T2R2 東京科学大学 リサーチリポジトリ
Science Tokyo Research Repository

論文 / 著書情報
Article / Book Information

題目(和文)	平安時代日本語の語彙の層
Title(English)	Layers in the lexicon of Heian Japanese
著者(和文)	田中牧郎
Author(English)	Makiro Tanaka
出典(和文)	学位:博士(学術), 学位授与機関:東京工業大学, 報告番号:甲第9581号, 授与年月日:2014年3月26日, 学位の種別:課程博士, 審査員:山元　啓史,中川　正宣,前川　眞一,赤間　啓之,平川　八尋,近藤　泰弘
Citation(English)	Degree:Doctor (Academic), Conferring organization: Tokyo Institute of Technology, Report number:甲第9581号, Conferred date:2014/3/26, Degree Type:Course doctor, Examiner:,,,,,
学位種別(和文)	博士論文
Type(English)	Doctoral Thesis

Powered by T2R2 (Science Tokyo Research Repository)

博士課程学位申請論文

平安時代日本語の語彙の層

田 中 牧 郎

東京工業大学社会理工学研究科

人間行動システム専攻

2014 年 2 月 20 日

目 次

第 1 章　序 **15**
1.1　本研究の目的 15
1.1.1　仮説 15
1.1.2　平安時代の語彙と文章・文体 16

第 2 章　方法 **19**
2.1　文献資料 19
2.1.1　『今昔物語集』 19
2.1.2　平安和文作品 21
2.1.3　『宇治拾遺物語』 22
2.1.4　『今昔物語集』の依拠資料 23
2.1.5　その他の資料 24
2.2　古典資料のコーパス化 24
2.2.1　古典研究・日本語史研究へのコンピューターの導入 24
2.2.2　『日本語歴史コーパス』 25
2.2.3　本研究でのコーパスの整備 26

第 3 章　漢文訓読文の語彙と和文の語彙 **35**
3.1　資料の語彙調査 35
3.1.1　基本語彙量 35
3.1.2　語種構成 36
3.1.3　品詞構成 38
3.1.4　各種資料の語彙の違い 40
3.1.5　語彙のレベル分け 41
3.1.6　和漢混淆文の基幹語 42
3.2　漢文訓読文の特徴語 43
3.2.1　『今昔物語集』巻 12 の特徴語の抽出 43
3.2.2　内容の違いに基づく特徴語の判別 44
3.2.3　文体の違いに基づく特徴語の分類 48
3.3　和文の特徴語 52

3.3.1 『今昔物語集』巻 27 の特徴語の抽出 52
3.3.2 内容の違いに基づく特徴語の判別 52
3.3.3 文体の違いに基づく特徴語の分類 54
3.4 対立関係にある語 56
3.4.1 対立の類型 56
3.4.2 異語種の対立 59
3.4.3 異品詞の対立 59
3.4.4 同語種・同品詞の対立 62
3.4.5 頻度の対立 63
3.5 まとめ 66

第 4 章 同文説話の語の対応：『今昔物語集』と『宇治拾遺物語』 67
4.1 同文説話 67
4.2 パラレルコーパスの作成 69
4.3 系列比較モデル 70
4.4 結果 74
4.4.1 異語対応の比率が高い語彙 74
4.4.2 『今昔』で採用され『宇治』で避けられる語彙 76
4.4.3 『宇治』で採用され『今昔』で避けられる語彙 79
4.5 語の対立と語彙の層 82
4.6 まとめ 83

第 5 章 漢語と和語の対立 85
5.1 平安和文の漢語：時代・品詞・意味分野から見た層 85
5.1.1 先行研究による調査 85
5.1.2 平安和文 8 作品の語種比率の調査 87
5.1.3 漢語の意味分類 88
5.1.4 漢語の初出時期 88
5.1.5 漢語の段階差 92
5.1.6 本節のまとめ 93
5.2 『今昔物語集』における漢語：語彙の層における漢語の位置 93
5.2.1 漢語の層の把握と『今昔』 93
5.2.2 2 字漢語サ変動詞を取り上げる理由 94
5.2.3 『今昔』の使用範囲から見た 2 字漢語サ変動詞の層 95
5.2.4 A 層 漢文訓読文の説話に使用範囲が限られる語彙 97

5.2.5　B層　漢文訓読文の説話に多いが、和文の説話にも少数使われている語彙 99
5.2.6　C層　和文の説話にも多い語彙 102
5.2.7　本節のまとめ 103
5.3　和語と漢語の関係：『今昔物語集』の〈祈る〉語彙 103
5.3.1　〈祈る〉語彙が属する層 104
5.3.2　〈祈る〉語彙の意味分析の方法 106
5.3.3　〈祈る〉対象 107
5.3.4　〈祈る〉内容 109
5.3.5　〈祈る〉相手 110
5.3.6　意味から見た〈祈る〉語彙の体系 112
5.3.7　本節のまとめ 112
5.4　和語と漢語の意味対立：『今昔物語集』の〈奇異〉〈微妙〉 113
5.4.1　本節の目的 113
5.4.2　「あさまし」と「きい」が使われる文体の違い 114
5.4.3　「あさまし」と「きい」の意味分析 114
5.4.4　「あさまし」と「きい」の意味の対立 119
5.4.5　「めでたし」と「みめう」が使われる文体の違い 119
5.4.6　「めでたし」と「みめう」の意味分析 120
5.4.7　「めでたし」と「みめう」の意味の対立 123
5.4.8　本節のまとめ 124
5.5　まとめ 124

第 6 章　感情形容詞と感情動詞の対立　127
6.1　感情形容詞と感情動詞の対立と人称 127
6.1.1　『源氏』における３分類 127
6.1.2　『今昔』における部別の頻度 129
6.1.3　感情主の人称 130
6.1.4　『源氏』における感情主の人称 131
6.1.5　『今昔』における感情主の人称 135
6.1.6　『源氏』と『今昔』の比較 136
6.1.7　本節のまとめ 137
6.2　「悲し」「悲しむ」の対立 138
6.2.1　「悲し」「悲しむ」が使われる文体 138
6.2.2　『今昔』の「悲し」「悲しむ」の人称 139

6.2.3 『今昔』の「悲し」「悲しむ」の述部の形式 141
6.2.4 『今昔』の「悲し」「悲しむ」の誘因を示す語句の形式 144
6.2.5 『今昔』の「悲し」「悲しむ」のまとめ 146
6.2.6 和文の「悲し」 147
6.2.7 漢文の「悲しむ」 150
6.2.8 本節のまとめ 151
6.3 まとめ 152

第 7 章 和語の同品詞同士の対立：「おづ」「おそる」の対立 153
7.1 〈恐怖〉の感情を表わす動詞 153
7.2 資料別の頻度の特徴 154
7.3 意味の分析 (1)：複合動詞の検討 157
7.4 意味の分析 (2)：対象格の検討 159
7.4.1 対象語を示す格助詞 159
7.4.2 平安和文の「おづ」の対象格 160
7.4.3 訓点資料の「おづ」「おそる」の対象格 161
7.4.4 『今昔』の「おづ」「おそる」の対象格 162
7.4.5 鎌倉時代の「おづ」「おそる」の対象格 163
7.4.6 対象格の分析のまとめ 165
7.5 使われる文体の違いと意味の対立 166
7.5.1 「おづ」「おそる」のまとめ 166
7.5.2 「おそろし」との意味の関係 166
7.5.3 「おそろし」との文体の関係 167
7.6 まとめ 168

第 8 章 総合討議 171
8.1 語彙の層状体系 171
8.1.1 本研究で見えた 3 層 171
8.1.2 漢文訓読語と和文語の層 172
8.1.3 文章語・日常語・俗語の層 172
8.1.4 語彙の層の見方 174
8.1.5 各層に属する語 175
8.2 語の対立とは何か 176
8.2.1 語の対立に関する先行研究 176
8.2.2 意味の対立 176
8.2.3 文体によって使われる語が異なる理由 177

8.3 対立から層へ 178
8.4 文体から層へ 179
8.5 研究資料の『今昔物語集』とは何か 180
8.6 古典語研究におけるコーパスとは何か 181
8.7 研究結果による今後の展望 182

第 9 章 結語 **183**

付録 **184**

付 録 A 語彙表 **185**
A.1 和漢混淆文の基幹語 185
A.2 『今昔物語集』巻 12 の特徴語 185
A.3 『今昔物語集』巻 27 の特徴語 185

付 録 B 資料 **203**
B.1 『今昔物語集』巻 12 の文体の違いに基づく特徴語とその対立語の用例 . . 203
B.2 『今昔物語集』巻 27 の文体の違いに基づく特徴語とその対立語の用例 . . 208
B.3 『今昔物語集』2 字漢語サ変動詞とその対立語の用例 211

文献 **219**

図目次

1.1　各資料の語種比率（異なり語数）. 15
1.2　鎌倉時代までの文章・文体 17

3.1　各資料の語種比率（異なり語数）. 37
3.2　各資料の語種比率（延べ語数）. 37
3.3　各資料の品詞比率（異なり語数）. 39
3.4　各資料の品詞比率（延べ語数）. 39
3.5　『今昔』巻 12・27 の語彙比較から得られた対立と層 65

4.1　系列比較モデルによる、２テキストの要素の対応 74
4.2　『宇治大納言』『今昔』『宇治』間の要素の対応 75
4.3　『今昔』『宇治』の同文説話から得られた対立と層 82

5.1　品詞別の漢語・混種語の初出時期（語数）. 89
5.2　名詞の意味分野別の漢語・混種語の初出時期（語数）. 90
5.3　名詞の「精神および行為」細分類別の漢語・混種語の初出時期（語数）. 90

8.1　語の対立と層（１）. 173
8.2　語の対立と層（２）. 174

表目次

2.1　形態素解析の入力・出力（『源氏物語』の冒頭の一文）. 27
2.2　『今昔』巻 12 第 1 話第 2 文・第 3 文の自動形態素解析 31
2.3　『今昔』巻 12 第 1 話第 2 文・第 3 文の誤解析と修正例 31

3.1　各資料の基本語彙量（付属語・記号類除く）. 36
3.2　各資料の「語種」情報の集計（付属語・記号類除く、異なり語数） 36
3.3　各資料の「語種」情報の集計（付属語・記号類除く、延べ語数） 36
3.4　各資料の「品詞」情報の集計（付属語・記号類除く、異なり語数） 38
3.5　各資料の「品詞」情報の集計（付属語・記号類除く、延べ語数） 38
3.6　各資料の語彙のレベル分け 42
3.7　『今昔』巻 12・巻 27 の語彙全体の品詞構成と基幹語の品詞構成 (%) . . . 43
3.8　『今昔』巻 12・巻 27 の使用率の比率（50 音順冒頭 10 語）. 44
3.9　『今昔』巻 12 の文体の違いに基づく特徴語とその対立語 50
3.10　『今昔』巻 12 の文体の違いに基づく特徴語で慣用句が多いもの 51
3.11　『今昔』巻 27 の文体の違いに基づく特徴語とその対立語 55
3.12　『今昔』巻 12 の文体の違いに基づく特徴語のうち対立語があるもの . . . 57
3.13　『今昔』巻 27 の文体の違いに基づく特徴語のうち対立語があるもの . . . 58
3.14　対立語のうち異語種間の対立 59
3.15　対立語のうち同語種・同品詞間の対立 62
3.16　双方向から挙がる対立語 63
3.17　基幹語と重なる対立語 64
3.18　対立語の層 64
3.19　「恐ろし」「恐る」の頻度 65

4.1　『今昔』→『宇治』の語の対応付け 71
4.2　『宇治』→『今昔』の語の対応付け 72
4.3　『今昔』→『宇治』の対応類型別の語数（%） 73
4.4　『宇治』→『今昔』の対応類型別の語数（%） 73
4.5　『今昔』→『宇治』で異語対応の比率が高い語（%） 75
4.6　『宇治』→『今昔』で異語対応の比率が高い語（%） 76

4.7 『今昔』→『宇治』で異語対応の比率が高い語の全件 (%) 76
4.8 『今昔』→『宇治』で異語対応の比率が高い語の対応状況 77
4.9 『宇治』→『今昔』で異語対応の比率が高い語の全件 (%) 79
4.10 『宇治』→『今昔』で異語対応の比率が高い語の対応状況 80

5.1 宮島 (1971) による語種別語彙頻度 86
5.2 平安和文 8 作品の語種別語彙頻度 87
5.3 平安和文 8 作品の漢語・混種語の品詞別・意味分野別語数 89
5.4 初出時期別の「生活」「芸術」「心」の漢語・混種語のリスト 91
5.5 「言語」に属する漢語・混種語の高頻度語彙の時期別頻度 93
5.6 2 字漢語サ変動詞の頻度 1：1〜33 95
5.7 2 字漢語サ変動詞の頻度 2：34〜55 96
5.8 本朝仏法部の漢文訓読文の説話に限って用いられる語 98
5.9 本朝仏法部の和文の説話にも用いられる語 99
5.10 〈祈る〉語彙の頻度分布 104
5.11 〈祈る〉語彙の格の表示件数と表示率 107
5.12 「を」格の対象の性質 107
5.13 〈祈る〉語彙の意味特徴のまとめ 112
5.14 「あさまし」「きい」の頻度分布 114
5.15 「あさまし」「きい」の対象となる名詞の分類 116
5.16 「めでたし」「みめう」の頻度分布 120
5.17 「めでたし」「みめう」の対象となる名詞の分類 121

6.1 『源氏』における感情形容詞・感情動詞の対の頻度・比率 128
6.2 『今昔』本朝部における感情形容詞・感情動詞の対の頻度・比率 129
6.3 A類における感情主の人称：『源氏』の会話文・心内語・和歌 132
6.4 A類における感情主の人称：『源氏』の地の文 133
6.5 B類における感情主の人称：『源氏』の会話文・心内語・和歌 133
6.6 B類における感情主の人称：『源氏』の地の文 134
6.7 B類における動詞の使用者：『源氏』の会話文・心内語・和歌 134
6.8 A類における感情主の人称：『今昔』の会話文・心内語・和歌 135
6.9 A類における感情主の人称：『今昔』の地の文 135
6.10 B類における感情主の人称：『今昔』の会話文・心内語・和歌 136
6.11 B類における感情主の人称：『今昔』の地の文 136
6.12 『源氏』と『今昔』の主な感情表現 137
6.13 『今昔』における「悲し」「悲しむ」の頻度 138

6.14 『慈恩伝』『源氏』における「悲し」「悲しむ」の頻度 138
6.15 『今昔』の「悲し」「悲しむ」の人称 139
6.16 『今昔』の「悲し」「悲しむ」の述部の用法 141
6.17 『今昔』の「悲し」「悲しむ」の終止法の形式 143
6.18 『今昔』の「悲し」「悲しむ」の接続法の形式 144
6.19 『今昔』の「悲し」「悲しむ」の感情の誘因の形式（述部が終止法） . . . 146
6.20 『今昔』の「悲し」「悲しむ」の感情の誘因の形式（述部が接続法） . . . 146
6.21 『今昔』の「悲し」「悲しむ」の文構造のまとめ 147
6.22 『源氏』の「悲し」の人称 147
6.23 『源氏』の「悲し」の述部の用法 148
6.24 『源氏』の「悲し」の終止法の形式 148
6.25 『源氏』の「悲し」の接続法の形式 148
6.26 『源氏』の「悲し」の感情の誘因の形式（述部が終止法） 149
6.27 『源氏』の「悲し」の感情の誘因の形式（述部が接続法） 149
6.28 『日本霊異記』『法華験記』の「悲し」の人称 150
6.29 『慈恩伝』『白氏文集』の「悲しむ」の終止法の形式 150
6.30 『慈恩伝』『白氏文集』の「悲しむ」の接続法の形式 150
6.31 『慈恩伝』『白氏文集』の「悲し」の感情の誘因の形式（述部が終止法） . 151
6.32 『慈恩伝』『白氏文集』の「悲し」の感情の誘因の形式（述部が接続法） . 151

7.1 平安和文・和漢混淆文資料の「おづ」「おそる」の資料別頻度 155
7.2 平安時代の訓点資料の「おづ」「おそる」の資料別頻度 156
7.3 「おづ」「おそる」が結合する動詞 158
7.4 「おづ」「おそる」が結合する動詞の意味のまとめ 158
7.5 「おづ」「おそる」の対象語が取る格助詞 159
7.6 『今昔』『源氏』の「おそろし」「おづ」「おそる」の頻度と比率（%） . . 168

8.1 『今昔』の 2 字漢語サ変動詞の層 180

A.1 『今昔』の巻 12・巻 27 の基幹語（両巻でともに高頻度語彙）1–50 186
A.2 『今昔』の巻 12・巻 27 の基幹語（両巻でともに高頻度語彙）51–100 . . . 187
A.3 『今昔』の巻 12・巻 27 の基幹語（両巻でともに高頻度語彙）101–150 . . 188
A.4 『今昔』の巻 12・巻 27 の基幹語（両巻でともに高頻度語彙）151–192 . . 189
A.5 『今昔』の巻 12 の特徴語（巻 12 比率 0.8 以上の高・中頻度語彙）1–50 . . 190
A.6 『今昔』の巻 12 の特徴語（巻 12 比率 0.8 以上の高・中頻度語彙）51–100 . 191
A.7 『今昔』の巻 12 の特徴語（巻 12 比率 0.8 以上の高・中頻度語彙）101–150 192

A.8 『今昔』の巻 12 の特徴語（巻 12 比率 0.8 以上の高・中頻度語彙）151–200 193
A.9 『今昔』の巻 12 の特徴語（巻 12 比率 0.8 以上の高・中頻度語彙）201–250 194
A.10 『今昔』の巻 12 の特徴語（巻 12 比率 0.8 以上の高・中頻度語彙）251–290 195
A.11 『今昔』の巻 12 の特徴語（巻 12 比率 0.8 以上の高・中頻度語彙）291–300 196
A.12 『今昔』の巻 27 の特徴語（巻 27 比率 0.8 以上の高・中頻度語彙）1–50 . . 197
A.13 『今昔』の巻 27 の特徴語（巻 27 比率 0.8 以上の高・中頻度語彙）51–100 . 198
A.14 『今昔』の巻 27 の特徴語（巻 27 比率 0.8 以上の高・中頻度語彙）101–150 199
A.15 『今昔』の巻 27 の特徴語（巻 27 比率 0.8 以上の高・中頻度語彙）151–200 200
A.16 『今昔』の巻 27 の特徴語（巻 27 比率 0.8 以上の高・中頻度語彙）200–243 201

第1章　序

1.1　本研究の目的

1.1.1　仮説

図 1.1 は、平安時代の日本語資料 4 種について、「和語」「漢語」「混種語」という「語種」の構成比率を、異なり語数[1] によって集計したものである[2]。

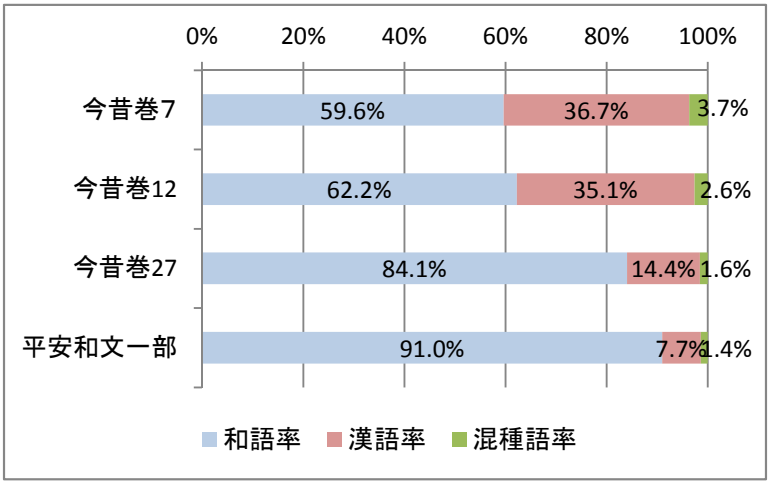

図 1.1: 各資料の語種比率（異なり語数）

図 1.1 の 4 つの資料のうち、『今昔』とは、「和漢混淆文」で書かれた説話集で、巻 7 は中国の説話を書いた巻、巻 12 は日本の仏教説話を書いた巻、巻 27 は日本の世俗説話を書いた巻である。また、「平安和文一部」は、「和文」で書かれた物語や日記である。「和漢混淆文」「和文」がどのような書き言葉であるかは、第 2 章で詳しく説明するが、ここでは、さしあたり和の要素と漢の要素が混じり合った文章を「和漢混淆文」、ほとんど和の要素だけからなる文章を「和文」と簡単に定義しておく。

図 1.1 の「和語率」「漢語率」「混種語率」とは、各資料の語彙で、和語、漢語、混種語それぞれの占める比率のことである。「和語（やまとことば）は日本固有の語と考えられ

[1] 語彙調査において、同じ語が何回使われていても 1 と数える数え方で、同じ語が繰り返し使われていたらその回数分数える「延べ語数」に対する概念。

[2] この図のもとになった語彙調査に関しては、第 3 章で詳しく取り上げる。各資料の詳しい説明も第 3 章で行う。

るもの」(沖森他 2011: 40-43) であり、「中国から借用した語が漢語で、日本で作られたものも」「漢字の字音を用いたもので」（同）あれば「漢語」と呼び、「二つ以上の異なる語種の要素が合成されてできている語を混種語と呼ぶ」（同）[3]。この定義に従って、各資料で語彙の使用実態を調査して算出したものである。

図 1.1 によると、和語の比率と漢語・混種語の比率により、和語が 60 %前後で漢語・混種語が 40 %前後の 2 つの資料群と、和語が 80 %以上で漢語・混種語が 20 %以下の 2 つの資料群との、2 つが対立し、段階的な層をなしているように見える。

以上は、4 種の文献資料を語種の観点で調査したものであるが、ここに現れている語彙の層は、他の種類の文献資料や、語種以外の観点から見た場合にも同じような層として見えるかどうかは明らかでない。

本研究では、次の 2 つの仮説を立てる。

1. 語彙を、文献資料への現れ方に応じて分類すれば、層をなしているのが見える。
2. 語彙の層は、漢と和との 2 つの要素の対立において明瞭に見える。

1.1.2　平安時代の語彙と文章・文体

平安時代末期までの文章・文体の流れ

文献資料は何らかの目的や内容を持った文章表現からなっているが、その文章の種類によって、言語が異なる姿を呈する場合、「文体」が異なっていると言う。「文体」とは、「表現の媒体（音声・文字）、ジャンル、目的・意図、場面・状況などによって、言語が異なった姿を呈する現象。また、そうした観点から見た時の言語の姿」(山口 1993: 10) と定義され、本研究では、文章の種類の違いに端的に現れる言語の姿を「文体」と呼び、「和漢混淆文の文体」「和文の文体」などと言う[4]。語彙の層を見るために、文献資料を分類する軸が、「文体」ということになる。

図 1.2 は、平安時代を中心に前後の時代を含めて、日本語の文章・文体の流れをまとめたものである。この図にしたがって、平安時代の文体の要点を記す。

日本語にはもともと文字がなかったが、漢字が伝来したことで、これを使って日本語を書くようになった。平安時代前期までは、「和化漢文」と「和歌」という、かけ離れた文体しかなかった。和化漢文は、「変体漢文」とも呼ばれ、「用字・用語・語法の上でそ

[3] 「混種語」には、外来語と和語または漢語が熟合したものも含むが、本研究の対象とする平安時代には外来語はほとんどないため、本研究の「混種語」は、和語と漢語が熟合したものということになる。

[4] 本研究における「文体」の概念は、「文体は、類型的文体と個性的文体とに大別される。類型とは、類的に特殊的なものであるが、不特定多数の表現に共通する類型的特殊性が認識把握される場合、これを類型的（あるいは範疇的）文体と呼ぶ。類型的文体は（中略）観点の相違に基づいて、次のような種類に分けられる。（中略）(2) 語彙・語法から。和文体・漢文訓読体（漢文直訳体）・和漢混淆体・候文体・擬古文体（雅文体）、など」(市川 1980: 766) とされる、「類型的文体」のうち「語彙・語法から」の観点によるものということになる。

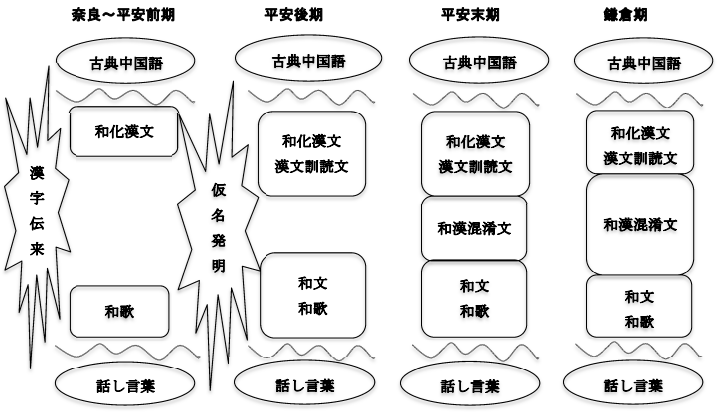

図 1.2: 鎌倉時代までの文章・文体

れ（引用者注：純漢文）と相違する要素を含」む (峰岸 1986: 10) が、奈良時代には「公の場で普及が進んでいた」(佐藤 2007: 480) とされ、古典中国語の枠組を利用した公的な文章の文体である。それは、『万葉集』などにまとまった作品が残る、日常的な感情を話し言葉に根付いたところで表現した「和歌」とは、相当に距離を置くものだった。

平安時代後期までに仮名が発明されると、漢の側、和の側、それぞれの側の文体は幅を広げ、「漢文訓読文」や「和文」も生み出し、二極に分かれていた文体の間は徐々に距離が縮まってきた。「和文」は、話し言葉に基盤を置いた貴族による文学として発展し、図 1.1 の資料とした「平安和文一部」は、この平安後期の和文に属す。

平安時代末期になると、その和文の系統の文章と漢文の系統の文章とが合流した「和漢混淆文」が成立する。それが鎌倉時代にはさらに発展して、もっとも勢力の強い文体になっていく。成立期の和漢混淆文の代表的な資料が、『今昔物語集』で、図 1.1 の資料とした『今昔』はこれである。

平安時代の文章における語彙

図 1.1 によれば、平安末期の和漢混淆文のなかに、漢語の比率が比較的高いもの（「今昔巻 7」「今昔巻 12」）と、それが低いもの（「今昔巻 27」）とがあり、平安後期の和文は、漢語の比率がさらに低くなっている。

このような、平安時代の文章に見られる語彙が、その文章がどのような文体で書かれているかによって異なる様相を見せることについて、築島 (1963, 1969) に研究がある。

築島 (1963: 317–56) は、平安時代末期の訓点資料である『興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝古点』（11 世紀末期〜12 世紀初期加点、以下『慈恩伝』と略記）の語彙を調査し、異なり語数で集計した漢語率が 85.8 %であることを示した。また、『慈恩伝』のすべての和語を、平安後期の和文資料である『源氏物語』（11 世紀初期、以下『源氏』と略記）のすべての和語と比較し、『源氏』にない「訓点特有語」が、42.7 %を占めることも示した。

このような調査をもとに、築島 (1969: 582) は、「漢文訓読語と和文語（中略）の言語現象上の相違は（中略）語彙の面に於ても著しい」とした。この『慈恩伝』の漢語率の数値は、図 1.1 で漢語率が最も高かった「今昔巻 7」に比べて相当に高い。

「訓点資料」とは、漢文を日本語で訓読するために訓点を書き入れた資料のことで、訓点にしたがって読めば、図 1.2 の「漢文訓読文」になる。築島は、漢文訓読文と和文という、両極に近い 2 つの文体の語彙を比較して、その相違が大きいことを示したわけである。

築島の影響を受けて盛んになった平安時代の漢文訓読文の語彙研究は、それを和文の語彙とは別のものとして研究する方向が強くなって現在に至っている (吉田他 2001, 築島 2007)。一方、和文の語彙の研究も漢文訓読文の語彙とは別個のものとして行われる傾向が強い (宮島 1971, 竹内 1988)。ところが、築島のデータ (築島 1963: 582) でも示されているように、『慈恩伝』と『源氏』で共通する和語も 57.3 %あるにもかかわらず、漢文訓読文の語彙と和文の語彙とがどのような関係にあるのかについては、あまり研究されてこなかった [5]。

異なる文体の文章を読み比べて、一見別々のものであるかのように見える語彙も、それが書かれる以前は、一つの語彙体系の中で使用されていたはずである。その体系の把握を目指した研究も行われていない。

築島は、図 1.2 における漢文訓読文と和文という離れた位置にあった文体の語彙を比較したが、同一の資料の語彙を分析する方が、語彙の体系の記述は行いやすい。その資料は、図 1.2 のように、平安後期まではほとんど存在していない。しかし、平安末期に漢文訓読文と和文とをつなぐ位置に出現する和漢混淆文は、その資料として適切ではないだろうか。そこで、本研究では、和漢の両系統の文章の語彙が一つの文章の中で使われるようになる和漢混淆文を扱うことにし、その最初の本格的作品である『今昔物語集』を中心の資料に定め、語彙の層が見出されるかどうかを確かめ、漢と和の対立を見ていくことを目的とする。

本研究のテーマに語彙の層を立てるのは、文体による語彙の違いを見るには、語彙を層状の構成に見立てるのが分かりやすいからである。文体とは別の視点から語彙を見る場合は、層のモデルが有効だとは限らない。

[5] この点について、築島の近年の著作では、築島 (1963, 1969) を振り返って、「異なり語数で、『慈恩伝』の和語のうち 42.7 %が『源氏』に見えないことを言いながら、57.3 %は『源氏』と共通することへの配慮が乏しかった」と述べており、漢文訓読語と和文語の共通性を研究する必要性に言及している (築島 2007: 6)

第2章　方法

本研究は、漢の要素と和の要素とを比較することを方法の中心に置く。漢の文章と和の文章の比較、漢語と和語の比較、和語における漢語的なものと和語的なものとの比較など、いくつかの組み合わせで比較を行い、それぞれの比較によって見えてくることを記述していく。

漢の文章と和の文章を選定し、それを電子テキストにして、語に分割して、語に関する情報を付与してコーパスデータを作成する。そのデータを相互に比較し、その結果を表示するという手順で研究を進めていく。

本章では、2.1 で研究材料とする文献資料について述べ、2.2 では資料のコーパス化とコーパスデータの集計方法について述べる。

2.1　文献資料

2.1.1　『今昔物語集』

本研究の中心資料となるのは、成立期の和漢混淆文の代表的作品である『今昔物語集』（以下、『今昔』と略記することがある）である。『今昔』は、12 世紀前半に書かれた全 31 巻（うち 3 巻は欠巻）の説話集で、インド、中国、日本の、仏教と世俗の説話 1000 話余りを集成する、大部な作品である。編者は未詳で、中国や日本の漢文説話集、日本の和文説話集などを依拠資料として、編者が説話の内容や表現に手を加え、内容によって説話を分類して編纂されたものである。

『今昔』の性質について、佐藤 (1984), 小峯 (1985), 森 (1986) によって要点をまとめると、次の通りである。現在に伝わる諸本のうち、鎌倉時代に書写された鈴鹿本（現在は、京都大学図書館所蔵）が、もっとも古く、巻 2、5、7、9、10、12、17、27、29 の 9 巻に、これが残っている。編者は未詳だが、1 人である可能性が高い。漢字片仮名交じり文で書かれ、インドや中国の説話で漢文の依拠資料によるものの多い前半の巻は、漢文訓読文であるが、日本の世俗説話で和文の依拠資料によったと考えられるものの多い後半の巻は、和文になっており、『今昔』全体として見れば、和漢の振れ幅のかなり大きい和漢混淆文である。漢文訓読文で書かれた説話でも、巻や説話によって漢文訓読的な特徴が非常に強いものからあまり強くないものまであり、和文で書かれた説話についても同様である。

本研究では、まず、この『今昔』を材料として、コーパスを作成してその全語彙を分析し、次に、その分析の結果見えた重要な現象に関して、特定の語彙を対象として事例研究を行っていく。それぞれで扱う材料は、次の通りである。

- 全語彙を分析対象とする部分　（第 3 章〜第 4 章の対象）
  - 巻 7　漢文訓読文で書かれた巻のうち、純漢文を依拠資料とする巻
  - 巻 12　漢文訓読文で書かれた巻のうち、和化漢文を依拠資料とする巻
  - 巻 27　和文で書かれた巻
- 事例研究を行う部分　　（第 5 章〜第 7 章の対象）
  - 全巻（巻 1〜31、欠巻を除く）

『今昔』は、部や巻によって、漢文訓読文の部分（巻 20 以前に多い）と、和文の部分（巻 22 以後に多い）とがある。前者は、依拠資料が中国式の純粋の「純漢文」である箇所と、日本式の「和化漢文」である箇所がある。このような資料の性質を踏まえて、巻 7、巻 12、巻 27 の 3 巻を、全語彙を分析対象とするものとして選定した。

それら各巻の第 1 話の冒頭を示すと、次の通りである。なお、『今昔』の原文は、片仮名は小さく書かれ、その一部は割書きのように 2 行書きになっているが、本論文に引用する場合は、片仮名も通常の大きさの 1 行書きにする。また、漢字の字体も、原則として、現在通行のものに改める。

- 『今昔』巻 7-1　和漢混淆文における、純漢文に依拠した漢文訓読文

  (1) 今昔、震旦ノ唐玄宗ノ代ニ玄奘三蔵、大般若経ヲ翻訳シ給フ、玉花寺ノ都維那ノ沙門、寂照・慶賀等筆受タリ。既ニ訳シ畢ヌルヲ皇帝聞キ給テ、歓喜シテ斎会ヲ設テ供養シ給ハムトス。

- 『今昔』巻 12-1　和漢混淆文における、和化漢文に依拠した漢文訓読文

  (2) 今昔、越後国ニ聖人有ケリ。名ヲバ神融ト云フ。世ニ古志ノ小大徳ト云フハ此レ也。幼稚ノ時ヨリ法花経ヲ受ケ持テ、昼夜ニ読奉ルヲ以テ役トシテ年来ヲ経。

- 『今昔物語集』巻 27-1　和漢混淆文における、和文

  (3) 今昔、此ノ三条ヨリハ北、東ノ洞院ヨリハ東ノ角ハ鬼殿ト云所也。其ノ所ニ霊有ケリ。其ノ霊ハ、昔シ未ダ此ノ京ニ都移モ無カリケル時、其ノ三条東ノ洞院ノ鬼殿ノ跡ニ、大ナル松ノ木有ケリ、其ノ辺ヲ男ノ馬ニ乗テ胡録負テ行キ過ケル程ニ、

上の 3 つの文章は、読んだ印象も異なっている。(3) の巻 27 の文章、すなわち和漢混淆文における和文は、一文が長かったり、ねじれていたりして、話し言葉に近い。これに比べると、和漢混淆文における漢文訓読文である（1）と（2）の文章は、ともに文が短く区切られていて、誰が何をどうしたというような、主語、対象語、述語が明示されながら論理的に述べられていて、文章語的である。そして、(1) と (2) を比較すると、どちらかというと、(1) の方がより硬く、あらたまっている印象を受ける。このように、漢文訓読文の文章と和文の文章とを読み比べると、そこから受ける印象は、硬いか軟らかいか、改まっているかくだけているか、文章語的か日常語的かなどという違いがあるが、このような印象の違いは、それぞれを構成する語彙の違いとも関係しているのではないだろうか。

できることなら、『今昔』の全巻をコーパス化して、全語彙を研究対象にするのが望ましいが、後に記すように、コーパス構築技術の現状では、『今昔』のコーパス化には困難なところが多く、作業コストも高く、困難な点を解決しつつ作業を行うことが可能な最大の分量として、3 巻分を対象とすることにした。巻 7、巻 12、巻 27 は、いずれも、最古の写本である鈴鹿本が現存している巻である。

第 5〜7 章で、事例研究の対象とする言語現象を扱う場合の資料の範囲は、上記 3 巻以外も加え、『今昔』全巻とする。『今昔』全体を対象とする場合は、電子テキストに対する文字列検索や、索引による検索で、利用する。

利用する本文は、全語彙を分析対象とするためにコーパス化した巻については、巻 7 は、国文学研究資料館の「日本古典文学本文データベース」（底本は、岩波書店の「日本古典文学大系」(山田他 1959-1963)、以下「古典大系」と略記することがある）、巻 12、巻 27 は、コーパス構築のために、小学館から国立国語研究所に提供された電子テキスト（底本は、「新編日本古典文学全集」(馬淵他 1999–2002)、以下「新編全集」と略記することがある）による。事例研究として取り上げる部分は、第 5〜7 章の各節で扱う言語現象や分析方法に即して、その都度選択する。なお、『今昔』原本には振り仮名が付されていないが、古典大系や新編全集には、校注者によって振り仮名が付けられている。本研究では、これらの振り仮名によることを原則とするが、それに不統一のある語や、不適当な例は、筆者の判断で修正した。

2.1.2　平安和文作品

和漢混淆文が成立する以前の「和文」は、現存しているもののほとんどは、貴族による文学作品で、日記、随筆、物語、和歌などのジャンルに広がり、男性も女性も書いた。和文は、貴族の日常的な話し言葉に基盤を置いた洗練された書き言葉であり、例えば、次のような文章である。

(4) むかし、男、初冠して、奈良の京春日の里に、しるよしして、狩にいにけり。その里に、いとなまめいたる女はらからすみけり。（伊勢物語・1 段）

本論文では、第 3 章で、国立国語研究所が構築し公開している『日本語歴史コーパス平安時代編』（先行公開版）を利用する。このコーパスには、『古今和歌集』『土佐日記』『竹取物語』『伊勢物語』『落窪物語』『大和物語』『枕草子』『源氏物語』『紫式部日記』『和泉式部日記』の和文 10 作品が収められており [1]、10 世紀前期から 11 世紀初期にかけて書かれたものである。

平安時代の和文作品には、この 10 作品以外にも多くの作品があり、第 5 章以降では、扱う言語現象とその分析方法に応じて、必要な和文作品と本文を利用する。その際は、コーパス化されていない作品について、電子テキストの文字列検索のほか、索引検索や目視によって用例を収集し、分析対象にする。

2.1.3 『宇治拾遺物語』

和漢混淆文は成立期の『今昔』以後、様々な資料が現れる。その中の 1 つである、鎌倉時代の 13 世紀前半に書かれた説話集『宇治拾遺物語』（以下、『宇治』と略記することがある）を取り上げる。

『宇治』は、他の説話集に類話のある、漢文訓読的な要素が交じる説話群と、他の説話集に類話のない、口語的な要素が強い説話群とからなっている。前者の説話群には、鎌倉時代の和化漢文の説話集である『古事談』に類話のある、漢文訓読的な要素が特に多い説話と、『今昔』に類話のある、漢文訓読的な要素がさほど多くない説話とに分かれる。

そのうち、『今昔』との類話においては、2 つの説話集の表現が、文のレベルまで対応する同文性の高い「同文説話」が多くを占める。これは『今昔』と『宇治』の共通の依拠資料である、散逸した『宇治大納言物語』に、それぞれが依拠して、部分的に改変したことによってできたものである。この同文説話間で異なる語が対応している場合は、その文体に応じて語が変換されたものである可能性が高い。そこで、第 4 章で、『今昔』との同文説話について、コーパス化を行い、『今昔』と『宇治』とのパラレルコーパスを作成して語の対応を探る、重点的な利用法を取る。

(5) 汝ガ、前世ノ罪報ヲバ知ラズシテ、強チニ責メ申ス事極メテ当タラズ。然レドモ、汝ヲ哀ブガ故ニ少シノ事ヲ授ケム。寺ヲ出ムニ、イカナル物ナリトイフトモ、タダ手ニ当ラム物ヲ捨テズシテ、汝ガ給ハルモノト知ルベシ。（今昔・巻 16-28）

(6) このをのこ、前世の罪の報いをば知らで、観音をかこち申して、かくて候ふ事、いと怪しき事なり。さはあれども、申す事のいとほしければ、いささかの事、計らひ

[1] 底本は新編日本文学全集（小学館）。『今昔』の場合と同じく、国立国語研究所のコーパス開発のために小学館から提供されたテキストデータに基づく

給はりぬ。まづすみやかにまかり出でよ。まかり出でんに、なにもあれ、手に当たらむ物を取りて、捨てずして持ちたれ。とくとくまかり出でよ。（宇治・96）

上記は、よく知られている藁しべ長者の説話であるが、2 つの説話集の文章は、内容だけでなく文のレベルまで対応している。第 1 文のはじめの部分で、語の対応を見ると、「汝」（今昔）—「このをのこ」（宇治）、「罪報」（今昔）—「罪の報い」（宇治）のように、異なる語が対応している。主にこのようなデータを得るために『宇治』を利用する。

その本文は、『今昔』同様、新編日本古典文学全集 (小林・増古 1996) の電子テキストである。また、第 4 章の事例研究においても、必要に応じて『宇治』の全体を文字列検索や索引を用いるなどして利用する。

2.1.4 『今昔物語集』の依拠資料

『今昔』の説話の多くは、同一内容の説話を収めた多くの文献資料をもとに、独自に編集や改変を加えて書かれたものであるが、その同一内容の説話を収めた資料のことを、「依拠資料」という (小峯 1985)。特に、漢文訓読的な説話は、そのほとんどが、中国や日本で書かれた漢文を依拠資料に持っている。その依拠資料のうち、中国で書かれた純漢文『三宝感応要略録』『冥報記』や、日本で書かれた和化漢文『日本霊異記』『法華験記』などは、『今昔』に入った説話数も多い。次に掲げるのは、『日本霊異記』を依拠資料として、『今昔』がこれを改変して書いた部分である。

(7) 聖武天皇世、紀伊国名草郡三上村人、為薬王寺、率引知識、息晋薬分。其薬料物、寄乎岡田村主姑女之家、作酒息利。時有斑犢。入薬王寺、常伏塔基。（日本霊異記 中巻 32）

(8) 今昔、紀伊国ノ名草ノ郡三上ノ村ニ一ノ寺ヲ造テ、名ヲ薬王寺ト云フ。其後、知識ヲ引テ、諸ノ薬ヲ儲テ、其ノ寺ニ宜テ、普ク人ニ施シケリ。而ル間ダ、聖武天皇ノ御代ニ、其ノ薬ノ料物ヲ、岡田ノ村主ト云者ノ姑ノ家ニ宿シ置ク。而ルニ、其ノ家ノ主其ノ物ヲ酒ニ造テ、其ヲ人ニ与ヘテ、員ヲ増シテ得ムト為ルニ、其ノ時ニ、斑ナル小牛出来テ、薬王寺ノ内ニ入、常ニ塔ノ本ニ臥ス。（今昔物語集 巻 20-22）

上の例では、例えば『日本霊異記』の「為薬王寺」をもとに、『今昔』は「名を薬王寺と云ふ」と表現しており、依拠資料の漢文にある「為」が、『今昔』では「名を…と云ふ」と変換されていることが分かる。和化漢文から和漢混淆文へと文体が変換されることによって、語がどのように変換されるのかを知るのに、依拠資料の漢文と『今昔』とを比較することは、非常に有益である。また、『今昔』の依拠資料となった漢文作品は、歴史を通じてよく読まれ、『今昔』以外にも日本で書かれた多くの書物に影響を与えており、日本語史をとらえるための漢文資料として重要なものである。

したがって、漢文依拠資料についても、『宇治』の場合と同じように、『今昔』との語の対応を探るために、コーパス化してパラレルコーパスとしたり、漢文系の文章での語彙の実態を把握するための資料としてコーパス化を行ったりすることが望まれる。

しかしながら、漢文資料のコーパス化は、現状では極めて困難である。なぜなら、漢文を日本語の文として読む読み方は様々に想定され、漢文テキストに引き当てるべき日本語が、一つに決められないという問題があるからである。仮に現代の研究者が一つの読み方に決めたとしても、それはそのままではその時代の日本語と見なすことはできず、日本語史の一次的な資料とは扱えない。仮にそれを二次的な資料として扱うことにしても、コーパス化のために、原文の語順を入れ換えたり、補読をしたりと、複雑なテキスト加工が必要とされる。日本語の文を単語に区切って単語情報を与えていくという、コーパス化の作業の中心となる工程を組むことが、漢文資料に関しては、非常に難しく、その研究はすべてこれから開拓していく必要があるものである。本論文で、それに取り組むのは困難であるため、漢文依拠資料のコーパス化は行わず、第 5 章以後の事例研究で、『今昔』の語彙と比較する際や、問題にする語彙の漢文資料での出現状況や使用法を調査する際に、その都度、部分的に利用することとする。その使用本文は、個々の作品ごとに異なり、検索方法は、目視によることを基本とする。

2.1.5　その他の資料

上記の 4 種類の資料以外でも、第 5 章以降では、必要に応じて、様々な資料を利用する。事例研究として取り上げる言語現象によっては、より広い範囲の資料での語彙の使用状況の把握が望まれることがあるからである。

平安時代については、漢文訓読文や和化漢文での語彙のありようを知るために、訓点資料や古記録資料を利用する部分がある。また、平安末期から鎌倉時代においては、多彩に展開していく和漢混淆文資料を利用するところもある。これらの資料は、公開されている電子テキストに対する文字列検索を行ったり、索引を使ったり、また、目視によったりして利用する。

2.2　古典資料のコーパス化

2.2.1　古典研究・日本語史研究へのコンピューターの導入

日本語史研究は、古典学を目的としたり、また手段としたりして発達してくる中で、それらの研究成果である、古典の校訂本文、注釈書、総索引なども生産してきた。近年はそれらの活動にコンピューターの技術を用いることが増えた。古典研究や日本語史研究へのコンピューターの導入は、単に道具が変わったということにとどまらず、その道

具の特性である、テキスト情報に含まれる要素の同定、解析、計算などの機能を生かした、新しい研究手法が加わることになってきた。古典本文を電子テキストにして、コンピューターによって言語研究を進める利点や、その具体的実践例は、近藤 (2000) で豊富に示されており、研究目的に応じて様々な形の電子テキストがあり得ることや、その検索方法にも多様な可能性があることが説かれている。

電子テキストを作成し検索して利用する研究は、言語研究に資する方法論を作り出す方向に向かい、現在では組織的なコーパスの構築と活用へと発展してきている。そのコーパスの発展は、次の 4 段階に整理できる (田中 2005: 4)。

1. プレーンテキストコーパス
2. 構造化テキストコーパス
3. 形態素解析コーパス
4. 構文解析コーパス

日本語史研究に用いられる電子化テキストは、長らく 1 のプレーンテキストコーパス[2]にとどまっていたが、『太陽コーパス』(国立国語研究所 2005) によって、2 の構造化テキストコーパスに進み、言語資料と言語構造の特徴を生かした研究を可能にした。そして、『太陽コーパス』以後は、3 の形態素解析コーパス、4 の構文解析コーパスへの展開が望まれることになった。

日本語史研究用の電子化資料を、3 の形態素解析コーパスへと進める研究は、平安時代の和歌を対象にした山元 (2007)、平安時代の和文を対象にした小木曽他 (2010) などによって、基礎研究と技術開発とが図られ、活用が試みられてきた。現在は、その試行実験の段階を過ぎ、時代やジャンルを限れば既に実用化の段階に入っている。

このうち、小木曽らの研究は、後述する国立国語研究所の「通時コーパスの設計」プロジェクトと連携して進行中のものであり、平安時代の和文作品に形態素解析を施すための形態素解析用の電子化辞書「中古和文 UniDic」が構築され公開されている。現代語の形態素解析辞書として実績のある「UniDic」(伝他 2007) を、平安時代の和文に適用できるように拡張整備したものである。「UniDic」の特長である、国立国語研究所の語彙調査の単位として長年使われてきた「短単位」に基づいて、揺れのない斉一な言語単位による解析を実現するものになっている。

2.2.2 『日本語歴史コーパス』

日本語史研究の電子化テキストの標準は、1. プレーンテキストコーパスや、2. 構造化テキストコーパスの段階から、3. 形態素解析コーパスの段階へと移りつつある[3]。

[2] 長瀬 (1995), 安永 (1998) など、文学作品の構造化テキスト構築の試みはあったが、それらは文学テキストや古典籍の構造を反映させようとするもので、言語構造を反映させるものにはなっていなかった。

[3] 4 の構文解析コーパスは、言語処理分野では現代日本語について作成されているが、言語学分野でこれを活用したり、新たに構文解析日本語コーパスを作成する動きは今のところ本格化していない。したがって、古典語コーパスでのこれの実現は、まだしばらく先になると思われる。

その新時代のコーパスの中心となるのが、国立国語研究所で構築が進められている『日本語歴史コーパス』である。これは、2009 年から始まった国立国語研究所の共同研究プロジェクト「通時コーパスの設計」[4] で設計が行われ、国立国語研究所コーパス開発センターで構築が進められているもので、2012 年に平安時代編の先行公開版が公開され、2014 年には、その増補版が公開される予定である。

『日本語歴史コーパス 平安時代編』の先行公開版は、平安時代の和文 10 作品が収録され、上述の「中古和文 UniDic」の短単位によって自動形態素解析が行われ、誤解析の箇所を人手で修正したものである。平安時代の和文作品をコーパス化した後は、室町時代の狂言集、江戸時代の洒落本など、各時代の話し言葉に基盤を持つ書き言葉の文献資料のコーパス化を行い、まずは、話し言葉に近い書き言葉の資料で平安時代から江戸時代までを繋いでいく予定である。

一方、日本語史をたどるには、話し言葉に近い資料だけでは一面的であり、文章語的な資料もコーパスに加えていく必要がある。平安時代に関しては、第 1 章で述べたような、その日本語史上の位置からは、和化漢文や和漢混淆文の資料をコーパスに加えていくことが極めて重要である。「通時コーパスの設計」プロジェクトでは、すでに『日本霊異記』『今昔』『法華百座聞書抄』『宇治』などの説話資料のコーパス化に着手し、『日本語歴史コーパス』に加えていく計画が進行中である。本研究においては、これらの資料群のコーパス化が重要である。

2.2.3　本研究でのコーパスの整備

平安和文作品

平安和文作品のコーパスは、10 作品についての形態素解析コーパスとして公開されている『日本語歴史コーパス 平安時代編』（先行公開版）を、そのまま利用する。

このコーパスは、小学館から提供された「新編全集」のテキストデータをもとに、国立国語研究所で構造化テキストを作成し、それに形態素解析を施したデータが公開されている。それは、「中古和文 UniDic」に定められた「短単位」という規定にしたがって、コンピューター（自動解析器）が単語に区切り、語彙素や品詞などの情報を付与したものをもとに、人手によって誤りを修正することで、実現されている。表 2.1 は、コンピューターから出力される『源氏物語』の冒頭の 1 文の形態素解析データを示したものである。

本研究において、このデータをもとに語彙を集計する際には、原則として、「語彙素読み」「語彙素」「品詞」のすべてが同一のものを、1 語と認定する。動詞など活用する語は、上記の 3 つに加えて「活用型」までが同一のものを、1 語と認定する。「品詞」や「語

[4] プロジェクトリーダー：近藤泰弘客員教授、研究期間は 2009 年度〜2015 年度（予定）。

表 2.1: 形態素解析の入力・出力（『源氏物語』の冒頭の一文）：「入力」としたテキストに解析処理のプログラムをかけると、「出力」に示すように、形態素（単語）に区切り、語彙素読み、語彙素、品詞、活用型、語種の情報が得られる。

入力	いづれの御時にか、女御、更衣あまたさぶらひたまひける中に、 いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めきたまふありけり。
出力	書字形, 語彙素読み, 語彙素, 品詞, 活用型, 語種 いづれ, イズレ, 何れ, 代名詞,, 和 の, ノ, の, 助詞-格助詞,, 和 御, オオン, 御, 接頭辞,, 和 時, トキ, 時, 名詞-普通名詞-副詞可能,, 和 に, ニ, に, 助詞-格助詞,, 和 か, カ, か, 助詞-係助詞,, 和 、,,、, 補助記号-読点,, 記号 女御, ニョウゴ, 女御, 名詞-普通名詞-一般,, 漢 、,,、, 補助記号-読点,, 記号 更衣, コウイ, 更衣, 名詞-普通名詞-サ変可能,, 漢 あまた, アマタ, 数多, 副詞,, 和 さぶらひ, サブラウ, 侍ふ, 動詞-一般, 文語四段-ハ行, 和 たまひ, タマウ, 給う-尊敬, 動詞-非自立可能, 文語四段-ハ行, 和 ける, ケリ, けり, 助動詞, 文語助動詞-ケリ, 和 中, ナカ, 中, 名詞-普通名詞-副詞可能,, 和 に, ニ, に, 助詞-格助詞,, 和 、,,、, 補助記号-読点,, 記号 いと, イト, いと, 副詞,, 和 やむごとなき, ヤンゴトナイ, やんごとない, 形容詞-一般, 文語形容詞-ク, 和 際, キワ, 際, 名詞-普通名詞-一般,, 和 に, ニ, に, 助詞-格助詞,, 和 は, ハ, は, 助詞-係助詞,, 和 あら, アル, 有る, 動詞-非自立可能, 文語ラ行変格, 和 ぬ, ズ, ず, 助動詞, 文語助動詞-ズ, 和 が, ガ, が, 助詞-格助詞,, 和 、,,、, 補助記号-読点,, 記号 すぐれ, スグレル, 優れる, 動詞-一般, 文語下二段-ラ行, 和 て, テ, て, 助詞-接続助詞,, 和 時めき, トキメク, 時めく, 動詞-一般, 文語四段-カ行, 和 たまふ, タマウ, 給う-尊敬, 動詞-非自立可能, 文語四段-ハ行, 和 あり, アル, 有る, 動詞-非自立可能, 文語ラ行変格, 和 けり, ケリ, けり, 助動詞, 文語助動詞-ケリ, 和 。,,。, 補助記号-句点,, 記号

種」は、原則としてこのまま集計に利用するが、各章・各節の研究目的に応じて、それらの枠組を変更する場合もある。

なお、平安和文作品を、ひとまとまりのコーパスとして扱う場合、語彙の全体的な把握を目指す第3章では、中心的な資料として用いる『今昔』の各巻との語彙の比較を行いやすくするために、『今昔』1巻分と規模の近い、『大和物語』と『和泉式部日記』の2作品だけを抜き出したものを利用するところがある。また、個別の事例研究を行う第5章以降では、各節で設定した問題を扱うのに最適な作品の部分を利用する。それは、公開されている『日本語歴史コーパス 平安時代編』の範囲外のものであることもある。

『今昔』のテキスト整形

本研究の中心資料として用いる『今昔』は、『日本語歴史コーパス』に組み込むことを想定して、コーパス作成に着手されているが、現段階では、利用できるデータは十分に整えられていない。

『日本語歴史コーパス』が主要な対象テキストとしている「新編全集」に、『今昔』の巻11〜31の本朝部が収められている。この範囲のものは、本研究でも『日本語歴史コーパス』の構築作業において作成中のデータを用いていく。そこに収められていない巻1〜10の天竺震旦部は、「日本古典文学大系」を底本とする国文学研究資料館の構造化テキストを用いるため、そのままでは巻11〜31の構造化テキストの形式とは異なるものとなる。そこで、後者を前者の形式に合わせる形で部分的に修正した。

『今昔』のテキストに形態素解析を施そうとする際、平安和文にはなかった大きな問題が存在する。それは、『今昔』の表記が、漢文の要素が交じっていることなど、自動形態素解析にとって障害となる種々の性質を持っているという問題である。冨士池他 (2013) によって、次の6点にまとめる。

1. 返読文字
2. 助詞・助動詞等の省略表記
3. 捨て仮名
4. 欠字欠文・破損
5. 字種（片仮名・万葉仮名）
6. 踊り字・くの字点・同の字点

1. 返読文字は、『今昔』の表記を特徴付けるもので、巻や諸本によっても異なり、相当に複雑な様相を示している (冨士池・田中 2012)。「不知ず」（「しらず」）、「令聞む」（「きかしむ」）、「于今」（「いまに」）などといった表記が見られ、「不」（「ず」「ざり」「じ」「で」「そ」）、「令」（「しむ」）、「被」（「る」「らる」）、「難」（「‐がたし」）など、多くの語彙にわたっている。このままの字順のテキストに形態素解析の処理プログラムをかけても、正しく判定できないため、あらかじめ日本語の語順に合わせて字順を変更する前

処理を施した。「不知ず」は「知らず」、「令聞む」は「聞かしむ」、「于今」は「今に」などというように、字順を修正するとともに、返読文字はそれが表している語を仮名書きに改めた。

2. 助詞・助動詞等の省略表記とは、「今昔」（「今は昔」）の「は」、「況」（「況むや」）の「む」「や」など、語それ自体が表記されていないもので、これは、平安和文にも稀に見られるが、『今昔』には非常にしばしば見られるものである。これも、このまま形態素解析処理にかけると、当然のことながら解析を誤るので、あらかじめ当該の語を仮名表記で補充することにした。上記の例は、「今は昔」、「況むや」[5] と表記する。

3. 捨て仮名とは、「汝ぢ」（「汝」）の「ぢ」、「此かく」（「此く」）の「か」のようなもので、通常は送らない仮名を漢字の後に送るものである。これをそのままの表記で形態素解析処理にかけると、やはり誤った結果になるので、あらかじめ構造化テキストから捨て仮名部分を削除する処理を施した。

4. 欠字欠文・破損は、あるべきはずの文字が欠けているもので、『今昔』には、底本が破損したことによるものと、原作者が故意に欠字欠文にしたものとがある。前者は、古典資料一般によく見られるものだが、後者が多く見られるのは、『今昔』の特徴である。欠けている文字が確実に推定できる場合も多く、その場合は、そこに推定される文字を補って構造化テキストを作成した。特に故意に欠字にしたものには、当時その語を書き表す漢字がなかった語（「しつらふ」「つぶる」など）が多く[6]、これは書き手が選択した語でありながら使える漢字がなくて欠字にしたものなので、語彙研究を目的とする本研究にとっては、補うべきと考えた。

5. 字種（片仮名・万葉仮名）も、『今昔』の表記の特徴である。平安和文をはじめ、日本語の古典は、仮名は平仮名を用いるものが主流であり、片仮名や万葉仮名を用いるものは主流でない。形態素解析の際、多様な字種で書かれていると、解析を十分に行うことができない。そこで、片仮名・万葉仮名は、すべて平仮名に変換して構造化テキストを作ることにした。

6. 踊り字・くの字点・同の字点などは、多様な繰り返し記号が使われている。これも、平安和文にもある表記だが、それに比して、『今昔』のそれは、種類が多様であり、用法も複雑であるため、形態素解析を行う際の障害になる。これも、これらの記号が表している語を、通常の表記で書き表すように、構造化テキストに手を加えた。

以上 6 点にわたって、『今昔』の複雑な表記を、いずれも形態素解析の障害にならないような形に修正して、構造化テキストに手を加えた。

[5] この語は「短単位」では「言ふ」「む」「や」の 3 単位に切ると規定されている。
[6] これは、『今昔』の書き手が、自立語は漢字で書くという志向性が極めて強いためである。

『今昔物語集』の形態素解析

上記のようにして整形した構造化テキストに対してでも、平安和文を想定して整備された「中古和文 UniDic」による自動形態素解析では、十分な精度は実現できない。その理由は、『今昔』には、平安和文とは異なる語彙が多いことと、文法や語法なども部分的に違っていて、語の連接の実態も異なっているためである。この問題は、今後、『今昔』にも対応できるように「中古和文 UniDic」の解析用辞書を整備していくことで解決を図るべきことである。しかし、当面は、自動形態素解析によって得られたデータに対して、手作業で誤りの修正を行っていかねばならない。その作業においては、平安和文の場合よりも、多くの問題を解決しなければならない。

表 2.2 は、『今昔』巻 12 第 1 話の冒頭部分の第 2 文と第 3 文を、「中古和文 UniDic」で解析した結果をそのまま示したものである。

表 2.2 のうち、11「也」、13「幼稚」、20「受け持」、28「以」、29「て」、36「経」の 6 語が誤まった解析結果になっている。記号類も含めて集計すると、37 件中 6 件（16 %）が誤解析となり、精度は非常に悪い。

これらの誤解析箇所は、手作業によって表 2.3 のように修正する。表 2.3 の「誤解析」「修正」の各列には、「語彙素読み」・「語彙素」・「品詞」の順で情報を示す。

表 2.3 のうち、11 と 36 は、全く別の語に誤認識したもので、中古和文では通常、「也」ではなく「なり」、「経」でははく「ふ」と表記されるため、誤解析となったと考えられる。13 は、「幼稚（ようち）」という語が中古和文にないため、「幼稚」という表記で書かれることのある「幼気（いたいけ）」という別語に誤って認識されたと考えられる。

20 は、「受け持」を 1 語に認定したものだが、本論文での『今昔』データでは、複合動詞はすべて 2 語に分割する処理を行った [7]。なお、「たもつ」を「持つ」と表記するのは、中古和文にはない『今昔』の特徴である。

2 語に分割されている 28「以」と 29「て」は、『今昔』では、2 つの要素が熟合して格助詞相当の機能を持った「以て」という語で機能している [8] と見られるため、1 語に扱い、品詞を「助詞-格助詞」に修正した。

本研究では、対象とする巻・説話のテキスト全体に自動形態素解析の処理プログラムをかけたデータについて、はじめから文を読み進めて、一語一語、正しい単位、正しい語彙素情報、正しい品詞情報等に修正していく作業を行って、データを整えた。漢字の読み方は、底本とした「古典大系」や「新編全集」に原則として従い、不統一・不適切

[7] 平安時代においては、動詞＋動詞の連接は、桜井 (1960) の言うように、熟合していると見るよりも 2 語に分かれると見るのが適切で、山元 (2007) の形態素解析システムも、複合動詞は分割している。『日本語歴史コーパス』でも、原則として 2 語に分割しているが、一部の複合動詞を 1 語と認定している。しかしながら、1 語と認定する基準は必ずしも明確でないため、本研究の『今昔』のデータではすべて 2 語に分割した。

[8] 「以て」が平安和文では限定された範囲にしか用いられず、漢文訓読の文章に特徴的な語であることは、山口 (1993: 403–424) に詳しい調査がある。

表 2.2: 『今昔』巻 12 第 1 話第 2 文・第 3 文の自動形態素解析

入力 世に古志の小大徳と云ふは此れ也。幼稚の時より法花経を受け持て、昼夜に読奉るを以て役として年来を経。

番号	出現形	語彙素読み	語彙素	品詞	活用型	語種
1	世	ヨ	世	名詞-普通名詞-一般		和
2	に	ニ	に	助詞-格助詞		和
3	古志	コシ	コシ	名詞-固有名詞-地名-一般		固
4	の	ノ	の	助詞-格助詞		和
5	小	コ	小	接頭辞		和
6	大徳	ダイトク	大徳	名詞-普通名詞-一般		漢
7	と	ト	と	助詞-格助詞		和
8	云ふ	イウ	言う	動詞-一般	文語四段-ハ行	和
9	は	ハ	は	助詞-係助詞		和
10	此れ	コレ	此れ	代名詞		和
11	也	ヤ	や	助詞-係助詞		和
12	。		。	補助記号-句点		記号
13	幼稚	イタイケ	幼気	形状詞-一般		和
14	の	ノ	の	助詞-格助詞		和
15	時	トキ	時	名詞-普通名詞-副詞可能		和
16	より	ヨリ	より	助詞-格助詞		和
17	法花	ホッケ	法華	名詞-普通名詞-一般		漢
18	経	キョウ	経	名詞-普通名詞-一般		漢
19	を	ヲ	を	助詞-格助詞		和
20	受け持	ウケモツ	受け持つ	動詞-一般	文語四段-タ行	和
21	て	テ	て	助詞-接続助詞		和
22	、		。	補助記号-句点		記号
23	昼夜	チュウヤ	昼夜	名詞-普通名詞-一般		漢
24	に	ニ	に	助詞-格助詞		和
25	読	ヨム	読む	動詞-一般	文語四段-マ行	和
26	奉る	タテマツル	奉る	動詞-非自立可能	文語四段-ラ行	和
27	を	ヲ	を	助詞-格助詞		和
28	以	モツ	持つ	動詞-一般	文語四段-タ行	和
29	て	テ	て	助詞-接続助詞		和
30	役	ヤク	役	名詞-普通名詞-一般		漢
31	と	ト	と	助詞-格助詞		和
32	し	スル	為る	動詞-非自立可能	文語サ行変格	和
33	て	テ	て	助詞-接続助詞		和
34	年来	トシゴロ	年頃	名詞-普通名詞-一般		和
35	を	ヲ	を	助詞-格助詞		和
36	経	キョウ	経	名詞-普通名詞-一般		漢
37	。		。	補助記号-句点	記号	

表 2.3: 『今昔』巻 12 第 1 話第 2 文・第 3 文の誤解析と修正例

番号	原文	誤解析	修正
11	也	ヤ・や・助詞-係助詞	ナリ・なり・助動詞
13	幼稚	イタイケ・幼気・形状詞-一般	ヨウチ・幼稚・名詞-普通名詞-形状詞可能
20	受け持	ウケモツ・受け持つ・動詞-一般	ウケル・受ける・動詞-一般／タモツ・保つ・動詞-一般
28	以	モツ・持つ・動詞-一般	モッテ・以て・助詞-格助詞
29	て	テ・て・助詞-接続助詞	（「以て」に統合）
36	経	キョウ・経・名詞-普通名詞-一般	ヘル・経る・動詞-一般

な例は修正した。また単位認定や、語彙素や品詞などの認定基準は、小木曽他 (2012) におおむね従ったが、上述した複合動詞の扱いや、「以て」の扱いなど、和漢混淆文の性質に応じて、部分的に基準を変更した。

こうした手作業によるデータ修正に関することで、注記しておくべきことに、多義語と認めるか同音意義語と認めるかの問題がある。多義語は、原則として 1 語にまとめる方針にしたが、多義語か同音異義語かの判断に迷うものがある。

(9) 其の投たる打蒔の米毎に血なむ付たりける。（巻 27-30）
(10) 僧共各座に着ぬ。（巻 12-22）
(11) 此の女に託たる狐の云く、（巻 27-40）
(12) 麓の里に房を造て、築垣を築き廻はして、（巻 12-33）
(13) 鐘を撞て其の音を聞しめよ（巻 12-16）
(14) 糯の干飯を舂き篩て、二斗を僧に与へて、（巻 12-31）

例えば、上記の下線部はいずれも「つく」という動詞であるが、この 6 種が多義語であるのか、同音異義語であるのかの判断は難しい。個々の用例を分析して、その判別を行うことは、それ自体が語の意味研究を行うことになる。本論文では、その判別の基準を、『日本国語大辞典 第 2 版』（小学館）によることにした [9]。この辞典によると、(9)（10）（11）を 1 つの多義語、(12)（13）(14) を 1 つの多義語にまとめ、前者と後者のグループは、別語すなわち同音異義語と扱っている。

以上のような手順で誤解析の修正と、同語異語の判別を行った後は、語彙素読み、語彙素、品詞順などで、語彙素情報や品詞情報を並べ替え、同一の表記が異なる語彙素に分かれてしまっていたり、同一の語彙素でありながら、異なる品詞になっていたりするものに関して、揺れを吸収する処理を行った。

『今昔』と『宇治』とのパラレルコーパス

『宇治』については、『今昔』との同話を用いて、この 2 作品のパラレルコーパスを作成した。『宇治』についても、『今昔』同様、「中古和文 UniDic」による解析だけでは十分な精度に至らないので、目視による修正作業も行った。形態素解析を施した『今昔』と『宇治』の同文説話 6 対について、パラレルコーパスを作成した。古典資料のパラレルコーパスの作成は、これまで全く行われていなかったもので、本研究においてはじめて試みるものである。パラレルコーパスは、同文説話について、『今昔』の説話の全語彙に対して『宇治』の説話の語彙がどう対応しているか、『宇治』の説話の全語彙に対して、『今昔』の説話の語彙がどう対応しているかの双方向から、語の対応付け作業を行って、データを作成した。

[9] 小木曽他 (2012) でも、多義語と同音異義語の判別は、『日本国語大辞典 第 2 版』を基準にしているが、『今昔』の場合、表記が多様であるため、この問題が顕在化しやすい。

なお、第 5 章以後の研究では、『今昔』、平安和文作品、『宇治』以外の資料も利用したが、多くの場合は、電子テキストを利用するのではなく、総索引を利用するか、目視で例を探すことかにより、用例採集を実施した。

第3章　漢文訓読文の語彙と和文の語彙

本章では、次の6段階で研究を進める。第1に、研究材料に定めた資料について、語彙の全体量を考察して各資料の語彙の全体的性質を明確にする。第2に、和漢混淆文における漢文訓読文の語彙と、同じく和文の語彙について、それぞれのレベル分けを行い、和漢混淆文の基幹語を確かめる。第3に、上記の2つの語彙の頻度を比較し、それぞれの特徴語を抽出する。第4に、特徴語を1語1語見ていくことで、説話の内容の違いに基づく特徴語と、和漢の文体の違いに基づく特徴語に分類する。第5に、和漢の文体の違いに基づく特徴語の中から、他方の文体によく使われる語彙の中に対立語を持つものを抽出する。第6に、対立関係にある対を、その内容から3つの類型に分類し、その頻度の対応から、3つのタイプに分類する。

3.1　資料の語彙調査

3.1.1　基本語彙量

本研究でコーパスとして活用し、全語彙を分析対象とするのは、『今昔』巻7、同巻12、同巻27、『日本語歴史コーパス 平安時代編』（先行公開版）所収の、平安和文10作品の4種である。それぞれの基本語彙量は、表3.1の通りである。平安和文作品については、『今昔』の各巻と語彙の比較がしやすいように、『大和物語』と『和泉式部日記』の2作品だけを取り出したデータも集計し、「平安和文一部」として示す。後に参照する必要から、『今昔』巻12と巻27とを合わせて集計した結果も示す。なお、付属語についても対象にすることが望まれるが、現状では、『今昔』の自動形態素解析結果の付属語には誤りが多く、これを人手で修正するには多大な手間がかかる。したがって、本章のデータには付属語は含めていない。また、言語ではない記号類も除外して集計した。

表3.1に示すように、『今昔』の各巻の語彙量は、異なり語数で約1,800から約2,500、延べ語数で約12,000から約18,000程度で、巻の間の差異はさほど大きいわけではない。一方、平安和文10作品は、異なり語数、延べ語数ともに、『今昔』の各巻に比べて非常に多いが、そこから取り出した『大和物語』『和泉式部日記』を合わせた「平安和文一部」の語彙量は、『今昔』巻12と大体同じ分量である。以下、この2作品だけを集計したデータを「平安和文一部」、10作品全体を集計したデータを「平安和文全体」と呼ぶことに

表 3.1: 各資料の基本語彙量（付属語・記号類除く）

資料	利用目的 (資料の位置付け)	異なり語数	延べ語数
今昔 巻 7	和漢混淆文の漢文訓読文〔純漢文依拠〕	1,861	12,590
今昔 巻 12	和漢混淆文の漢文訓読文〔和化漢文依拠〕	2,426	17,859
今昔 巻 27	和漢混淆文の和文	1,837	14,294
平安和文一部	和文〔今昔と比較するため 2 作品を抽出〕	2,415	17,839
今昔 巻 12 ＋巻 27	和漢混淆文の全体	3,305	32,153
平安和文 10 作品	和文	9,300	389,170

表 3.2: 各資料の「語種」情報の集計（付属語・記号類除く、異なり語数）

資料	和語	漢語	外来語	混種語	固有名詞	合計
今昔 巻 7	1,012	612	2	64	170	1,861
今昔 巻 12	1,369	754	2	58	242	2,425
今昔 巻 27	1,437	247	0	27	125	1,837
平安和文一部	2.022	168	2	30	193	2,415
今昔 巻 12 ＋巻 27	2,010	882	2	72	339	3,305
平安和文 10 作品	6,972	1,155	22	210	941	9,300

表 3.3: 各資料の「語種」情報の集計（付属語・記号類除く、延べ語数）

資料	和語	漢語	外来語	混種語	固有名詞	合計
今昔 巻 7	9,402	2,340	4	249	595	12,590
今昔 巻 12	13,855	3,222	2	245	535	17,859
今昔 巻 27	12,997	900	0	87	310	14,294
平安和文一部	16,584	743	3	95	414	17,839
今昔 巻 12 ＋巻 27	26,852	4,122	2	332	845	32,153
平安和文 10 作品	363,297	18,620	140	2,621	4,492	389,170

する。語彙量が大きく違わない、『今昔』巻 7、巻 12、巻 27 と平安和文一部とを中心に、各資料の語彙の概要を語種と品詞の観点から見ていく。

3.1.2　語種構成

表 3.2 と表 3.3 は、UniDic の「語種」情報にしたがった、各資料についての、異なり語数と延べ語数の集計表である。このうち、「固有名詞」を除外し、「外来語」を「漢語」にまとめて、中心として比較分析する資料ごとの語種構成比率をグラフにまとめたものが、図 3.1[1] および図 3.2 である。固有名詞を除外するのは、言語学的には語種とは次元の異なる概念であり、外来語を漢語に含めるのは、この時代の外来語は梵語で、梵語も漢語を通して日本に入ってきており、日本語の中での語彙的な性格は漢語と同じだからである。

『今昔』巻 7 と『今昔』巻 12 とを比較する。『今昔』の巻 7 は震旦部にあって中国の

[1] この図は、第 1 章冒頭に掲載したものと同じ図である。

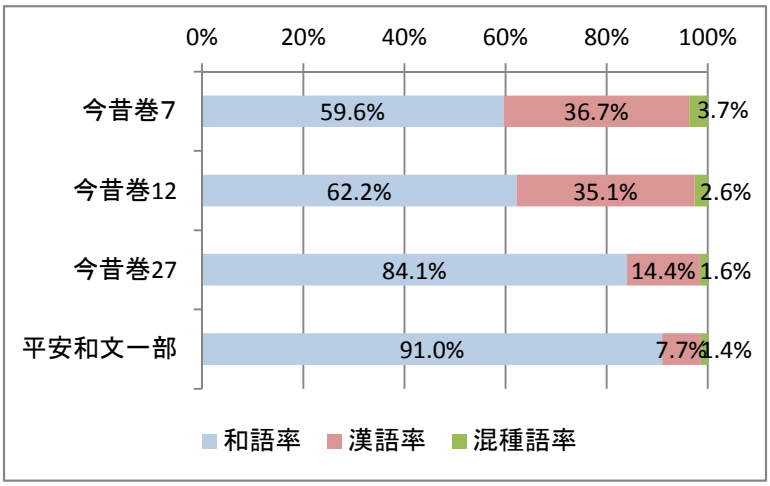

図 3.1: 各資料の語種比率（異なり語数）

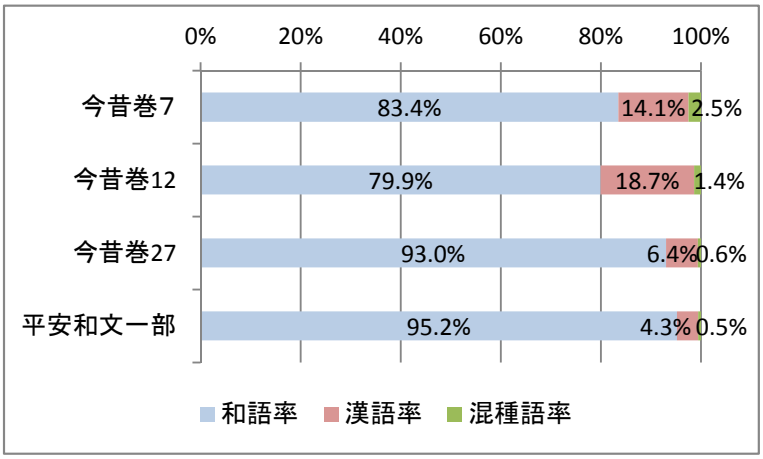

図 3.2: 各資料の語種比率（延べ語数）

説話を収める巻で、純漢文を依拠資料とするものが多いのに対して、巻 12 は本朝部の日本の説話を収める巻で、和化漢文を依拠資料とするものが多い。こうした事情から、この 2 つの巻には、同じく和漢混淆文における漢文訓読文ではあるが、そこに差異が存する可能性が予想されたが、語種構成比率は実際どうなっているだろうか。図 3.1（異なり語数）を見ると、巻 7 は巻 12 よりも和語の比率が 2.6 ポイント低くなっており、その分、漢語や混種語の比率が、それぞれ 1〜2 ポイント高くなっている。一方、図 3.2（延べ語数）では、巻 7 は巻 12 よりも和語の比率が 3.5 ポイント高くなっており、その分、漢語の比率が 4.6 ポイント低くなっている。このように、異なり語数、延べ語数ともに、両者の差はあるものの、それは小さく、このあと見ていく他の資料間の差に比べるとわずかと言ってよいものである。

『今昔』巻 12 と『今昔』巻 27 とを比較すると、異なり語数においても延べ語数におい

表 3.4: 各資料の「品詞」情報の集計（付属語・記号類除く、異なり語数）

資料	名詞	代名詞	形状詞	連体詞	副詞	接続詞	感動詞	動詞	形容詞	接辞	計
今昔 巻7	1,182	16	28	3	41	3	0	476	69	42	1,861
今昔 巻12	1,583	19	42	2	54	5	3	566	92	59	2,425
今昔 巻27	1,031	31	50	2	70	1	6	490	117	38	1,837
平安和文一部	1,304	31	56	2	102	0	5	689	168	58	2,415
今昔 巻12＋巻27	2,163	32	72	3	82	5	9	727	142	70	3,305
平安和文10作品	6,320	59	246	7	265	4	20	1,647	598	134	9,300

表 3.5: 各資料の「品詞」情報の集計（付属語・記号類除く、延べ語数）

資料	名詞	代名詞	形状詞	連体詞	副詞	接続詞	感動詞	動詞	形容詞	接辞	計
今昔 巻7	6,137	960	108	17	403	31	0	4,371	382	181	12,590
今昔 巻12	8,353	1,371	179	8	578	16	3	6,389	530	432	17,859
今昔 巻27	5,896	945	151	9	562	6	26	5707	732	260	14,294
平安和文一部	6,978	725	130	12	1,118	0	24	6,941	1,144	767	17,839
今昔 巻12＋巻27	14,249	2,316	330	17	1,140	22	29	12,096	1,262	692	32,153
平安和文10作品	141,523	13,067	5,313	125	24,044	23	539	152,788	33,346	18,402	389,170

ても、語種構成比率に非常に大きな差があることが分かる。異なり語数（図 3.1）では、巻 27 は巻 12 に比べて、和語の比率が 21.9 ポイントも高くなっており、その分、漢語の比率が 20.7 ポイントも低くなっている。延べ語数（図 3.2）でも、巻 27 の方が、和語の比率が 13.1 ポイント高く、漢語の比率が 12.3 ポイント低い。

次に、『今昔』巻 27 と平安和文一部とを比較する。異なり語数（図 3.1）においては、平安和文一部の方が、和語の比率が 6.9 ポイント高く、漢語・混種語の比率が 6.9 ポイント低くなっている。また、延べ語数においては、同じく、和語の比率が 2.2 ポイント高く、漢語・混種語の比率が 2.2 ポイント低くなっている。『今昔』巻 27 と平安和文一部の差は『今昔』巻 12 と『今昔』巻 27 との差に比べれば小さいが、そこには明確な差があると言ってよいだろう。和漢混淆文における和文と平安和文とは、同じ和文であっても、語種構成に差があるのである。

3.1.3　品詞構成

今度は、各資料の品詞構成を概観する。表 3.4、表 3.5 は、中古和文 UniDic の規定する品詞の大分類にしたがった、異なり語数と延べ語数の集計表である。

図 3.3 および図 3.4 は、語種構成比率の場合と同じようにして、中心として比較分析する 4 つの資料の語彙の品詞構成比率を、相互に比較できるようにまとめたものである。そ

の際、接辞は除外し、名詞の類（N）、動詞（V）、形容詞・副詞の類（M）、接続詞・感動詞の類（I）の 4 つにまとめ直して示した。接辞を除外するのは、この品詞が語基と結合することをその役割としていて、文の中で決まった役割を果たしている他の品詞とは性質が異なるからである。また、N、V、M、I の 4 つに分ける枠組は、文章の種類によって品詞構成に一定の法則があることを明らかにした樺島 (1954) にしたがったものである。

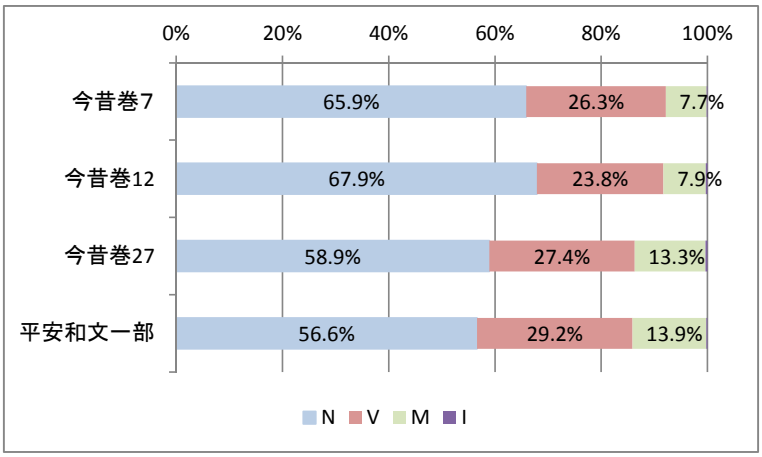

図 3.3: 各資料の品詞比率（異なり語数）

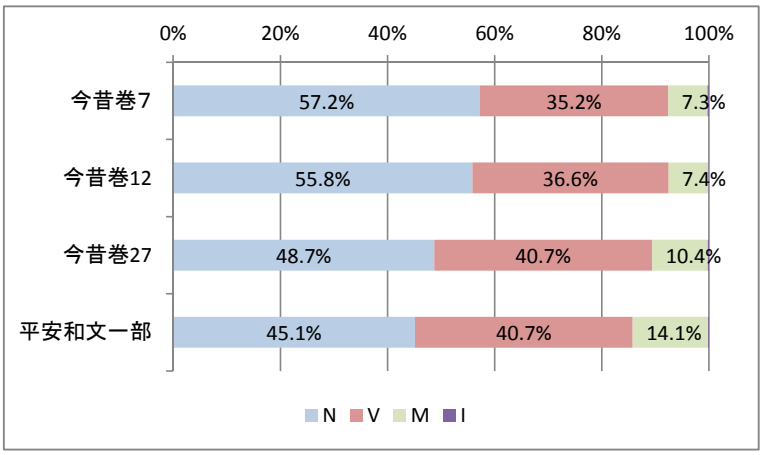

図 3.4: 各資料の品詞比率（延べ語数）

『今昔』巻 7 と『今昔』巻 12 とを比較すると、異なり語数では、巻 7 に比べて巻 12 は、N の比率が 2 ポイント高くなり、V の比率が 2.5 ポイント低くなっている。延べ語数では、巻 7 に比べて巻 12 は、N の比率が 1.4 ポイント低く、V の比率が 1.4 ポイント高くなっている。異なり語数・延べ語数ともに、この 2 つの巻の差は、それほど大きくないと言ってよいだろう。巻 7 と巻 12 とは、品詞構成の面でも、その差は小さい。

一方、『今昔』巻 12 と『今昔』巻 27 とを比較すると、異なり語数でも延べ語数でも明確な差が認められる。巻 12 に比べて巻 27 は、N の比率が、異なり語数で 9 ポイント、延

べ語数で7.1ポイント低くなり、Vの比率が、異なり語数で3.6ポイント、延べ語数で4.1ポイント高くなっている。Mの比率も、異なり語数で5.4ポイント、延べ語数で3ポイント高くなっており、これは倍率では、それぞれ1.7倍、1.4倍に増加していることになり、Mの増加率は際立っている。

『今昔』巻27と平安和文一部を比較すると、異なり語数で、平安和文はNの比率が2.3ポイント低くなり、Vの比率が1.8ポイント高くなっている。延べ語数では、平安和文はNの比率が3.6ポイント低くなり、Mの比率が3.7ポイント高くなっている。

3.1.4　各種資料の語彙の違い

以上、4種の資料の語種構成と品詞構成を概観してきた結果から、各資料の語彙の性質は、次のようにまとめられる。

1. 純漢文を依拠資料とする『今昔』巻7と、和化漢文を依拠資料とする『今昔』巻12とは、語種構成から見ても品詞構成から見ても、大きな差異はない。

2. 和漢混淆文においては、漢文訓読文の『今昔』巻12と、和文の『今昔』巻27とは、語種構成から見ても品詞構成から見ても、大きな差異がある。

3. 和漢混淆文における漢文訓読文では、漢語の比率が高いのに対して、その和文では、和語の比率が高い。また、同じく漢文訓読文では、名詞の類（N）の比率が高いのに対して、その和文では、動詞の類（V）と形容詞・副詞の類（M）の比率が高い。

4. 和漢混淆文における和文である『今昔』巻27と、平安和文との間には、語種構成から見ても品詞構成から見ても差異があるが、その差異は、和漢混淆文の中の漢文訓読文と和文の差異に比べるとかなり小さい。

このような、語彙全体を語種や品詞の観点から集計して、『今昔』の巻による語彙の違いを見たり、平安和文のそれとの違いを見たりすることは、形態素解析コーパスがなかった従来は行われていなかった。今回、コーパスを作成した調査から得られた結果をもとに、従来言われてきた『今昔』の語彙の性質に[2]、次のような新たな見方を加えることができると思う。

第一に、1から、純漢文を依拠資料とする天竺震旦部と、和化漢文を依拠資料とする本朝仏法部との語彙の違いは、それほど大きいものではなく、むしろ、その違いはあまりないと言ってよい。第二に、2、3から、『今昔』における漢文訓読文の部分と和文の部

[2] 『今昔』の語彙研究の歴史は佐藤 (1984) にまとめがあり、和漢混淆文に先行する文体である、和文・和化漢文・漢文訓読文のいずれの語彙が、『今昔』の基底にあるかが中心的なテーマであったことが分かる。

分との語彙の違いは非常に大きい。そして第三に、4 から、『今昔』の和文の部分と平安和文とは、違いがあるものの、その違いの程度は、『今昔』における漢文訓読文の部分との違いに比べると、小さい。

もっとも、今回は、『今昔』の 3 巻だけの調査であるため、他の巻にも同様の調査をすれば、この見方を若干修正する必要が出てくる部分もあるかもしれない。しかし、依拠資料が純漢文か和化漢文かの違いや、漢文訓読文の巻と和文の巻との違いについては、ここで得られた結論は、大筋では動かないと考えてよいだろう。

そして、和漢混淆文における和文が、平安和文とどの程度似ていて、どの程度違っているかも、この調査によって、はじめて数字でとらえることができた。和漢混淆文である『今昔』の語彙が、相当に振れ幅が大きいものであることと、その中の和文の語彙が、平安和文の語彙にかなり近いこと、和文よりも少し漢文訓読文の側に寄った位置にあることが確かめられた。

また、ここで判明した事実をもとに、本章におけるこの後の調査について、次のような方針を採ることが妥当と考えられる。1 から、漢文訓読文の資料としては、『今昔』巻 12 に加えて巻 7 を調査対象にする必要性は低く、巻 12 でこれを代表させてよい。したがって、本章におけるこれ以後の考察では、巻 7 は調査対象から外す。また、2、3 から、和漢混淆文における漢文訓読文である巻 12 と和文である巻 27 との比較は、漢文訓読文の語彙と和文の語彙の違いを研究する際に特に重要である。

3.1.5　語彙のレベル分け

レベル分けの目的

語彙の一般的な性質によれば、高頻度の語彙には、どのような文章にも共通してよく用いられる「基幹語」と、文章を特徴付ける「特徴語」とがある (樺島 2009)。一方、低頻度の語彙は、資料への出現が文章の内容など偶然に左右されるところも大きく、頻度から語彙の性質を考えることが難しい面がある。その高頻度の語彙と、低頻度の語彙の境界を客観的に定めることは難しく、その中間にある中頻度の語彙という一群を考えることもでき、そこには言語の特徴を考えるのに役立つ性質があると考えられる [3]。

そこで、まず、高頻度語彙、中頻度語彙、低頻度語彙の 3 段階に分け、そのうちの高頻度語彙と中頻度語彙を、分析対象としていきたい。語彙をこの 3 段階に分けることを「語彙のレベル分け」と呼び、そう分けた 3 つの段階のことを「レベル」と呼ぶことにする。

[3] ホドシチェク・山元 (2013) は、情報量によって語彙を上位・中位・下位に序列化し、「中位においても何らかの分析において便利な特徴があるものと考える」としている。

表 3.6: 各資料の語彙のレベル分け: 範囲は頻度、語数は異なり語数。例えば、巻 12 は低頻度語を頻度 1〜3 の語と規定し、その範囲に異なりで 1609 語あることを示す。

	低頻度語彙		中頻度語彙		高頻度語彙	
	範囲	語数	範囲	語数	範囲	語数
巻 12	1〜 3	1609	4〜 7	392	8〜	424
巻 27	1〜 3	1188	4〜 8	324	9〜	324
巻 12 ＋巻 27	1〜 4	2266	5〜 11	564	12〜	475
平安和文全体	1〜41	8103	42〜116	672	117〜	525

レベル分けの方法

各資料の語彙を 3 つのレベルに分ける具体的な指標には、累積使用率を用いる。この指標を用いることで、総語数が異なる資料であっても、相互に同じ位置でレベルの線引きをすることが可能になる。ここでは、累積使用率が 75 %に達するところまでの語彙を高頻度語彙、75 %から 87 %までの語彙を中頻度語彙、87 %以上の語彙を低頻度語彙とする基準を設定した [4]。

本研究でこれから使っていく『今昔』の各巻と、参考のために平安和文全体も加えて、それぞれの全語彙に対してこの基準でレベル分けを行った結果について、その度数範囲と語数をまとめたものが、表 3.6 である。資料の総語数（異なり語数・延べ語数）の多寡などによって、各レベルの語数には変動があるが、高頻度語彙には 324 語から 525 語、中頻度語彙には 324 語から 672 語が、低頻度語彙には 1,188 語から 8,103 語が、それぞれ分類された。

3.1.6　和漢混淆文の基幹語

『今昔』における巻 12（漢文訓読文）と巻 27（和文）のどちらでもよく使われる、基幹語に相当するものを抽出する。レベル分けの結果 (表 3.6) に基づき、巻 12 でも巻 27 でも、「高頻度語彙」に属するものを抽出すると、192 語になる。この 192 語は、和漢混淆文における漢文訓読文（巻 12）にも和文（巻 27）にもよく用いられる語であるということだから、和漢混淆文の基幹語と見ることにする。

付録 A.1 の「和漢混淆文の基幹語」に、表 A.1〜A.4 として、その 192 語のリストを品詞別に掲げた。その基幹語のリストに表示した語彙の品詞構成比率を、先述した『今昔』巻 12 ＋巻 27 の全語彙の品詞構成比率と比較して示すと、表 3.7 のようになる。これによれば、基幹語は、全語彙に比較して、名詞の類の比率が低くなり、動詞の類と形容詞・

[4] 線引きの基準をどこに置くかについて絶対的な根拠があるわけではなく、3 つのレベルに分けると高頻度語彙と中頻度語彙の 2 レベルにおいて特徴語を抽出しやすいと考え、ここで線引きをした。同一頻度で多くの語が並ぶ場合、線引きを行う累積使用率の数値が、基準値の前後にいくらかずれる場合がある。

表 3.7: 『今昔』巻 12・巻 27 の語彙全体の品詞構成と基幹語の品詞構成 (%)

語彙	名詞の類 (N)	動詞の類 (V)	形容詞・副詞の類 (M)	接続詞・感動詞の類 (I)	計
全語彙	67.9	22.5	9.2	0.4	100.0
基幹語	43.3	43.9	12.8	0.0	100.0

副詞の類の比率が高くなっており、特に、動詞の類の比率の高さが際立っている。基幹語の占める位置は、相対的に動詞が、次いで形容詞・副詞が、大きなものであることが分かる。

また、語種の観点から見ると、基幹語における漢語・混種語は、次の 8 語、約 4.2 %にとどまる。

- 名詞： 院、京、希有、師、僧、堂、様(やう)
- 動詞： 具す

この状況は、表 3.3 で見た、『今昔』巻 12 ＋ 27 の全語彙における漢語・混種語が 956 語で、32.2 %であったのに比べて極めて低い。全語彙と比較して見た場合、基幹語の大部分は和語が占め、漢語や混種語はほとんどそこに入り込んでいないことが分かる。

『今昔』において和漢混淆文が成立し、同一文章中で和語と漢語とが共に用いられることが普通になったとは言え、その共存の状況は基幹語の部分にまではほとんど及んでいない。

3.2 漢文訓読文の特徴語

3.2.1 『今昔物語集』巻 12 の特徴語の抽出

『今昔』の巻 12 に多く使われ、巻 27 にあまり使われない語彙の中には、漢文訓読文によく使われ、和文にあまり使われない語彙が含まれていると考えられる。同様に、『今昔』の巻 27 に多く使われ、巻 12 にあまり使われない語彙の中には、和文によく使われ、漢文訓読文にはあまり使われない語彙が含まれていると考えられる。

本節では、まず、『今昔』巻 12 に多く使われ、巻 27 であまり使われない、巻 12 の特徴語を抽出し、それがどのような語彙であるかを見ていく。『今昔』巻 27 に多く使われ、巻 12 にあまり使われない、巻 27 の特徴語については、次節で取り上げる。

特徴語の抽出基準

特徴語の抽出は、次の手順で行った。まず、巻 12、巻 27 それぞれについて、各語の頻度と、巻全体の延べ語数を用いて、各語の使用率を計算し、10,000 語あたりに何件使わ

表 3.8: 『今昔』巻 12・巻 27 の使用率の比率（50 音順冒頭 10 語）:「読み」は現代仮名遣い・口語法で示し、「語」は歴史的仮名遣い・文語法で示した。

No.	読み	語	品詞	巻 12 頻度	巻 27 頻度	頻度計	巻 12 使用率	巻 27 使用率	使用率計	巻 12 比率	巻 27 比率
1	アイ	相	接辞	4	3	7	2.24	2.1	4.34	0.52	0.48
2	アイダ	間	名詞	123	34	157	68.87	23.79	92.66	0.74	0.26
3	アウ	会ふ	動詞	21	19	40	11.76	13.29	25.05	0.47	0.53
4	アウ	合ふ	動詞	13	9	22	7.28	6.3	13.58	0.54	0.46
5	アオリ	障泥	名詞	5	1	6	2.8	0.7	3.5	0.8	0.2
6	アカイ	赤し	形容詞	2	5	7	1.12	3.5	4.62	0.24	0.76
7	アカイ	明し	形容詞	2	6	8	1.12	4.2	5.32	0.21	0.79
8	アカガネ	銅	名詞	5	3	8	2.8	2.1	4.9	0.57	0.43
9	アカツキ	暁	名詞	2	5	7	1.12	3.5	4.62	0.24	0.76
10	アガル	上がる	動詞	1	9	10	0.56	6.3	6.86	0.08	0.92

れるかを数値に表した。

使用率　＝　（頻度／延べ語数）× 10,000

次に、上記で算出した巻 12 使用率と巻 27 使用率とを比較した比率を算出した。表 3.8 は、高頻度語彙と中頻度語彙とを合わせた語彙について、50 音順に冒頭の 10 語の上記の数値を一覧にしたものである。

表 3.8 の「1. 相」、「3. 会ふ」、「4. 合ふ」は、巻 12 使用率、巻 27 使用率ともに 0.4 から 0.6 の間の数値を示しており、巻 12 や巻 27 のいずれかに偏って使用されているわけでなない。これに対して、「5. 障泥」は巻 12 の比率が 0.8 を、また、「10. 上がる」は巻 27 の比率が 0.92 を、それぞれ示しており、巻 12 および巻 27 それぞれに、特徴的な語と見てよいだろう。本章では、この比率が 0.8 以上のものを、その巻の特徴語と扱うことにする。

巻 12 の特徴語の品詞別リスト

まず、高頻度語彙と中頻度語彙の中から、巻 12 の特徴語として、巻 12 の比率が 0.8 以上の語を抽出したところ、303 語が得られた。付録 A.2 の「『今昔物語集』巻 12 の特徴語」に、表 A.5〜表 A.10 として、その巻 12 特徴語の 303 語のリストを品詞別に一覧にした。

3.2.2　内容の違いに基づく特徴語の判別

仏教に関わる名詞

付録 A.2 の「『今昔物語集』巻 12 の特徴語」の、表 A.5〜表 A.10 の、巻 12 特徴語のリストを見ていくと、『今昔』の巻 12 と巻 27 の説話を読んだ者であれば、巻 12 の特徴語になっている理由に思い当たるものが多くある。二、三の語を例に、具体的に説明しよう。

例えば、表 A.5 にある「2. 阿闍梨」という語は、巻 12 に 44 件用いられており、巻 27 には 1 件も用いられていない。巻 12 のそれらは、6 つの説話で、飯室の阿闍梨（第 22 話）、慶祐阿闍梨（第 32 話）、延源阿闍梨（第 34 話）、道命阿闍梨（第 36 話）、信誓阿闍梨（第 37 話）、徳大寺の阿闍梨（第 39 話）という 6 人の人物を指して用いられているものである。「阿闍梨」とは、梵語に由来する、弟子を教える高僧を意味する語であるが、平安時代の日本では、儀式を執り行うなど一定の役割を担う、真言宗や天台宗の僧侶の職名として用いられることが一般的であった（『日本国語大辞典 第 2 版』小学館）。『今昔』で、「阿闍梨」が巻 12 に多く、巻 27 に皆無であるのは、それぞれの巻に収録された説話が、このような人物を多く登場させているか否かという、説話の内容の違いに基づく現象である。同じ表の「3. 尼」が、巻 12 に 24 件あって、巻 27 に皆無であるのも、尼が登場する説話が一定数あるか全く無いかの違いによるものである。

このような、説話が扱う内容の違いが特徴語となって現れたと推定できるものが、以下に挙げるように多数ある。

- 仏や僧侶など仏教に関わる人物
  - 2 阿闍梨、3 尼、24 願主、37 講師、42 乞者、50 座主、57 沙弥、63 聖人、76 僧、79 僧正、80 僧都、83 大師、86 大菩薩、91 檀越、100 弟子、104 天童、108 童子、119 入道、132仏（ぶつ）、133 仏師、141 法師、144 菩薩、145 菩提、147仏（ほとけ）、156 薬師、164 老僧
- 仏教に関わる事物や概念
  - 1 障泥、4 安置、8 一部、12会（え）、15 音楽、22巻（くわん）、23願（ぐらん）、26 儀式、28 経、29 恭敬、31 功徳、32 供養、35 講、36 高座、38 講堂、40 極楽、41 後世、44 金堂、45座（ざ）、46 最後、47 最勝、56 持経、58 舎利、59 修行、60 受持、61 出家、62 丈、64 生類、65 丈六、67 食堂、68 書写、70 印、71 信、74 善根、77 像、78 僧供、81 俗、87 大門、93 誓い、95 知識、96 聴衆、97 聴聞、99 罪、101 寺、102 天、103 天蓋、106 塔、109 道心、111 読誦、118 日夜、120 入滅、122 願ひ、123 涅槃、128 平張、130 部、131 札、134 仏法、136文（ふみ）、138 法、139房（ぼう）、140 法会、142 放生、143 法服、146 法華、153 巡り、157 山寺、158 維摩、160 礼拝、162 霊験、163 蓮華

これらの語彙が巻 12 の特徴語となっているのは、巻 12 が、塔の建立、法会の起源、法花経の霊験など、仏教の内容を扱っており、そのような仏教に関わる内容は巻 27 ではほとんど扱われていないことから生じた現象である。

仏教関係以外の名詞

仏教に関わる語ではなくても、巻27に比べて巻12が扱う内容として特徴的な事物や概念を表す語が存在する。例えば、表A.7にある名詞「149御代（みよ）」は天皇の治世を表す語だが、巻12には説話の舞台となる時代をどの天皇の治世であったかで表す場合が、「聖武天皇ノ御代」（巻12-11）、「白壁ノ天皇ノ御代」（巻12-14）などのように多いが、巻27ではこの表し方はあまり行われていないため、「御代」は、巻12の特徴語となっているのである。同じく「105天皇（てんわう）」という語が巻12の特徴語になるのも同じ事情である。このような説話の舞台となる時間や空間を表す語で、巻12の特徴語になっているものには、他に「151村（むら）」などがあり、

(15) 河内ノ国、若江ノ郡ノ遊宜ノ村（むら）ノ中ニ一人ノ沙弥ノ尼有ケリ。（巻12-17）

のように使われている。さらに、次のように、人間の成長を年齢で示す「272歳（さい）」も、巻12では非常に多いが巻27では少ない。

(16) 年九歳（さい）ニシテ家ヲ出デテ（巻12-38）

これらの語が特徴語になるのも、説話で扱われる内容が、巻12と巻27とで違っていることによるものである。

そのほか、個々の事情を説明することは省略するが、次に挙げる名詞なども内容の違いに基づく巻12の特徴語であると見ることができる。

5飯、6籬、7筏、9魚（うを）、10氏（うぢ）、13王、17鏡、18学生、19風、20月、21壁、27鬼神（きじん）、30公卿、31蔵人、34碁、43衣（ころも）、48材木、49左右、52鯖、53三月、54食、55食物、66織冠、69書生、72関、73銭、75宣旨、82空、84太政、88宝、98司、110道俗、112年（とし）、115縄、117日（にち）、126針、127病人、129夫（ぶ）、135船、148峰、150明神、151村、152雌牛、159夢

名詞以外の語

内容の違いに基づく特徴語は名詞に多いが、他の品詞にも見られるものである。動詞では、次の例などが、それに当たると考えられる。

(17) 多武ノ峰ト云フ所ニ行テ、籠（こもり）居テ静ニ行テ、後世ヲ祈ラム。（巻12-33）

(18) 夢覚（さめ）テ父母ヲ見ルニ、苦（わづか）ニ蘇生セリ。（巻12-37）

（17）は、多武の峰に籠もって祈念することを言い、(18) は、法花経を読誦しながら父母の蘇生を祈願して見た夢から覚めると願いが叶っていたことを言う例であるが、この「196 籠もる」「173 祈る」「198 覚む」などは、仏教思想に基盤を置いた一連の祈願の行為を構成するものであり、巻 12 のテーマに密接に関連する内容を表す語であるから、この巻に多く描かれているのである。

具体的な説明は省略するが、次の動詞も、巻 12 によく扱われている内容を表す語であると考えられる。

> 170 癒ゆ、175 移す、176 移る、178 敬ふ、179 選ぶ、180 拝む、183 行ふ、184 修む、187 飾る、189 叶ふ、191 朽つ、192 曇る、194 請ふ、195 講ず、200 示す、201 修す、203 誦す、204 請ず、206 信ず、207 責む、212 頼む、213 保つ、214 作る、215 勤む、217 貴ぶ、218 説く、219 遂ぐ、220 整ふ、221 唱ふ、225 習ふ、226 握る、228 願ふ、230 宣ふ、231 運ぶ、234 施(ほどこ)す、237 迎ふ、238 詣づ、240 焼く、243 読む

また、形容詞や接辞にも、巻 12 に多く描かれ、巻 27 には描かれにくい内容を指す語がある。

(19) 此ノ放生ノ功徳極テ貴シ。（巻 12-10）

(20) 皆諸寺ノ止事無(やんごとな)キ学生ヲ撰ビ召ス。（巻 12-04）

(21) 山ノ座主慈恵大僧正、（巻 12-09）

「251 貴し」は、仏教的な行為についてその崇高さが話題になることが多いことによって、同じく「254 やんごとなし」も、仏教的に高貴な人物がよく描かれていることによって、それぞれ仏教をテーマにする巻 12 に多く使われているものであり、そのような崇高な行為や高貴な人物は、巻 27 にはほとんど登場していない。また、「275大(だい)」については、巻 12 には「大僧正」のほか、「大僧都」「大明神」「大相国」などの語が多く、巻 27 には「大納言」が数例あるだけである。巻 12 と巻 27 とで扱われる内容の違いに基づく特徴語である。

ほかに次の語も、表している内容が巻 12 に多く巻 27 に少ないことによる特徴語だと考えられる。

> 247 黒し、252 長し、270小(こ)、273寺(じ)、274者(しや)、276南(なん)、277品(ほん)

表 A.10 の 260〜289 の数詞も、巻 12 では数量がよく話題になるのに対して、巻 27 にはそれがあまり話題にならないという内容上の違いによる特徴語である。279 以下の固

有名詞も、それが指示する人や場所が、巻12によく登場し、巻27にはあまり登場しないという内容の違いによる特徴語である。

以上に記してきた、説話の内容の違いが要因となって、巻12の特徴語となっていると考えてよさそうなものには、付録に掲載した特徴語の表A.5〜表A.11の最右列の「内容」の列に＊を付した。＊を付した語は、303語中の231語になり、全体の約76％を占めており、特徴語の多くは、説話の内容に起因するものであることが確認できる。

このようにして説話を読んでいくことで、説話内容の違いに基づく特徴語であることを判別していくことができる語は多い。しかしながら、この、説話を読んで判別していくという研究方法は、説話の解釈に依存するところが少なくなく、その方法自体、客観的でないという問題がある。巻12と巻27の説話をさらに深く読み込んで比較していけば、表に＊を付していない語の中に、2つの巻の内容の違いに起因する特徴語であることが判明するものがもっと多くあるかもしれない。このように考えると、内容に起因する特徴語であるか否かを判定する方法自体に研究が必要だということになる。この問題については、次節で巻27特徴語について考えた後に再び触れ、第4章で詳しく検討することにする。

ここで、3.2.2で考察した結果を受けて、＊が付かなかった語、すなわち、内容の違いとは別の理由で巻12の特徴語となっている語の検討に移ることにしよう。

3.2.3　文体の違いに基づく特徴語の分類

巻12の特徴語として掲げた303語のリストのうち、72語、約24％には「内容」の列には、＊が付いていない。説話の内容の違いということでは説明できない特徴語もまたかなりの数存在するのである。特に、動詞や形容詞・形状詞、副詞には、＊が付かない語が多く、内容の違いからは説明できない語が多い。

それらは、巻12と巻27の文章の種類、すなわち文体の違いに起因する特徴語なのではないかと予想される。そして、それらの中には、いくつかの種類がある。具体的な事例をあげて説明しよう。

巻27では類義の別語がよく使われるもの

はじめに　表A.8にある動詞「166与ふ」を取り上げよう。この語は、巻12には20件あるのに対して、巻27では2件にとどまり、巻12に特徴的である。各巻から1例ずつを挙げれば、次の通りである。

(22) 正則此ノ牛ヲ聖人ニ与へ ツ。（巻12-24）

(23) 男懐ヨリ玉ヲ取出シテ女ニ与へ ツ。（巻27-40）

（22）は、正則が牛を聖人に授与する例、（23）は、男が玉を女に授与する例であるが、これらの例のような、誰かが何かを誰かに授与するという内容は、巻 12 にも巻 27 にもよく見られるものである。したがって、「与ふ」という語が、巻 12 の特徴語となる理由を、説話が扱う内容の違いに求めることはできない。

それでは、「与ふ」は、なぜ巻 12 に多く、巻 27 には少ないのだろうか。その理由は、次のような例を見ることで推測することができる。

(24)　（遠助は）此ノ箱ヲバ女ニ取セ（とら）ムトテ　（巻 27-21）

（24）も、誰かが何かを誰かに授与することを言っているものであるが、「与ふ」ではなく、「取らす」を用いている。巻 27 には、これと同じ意味で「取らす」を使う箇所が 12 件あり、「与ふ」よりもずっと多い。誰かが何かを誰かに授与する意味を表すのに、巻 12 では「与ふ」を用いることが一般的であり、巻 27 では、「取らす」を使うことが一般的なのである。

次に、表 A.8 で、「与ふ」の直前にある代名詞「165 汝（なんぢ）」を見てみよう。この 2 人称代名詞は、巻 12 に 44 件、巻 27 に 6 件で、やはり巻 12 に特徴的である。

(25)　汝ガ持タル物ハ、此レ何物ゾ。（巻 12-27）

巻 27 に用いられている 2 人称代名詞は、「汝」のほかに、「其（そこ）」や「己（おのれ）」などもあり、これらは、巻 12 では 2 人称代名詞として使われることのなかったものである。

(26)　其ハ其ノ玉取タリト云フトモ、（巻 27-40）

(27)　己ヨ、今ヨリ此ル態（わざ）ナセソ。（巻 27-41）

巻 27 は巻 12 に比べて、使用される 2 人称代名詞の種類が多様になっており、それが「汝」の頻度が低いことと関係していよう。

「与ふ」と「取らす」、「汝」と「其」「己」のような、ほぼ同じ意味を表すのに、巻 12 と巻 27 とで一般的に用いられる語が異なっている組み合わせは、ほかにも色々とありそうである。この現象は、同じ内容を表すのに、どの語を選択するかが巻によって異なっているというものだが、その選択の違いは、巻 12 の漢文訓読文と巻 27 の和文との違いが原因だと考えるのである。

本研究では、以後、「与ふ」と「取らす」のような関係にある、ほぼ同じ意味を表す類義語が何らかの要因で使い分けられていて、その使い分けが語彙体系の中で安定している関係を「対立」と言う。「与ふ」と「取らす」の対立の真の要因が何であるかは分からないが、ここでは、漢文訓読文と和文の比較で見えた対立であるので、文体の違いによる対立に見える[5]。「汝」と「其」「己」のように、1 対多の対立関係の場合も同様に呼ぶ。

[5] 平安時代末期の訓点資料である『大慈恩寺三蔵法師伝古点』の語彙と、平安時代後期の和文資料である『源氏物語』の語彙を比較した築島 (1963: 350) は、ほぼ同じ意味を表す語が漢文訓読文と和文とで分かれることを「対立」と呼んでいる。

表 3.9: 『今昔』巻 12 の文体の違いに基づく特徴語とその対立語: （　）内は文脈上の形。例えば、「疑ひ有らじ」「疑ひ有らじ」「疑ひ無し」などの形で対応する（203 ページ参照）。

No.	巻 12 特徴語	巻 12 頻度	巻 27 頻度	対立語	巻 12 頻度	巻 27 頻度
11	疑ひ（有らず、有らじ、無し）	10	0	必ず	29	23
16	女子（をんなご）	7	0	女の童	0	23
23	奇異	19	2	あさまし	1	31
51	悟り（有り）	10	1	賢し	1	9
85	大臣（だいじん）	15	3	大臣（おとど）	0	18
90	為（ため）	54	8	とて	16	45
92	端正	6	0	うるはし	0	3
114	並び（に）	16	0	など	6	95
121	女人（にょにん）	16	0	女（をんな）	17	111
137	父母（ぶも）	30	4	親	1	4
155	諸々	25	1	あまた	0	18
165	汝	44	6	其（そこ）	6	25
				己（おのれ）	2	19
166	与ふ	20	2	取らす	0	12
169	哀れむ	10	0	哀れ	10	14
172	至る	27	3	つく	19	44
177	生まる	20	0	生む	1	4
186	終はる	26	1	果つ	2	10
190	悲しむ	35	2	悲し	9	2
193	化す（け）	5	0	成る	53	74
197	叫ぶ	11	0	声を挙ぐ	11	4
199	従ふ	22	2	つく	19	44
202	住す	14	1	住む	10	43
205	生ず	8	0	生む	4	1
224	悩む	6	0	煩ふ	7	4
232	開く（ひら）	22	4	開く（あ）	1	19
233	経（ふ）	26	4	過ぐ	12	30
235	在す（ましま）	29	1	おはす	1	38
239	用ゐる	6	0	使ふ	7	5
241	養ふ	6	1	傅く（かしづ）	1	2
245	喜ぶ	32	4	嬉し	2	11
246	明らか	5	0	明し（あか）	2	6
249	速やか	17	2	疾し（と）	3	11
250	具さ（つぶ）	7	1	詳し	0	3
256	つゆ	8	0	聊か	3	3
271	御（ご）	7	0	御（み）	12	5

付録 A.2「『今昔物語集』巻 12 の特徴語」に示したリストで、「内容」の列に＊が付いていない語について、巻 27 に同じ意味を表すのに別の語が使われている例が見つかるかどうかを調べていったところ、表 3.9 に掲げる諸語で、そのような例が見つかった。個々にあげる語がほぼ同義であることが分かる用例は、付録 B.1「『今昔物語集』巻 12 の文体の違いによる特徴語と対立語の用例」に挙げるので適宜参照してほしい。

表 3.10: 『今昔』巻 12 の文体の違いに基づく特徴語で慣用句が多いもの

No.	巻 12 特徴語	巻 12 頻度	巻 27 頻度	慣用句	巻 12 頻度	巻 27 頻度
14	思ひ	7	1	思ひの如く	4	1
39	首(かうべ)	8	0	首を傾く	6	0
				首を挙ぐ	2	0
89	掌(たなごころ)	7	0	掌を合はす	5	0
113	涙	11	1	涙を流す	9	0
169	合はす	7	1	掌を合はす	5	0
171	致す	19	0	心を致す	14	0
181	起こす	34	2	心を発(おこ)す	17	0
				信を発(おこ)す	3	0
182	怠る	5	0	怠らず	3	0
				怠る事無し	2	0
188	傾く	6	0	首(かうべ)を傾く	6	0
222	流す	10	0	涙を流す	9	0

こうして、巻 27 で、対立語が見つかるものを拾っていったところ、全部で 34 語となった。

巻 12 に慣用句が多いもの

巻 12 にまとまった件数があり、巻 27 にはそれがほとんどない語の中には、特定の慣用句として用いられている例が多くを占めるものがある。このような場合は、その語自体が漢文訓読文によく用いられるということよりも、その慣用句が、漢文訓読文によく用いられるということに注目すべきであろう。巻 12 において慣用句として多く使われ、巻 27 ではその慣用句はほとんど使われていないことが確認できたものを表 3.10 に挙げる。

表 3.10 に示した、漢文訓読文に特徴的な慣用句が形成されていると考えられるものは全部で 10 語となり、文体の違いに基づく巻 12 の特徴語 72 語の中で、約 14 %を占める。

これらの慣用句の背後には、「如思」「挙首」「合掌」「流涙」「致心・至心」「発心」などの漢語表現が想定され、これらの訓読語形として、上記のような慣用句が、漢文訓読文で用いられ、和文では用いられなかったものと見ることができる。

対立語も慣用句もないもの

ここまで、文体の違いに基づく巻 12 の特徴語について、巻 27 に対立語が指摘できる語彙と、慣用句が文体の違いに基づく特徴語になっている語彙との、2 つの類型を見出すことができた。この 2 つのいずれかに分類できたものは、あわせて 44 語、約 61 %である。

それでは、この 2 つの類型のいずれにも入らない、残った 28 語はどのような語彙だろうか。以下にそれらを品詞別に列挙する。

- **名詞** 107 東西、116 男女、124 年、125 始め、154 専ら、161 料
- **動詞** 167 集む、174 承る、185 及ぶ、208 奏す、209 添ふ、210 絶つ、211 奉る、216 積む、223 嘆く、227 担ふ、229 臨む、236 満つ、242 破る、244 因る
- **形状詞** 248 静か、253 懇ろ
- **副詞** 255予(かね)て、257 初めて、258 偏に、259 良く
- **接尾辞** 271御(ご)、278等(ら)

これらの語が、さらにいくつかの類型に分けられるのか、巻 12 と巻 27 のデータだけでは材料が不足するために性質が不明なままとなっているのか、現段階では分からない。

上に指摘した 2 つの類型のうち、本研究の材料としては、1 番目の、対立関係にある類義語が、特に重要だと考えられる。これについては、巻 27 の特徴語を分析した後に、詳しく扱っていく。

3.3　和文の特徴語

3.3.1　『今昔物語集』巻 27 の特徴語の抽出

『今昔』の巻 27 によく使われ、巻 12 にあまり使われない、巻 27 の特徴語の中には、和文によく使われ、漢文訓読文にはあまり使われない語彙が含まれていると考えられる。巻 12 の特徴語を抽出したのと同じ手法で、巻 27 の比率が 0.8 以上であることを基準として、巻 27 の特徴語を抽出したところ、243 語となった。付録 A.3「『今昔物語集』巻 27 の特徴語」の、表 A.12〜表 A.16 は、その 243 語を品詞別に 50 音順に並べたものである。

これらの語について、巻 12 の特徴語の場合と同じく、内容の違いに基づく特徴語と、文体の違いに基づく特徴語とに分ける作業を行っていこう。

3.3.2　内容の違いに基づく特徴語の判別

まず、表 A.12 の「3.兄(あに)」を見ると、巻 12 には 1 件もなく、巻 27 には 27 件ある。「19.弟(おとうと)」も同じ状況で、巻 12 に皆無で、巻 27 に 28 件ある。「兄」「弟」が巻 27 の特徴語となっているのは、巻 12 には兄弟が登場する説話が全くないのに対して、巻 27 にはそれが多いことによるもので、説話内容の違いに基づく現象であることが明らかである。

巻 27 の特徴語で、内容の違いがその要因であるものをグループに分けて示すと、次のようになる。

- 家族・性別・年齢・貴族の職階に基づく、人物を指す語

- 3兄(あに)、11夫、12嫗(おうな)、13大君、16大宮、17翁(おきな)、19弟(おとうと)、20男(をとこ)、23男(をのこ)、26女(をんな)、35兄弟、41子、42子供、45宰相、46史(さかん)、52僕(しもべ)、53従者、59雑色、62大夫(たいふ)、63大夫(だいふ)、71中将、81女房、91弁、97娘、98女(め)、100乳母

- 貴族・庶民の生活・活動、その場所や道具を表す語
  - 5庵(いほり)、6板、8歌、9餌袋、10扇、15大殿油、30刀、31門(かど)、33衣(きぬ)、34京、55銀(しろかね)、56寝殿、57杉、65畳、68玉、69盥、72庁、74戸、75洞院、76殿、77宿直(とのゐ)、80南殿、81塗籠、86放ち出で、88棺(ひつぎ)、89蓋、90懐、92本所、93松、95南面(みなみおもて)、96宮仕へ、101髻(もとどり)、102物忌み、103物語、105門(もん)、133歌ふ、135占ふ、136生ふ、144借る、147消つ、166寝(ぬ)、226位(ゐ)

- 霊・鬼・狐・武士・盗賊などを指す語
  - 22鬼、27陰陽(おんやう)、32狐、36野猪(くさゐなぎ)、37鞍、48侍、54尻、64滝口、67霊(たま)、73兵(つはもの)、104物の怪、116霊(りょう)、163鳴く、199こうこう

- 犯罪・戦乱・夜・闇などを表す語
  - 1明日、43今夜(こよひ)、44今夜(こんや)、50死に、51死人、66太刀、70血、85裸、99女手(めて)、106矢、107夜前、109胡録(やなぐひ)、110夜半、111夕暮れ、112弓、113夜(よ)、128争ふ、130勇む、131射る、138負ふ、143絡む、145消ゆ、146暮る、150零(こぼ)る、151探る、153騒ぐ、157番ふ、161灯す、165抜く、169励ます、176光る、177更く、178臥す、184宿る、185呼ぶ、187悪(あ)し、197暗し、202猛し、204強し

- 通行に関する語
  - 14大路、60葬送、84橋、127歩む、129行(あり)く、148越ゆ、159通る、167乗す、170走る、171馳す、181待つ、183廻らす、206遠し

家族・性別・年齢や貴族の職階に着眼して人物を指す語が多いのは、ちょうど、巻12の特徴語に、仏や僧侶を表す語が多かったことに対応するものである。同じく、貴族・庶民の生活・活動や、その場所・道具を表す語が多いのは、巻12の特徴語に、仏教に関わる事物や概念を表す語が多かったことに対応する。これらは、仏教説話を収める巻12と、世俗説話を収める巻27の内容上の違いに基づくものである。

また、巻27は、『今昔』原本で「本朝付霊鬼」と題されているように世俗説話の中でも霊や鬼に遭遇する話など恐怖譚を集めた巻であるので、霊・鬼・狐や、それらと同じような悪行を働く武士や盗賊を表す語や、それらのものによる犯罪や戦乱などの悪行、また、そうした出来事の生じる夜や闇などに関する語彙が特徴語となっているのも、説話内容を反映したものだと理解することができる。

そして、「通る」「歩む」「走る」「騒ぐ」「呼ぶ」など通行や走行あるいは騒乱などの行為は、恐怖体験に遭遇しやすい行為や恐怖を感じた時に反射的に伴う行為であろう。また、231番以降の固有名詞も、内容の違いに基づく特徴語だろう。

3.3.3　文体の違いに基づく特徴語の分類

付録A.3「『今昔物語集』巻27の特徴語」のリストにも、やはり「内容」の列に＊が付いておらず、内容の違いからでは特徴語になる理由が説明できないものも多くある。それは、上記のリストの243語のうち94語で、約39％を占める。それらの語も、巻12の特徴語の場合と同じく、2つの種類に分類することができる。

巻12では類義の別語がよく使われるもの

巻27の特徴語が使われている文脈と同じような文脈で用いられた、巻12でよく使われる類義語、すなわち対立語が見つかったものは、表3.11に掲げる諸語である。それらがほぼ同義であることが分かる用例は、付録B.2「『今昔物語集』巻27の文体の違いによる特徴語と対立語の用例」に掲げるので適宜参照してほしい。

表3.11のように、巻27の特徴語においても、巻12の特徴語の場合と同様に、内容の違いからは特徴語となる理由が説明できない語の多くに、巻12ではほぼ同じ意味を表す別の語が使われている。その数は28語で、内容の違いからは説明できなかった巻27の特徴語94語のうち、約30％を占める。

この30％という数字は、巻12の漢文訓読文の特徴語について見た場合に比べて低く、和文の特徴語は対立語を持ちにくい面がありそうである。

巻27に慣用句が多いもの

巻27に慣用句が多いことで特徴語となっているものに、「179太る」1語が指摘でき、「頭の毛太る」という慣用句として多く用いられている。

(28) 此ノ事ヲ思ヒ出ルニ、頭ノ毛太テ、心地モ悪ク思エケレバ、（巻27-13）

巻12の特徴語には、慣用句として、文体の違いに基づく際だった特徴語になるものが多かったが、巻27の特徴語には、この1語しか見つからない。この違いは、漢文訓読文の巻12の特徴語句となる慣用句が、漢語の訓読を基盤に用いられたものであったのに対し、漢語という基盤を持たない和文の巻27には、慣用句をつくり出す基盤がなかったことを示しているだろう。

表 3.11: 『今昔』巻 27 の文体の違いに基づく特徴語とその対立語

No.	巻 27 特徴語	巻 12 頻度	巻 27 頻度	対立語	巻 12 頻度	巻 27 頻度
4	あまた	1	18	多く	14	5
				諸々	25	1
21	大臣(おとど)	0	18	大臣(だいじん)	15	3
25	親	1	4	父母	30	4
28	顔	1	15	面(おもて)	3	3
94	尓	0	16	如し	93	11
				時に	75	57
114	様(やう)	12	62	如し	93	11
118	渡り	0	9	辺(ほとり)	15	16
120	己(おのれ)	2	19	汝	44	6
125	開(あ)く	1	19	開(ひら)く	22	4
134	生む	1	4	生まる	20	9
140	御(おは)す	1	38	在(ましま)す	29	1
141	斯かり	1	23	然り	184	107
154	住む	10	43	住す	14	1
172	果つ	2	10	終わる	26	1
186	あさまし	1	31	奇異	19	2
188	怪し	1	23	怪しむ	28	12
191	嬉し	2	11	喜ぶ	32	4
194	恐ろし	10	52	恐る	8	13
195	賢し	1	9	悟り有り	5	1
196	斯様(かやう)	0	8	如此し(かくのごと)	35	1
205	疾(と)し	3	11	速やか	17	2
215	いと	6	33	極めて	31	29
216	え	0	27	能ふ	4	0
217	然(さ)	4	25	然(しか)	3	3
220	暫し	1	9	暫く	12	10
222	軈(やが)て	0	6	即ち	20	6
224	あな	0	8	ああ	1	0
229	人(たり)	1	10	人(にん)	9	7

対立語も慣用句もないもの

文体の違いに基づく特徴語のうち、対立語か慣用句が指摘できる語かのいずれかに分類できるものは、29 語で、巻 27 の文体の違いに基づく特徴語の 31 %である。この数字は、巻 12 の特徴語の同種のものが 62 %を占めていたのに比べて、かなり少ない。

次の 65 語は、上記の 2 つのいずれにも入らない。

- **名詞** 2辺(あた)り、7 後ろ、24思量(おもばかり)、29 限り、30気(け)、38 毛、40気色(けしき)、47様(さま)、49 然々、58角(すみ)、61 空言、78 長月、79 何物、83 狭間、87 僻目、108奴(やつ)、115 万(よろづ)、117 脇

- **代名詞** 119彼(あ)れ、121 此処、122 其処

- **動詞** 123 上がる、124開(あ)く〔四段〕、126 扱ふ、132 失ふ、137 老ゆ、139 踊る、142 懸かる、152 差す、155 候ふ、156 立つ、158連(つ)る、160 閉づ、162 眺む、164 並む、168 測る、172 離る、174 侍り、175 控ふ、180 罷る、182 見す
- **形容詞・形状詞** 189 訝し、190 いみじ、192 幼し、193 遅し、198 気高し、200 心細し、201 然様、203 拙し、207 早し、208 古し、209難(むつか)し、210益(やく)なし、211 安し、212 由無し、213 若し、214 わりなし
- **副詞** 218 然て、219 さと、221 何ど、223 柔ら
- **感動詞** 225去来(いざ)
- **接辞** 227気(げ)、228 しや、230中(ちう)

この 65 語の性質は、巻 12 特徴語で 28 語の性質を不明としたのと同様、現段階では不明である。

3.4　対立関係にある語

3.4.1　対立の類型

3.3 節、3.4 節において、漢文訓読文の『今昔』巻 12 と、和文の『今昔』巻 27 の特徴語を抽出し、その中から内容の違いに基づく特徴語を判別することで、文体の違いに基づく特徴語を取り出し、さらにその中から、ほぼ同じ意味を表していて、他方の文体でよく使われる「対立語」を特定していく作業を行った。

その作業の結果得られた、対立関係にある語のリストを、表 3.12 （巻 12 の特徴語のうち、巻 27 に対立語があるもの)、表 3.13（巻 27 の特徴語のうち、巻 12 に対立語があるもの）に掲げる。

表 3.12 に即して、表の見方を説明しよう。まず、各語の番号は、3.3 節で見た、巻 12 特徴語のリストや記述の番号と対応している。

「漢文訓読文の特徴語」とした列の見出し語に「＊」が付いているものは、漢語または混種語であることを示し、その場合の「和文での対立語」は和語になり、この場合は、漢語または混種語と、和語との間の対立ということになる。

左から 2 つめの列の「品詞」の見出し語に「＊」が付いている語は、和文での対立語が異なる品詞になっているものであることを示している。なお「対立語の品詞」の列に「句」とあるものは、2 語以上が組み合わさった句の単位で対立語になっているものである。

そして、一番右側の列の「双方向」の列に「＊」が付いている語は、表 3.13 にも、同じ組み合わせが、「和文の特徴語」の側から挙がっていることを示している。

表 3.12: 『今昔』巻 12 の文体の違いに基づく特徴語があるもの

No.	漢文訓読文の特徴語	品詞	和文での対立語	対立語の品詞	双方向
11	疑ひ（有らず、有らじ、無し）	名詞*	必ず	副詞	
16	女子（をんなご）	名詞*	女の童	句	
25	奇異*	名詞*	あさまし	形容詞	＊
51	悟り（有り）	名詞*	賢し	形容詞	＊
85	大臣*	名詞	おとど	名詞	＊
90	為（ため）	名詞*	とて	句	
92	端正*	名詞*	うるはし	形容詞	
114	並び（に）	名詞*	など	助詞	
121	女人*	名詞	女	名詞	
137	父母*	名詞	親	名詞	＊
155	諸々	名詞	あまた	名詞	＊
165	汝	代名詞	其、己	代名詞	＊
166	与ふ	動詞*	取らす	句	
169	哀れむ	動詞*	哀れ	形容詞、形状詞	
172	至る	動詞	着く	動詞	
177	生まる	動詞	生む	動詞	＊
186	終わる	動詞	果つ	動詞	＊
190	悲しむ	動詞*	悲し	形容詞、形状詞	
193	化す*	動詞	成る	動詞	
197	叫ぶ	動詞*	声を上ぐ	句	
199	従ふ	動詞	付く	動詞	
202	住す*	動詞	住む	動詞	＊
205	生ず*	動詞	生む	動詞	
224	悩む	動詞	煩ふ	動詞	
232	開（ひら）く	動詞	開（あ）く	動詞	＊
233	経（ふ）	動詞	過ぐ	動詞	
235	在す	動詞	御（おは）す	動詞	＊
239	用ゐる	動詞	使ふ	動詞	
241	養ふ	動詞	傅く	動詞	
245	喜ぶ	動詞*	嬉し	形容詞、形状詞	＊
246	明らか	形容詞、形状詞	明し	形容詞、形状詞	
249	速やか	形容詞、形状詞	疾し	形容詞、形状詞	＊
250	具さ	形容詞、形状詞	詳し	形容詞、形状詞	
256	つゆ	副詞	聊か	副詞	
271	御（ご）*	接辞	御（み）	接辞	

表 3.13: 『今昔』巻 27 の文体の違いに基づく特徴語のうち対立語があるもの

No.	和文の特徴語	品詞	漢文訓読文での対立語	対立語の品詞	双方向
4	あまた	名詞	多く、諸々	名詞	＊
21	おとど*	名詞	大臣	名詞	＊
25	親*	名詞	父母	名詞	＊
28	顔	名詞	おもて	名詞	
94	侭	名詞*	如し、時に	助動詞、句	
113	様(やう)	名詞*	如し	助動詞、句	
118	渡り	名詞	ほとり	名詞	
120	おのれ	代名詞	汝	代名詞	＊
125	開(あ)く	動詞	開(ひら)く	動詞	＊
134	生む	動詞	生まる	動詞	＊
140	御す	動詞	在す	動詞	＊
141	斯かり	動詞	然り	動詞	
154	住む*	動詞	住す	動詞	＊
172	果つ	動詞	終わる	動詞	＊
186	あさまし*	形容詞、形状詞*	奇異	名詞	＊
188	怪し	形容詞、形状詞*	怪しむ	動詞	
191	嬉し	形容詞、形状詞*	喜ぶ	動詞	＊
194	恐ろし	形容詞、形状詞*	恐る	動詞	
195	賢し	形容詞、形状詞*	悟り有り	句	＊
196	斯様	形容詞、形状詞*	如此し	句	
205	疾し	形容詞、形状詞	速やか	形容詞、形状詞	＊
215	いと	副詞	極めて	副詞	
216	え	副詞*	能ふ	動詞	
217	然(さ)	副詞	然(しか)	副詞	
220	暫し	副詞	暫く	副詞	
222	軈て	副詞	即ち	副詞	
224	あな	感動詞	ああ	感動詞	
229	たり*	接辞	人(にん)	接辞	

表 3.13 の見方も、表 3.12 と基本的に同じだが、「和文の特徴語」の列の見出し語に「＊」があるものは、「漢文訓読文での対立語」が漢語または混種語になっているもので、異なる語種の間で対になっているものである。

2 つの表には、延べ 63 対が挙がっているが、そのうち 13 対は「双方向」に「＊」が付いていて重複するので、異なりで 50 対が得られているということになる。

その 50 対を見わたすと、使われる文体が異なる語の対立には、次の 3 つの類型があることが分かる。

1. 異語種の対立
2. 異品詞の対立
3. 同語種・同品詞の対立

以下、この 3 類型ごとに、具体的に見ていこう。

表 3.14: 対立語のうち異語種間の対立

漢→和	和→漢	漢文訓読文の語（漢語・混種語）	和文の語（和語）
25	186	奇異	あさまし
85	21	大臣（だいじん）	大臣（おとど）
137	25	父母（ぶも）	親
202	154	住す	住む
92		端正（たんじゃう）	うるはし
121		女人（にょにん）	女（をんな）
193		化す（け）	成る
205		生ず	生む
271		御（ご）	御（み）
	229	人（にん）	人（たり）

3.4.2 異語種の対立

まず、語種が異なるもの同士が対立している類型がある。

表 3.12（巻 12 特徴語）の方は、漢文訓読文の特徴語が漢語や混種語で、和文での対立語は和語になっており、９対ある。一方、表 3.13（巻 27 特徴語）の方は、和文の特徴語が和語で、漢文訓読文の対立語は漢語や混種語になっており、５対ある。

表 3.14 は、異語種間で対立する語のリストである。「漢→和」の列には、表 3.12 の番号、「和→漢」の列には、表 3.13 の番号が示されており、この両方に番号があるものは、漢文訓読文の特徴語と、和文の特徴語の、双方から挙がってきた対である。

漢語・混種語が、漢文訓読文でよく用いられ、ほぼ同じ意味の和語が、和文でよく用いられるという構図は、自然であり、納得しやすいものである。この類型が、多くの品詞に幅広く広がっているのもうなずける。一方で、その数が 10 対（20 %）というのは、漢と和とが対立している和漢混淆文における語彙のありようからすれば、思いのほか少ないと見ることもできる。この異語種間の対立については、第 5 章で詳しく取り上げる。

3.4.3 異品詞の対立

次に、品詞が異なるもの同士が対立している類型を見よう。異語種間の対立として上に掲げたものでも、異品詞間の対立になっているものは、ここに含めて、検討する。

異品詞間で対になる組み合わせは、表 3.12（巻 12 特徴語）で 12 対、表 3.13（巻 27 特徴語）で 9 対挙がっているが、そのうち 3 対は、双方に挙がっているものなので、異なりで 18 対ということになり、対立関係にある語全体の約 36 %になる。この数字は、異語種間の対立の 20 %をかなり上回るものである。

まず、表 3.12（巻 12 特徴語）の、漢文訓読文の特徴語で、和文に対立語を持つ語は、漢文訓読文の特徴語の方が名詞（7 件）または動詞（5 件）であるものが多く、他の品詞

はない。

- 漢文訓読文＝名詞　／　和文＝形容詞・形状詞
  - 25. 奇異　／　あさまし
  - 51. 悟り（有り）　／　賢し
  - 90. 端正　／　うるはし
- 漢文訓読文＝名詞　／　和文＝副詞
  - 11. 疑ひ（有らじ、有らず、無し）　／　必ず
- 漢文訓読文＝名詞　／　和文＝助詞
  - 114. 並び　／　など
- 漢文訓読文＝動詞　／　和文＝形容詞・形状詞
  - 169. 哀れむ　／　哀れ
  - 190. 悲しむ　／　悲し
  - 245. 喜ぶ　／　嬉し
- 漢文訓読文＝動詞　／　和文＝句
  - 166. 与ふ　／　取らす
  - 197. 叫ぶ　／　声を挙ぐ

和文でよく使われる対立語は、名詞に対しては、「25. 奇異／あさまし」、「92. 端正／うるはし」、「51. 悟り (有り) ／賢し」のように、形容詞・形状詞になることが多く、動詞に対しても、「169. 哀れむ／哀れ」、「190. 悲しむ／悲し」、「245. 喜ぶ／嬉し」のように、形容詞・形状詞になることが多い。また、「51. 悟り (有り) ／賢し」、「11. 疑ひ（有らじ、有らず、無し）／必ず」、「166. 与ふ／取らす」、「197. 叫ぶ／声を挙ぐ」など、いくつかの対において、一方が語の結合した句になる場合も目立つ。

反対に、表 3.13（巻 27 特徴語）の、和文の特徴語から見た対立語には、和文の特徴語の方が形容詞・形状詞になるものが特に多く（6 件）、他は、名詞 2 件、副詞 1 件と少ない。

- 和文＝形容詞・形状詞　／　漢文訓読文＝動詞
  - 188. 怪し　／　怪しむ
  - 191. 嬉し　／　喜ぶ

  - 194. 恐ろし　／　恐る

- 和文＝形容詞・形状詞　／　漢文訓読文＝句
  - 195. 賢し　／　悟り有り
  - 196. 斯様　／　如此し

- 和文＝形容詞・形状詞　／　漢文訓読文＝名詞
  - 186. あさまし　／　奇異

- 和文＝名詞　／　漢文訓読文＝助動詞
  - 113.様（やう）　／　如し

- 和文＝名詞　／　漢文訓読文＝助動詞、句
  - 94. 侭　／　如し、時に

- 和文＝副詞　／　漢文訓読文＝動詞
  - 216. え　／　能ふ

漢文訓読文でよく用いられる対立語は、形容詞・形状詞に対しては、「188. 怪し／怪しむ」、「188. 嬉し／喜ぶ」、「194. 恐ろし／恐る」のように、動詞になる例が多く、「195. 賢し／悟り有り」、「196. 斯様／如此（かくのごとし）」のように、句になるものも複数ある。

このように、異品詞同士が対になる場合、ある一定の品詞に集中する傾向が明確に見てとれる。漢文訓読文と和文それぞれにとって、よく使われる品詞があったことがうかがえる。中でも、次の 2 点が注目される。

- 漢文訓読文の特徴語には、名詞と動詞が多く、和文の特徴語には、形容詞・形状詞が多い。
- 漢文訓読文の特徴語が感情動詞で、和文の特徴語が感情形容詞、という組み合わせが、多い。

特に、第 2 点の、感情形容詞と感情動詞という対立が多く見られることについては、第 6 章で詳しく考察したい。

表 3.15: 対立語のうち同語種・同品詞間の対立

漢→和	和→漢	品詞	漢文訓読文の語	和文の語
155	4	名詞	諸々	あまた
165	120	代名詞	汝	其(そこ)*、己(おのれ)
172		動詞	至る	着く
177	134	動詞	生まる	生む
186	172	動詞	終はる	果つ
199		動詞	従ふ	付く
224		動詞	悩む	煩ふ
232	125	動詞	開(ひら)く	開(あ)く
233		動詞	経(ふ)	過ぐ
235	140	動詞	在(ましま)す	御(おは)す
239		動詞	用(もちゐ)る	使ふ
241		動詞	養ふ	傅(かしづ)く
246		形容詞・形状詞	明らか	明し
249	205	形容詞・形状詞	速やか	疾し
250		形容詞・形状詞	具さ	詳し
256		副詞	つゆ	聊か
	28	名詞	面(おもて)	顔
	118	名詞	辺(ほとり)	渡り
	141	動詞	然(しか)り	斯り
	215	副詞	極めて	いと
	217	副詞	然(しか)	然(さ)
	220	副詞	暫く	暫し
	222	副詞	即ち	軈(やが)て
	224	感動詞	ああ	あな

3.4.4　同語種・同品詞の対立

同語種（すべて和語同士）・同品詞の間で、対立関係を構成するのは、表 3.12（巻 12 特徴語）に 16 語、表 3.13（巻 27 特徴語）に 15 対挙がっている。そのうち、7 対が双方にあり、異なりでは 24 対がこの類型に属し、比率では約 45 %にあたる。

同語種・同品詞の間で対立関係になっていることは、異語種や異品詞の組み合わせに比べて多いことが確認される。

表 3.15 にその組み合わせになる 24 対を挙げる。この表を見ると、動詞と副詞が目立っており、この 2 つの品詞は、対立関係を構成しやすい。

また、対になっている語を見ると、まず、一方の意味の方が広く、他方の意味が狭いというものがある。例えば、「172. 至る／着く」の対においては、到達する意味では「至る」と「着く」が対立関係にあるが、「着く」は、到達以外にも、付着など広い意味を持っており、「至る」と対立するのは、その語義の一部においてのことである。また、「186. 終はる／果つ」、「249. 速やか／疾し」については、それぞれ、藤井 (1988)、山本 (1988)

表 3.16: 双方向から挙がる対立語:比率（実数）

対立語　（漢／和）	漢文訓読文の語		和文の語	
	巻 12	巻 27	巻 12	巻 27
奇異／あさまし	0.88 (5)	0.12 (2)	0.03 (1)	0.97 (31)
悟り（有り）／賢(かしこ)し	0.89 (10)	0.11 (1)	0.08 (1)	0.92 (9)
大臣(だいじん)／大臣(おとど)	0.80 (15)	0.20 (3)	0.00 (0)	1.00 (18)
父母／親	0.86 (30)	0.14 (4)	0.17 (1)	0.83 (4)
諸々／あまた	0.95 (25)	0.05 (1)	0.00 (0)	1.00 (18)
汝／己	0.85 (44)	0.15 (6)	0.08 (2)	0.92 (19)
生まる／生む	1.00 (20)	0.00 (0)	0.17 (1)	0.83 (4)
終わる／果つ	0.95 (26)	0.05 (1)	0.14 (2)	0.86 (10)
住す／住む	0.92 (14)	0.08 (1)	0.16 (10)	0.84 (43)
開(ひら)く／開(あ)く	0.81 (22)	0.19 (4)	0.06 (1)	0.94 (13)
在(ましま)す／御(おは)す	0.96 (29)	0.04 (1)	0.02 (1)	0.98 (38)
喜ぶ／嬉し	0.86 (31)	0.14 (4)	0.13 (2)	0.87 (11)
速やか／疾し	0.87 (17)	0.13 (2)	0.19 (3)	0.81 (10)

で、『今昔』における 2 語の意味・用法に差があることが指摘されている。このように、対立関係にある語同士は、意味が全く同じというのではなく、その間に、何らかの意味の差異が存在する可能性がある。

この同語種・同品詞間での対立については、第 7 章で詳しく取り上げる。

3.4.5　頻度の対立

双方向から挙がる対立語

ここまで扱ってきた、対立関係にある 50 対のうち、表 3.12（漢文訓読文の特徴語）と、表 3.13（和文の特徴語）の、双方に挙がっているものが対を構成するのは、表 3.16 に挙げる 13 対で、約 25 %を占める。

表 3.16 の 13 対の頻度は、漢文訓読文の語は巻 12（漢文訓読文）に偏り、和文の語は巻 27（和文）に偏るという対立が明瞭である。

基幹語と対立語

3.1.6 で、漢文訓読文・和文の違いに関わらずよく使われる和漢混淆文の基幹語を見た（付録 A.1「和漢混淆文の基幹語」、表 A.1〜A.4）。それら基幹語は、言わば、文体的には無色な語である。漢文訓読文（巻 12）または和文（巻 27）のいずれかの、文体の違いに基づく特徴語と対立関係にあると特定された語の中には、その基幹語と重なるものが 8 語ある。表 3.17 にそれを示す。

表 3.17: 基幹語と重なる対立語:比率（実数）

No.	対立関係にある語の対（漢／和）	漢文訓読文の語		和文の語	
	（太字は基幹語）	巻 12	巻 27	巻 12	巻 27
1	**辺(ほと)り**／渡り	0.43 (15)	0.57 (16)	0.00 (0)	1.00 (9)
2	**怪しむ**／怪し	0.65(28)	0.35 (12)	0.04 (1)	0.96 (22)
3	**然(しか)り**／斯かり	0.58 (184)	0.42(105)	0.03 (1)	0.97 (23)
4	**極めて**／いと	0.55 (31)	0.45 (20)	0.13 (6)	0.87 (33)
5	**暫く**／暫し	0.49 (12)	0.51 (10)	0.08 (1)	0.92 (9)
6	哀れむ／**哀れ**	1.00 (10)	0.00 (0)	0.36 (10)	0.64 (14)
7	従ふ／**付く**	0.90 (22)	0.10 (2)	0.26 (19)	0.74 (44)

表 3.18: 対立語の層

タイプ	漢文訓読文の特徴語	基幹語（無色の語）	和文の特徴語
a	奇異		あさまし
a	悟り（有り）		賢(かしこ)し
a	大臣(だいじん)		大臣(おとど)
a	父母		親
a	諸々		あまた
a	汝		己
a	生まる		生む
a	終わる		果つ
a	住す		住む
a	開(ひら)く		開(あ)く
a	在(ましま)す		御(おは)す
a	喜ぶ		嬉し
a	速やか		疾し
b		辺(ほと)り	渡り
b		怪しむ	怪し
b		然(しか)り	斯かり
b		極めて	いと
b		暫く	暫し
c	哀れむ	哀れ	
c	従ふ	付く	

表 3.17 の 5 番までは、和文の語がその特徴語であり、漢文訓読文の語が基幹語になっているものであり、和文の語は文体的な特色が明確で、漢文訓読文の語はそれが無色である。一方、6 番と 7 番では、漢文訓読文の語がその特徴語であり、和文の語が基幹語になっており、漢文訓読文の語は文体的な特色が明確で、和文の語はそれが無色になっている。

表 3.18 のタイプ a は、表 3.16 に掲出される、漢文訓読文の特徴語と和文の特徴語の双方向から挙がってきた対である。表 3.18 のタイプ b が、表 3.17 の 1〜5 番、タイプ c が、同じく 6 番 7 番の語である。

このように、基幹語との関係を観点に加えることで、対立関係にある各対の頻度対立

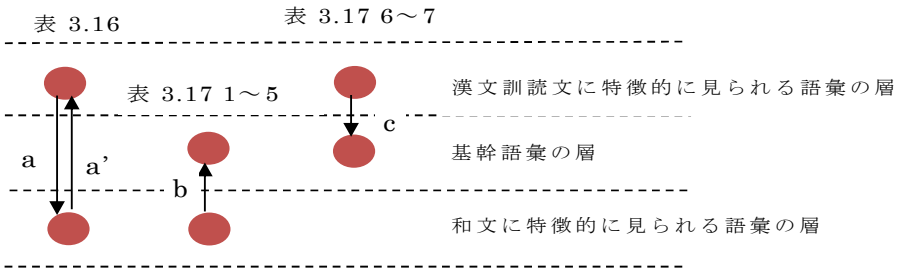

図 3.5: 『今昔』巻 12・27 の語彙比較から得られた対立と層: 例えば、a は巻 12 の特徴語「奇異」に対して巻 27 では「あさまし」が使われていることを示す。a' は巻 27 の特徴語「あさまし」に対して巻 12 では「奇異」が使われていることを示す。b は巻 27 の特徴語「渡り（わたり）」に対して巻 12 では「辺り（ほとり）」が使われ、それが基幹語であることを示す。c は巻 12 の特徴語「哀れむ」に対して巻 27 では「哀れ」が使われ、それが基幹語であることを示す。層は実体として存在するのではなく、語の対立によって見えてくるものであるので、点線で示す。

表 3.19: 「恐ろし」「恐る」の頻度:比率（実数）

語	巻 12	巻 27	計	性質
恐ろし	0.13 (10)	0.87 (52)	1.00 (62)	基幹語、和文特徴語
恐る	0.33 (8)	0.67 (13)	1.00 (21)	
計	0.18 (18)	0.82 (65)	1.00 (83)	

のありようが、段階的になっていることが見えてくる。これを図示すると、図 3.5 のようになる。この図に見える層は、文体による語彙の違いを説明するためのモデルである。

基幹語かつ文体の違いに基づく特徴語

基幹語は漢文訓読文にも和文にもよく使われるものであるので、通常は、文体の違いに基づく特徴語にはならない。しかしながら、基幹語でありながら、文体の違いに基づく特徴語でもある語が 1 語だけある。それは、和文の特徴語である形容詞「恐ろし」（表 3.13 の 194 番、表 A.4 の 166 番）である。

表 3.13 の 194 番に示すように、この語に対応する、漢文訓読文の語は「恐る」であるが、「恐ろし」と「恐る」の、巻 12 と巻 27 の頻度は、表 3.19 の通りである。

巻 27 は、恐怖譚を集めた巻であるので、説話の内容の理由から恐怖の感情を表す語彙が多くなる。「恐ろし」と「恐る」を合わせた「計」の数値が、巻 27 の方が巻 12 よりもかなり多くなっているのは、この内容の違いに起因する。

「恐ろし」と「恐る」を比較すると、巻 27 の比率は、「恐ろし」0.87 に対して「恐る」0.67 で、「恐ろし」の方が高い。また、巻 12 では「恐ろし」10 件に対して「恐る」8 件、

巻27では「恐ろし」52件に対して「恐る」13件で、巻27の方が「恐ろし」を選択する傾向が強い。これらのことから、「恐ろし」は漢文訓読文よりも和文によく用いられると言ってよい。

この「恐ろし」と「恐る」については、この2語と深い関係を持つ「恐(お)づ」をも含めて、第7章で詳しく考察する。

3.5　まとめ

本章では、『今昔』巻12（漢文訓読文）と巻27（和文）の語彙を相互に比較することで、特徴語を抽出した。抽出された特徴語を1語1語見て、説話の内容の違いが原因で特徴語になっているものを判別することで、残った語を文体の違いに起因する特徴語の候補とした。

文体の違いに基づく特徴語の多くには他方の文体でよく使われる、ほぼ同義の対立語があることを示した。そして、対立関係にある対に目立つ類型として、漢語（混種語を含む）と和語、感情動詞と感情形容詞、和語の同品詞同士の3つを指摘した。

その作業のうち、『今昔』の巻12と27という2つのコーパスの語彙頻度を比較して特徴語を抽出する部分は、十分に客観的な手順で作業を進めることができた。一方、抽出された特徴語を、内容の違いによる特徴語か、文体の違いによる特徴語かを判別する部分は、説話の解釈に依存する部分があった。同じく、文体による特徴語とほぼ同義の対立語を、他方の文体のテキストから特定していく作業も、用例の解釈に依存する部分があった。この2つの作業には、研究者の主観が交じる余地があり、客観性が十分に担保されないという問題が残った。

この問題に対しては、客観的な手順で、文体の違いに基づく特徴語と、それと対応するほぼ同義の対立語を抽出する方法を提示することが、課題である。その方法については、次章で研究する。

第4章　同文説話の語の対応：『今昔物語集』と『宇治拾遺物語』

本章では、同じ内容が書かれた文体の異なる2つの説話集をパラレルコーパスにして、同じ内容が書かれた文と文の間で、語の対応[1]を網羅的に調べる方法で、語彙の層と対立語を浮かび上がらせる研究を行う。パラレルコーパスにして比較するのは、より硬く漢文訓読的な文体で書かれる『今昔』と、より軟らかく和文的な文体で書かれる『宇治』である。

4.1　同文説話

平安時代末期から鎌倉時代の説話集には、同一の説話が異なる文体で書かれたものが多く存在する。「同一の説話」には、説話の素材やプロットが同一で、文や語など実際の表現は異なるものから、実際の表現もかなりの程度一致するものまである。本節では、実際の表現が文のレベルで相互に対応が取れる箇所がまとまって存在している説話を「同文説話」と呼んで研究対象とする。特に『今昔』と『宇治』との間には同文説話が83話もある[2]。『今昔』は、漢文訓読文と和文との間で、文体の振れ幅が大きいことは、前節までで見てきた通りである。一方の『宇治』は、『今昔』に比べて軟らかい和文の説話が多いが、中には漢文訓読文の要素が交じる説話もあり、やはり、文体の振れ幅を含んでいる。

(29) 遥に浦陀落世界の方に向て心を発して皆音を挙て観音を念じ奉る事无限し。其の音、糸おびたたし。苦に念じ奉る程に、息の方より大なる白き馬、浪を叩て出来て、商人等の前に臥ぬ。「此れ、他に非ず、観音の助け給ふ也」と思て、有る限り、此の馬に取付て乗ぬ。（今昔・巻5-1）[3]。

---

[1] 実際に表現された個々の文において語を比較したときに、語と語が関係を持っていることを「語の対応」と言う。第3章で扱った使われる文体が異なる語に対立が見られたように、語彙体系において語と語が関係を持っている場合の「語の対立」とは、異なる概念である。

[2] 新編日本古典文学全集『宇治拾遺物語』（小林保治・増古和子校注、小学館）が掲載する「関係説話表」の「同文話」の欄に『今昔』の説話を指摘するものを対象とし、各説話のどの範囲を、2つの説話集で相互に比較するかは、筆者の判断で確定させた。

[3] 本論文では、『今昔』の引用文は原文に合わせて漢字片仮名交じり文としているが、本章に限っては、『宇治』との表現比較を見やすくするため、漢字平仮名交じり文にする。

(30) 遥かに補陀落世界のかたへむかひて、もろ共に声をあげて、観音を念じけるに、沖の方より大なる白馬、波のうへをおよぎて、商人らがまへに来て、うつぶしに伏しぬ。是念じ参らするしるし也と思ひて、あるかぎり、皆とりつきてのりぬ。（宇治・91）

(31) 其の時に、成村彼の「尻蹴よ」と云たる相撲に急ぎ目を態（つかひ）たりければ、この相撲、人よりは長高く大きく、若く勇たりける者なれば、袴の扶高やかに上て指進て歩み寄るに、其れに次きて異相撲共忠通に通らんと為るを、衆共は不通（とほさじ）と塞がる程に、（今昔・巻23-21）

(32) 成村「けよ」といひつる相撲に目をくはせければ、この相撲、人よりたけたかく大きに、わかくいさみたるをのこにて、くくり高やかにかきあげて、さし進み歩みよる。それにつづきて、こと相撲も、ただ通りに通らむとするを、かの衆どもも、通さじとするほどに（宇治・31）

同じ『今昔』で、（29）は漢文訓読文、（31）は和文で書かれている。これは、ちょうど、前章までで対象にしていた、巻12と巻27の文体の違いに相当する。『宇治』の2つを比べると、（30）の方が漢文訓読的で、（32）の方が和文的である。このように、『今昔』『宇治』ともに、説話によって文体の振れ幅を持つ。しかし、（29）と（30）を比べると、前者がより硬く漢文訓読的で、後者がより軟らかく和文的で、（31）と（32）を比べても同様である[4]。

『今昔』と『宇治』の同文説話同士を比較すると、『今昔』の方がより硬く漢文訓読的な文体で、『宇治』の方がより軟らかく和文的な文体であるという相違があることは、すべての同文説話に共通している。したがって、この2作品の同文説話の比較は、語彙の層を見る方法として有効であると予想される。

この2作品の同文説話の語を相互に比較する研究は、先行研究においても盛んに行われている。中でも、舩城 (2011: 175–88) は、異なる語が対応しているもののリストを提示し、その対立関係が単に出自に帰せない多様なものであることを示唆しており有益であるが、計量的処理などは施されておらず、その全体像は必ずしも十分に明らかになっていない。

[4] 『今昔』の巻12と巻27との比較では、全体として漢文訓読文と和文との違いと見ることができたが、『今昔』と『宇治』との比較では、そう見ることができない。なぜなら、『今昔』のある説話の方が『宇治』のある説話よりも和文的性質が強い場合があるからである。このような、相対的な文体差の場合は、漢文訓読文と和文かという軸でとらえるよりも、硬いか軟らかいか、改まっているかくだけているか、難しいか易しいかなど、形容詞評価による軸でとらえる方が、文章の違いの実感に近くなる。しかし、形容詞評価の軸として何が適切かについては、本研究とは別に研究が必要である。ここでは、この軸での文体差に言及する必要のある場合は、硬軟や漢文訓読的和文的という軸での差異として表現する。

4.2 パラレルコーパスの作成

同一内容が異なる言語形式で表現されたものを、文や語句の対応が取れるようにしてそのままデータ化する方法に、「パラレルコーパス」がある[5]。『今昔』と『宇治』の同文説話を比較するデータを、相互に対応する語を明確に記述したパラレルコーパスとして整備していくことで、文体による語の異同を研究するためのデータベースとすることができる。天竺・震旦部（巻 1〜10）、本朝仏法部（巻 11〜20）、本朝世俗部（巻 22〜31）と進むにしたがって文体を変えていく『今昔』の性格を考慮し[6]、まずは、3 つの部から 2 話ずつを無作為に抽出し、次の 6 対をパラレルコーパスにすることにした。『今昔』は巻番号–説話番号、『宇治』は説話番号で示す。

> 今昔 4-9・宇治 137、今昔 5-1・宇治 91、今昔 14-29・宇治 102、今昔 16-28・宇治 96、今昔 23-21・宇治 31、今昔 31-11・宇治 187

パラレルコーパスとしてデータを整備する作業は、次の 4 段階の手順で行った。

1. 『今昔』『宇治』各 6 話のそれぞれのテキスト全文について、語に区切り、見出し語や品詞等の情報を付与した。その語認定の単位や情報を付与する規則は、小木曽他 (2012) が定める中古和文の「短単位規程」に原則として従ったが、和漢混淆文への適用にあたって一部補正した。単位切りと情報付与の作業は、「中古和文 UniDic」(小木曽他 2010) を利用したコンピューターによる自動形態素解析ののち、誤りの修正と揺れの統一を図った。

2. 6 対の同文説話について、まず文同士の対応付けを行い、相互に対応付いた文について、語同士の対応付け作業を行った。他方の説話集に対応しない文は、語の対応付け作業を行わず、データから外した。また、文が対応していても、20 語以上連続して対応が取れない語が続く箇所は、やはりデータから外した。

3. 語の対応付け作業は、『今昔』の語が『宇治』の語とどう対応しているか（以下、『今昔』→『宇治』と表示する）、『宇治』の語が『今昔』の語とどう対応しているか（以下、『宇治』→『今昔』と表示する）の双方向から実施した。同じ内容が表現された語が対応している場合は「対応」と扱い、そのような対応語がない場合は「非対応」と扱った。

[5] 機械翻訳や外国語学習などの領域で需要が多く、異なる言語間のパラレルコーパス（bilingual parallel corpus）が多く作られているが、同じ内容が異なる言語形式で表現された同一言語のパラレルコーパス（monolingual parallel corpus）も、英語などでは作られている。日本語史研究では、同文説話以外にも、同じ原典（漢文や欧文など）をもとに書かれた異なる訓読文・翻訳文の比較や、同じ古典からの異なる口語訳文の比較などの必要性から、日本語という同一言語のパラレルコーパスを作成することも期待される。

[6] 和文に近い『宇治』にも説話によって文体を異にする性格があるが、『今昔』ほどにはそれが目立たず、巻序に従う変化ではない。このため、基準に取りやすい『今昔』の方を対象説話を抽出する枠組に設定した。

4. 「対応」としたものについては、対応している語が「同語」か「異語」かの判別を行った。原則として、語彙素読み、語彙素、品詞までが同一のものを同語と認め、そのいずれか一つでも異なるものは異語と扱った。

以上の4段階の作業は、筆者が目視によって実施した。同じ内容の表現であるか否かや、同語であるか異語であるかの判別作業には揺れが生じがちであるが、対応付けの基準を定めるとともに、類似表現や類語を集めて、判別の均質化を行った。作業の結果、各説話で文が対応している部分の全語彙が「同語対応」「異語対応」「非対応」の3種のいずれかに分類された。

表4.1、表4.2は、『今昔』巻5第1話と『宇治』91話の、ある部分について、それぞれの方向から語の対応付けを行った、パラレルコーパスのデータである。表4.1で見方を説明しよう。

左から2列目の「今昔出現形」は、『今昔』に出現した形そのままを、単語に区切ったもので、その語の「語彙素読み」「語彙素」「品詞」が、その後の列に順次示されている。

その語に対して、『宇治』で対応する語がある場合は、その出現形を、「宇治出現形」の列に記した。例えば、7番は、『今昔』の「先」が『宇治』の「前」に対応し、これはいずれも、語彙素読み「サキ」、語彙素「先」、品詞「名詞-普通名詞-副詞可能」であるので、「同語」であると判断した。

7番のような場合の、『今昔』の語と『宇治』の語とが同じ語であると認定される場合は、「対応」の列に「同語」と書き入れたが、それが異なる語と認定される場合は「異語」と書き入れた。例えば、19番の『今昔』の「行く」と、『宇治』の「付く」との対応は、「異語」である。そして「異語」の場合は、その『宇治』の語の「語彙素読み」「語彙素」を記入した。

『今昔』の語に対して、『宇治』で対応する語がない場合は、「宇治出現形」の列は空欄のままで、「対応」の列に「非対応」と記した。1番と2番の語がそれに当たる。なお、句読点など記号類は、対応付け作業の対象外であるので、「対応」の列に「対象外」と記した。

4.3　系列比較モデル

作成したデータの全体について、対応の類型ごとに集計した結果が、表4.3、表4.4である。表4.3、表4.4によれば、『今昔』→『宇治』、『宇治』→『今昔』のいずれの方向においても、同語対応、異語対応を合わせた比率が約70〜80％を占め、対応する度合いが高いことが分かる。同語対応と異語対応とを比較すると、どちらの方向でも同語対応の比率が圧倒的に高い。『今昔』と『宇治』は語のレベルまでよく一致していることが確認できる。

表 4.1: 『今昔』→『宇治』の語の対応付け

No.	今昔出現形	語彙素読み	語彙素	品詞	宇治出現形	対応	語彙素読み	語彙素
1	女	オンナ	女	名詞-普通名詞		非対応		
2	共	ドモ	共	接尾辞-名詞的-一般		非対応		
3	、		、	補助記号-読点		対象外		
4	商人	アキンド	商人	名詞-普通名詞		非対応		
5	等	ラ	等	接尾辞		非対応		
6	の	ノ	の	助詞-格助詞		非対応		
7	先	サキ	先	名詞-普通名詞-副詞可能	前	同語		
8	に	ニ	に	助詞-格助詞	に	同語		
9	立	タツ	立つ	動詞	立	同語		
10	て	テ	て	助詞-接続助詞	て	同語		
11	導き	ミチビク	導く	動詞	みちびき	同語		
12	て	テ	て	助詞-接続助詞	て	同語		
13	将	イル	率る	動詞-非自立可能		非対応		
14	て	テ	て	助詞-接続助詞		非対応		
15	行く	ユク	行く	動詞	ゆく	同語		
16	。		。	補助記号-句点	。	対象外		
17	家	イエ	家	名詞-普通名詞-一般	家	同語		
18	に	ニ	に	助詞-格助詞	に	同語		
19	行	ユク	行く	動詞	つき	同語	ツク	付く
20	て	テ	て	助詞-接続助詞	て	同語		
21	見れ	ミル	見る	動詞	見れ	同語		
22	ば	バ	ば	助詞-接続助詞	ば	同語		
23	、		、	補助記号-読点	、	対象外		
24	広く	ヒロイ	広い	形容詞	しろく	異語	シロイ	白い
25	高き	タカイ	高い	形容詞	高き	同語		
26	築垣	ツイガキ	築垣	名詞-普通名詞	築地	異語	ツイジ	築地
27	遥	ハルカ	遥か	形状詞	遠く	異語	トオイ	遠い
28	に	ナリ	なり	助動詞		非対応		
29	突き	ツク	突く	動詞	つき	同語		
30	廻し	メグラス	巡らす	動詞	まはし	異語	マワス	回す
31	て	テ	て	助詞-接続助詞	て	同語		
32	、		、	補助記号-読点	、	対象外		
33	門	カド	門	名詞-普通名詞	門	同語		
34	器量く	イカメシイ	厳めしい	形容詞	いかめしく	同語		
35	立	タテル	立てる	動詞	立て	同語		
36	たり	タリ	たり	助動詞	たり	同語		
37	。		。	補助記号-句点	。	対象外		
38	其の	ソノ	其の	連体詞	その	同語		
39	内	ウチ	内	名詞-普通名詞	うち	同語		
40	に	ニ	に	助詞-格助詞	に	同語		
41	率る	イル	率る	動詞-非自立可能	具し	異語	グスル	具する
42	て	テ	て	助詞-接続助詞	て	同語		
43	入る	イル	入る	動詞-一般	入	同語		
44	ぬ	ヌ	ぬ	助動詞	ぬ	同語		
45	。		。		。			

表 4.2: 『宇治』→『今昔』の語の対応付け

No.	宇治出現形	語彙素読み	語彙素	品詞	今昔出現形	対応	語彙素読み	語彙素
1	前	サキ	前	名詞-普通名詞-副詞可能	先	同語		
2	に	ニ	に	助詞-格助詞	に	同語		
3	立	タツ	立つ	動詞-一般	立	同語		
4	て	テ	て	助詞-接続助詞	て	同語		
5	みちびき	ミチビク	導く	動詞	導き	同語		
6	て	テ	て	助詞-接続助詞	て	同語		
7	ゆく	ユク	行く	動詞-一般	行く	同語		
8	。		。	補助記号-句点	。	対象外		
9	家	イエ	家	名詞-普通名詞-一般	家	同語		
10	に	ニ	に	助詞-格助詞	に	同語		
11	つき	ツク	付く	動詞-一般	行	異語	ユク	行く
12	て	テ	て	助詞-接続助詞	て	同語		
13	見れ	ミル	見る	動詞-一般	見れ	同語		
14	ば	バ	ば	助詞-接続助詞	ば	同語		
15	、		、	補助記号-読点	、	対象外		
16	しろく	シロイ	白い	形容詞-一般	広く	異語	ヒロイ	広い
17	高き	タカイ	高い	形容詞-一般	高き	同語		
18	築地	ツイジ	築地	名詞-普通名詞	築垣	異語	ツイガキ	築垣
19	を	ヲ	を	助詞-格助詞		非対応		
20	、		、	補助記号-読点	、	対象外		
21	遠く	トオイ	遠い	形容詞-一般	遥	異語	ハルカ	遥か
22	つき	ツク	突く	動詞-一般	突き	同語		
23	まはし	マワス	回す	動詞-一般	廻し	同語		
24	て	テ	て	助詞-接続助詞	て	同語		
25	、		、	補助記号-読点	、	対象外		
26	門	カド	門	名詞-普通名詞	門	同語		
27	を	ヲ	を	助詞-格助詞		非対応		
28	いかめしく	イカメシイ	厳めしい	形容詞-一般	器量く	同語		
29	立て	タテル	立てる	動詞-一般	立	同語		
30	たり	タリ	たり	助動詞	たり	同語		
31	。		。	補助記号-句点	。	対象外		
32	その	ソノ	其の	連体詞	其の	同語		
33	うち	ウチ	内	名詞-普通名詞	内	同語		
34	に	ニ	に	助詞-格助詞	に	同語		
35	具し	グスル	具する	動詞-一般	率る	異語	イル	率る
36	て	テ	て	助詞-接続助詞	て	同語		
37	入	イル	入る	動詞-一般	入る	同語		
38	ぬ	ヌ	ぬ	助動詞	ぬ	同語		
39	。		。	補助記号-句点	。	対象外		
40								

表 4.3: 『今昔』→『宇治』の対応類型別の語数（%）

説話	対応 同語	**異語**	非	計
今 4- 9 → 宇 137	163(34.8)	83(17.7)	222(47.4)	468
今 5- 1 → 宇 91	1041(51.8)	391(19.5)	576(28.7)	2008
今 14-29 → 宇 102	1086(58.5)	345(18.6)	426(22.9)	1857
今 16-28 → 宇 96	1028(57.4)	284(15.9)	478(26.7)	1790
今 23-21 → 宇 31	690(64.0)	104 (9.6)	284(26.3)	1078
今 31-11 → 宇 187	381(47.0)	100(12.3)	330(40.7)	811
計	4389(54.8)	1307(16.3)	2316(28.9)	8012

表 4.4: 『宇治』→『今昔』の対応類型別の語数（%）

説話	対応 同語	**異語**	非	計
宇 137 →今 4- 9	158(50.3)	76(24.2)	80(25.5)	314
宇 91 →今 5- 1	1022(59.5)	411(23.9)	284(16.5)	1717
宇 102 →今 14-29	1094(59.7)	333(18.2)	406(22.1)	1833
宇 96 →今 16-28	1030(52.6)	306(15.6)	623(31.8)	1959
宇 31 →今 23-21	691(75.6)	124(13.6)	99(10.8)	914
宇 187 →今 31-11	380(70.1)	86(15.9)	76(14.0)	542
計	4375(60.1)	1336(18.4)	1568(21.5)	7279

『今昔』と『宇治』の同文説話は、共通の依拠資料である『宇治大納言物語』（以下、『宇治大納言』と略記）をそれぞれが継承しつつ部分的に改変したことによってできたものである。『宇治大納言』から『今昔』あるいは『宇治』への継承と改変において、どの語が受け継がれ、取り除かれ、変換されたかは、『宇治大納言』が散逸してしまっているため、実際のところは不明である [7]。しかし、各対応類型が意味している現実の表現行為として考えられる可能性は、以下のようなものであろう。

図 4.1 は、テキスト A を元にして、テキスト A' が生み出されたとき、それぞれに含まれる要素の対応付けを行ったものである。A と A' の違いはどこにあるのか、どこに注目すべきかが整理されている。これを山元他 (2012) は「系列比較モデル」と呼んでいる。これによれば、2 テキスト間の語の対応・非対応関係は大きく 3 つの要素に分けられる。捨てられる要素 (1.0)、引き継がれる要素 (2.X)、新たに取り入れられる要素 (3.0) である。引き継がれる場合、ある要素 (2.2) がそのまま引き継がれる場合と、何らかの変換過程 $f(x)$ を経て、ある要素 (2.1) が変換後の要素 (2.3) として引き継がれる場合がある。A、A' のいかなる要素もいずれかに所属する [8]。

[7] 野口 (1963) などに説くように、『宇治大納言』からの表現の改変の度合いは、『今昔』でより大きく、『宇治』でより小さいと考えられている。全体としてはそうであるが、個々の語のレベルでは、『今昔』と『宇治』のどちらがどのように『宇治大納言』の表現を改変したかは確かめようがなく、不明とせざるを得ない。

[8] (2.2) を相対的基準とし、(2.1) と (2.3) で言語の変化が見える。一方、(1.0) と (3.0) は言語の変化もあ

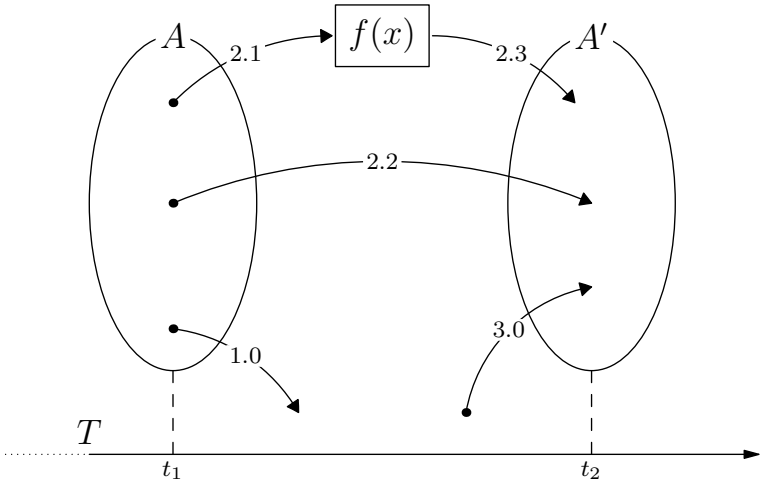

図 4.1: 系列比較モデルによる、２テキストの要素の対応 (山元他 2012)

さて、図 4.1 を『宇治大納言』『今昔』『宇治』の 3 作品に適応すると図 4.2 となる。散逸した『宇治大納言』の要素は a, b, c, d, e, g, h, i の８語からなる文であったとする。「仮に」であって実際はどうであったかは分からないし、今、私たちの目の前には『宇治大納言』の 8 語は見えない。まず、『今昔』『宇治』間で内容的には対応しているが、異なる語として見えるのは、図 4.2 の a, b, c の 3 つの場合で、『宇治大納言』の語を、a は『今昔』が改変（具体的にどんな操作かは分からないので、なにがしかの関数 F(x)、f(x) としておく）し『宇治』がそのまま継承した場合である。b は『宇治』が改変し『今昔』が継承した場合で、c は両者が改変した場合である。次に、『今昔』『宇治』間で同じ語として見えるのは、『宇治大納言』の語 d を、『今昔』『宇治』がそれぞれ同じ語に変換した d'、『今昔』『宇治』がともにそのまま継承した e、『今昔』『宇治』がそれぞれ付加した結果、偶然、同じ語になった f の 3 つの場合が想定される。そして、非対応の g, h, i, j, k の場合も整理すると、『宇治大納言』にあった語を、『今昔』『宇治』の一方または両方が削除したか（g, h, i. ただし、i は語の存在すら確認できない）、『宇治大納言』になかった語を、『今昔』『宇治』が付加したか（j, k）のいずれかである。このうち、a, b, c の、表現内容は同じだが異なる語に変換しているところに注目し、その実態を探っていく。

4.4　結果

4.4.1　異語対応の比率が高い語彙

表 4.5 と表 4.6 は、『今昔』→『宇治』と『宇治』→『今昔』のそれぞれで、異語対応の比率が高かった語を上位 10 位まで（表 4.6 は 10 位が 2 語あるので 11 語）あげ、各類

るかもしれないが、内容の変更であるものも含まれるので注意を要する。この (1.0)(2.X)(3.0) を明確にした上で、何を見るべきかをあらかじめ明らかにしておく。

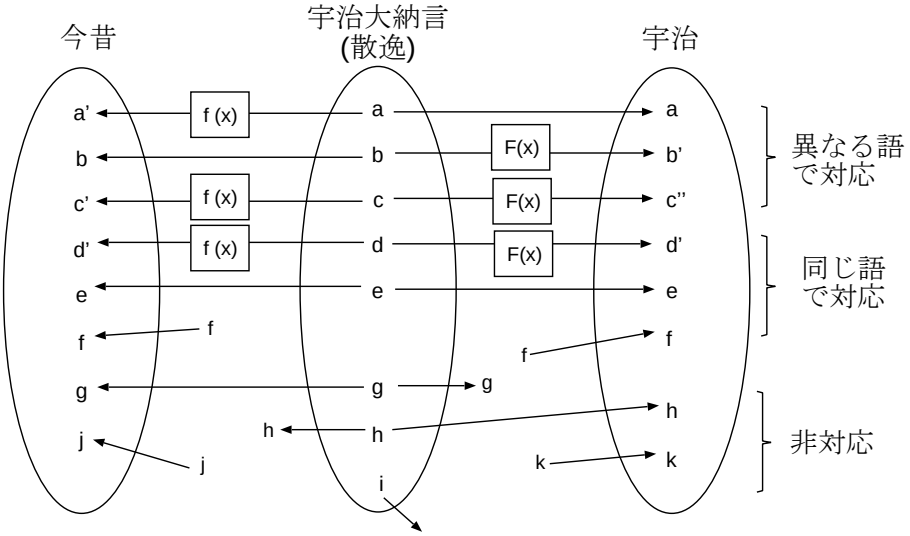

図 4.2: 『宇治大納言』『今昔』『宇治』間の要素の対応

表 4.5: 『今昔』→『宇治』で異語対応の比率が高い語（%）

			対応		
	語	品詞	同語	**異語**	非
1	以て	助詞	0(0)	6(100)	0(0)
2	美麗	形状詞	0(0)	7 (88)	1(13)
3	去る	動詞	1(17)	5 (84)	0(0)
4	悲しむ	動詞	0(0)	4 (67)	2(33)
5	渡す	動詞	1(17)	4 (67)	1(17)
6	相ひ	接頭辞	0(0)	3 (50)	3(50)
7	難し	形容詞	3(50)	3 (50)	0(0)
8	即ち	副詞	0(0)	3 (50)	3(50)
9	深し	形容詞	0(0)	3 (50)	3(50)
10	り	助動詞	6(17)	17 (49)	12(34)

型の件数と比率を示したものである。その際、6 件以上用いられ、かつ 2 話以上に出現しているもの、という条件を付けて抽出した。表 4.5 と表 4.6 にあがった語は、異語対応の比率が、全体でのその数値（表 4.3 では 16.3 %、表 4.4 では 18.4 %）に比べて、かなり高くなっている。表 4.5 の語は、『今昔』は積極的に用い、『宇治』は排除する傾向が強い（図 4.2 の a', b, c' になりやすい）ものであり、反対に表 4.6 の語は、『宇治』が積極的に採用し、『今昔』が排除する傾向が強い（図 4.2 の a, b', c" になりやすい）ものということになる。『今昔』と『宇治』の文体差に基づけば、4.4 の語は漢文訓読的な語、4.5 の語は和文的な語だと見ることができる。もっとも、調査する説話を増やせば、別の語が色々と挙がってくるだろうが、これらの 2 表に挙がる語はそのような特徴を持つ語の一部であると言ってよいだろう。

以下、ここに挙がってきた語について用例に即してその対応の状況を記述していくが、この 6 対の説話の用例だけでは、個々の語の分析のためには、データ量が少なすぎる。そ

表 4.6: 『宇治』→『今昔』で異語対応の比率が高い語（%）

	語	品詞	対応 同語	**異語**	非
1	給ぶ	動詞	0(0)	7(100)	0(0)
2	まま	名詞	0(0)	6(100)	0(0)
3	参らす	動詞	1(13)	6 (75)	1(13)
4	様（さま）	名詞	1(17)	4 (67)	1(17)
5	で	接続助詞	1(17)	4 (67)	1(17)
6	めり	助動詞	0(0)	4 (67)	2(33)
7	へ	格助詞	3(27)	7 (64)	1 (9)
8	思ゆ	動詞	2(29)	4 (57)	1(14)
9	斯かり	動詞	2(27)	5 (56)	2(22)
10	げ	接尾辞	4(36)	6 (55)	1 (9)
11	むず	助動詞	4(36)	6 (55)	1 (9)

表 4.7: 『今昔』→『宇治』で異語対応の比率が高い語の全件 (%)

No.	語	品詞	対応 同語	**異語**	非
2	美麗	形状詞	0 (0)	9(75)	3(25)
6	相ひ	接頭辞	2(13)	10(63)	4(25)
7	難し	形容詞	11(34)	18(56)	3 (9)
1	以て	助詞	12(24)	22(43)	17(33)
4	悲しむ	動詞	5(18)	9(32)	14(50)
8	即ち	副詞	3(17)	5(28)	10(56)
5	渡す	動詞	8(44)	5(28)	5(28)
9	深し	形容詞	12(40)	6(20)	12(40)

こで、これら諸語の具体的分析を進めるために、すべての同文説話（83 話）における語の対応の状況を調べた。その作業は、83 話の全文を文字列検索して当該語の全例を抽出し、それぞれについて他方の説話集での対応箇所を調べ、データ化した。その作業基準は、パラレルコーパスを作成した 6 話の作業手順の 2〜4 に記したことに準じた。以下の考察ではこのデータを使っていく。

4.4.2 『今昔』で採用され『宇治』で避けられる語彙

まず、表 4.5 に挙がった『今昔』→『宇治』の方向で異語対応の比率が高い語を見ていこう。表 4.7 は、この方向で見た、83 話全体での語の対応の状況をまとめたものである。掲出順は、表 4.7 の数値で異語対応の比率の高い順とし、表 4.5 と同じ番号を付けた。なお、「去る」「り」は、語の認定上に難しい問題があるため[9]、表 4.7 には掲出せず、以下

[9] 「去る」については、「去」と表記されたものを「さる」と読むか「のく」と読むか決めがたい場合が多くある。また、「り」については、例えば「説けり」と書かれたものか、「説く」に「り」が付いたものなのか、「説く」に「けり」が付いたものか判別できない場合が多くある。

の考察からも除外する。

「美麗」は漢語であり、「相ひ」「以て」「悲しむ」「即ち」は漢文訓読語と指摘されるものであり[10]、『今昔』で採用され『宇治』で避けられる語には漢語や漢文訓読語が多いことが確認されるが、そのいずれでもない「難し」「渡す」「深し」のようなものも少なくない。漢文訓読語でない「難し」も上位に位置付いている。

これらの語について、『今昔』と『宇治』とで表現が対応する場合の状況を分析した結果を表にまとめたのが、表 4.8 である。表 4.8 を全体的に見ると次のようなことが言えよう。まず、表の最上位の語から、表の中位の語へと進むにしたがって、ある意味・用法の場合は同語対応となりやすく、別の意味・用法の場合は異語対応になりやすい。意味・用法によって同語対応か異語対応かが決まる傾向が強くなっていく。また、中位の語においては、異語対応の場合に『宇治』で対応している語が、特定の１～２種に定まっている。さらに、表の中位の語から下位の語へと進んでいくと、意味・用法によって同語対応になるか異語対応になるかが決まる傾向は弱まって、異語対応の際の対応語も特定のものに定まらなくなっていく。以下、語別のポイントを確認していく。

表 4.8: 『今昔』→『宇治』で異語対応の比率が高い語の対応状況

語	意味・用法	同語対応	異語対応	異語対応の対応語
美麗	(一般)	0	9(100%)	多様
相ひ	(一般)	0	10(100%)	多様
	相互性顕著、特異な物言い	2(100%)	0	—
難し	(一般)	1(7%)	14(93%)	多様
	「有り難し」	2(50%)	2(50%)	—
	「堪へ難し」	8(80%)	2(20%)	—
以て	道具・身体	7(30%)	16(70%)	「して」「にて」14(88%)
	行為の媒介・交換の媒体	0	6(100%)	「して」「に」6(100%)
	事柄・抽象概念	5(100%)	0	—
悲しむ	(一般)	2(18%)	9(82%)	「悲し」5(56%)
	「泣き悲しむ」	3(100%)	0	—
即ち	時間の経過	0	5(100%)	「やがて」4(80%)
	同時共存・因果関係	3(100%)	0	—
渡す	～し通す、到達させる	2(50%)	2(50%)	—
	授与する	6(67%)	3(33%)	「取らす」3(100%)
深し	心理的深さ	0	4(100%)	多様
	抽象的深さ・時間的深さ	6(100%)	0	—
	空間的深さ	6(75%)	2(25%)	—

*「意味・用法」には、同語対応か異語対応かに分かれる特徴を簡潔に記し、広い意味・用法にわたる場合「(一般)」と記した。
*「同語対応」「異語対応」の数字は件数(比率)。3件以上ある意味・用法で、67%以上を占めるところに網掛けをした。
*「異語対応の対応語」には、「異語対応」が3件以上ある場合の、主要な対応語とその件数(比率)を示した。対応語が特定の2～3種以内に定まらない場合は「多様」と記した。

最上位の「美麗」は、『宇治』で異語が対応している 9 件の実例を見ていくと、

(33) 児有り。其形ち 美麗 也。(今昔・巻 16-28)

[10] 「相ひ」「以て」「即ち」は山田 (1935a)、「悲しむ」は築島 (1963) にそれぞれ漢文訓読語としての記述がある。

(34) 児の、いと美しげなるが」（宇治・96）

のような、「美しげ」が対応している例のほか、「めでたし」「よし」「あはれ」「をかしげ」「玉の」など多様な対応語がある。

２番目の「相ひ」も、『宇治』で対応する語は多彩である。

(35) 相具して任国に下にけり。（今昔・巻19-2）

(36) 三河へ率て下りける程に（宇治・59）

の例で、「相ひ具す」が「率る」に対応するなど、様々な動詞に「相ひ」が前接した『今昔』の合成語が、『宇治』で多様な語に対応している。一対多の対応の様相を示すことは、「美麗」の場合と同じだが、

(37) 祖子の相見む事の（今昔・巻26-7）

(38) 親子とあひ見ん事（宇治・119）

のような同語対応の例が2件ある点は、「美麗」の場合と違っている。上はそのうちの1件で、親子が会うという相互性が顕著に表れた例である。もう1件は、増賀上人の物狂いの特異な言葉遣いの中で「相ひ構へて」という形が用いられている（今昔・巻19-18、宇治・143）。『宇治』でも「相ひ」が使われるのは、用法あるいは場面が特別な場合に限られている。

３番目の「難し」の多くは、動詞連用形に下接する用法で、一般に異語対応となりやすいが、「有り難し」の場合は同語対応と異語対応が半々であり、「堪へ難し」の場合は同語対応の方が多くなっている。そして、異語対応の場合の対応語は「美麗」「相ひ」と同じく多様である。４番目の「以て」は、「難し」の場合と同じく、意味・用法によって、異語対応に偏るものと、同語対応に偏るものとに分かれる傾向がある。道具としての物に付く場合や、身体を表す語に付く場合は、異語対応が多い。さらに、行為の媒介としての人物や、交換の媒体としての物に付く場合は、異語対応ばかりで『宇治』ではこの語を使うことを避けている。一方、事柄や抽象概念を表す語に付く場合は、同語対応ばかりで『宇治』でも積極的に用いられている。

「以て」には、上述の「難し」までの３語とは明確に異なる特徴がある。それは、異語対応の多い意味・用法の例で『宇治』での対応語が、特定の語に定まる傾向が顕著であることである。道具や身体を表す語に付く場合は「して」または「にて」が対応する場合が極めて多く、「以て」―「して」「にて」に、対立関係を認めることができる。媒介や媒体を表す語に付く場合は、「以て」―「して」「に」に同じ関係があると言える。このように、対立関係にある語の組み合わせを明確に抽出していくことが可能になる。

表 4.9: 『宇治』→『今昔』で異語対応の比率が高い語の全件 (%)

No.	語	品詞	対応 同語	**異語**	非
1	給ぶ	動詞	0(00)	10(77)	3(23)
3	参らす	動詞	4(15)	19(70)	4(15)
7	へ	格助詞	21(23)	55(59)	17(18)
5	で	接続助詞	14(27)	28(54)	10(19)
9	斯かり	動詞	21(36)	30(52)	7(12)
11	むず	助動詞	14(33)	20(47)	9(21)
2	まま	名詞	12(27)	18(40)	15(33)
6	めり	助動詞	13(43)	11(37)	6(20)
10	げ	接尾辞	29(52)	13(23)	14(25)

その次の「悲しむ」は、「泣き悲しむ」という用法の場合は必ず同語対応になり、それ以外の一般的な用法では異語対応が多い。その異語対応の対応語は、「悲し」になることが多く、「悲しむ」—「悲し」の間にも対立があると言える。そして「即ち」も、前の文や句との間で単純な時間の経過を示す場合は異語対応になり、「即ち」—「やがて」に対立関係が認められる。一方、同時共存や因果関係など密接な関係性を示す場合は、すべて同語対応となり、『宇治』にも受け入れられている。このような特徴は、「以て」「悲しむ」の場合と同じである。

さらに「渡す」については、授与する意味の場合は同語対応が多いが、到達させる、〜し通すの意味の場合は、同語対応と異語対応の両方の例がある。前者の意味での異語対応の場合、対応語は「取らす」に定まる。最後の「深し」は、心理的深さを言う場合は、異語対応になり、対応語は多様であるが、抽象的深さ、時間的深さ、空間的深さを言う場合は、同語対応になりやすく、『宇治』にも受け入れられやすくなる。

以上のように、『今昔』の側から行った対応付け作業において、異語対応の比率で序列化した８語は、表の上位にある語は、たいていの例で『今昔』の側だけで採用され、『宇治』では避けられているが、特別な意味・用法の場合に限って『宇治』でも使われる。表の中位から下位へと進むにつれて、一般的な意味・用法においても、『宇治』で使われるようになる。語の対応を調査する方法によって抽出され、並べられた語が、語の意味・用法や、類義語との対立関係と密接に絡み合って、幾重もの層が見えている。

4.4.3 『宇治』で採用され『今昔』で避けられる語彙

次に、表 4.6 にあがった、『宇治』→『今昔』の方向で異語対応の比率が高い語の状況を 83 話全体で集計した、表 4.9 を見よう。「思ゆ」「様(さま)」は、語の認定上に難しい問題があるため[11]、表に掲出せず、以下の分析対象からも除外する。

[11] 「思」と書かれた例を「おもふ」と「おぼゆ」に読み分けるのがむずかしい例が多く、「様」を「さま」と「やう」に読み分けるのがむずかしい例も多い。

9 語の中には、「へ」「むず」のように口語性の強さが指摘されるものが含まれているが[12]、そのような指摘がなされてこなかった語も多く、先行研究では取り扱われていない文体的特徴を持つ語彙が抽出できていると考えられる。

表 4.9 の 9 語について、『宇治』の該当箇所の表現と、『今昔』の対応表現のすべてを確認し、その分析結果をまとめたのが、表 4.10 である。表 4.10 を全体的に見ると、表の上位の語から中位の語へと進むにしたがって、同語対応になりやすい意味・用法が、一般的な意味・用法とは区別されるようになっていく。さらに、表の下位の語へと進むと、一般的な意味・用法の方が同語対応になりやすくなっていく。また、中位までの語においては、異語対応の場合に『今昔』で対応している語が特定の語に定まっている。これらのことは、表 4.8 で見た、『今昔』で採用され『宇治』で避けられた語彙にうかがえたのとほぼ同じような傾向である。以下、表 4.10 に現れた語別の要点を見ていく。

表 4.10:　『宇治』→『今昔』で異語対応の比率が高い語の対応状況

語	意味・用法	同語対応	異語対応	異語対応の対応語
給ぶ	（一般）		10(100%)	「給ふ」8(80%)
参らす	（一般）	1（5%）	19(95%)	「奉る」16(84%)
	献上相手を表示	3(100%)	0	—
へ	（一般）	16(23%)	55(78%)	「に」51(93%)
	不定の場所	5(100%)	0	—
で	（一般）	5(15%)	28(85%)	「ずして」22(78%)
	「あり」及び往来動詞に後接	9(100%)	0	—
斯かり	「斯かれば」「斯かる程」	1(7%)	14(93%)	「然り」11(79%)
	（一般）	20(56%)	16(44%)	多様
むず	（一般）	7(27%)	19(74%)	「むとす」「べし」「む」15(79%)
	「むずらむ」	7(88%)	1(13%)	—
まま	「の」「が」に後接	0	6(100%)	多様
	連体形に後接	12(50%)	12(50%)	多様
めり	「なめり」	10(62.5%)	6（37.5%）	多様
	（一般）	3(37.5%)	5(62.5%)	多様
げ	「をかしげ」	0	7(100%)	多様
	（一般）	29(83)%	6(17%)	多様

*「意味・用法」には、同語対応か異語対応かに分かれる特徴を簡潔に記し、広い意味・用法にわたる場合「（一般）」と記した。
*「同語対応」「異語対応」の数字は件数（比率）。3件以上ある意味・用法で、67%以上を占めるところに網掛けをした。
*「異語対応の対応語」には、「異語対応」が3件以上ある場合の、主要な対応語とその件数（比率）を示した。対応語が特定の2～3種以内に定まらない場合は「多様」と記した。

最上位の「給ぶ」は、すべて異語対応となり、その大半は、

(39) 僧伽多にやがてこの国を賜びつ（宇治・91）

(40) 其の国を僧迦羅に給ひつ（今昔・巻 5-1）

のように、『今昔』で「給ふ」が対応している。次の「参らす」も、ほとんどが異語対応

[12] 「へ」「むず」の用例の出方に偏りがあり、会話に多いことや口語性が強いことについて、『日本国語大辞典・第 2 版』（小学館）に記載がある。

で『今昔』の対応語もほぼ「奉る」に定まっている。「給ぶ」の場合と違うのは、同語対応の例があることで、その場合の大部分は、

(41) （物を）宇治殿に参らせ（宇治・180）

(42) 宇治殿に物共参らせ（今昔・今26-16）

のように、物を献上する相手が助詞「に」で示される用法になっている。『今昔』が「参らす」を用いるのは特別な場合なのである。

３番目・４番目の「へ」「で」も、「参らす」と同じく、一般的な意味・用法では異語対応が多くを占め、その場合は、『今昔』の対応語は特定の語（「に」「ずして」）に定まっている。また、「へ」が不定の場所を示したり、「で」が「あり」または往来動詞に付いたりするなど、特別の意味・用法の場合は、同語対応になっているところも、「参らす」と同じである。しかし、「へ」「で」は、一般的な意味・用法の場合でも、ある程度（23 %。16 %）は同語対応となっており、これらの語を『今昔』が避ける度合いは、「参らす」ほど強くない。

５番目の「斯かり」については、「斯かれば」「斯かる程」のように、確定条件の「ば」、時間・空間を表す「ほど」に続く場合に異語対応になりやすく、『今昔』での対応語は「しかり」であることが多い。しかし、上に記した「へ」「で」までの語が、特別な意味・用法に限って同語対応となり、『今昔』がこれらを避けていたのと違って、「斯かり」は、一般的な意味・用法でも『今昔』がよく使っているという違いがある。

６番目の「むず」は、「らむ」が後接する用法では、同語対応になる例が大部分を占め、それ以外の一般的な用法では、同語対応よりも異語対応になる場合が多い。その異語対応では、「むとす」と対応する場合が特に多く、最もよく対応する語は１つに集中するが、「べし」「む」とも対応する例も多い。それら三種をあわせれば80 %近くに達する。同語対応の場合の用法が異語対応の場合のそれより狭いところは、「斯かり」までの５語と同じ傾向を示しているが、異語対応の場合に対応する語が一つに定まらないところは、それら５語と違っている。

以上６語において、対立関係にある、同義性の高い類義語を抽出できたことは、先に見た『今昔』の側から対応付けを行って抽出した語彙の場合と同じように、同文説話の語の対応を調査する利点の一つである。『今昔』側から抽出した語彙の場合は中位の語彙に同義性の高い類義語が目立ったが、『宇治』側から抽出した語彙では、上位から中位の語彙に目立つという違いもある。対立語を持つ語が、層の特定の段階にあるものに集中し、その位置が対応付けの方向によって異なる理由は、今のところ不明である。

その次の「まま」は、「の」「が」に後接する場合は、異語対応となり、連体形に後接する場合は、異語対応と同語対応の両方が同程度ある。「まま」においては、異語対応の場合の『今昔』での対応語が特定の語に定まらず、多様になっている点は、「むず」まで

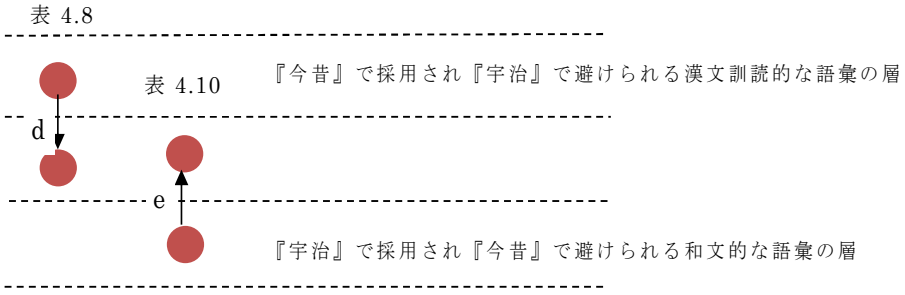

図 4.3: 『今昔』『宇治』の同文説話から得られた対立と層: 例えば、d は『今昔』の「即ち」に対して『宇治』では「やがて」が対応していることを示す。e は『宇治』の「給ぶ」に対して『今昔』では「給ふ」が対応していることを示す。

の 6 語と異なっているところである。そして、「めり」は、「なめり」の場合、同語対応になる比率がやや高いが、この用法で異語対応になる場合も多い。意味・用法によって同語対応か異語対応かが決まる傾向は弱くなる。また、異語対応の場合の『今昔』での対応語も多様である。最後の「げ」は、「をかしげ」の場合だけ、必ず異語対応になるが、それ以外の用法一般では、同語対応が大部分を占める。そして、異語対応の場合の『今昔』での対応語は、多様である。

以上、『宇治』側から見た異語対応の比率で序列化した 9 語について、表の上位にある語は、たいていの例で『宇治』の側だけで採用され、『今昔』で避けられているが、特別な意味・用法の場合に限って『今昔』でも使われることがある。そして、表の中位から下位に進むにつれて、一般的な意味・用法でも『今昔』で使われるようになる。前節で扱った、『今昔』側から対応付けを行った語彙の場合と同様に、序列化された語彙が、語の意味・用法や類義語との対立関係と密接に絡み合って、幾重もの層が見えている。

4.5　語の対立と語彙の層

以上の分析から得られた語の対立と、そこに見えた語彙の層を示すと、図 4.3 のようになる。図 4.3 は、3.4 節で『今昔』巻 12 と巻 27 の語彙の比較から導き出した、和漢の軸での語彙の 3 層のモデル（図 3.5）に、本節で見た語彙の層と語の対立を当てはめたものである。

『今昔』→『宇治』の対応付けによって抽出した、『今昔』で採用され『宇治』で避けられる語のうち、「以て」「悲しむ」「即ち」「渡す」は、表 4.8 にまとめたように、特定の語と対応し、次のような対立関係が見えた。

- 以て → して、にて、に

- 悲しむ → 悲し
- 即ち → やがて
- 渡す → 取らす

これらが図 4.3 の対立 d で、上の層の「以て」以下 4 語は、それぞれ、中央の層の「して」「にて」「に」など 4 組と対立している。

反対に『宇治』→『今昔』の対応付けによって抽出した、『宇治』で採用され『今昔』で避けられる語のうち、「給ぶ」「参らす」「へ」「で」「斯かり」「むず」は、表 4.10 にまとめたように、特定の語と対応し、次のような対立関係が見えた。

- 給ぶ → 給ふ
- 参らす → 奉る
- へ → に
- で → ずして
- 斯かり → 然り
- むず → むとす、べし、む

これらが、図 4.3 の対立 e で、下の層の「給ふ」以下 6 語は、それぞれ、中央の層の「給ふ」など 6 組と対立している。

4.6 まとめ

本章では、『今昔』と『宇治』の同文説話のパラレルコーパスを作成して語の対応付けを行ったデータを分析することで、一方の作品が積極的に採用し、他方の作品が避けている語彙を、その段階差とともに抽出できることと、抽出した語彙においては、語の意味・用法や類義語との対立関係と絡み合った層が見えることを示した。その方法を取ることで、語彙の層を想定し、対立語を抽出することを、研究者の主観を交えずに行うことができる。

本章の研究でパラレスコーパスにした同文説話は 6 対にとどまり、語彙の層が見え、そこにある語を特定できたのは、サンプルにとどまる。もっと多くの同文説話をパラレルコーパスにすることで、『今昔』と『宇治』の文体の違いに基づく語彙の層を、より明確に見ることができ、層を背景とした対立関係にある対を抽出していくことができるようになるだろう。

また、その先には、『今昔』と『宇治』の間以外にも様々に存在している、文体の異なる同文説話についてパラレルコーパス化することで、語彙の層と対立語を、より広範囲に研究していくこともできるようになるだろう。

次章からは、第 3 章で指摘した、漢と和の語彙の層における対立語が、漢語と和語の対立、感情動詞と感情形容詞の対立、和語の同品詞の対立、の 3 つの類型に分けられることについて、各類型の事例を取り上げて、詳しく分析していく。

第5章　漢語と和語の対立

第3章で見出した対立語の中には、漢語（混種語を含む）と和語とが対になる組み合わせの一群があった。語彙の層において、漢語が和語に対してどのような位置を占め、それが和語とどのような関係にあるかを調査すること、すなわち、漢語と和語とを比較することが、この章の目的である。

この章では4つのことを研究する。第1に、平安和文の語彙における漢語・混種語が占める比率を、時代・品詞・意味分野の3つの観点から観察し、第2に、和漢混淆文における漢文訓読文と和文との文体の違う資料のどの範囲に出現しているのかを観察することで、漢の要素である漢語にも何段階かの層があることを見る。第3に、その層をなす漢語のうち、漢の層の側に位置する漢語が、和語との間に対立関係を形成している様子を見る。そして第4に、和の層の側に近付いている漢語が、和語との間により強固な対立関係を持つようになっていることを見る。

5.1　平安和文の漢語：時代・品詞・意味分野から見た層

本節では、平安和文における漢語・混種語を計量的に調査し、時代・品詞・意味分野の3つの側面から、層をなしていることを確かめる。

5.1.1　先行研究による調査

第1章で日本語の書き言葉の流れを概観し、第3章で語種構成比率を確認したように、漢文訓読文や和化漢文ではない、日本語の話し言葉に基盤を置いた書き言葉として成立した平安時代の和文は、当初は、その語彙の大部分が和語で占められていた。ところが、時代が進むにつれて漢語や混種語の占める比率は少しずつ増加していき、平安時代末期には、それらの比率も少なからぬ量を占めるようになっていく。このことは、宮島 (1971) によって明らかにされているが、表5.1は、宮島 (1971) に示されている語種別語彙頻度表から、平安時代の和文作品（和歌作品を除く）の部分だけを抜き出して示したものである。

表の上段は、語種別の延べ語数とその比率（%）を示し、表の下段は、同じく異なり語数とその比率を示している。表5.1によれば、延べ語数では、漢語の比率は、10世紀

表 5.1: 宮島 (1971) による語種別語彙頻度: 各作品の上段データは異なり語数、下段データは延べ語数による計数。括弧内は全体（計）を分母とする割合（%）。

成立時期	作品名	和語		漢語		混種語		計
10 世紀前期	竹取物語	4864	(94.9)	220	(4.3)	40	(0.8)	5124
		1202	(91.7)	88	(6.7)	21	(1.6)	1311
10 世紀前期	伊勢物語	6729	(97.1)	183	(2.6)	19	(0.3)	6931
		1586	(93.7)	89	(5.3)	17	(1.0)	692
10 世紀前期	土佐日記	3369	(96.4)	103	(2.9)	24	(0.7)	3496
		926	(94.1)	44	(4.5)	14	(1.4)	984
10 世紀後期	蜻蛉日記	21459	(95.8)	778	(3.5)	161	(0.7)	22398
		3279	(91.1)	236	(6.6)	83	(2.3)	3598
11 世紀初期	枕草子	30245	(91.9)	2169	(6.6)	492	(1.5)	32906
		415	(84.1)	641	(12.2)	191	(3.6)	5247
11 世紀初期	1 源氏物語	98684	(95.6)	7116	(3.4)	2008	(1.0)	207808
		9953	(87.1)	1008	(8.8)	462	(4.0)	11423
11 世紀初期	紫式部日記	7732	(88.5)	852	(9.8)	153	(1.8)	8737
		2104	(85.3)	277	(11.2)	87	(3.5)	2648
11 世紀初期	更級日記	6891	(95.1)	295	(4.1)	57	(0.8)	7243
		1770	(90.8)	146	(7.5)	34	(1.7)	1950
11 世紀末期	大鏡	23902	(81.8)	4549	(15.6)	761	(2.6)	29212
		3259	(67.6)	1330	(27.6)	230	(4.8)	4819

後期までは 5 %に達していないが、11 世紀初期には 6 %以上の作品が見られるようになり、11 世紀末期には 15 %を超えている。また、異なり語数では、漢語の比率は、10 世紀後期には 7 %に達せず、11 世紀初期から 10 %以上の作品が見られるようになり、11 世紀末期には 27 %を超えている。それでは、このような平安時代後期から末期にかけての漢語の増加は、どのようなところから進んでいったのだろうか。

この問題については、『源氏物語』の漢語が、作品中のどのような箇所で、どのように使われているかを研究した山口 (1998: 148–61) が参考になる。それによると、まず、地の文で使われる漢語は、官職地位名、建築物名、行事名、家具調度名、音楽舞楽関係語、仏教関係語、数詞のいずれかの意味分野に分類され、「壮大な絵巻さながらに展開する行事描写に必要欠くべからざるものだった」とする。また、会話文の漢語は、男性の用いる語、女性の用いる語で異なる場合があったり、どのような漢語を用いるかで、その人物の階層や人物像などまで分かる場合があり、物語の作者は、それを人物造型に利用しているとしている。この研究は、『源氏物語』の漢語は、和語に比べると、使用される意味分野と使用者にかなり限定のあることと、その限定のもとでは、漢語の特質を生かして存分に使われていることを明らかにしている。

それを踏まえれば、『源氏物語』に限らず、平安和文の多くの作品も対象に加えて、漢語の位置を歴史的に見ていくことが期待されるだろう。そこで、本節では、山口が提示した視点のうち、どの意味分野で使われるかという観点から、平安和文の漢語を時間軸

に沿って歴史的に見く[1]。

5.1.2　平安和文 8 作品の語種比率の調査

ここでは、平安和文作品のうち、『竹取物語』『伊勢物語』『土佐日記』『大和物語』『平中物語』『蜻蛉日記』『枕草子』『源氏物語』の 8 作品を調査対象にする[2]。

また、分量の多い『源氏物語』は、作業量を縮減するために、「新編日本古典文学全集」の全 6 巻のうち 2 巻（第 1 巻・第 5 巻）を調査対象とした。

第 3 章と同様に、「中古和文 UniDic」を用いて、調査対象に定めたテキスト全文に対して自動形態素解析を施し、誤解析の箇所を目視によって補正してデータを作成し、集計した。この分析手順については、Tanaka and Yamamoto (2011) で概要を報告したが、あらためて詳細を述べる。

表 5.2 は、上記 8 作品の語種別の語彙頻度表である。表の上段は、延べ語数とその比率、下段は、異なり語数とその比率を示している。表 5.2 と表 5.1 とで同じ作品がいくつかあるが、その数値が多少異なっているところがあるのは、表 5.1 のもとになった宮島 (1971) と、表 5.2 に集計した調査に使った「中古和文 UniDic」とで、言語単位が異なっているところがあることによる。

表 5.2 によると、漢語と混種語を合わせた語彙の比率は、延べ語数（表の上段）では 11 世紀初期に増加し、異なり語数（表の下段）では 10 世紀後期と 11 世紀初期とに 2 度増加している。

5.1.3　漢語の意味分類

表 5.2 で示した「漢語＋混種語」に分類された語彙について、それがどのような意味分野のものであるかという観点から分類する。意味分類の枠組には、国立国語研究所 (2004)『分類語彙表 増補改訂版』（以下、『分類語彙表』と略記）を用いる。『分類語彙表』は、現代日本語の語彙 96,000 語を意味によって配列し、意味番号が付与された語彙リストである。ただし、平安時代の漢語や混種語の中には、『分類語彙表』に収められていないものもあるため、これらには新たに意味番号を付与する必要がある[3]。

---

[1] 従来は実施するのに厖大な時間がかかったこの種の研究も、形態素解析コーパスを利用することで、効率的に進めることができるようになった。

[2] 第 3 章で用いた、『日本語歴史コーパス 平安時代編』と重なる作品が多いが、『日本語歴史コーパス 平安時代編』に納められている『古今和歌集』『落窪物語』『紫式部日記』は対象にしておらず、これに入っていない『蜻蛉日記』を対象にしているという違いがある。この違いは、本節の調査は、『日本語歴史コーパス 平安時代編』の構築以前に実施したことによって生じたものである。

[3] 『分類語彙表』に収められている語でも、現代語とは意味が異なるものもあり、本来であれば、このような語にも意味番号を付与し直す必要がある。しかし、その実現には、平安時代の語の意味をとらえる方法を考える別の研究が必要になる。ここで試みる『分類語彙表』の意味番号付与は、そのような研究を経ない段階のものである。

表 5.2: 平安和文 8 作品の語種別語彙頻度: 各作品の上段データは異なり語数、下段データは延べ語数による計数。括弧内は全体（計）を分母とする割合（%）。

成立	作品	和語	漢語	混種語	漢語＋混種語	計
10 世紀前期	竹取	9672(97.0 %)	266(2.7 %)	38(0.3 %)	304(3.0 %)	9976(100 %)
		1193(91.5 %)	91(7.0 %)	20(1.5 %)	111(8.5 %)	1304(100 %)
	伊勢	13239(98.6 %)	170(1.3 %)	17(0.1 %)	187(1.4 %)	13426(100 %)
		1515(93.6 %)	90(5.5 %)	14(0.9 %)	104(6.4 %)	1619(100 %)
	土佐	6304(97.2 %)	174(2.7 %)	8(0.1 %)	182(2.8 %)	6486(100 %)
		942(95.2 %)	41(4.2 %)	6(0.6 %)	47(4.8 %)	989(100 %)
10 世紀後期	大和	21715(97.1 %)	597(2.7 %)	42(0.2 %)	63(2.9 %)	22354(100 %)
		1693(91.0 %)	150(8.1 %)	18(0.9 %)	168(9.0 %)	1861(100 %)
	平中	12144(99.0 %)	113(0.9 %)	8(0.1 %)	121(1.0 %)	12265(100 %)
		1197(96.3 %)	40(3.2 %)	6(0.5 %)	46(3.7 %)	1243(100 %)
	蜻蛉	45363(97.5 %)	1093(2.3 %)	118(0.3 %)	1181(2.5 %)	46544(100 %)
		2749(90.1 %)	259(8.5 %)	43(1.4 %)	302(9.9 %)	3051(100 %)
11 世紀初期	枕	62002(95.9 %)	312(3.6 %)	311(0.5 %)	2623(4.1 %)	64625(100 %)
		3402(85.4 %)	515(12.9 %)	67(1.7 %)	582(14.6 %)	3984(100 %)
	源氏	130701(97.0 %)	3624(2.7 %)	400(0.3 %)	4024(3.0 %)	134725(100 %)
		4417(89.1 %)	468(9.4 %)	76(1.5 %)	544(10.9 %)	4961(100 %)

『分類語彙表』にない語の場合、その語と意味が最も近い現代語の語が属しているところに分類した。例えば、『竹取物語』や『源氏物語』に使われている「蓬莱（ほうらい）」という漢語は、『分類語彙表』には掲載されていない。この語は『分類語彙表』に掲載されている語で言い換えるなら「仙境」という語が最も意味が近いと考えられる。そこで、「仙境」に与えられている意味番号である「1.2600」を、「蓬莱」に与えることにした。

表 5.3 は、作品ごとに、漢語・混種語を『分類語彙表』が示す 12 の区分に分け、各区分毎の語数を示したものである。作品名は、それぞれの頭文字で示す。表 5.3 を見ると、漢語・混種語は、「1. 体の類」（名詞の類）に多く、「2. 用の類」（動詞の類）、「3. 相の類」（形容詞の類）には少ないことが分かり、それぞれの品詞の中でも、漢語・混種語が多い意味分野や少ない意味分野があることも分かる。そして、時代が進むにつれて、幅広い品詞、幅広い意味分野に、漢語・混種語が広がっていく様子が見える。

5.1.4　漢語の初出時期

品詞の観点から

次に、漢語が、どの品詞や意味分野からいつごろ使われ始めたかを詳しくみていくことにする。まず、品詞の観点から見ていく。図 5.1 は、『分類語彙表』の品詞の枠組である、「1. 体の類」（名詞の類）、「2. 用の類」（動詞の類）、「3. 相の類」（形容詞の類）の別で分類した際に、10 世紀前期、10 世紀後期、11 世紀初期の 3 期のどの時期にはじめて

表 5.3: 平安和文 8 作品の漢語・混種語の品詞別・意味分野別語数: 数字は各作品の品詞別・意味分野別語数（異なり語数）

品詞	意味分野	10 世紀前期 竹取	伊勢	土佐	10 世紀後期 大和	平中	蜻蛉	11 世紀初期 枕	源氏
1. 体の類	抽象的関係	30	22	16	28	11	58	94	81
	人間活動の主体	21	27	12	59	11	51	110	118
	人間活動—精神および行為	15	20	8	29	5	58	106	123
	生産物および用具	9	12	4	17	5	41	85	77
	自然物および自然界	4	4	2	4	1	9	36	23
2. 用の類	抽象的関係	4	2	0	4	0	3	3	2
	人間活動—精神および行為	8	5	1	7	4	17	29	39
	自然物および自然界	1	0	0	0	0	0	0	0
3. 相の類	抽象的関係	6	4	1	6	2	13	18	19
	人間活動—精神および行為	2	4	1	2	1	2	9	10
	自然物および自然界	1	0	0	0	0	1	1	2
4. その他		0	0	0	0	0	0	0	0
合計		101	100	45	156	40	253	491	494

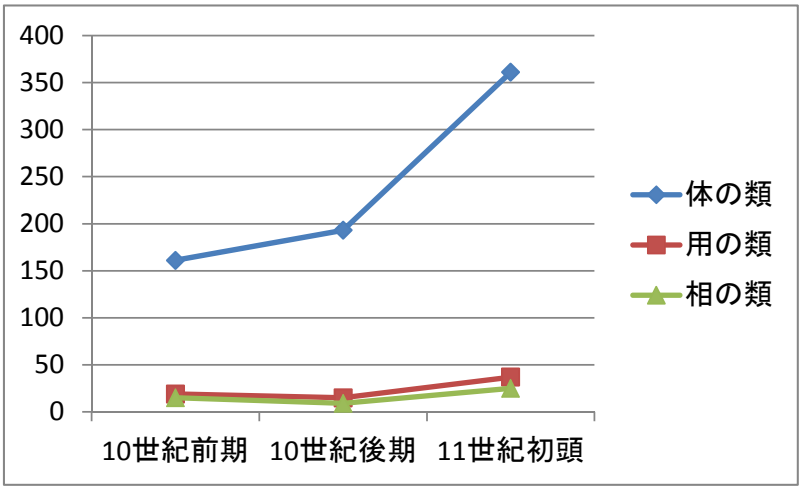

図 5.1: 品詞別の漢語・混種語の初出時期（語数）

出現するかに分けて（初出時期による分類）、漢語・混種語の語数の変化を示したものである。

図 5.1 から、漢語・混種語は、その大多数を名詞の類が占め、その増加傾向も著しいことと、その傾向は 11 世紀初期に特に顕著である。また、動詞の類、形容詞の類の変化は、名詞のそれに比べて目立たないが、いずれも、11 世紀初期にはやや増加している。

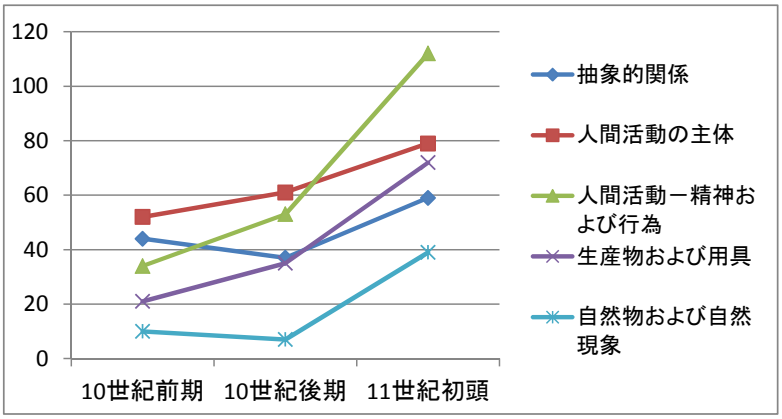

図 5.2: 名詞の意味分野別の漢語・混種語の初出時期（語数）

名詞の意味分野の観点から

10 世紀後期と 11 世紀初期に増加傾向の著しい名詞の漢語・混種語の中では、どのような意味分野の語彙が特に増えていくのだろうか。図 5.2 は、表 5.3 に示す、名詞に属する 5 つの意味分野ごとに、漢語・混種語の初出を分類して、その数の推移をまとめたものである。

5 つの意味分野のいずれも、3 期を通して見た場合は、漢語や混種語がはじめて登場する数が増加傾向にあることが分かる。中でも、「人間活動―精神および行為」の伸びが著しい。

今度は、その「人間活動―精神および行為」の中のさらに細かい意味分野を見ていこう。図 5.3 は、『分類語彙表』が、名詞の類の「精神および行為」を細分している 9 つの細目にしたがって、漢語・混種語の初出時期をまとめて示したものである。

図 5.3 を見ると、細目によって、初出の語の増減の傾向は様々であることが分かる。「行為」「交わり」「待遇」「経済」「事業」の 5 つの細目は、3 期を通じてごくわずかである。

これに対して、「言語」「心」「芸術」「生活」の 4 つの細目は、増加が目立っているが、その時期や増加の程度は、細目によって大きく異なっている。まず、「生活」は、10 世紀後期に初出となる語が非常に多く、この時期期に漢語や混種語が増加した唯一の細目として際立った特徴を見せるが、11 世紀初期に新出語の数は減少に転じている。一方、「心」「芸術」の 3 つの細目は。10 世紀後期まではごく少なかったが、11 世紀初期に増加傾向をはっきりと示している。特に、「心」と「言語」は、急速に語数を増やしている。

それでは、各細目にはどのような語が属し、特に語彙が増加する時期には、どのような語が新たに登場しているのだろうか。最終的に最も伸びが大きい「言語」については、後に詳しく見ることとし、それ以外の 3 つの細目について、初出時期別の語彙リストを、表 5.4 として示す。

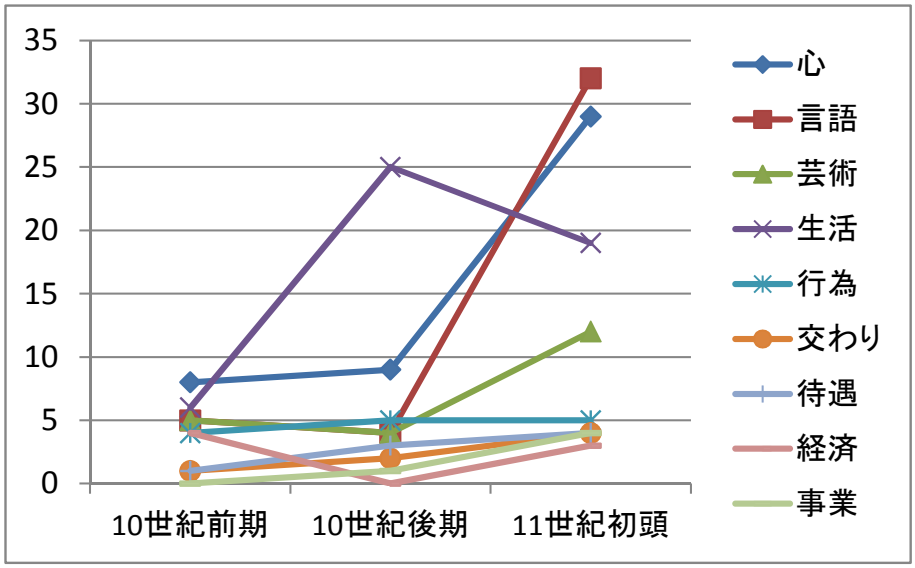

図 5.3: 名詞の「精神および行為」細分類別の漢語・混種語の初出時期（語数）

表 5.4: 初出時期別の「生活」「芸術」「心」の漢語・混種語のリスト

初出	「生活」	「芸術」	「心」
10 世紀前期	賀、化粧、講、逍遥、節忌、俗	絵、句、唱歌、日記、蒔絵	案、陰陽、願、興、支度、修行、精進、本意
10 世紀後期	今様、会、加階、加持、儀式、供養、禊、碁、穀断ち、誦経、節会、節句、大嘗、着座、朝拝、読経、儺、念誦、念仏、博奕、八講、服脱ぎ、仏名、盆、労	女絵、楽、猿楽、試楽	気、懸想、宿徳、修法、精進、憎、無下、要、論
11 世紀初期	回向、行事、競馬、元服、劫、庚申、碁打ち、碁手、斎会、参座、出家、声明、懺法、致仕、答、踏歌、頓食、舞踏、法事	歌、唐絵、細工、催馬楽、祭文、頌、蘇合、探韻、調楽、抜頭、風俗、律、呂	愛敬、恩、学問、義、結縁、験方、嫌疑、孝、宿曜、呪詛、情、信、善、聴聞、道心、道理、得業、内教、卑下、不意、方便、法輪、法華、煩悩、妙法、面目、物怨じ、大和相

表 5.4 によると、「生活」の細目に属する語彙には、行事や娯楽に関する語彙が多いほか、仏教に関わる語彙も目に付く。一方、「芸術」「心」の細目に属する語には、行事、娯楽、仏教に関連する語彙はあまりなく、「芸術」には美術や音楽、「心」には学問や道徳に関連する語彙が多く属している。『分類語彙表』の細目による意味分野の分類は、別の見方で見た場合も、語彙の意味分野の違いを示していそうである。

表 5.4 に示すような語彙が、10 世紀後期には「生活」の意味分野で、11 世紀初期には

「芸術」「心」の意味分野で増加している。各意味分野の語彙が表すような内容は、9世紀以前に日本に輸入され、日本人も読んだ純漢文には書かれており、このリストに挙がるような語彙も、その純漢文の文章に使われていたとすれば[4]、それが書きことばとして使われた10世紀になってはじめて、日本語になったと考えられる[5]。

ある時期に初出となる語彙の意味分野が特定の分野に偏る傾向が認められるのは、その時期に、その意味分野の事物が普及したり、その意味分野の事柄への認識を更新したりということが、あったことを示しているのではないだろうか。事物の普及や認識の更新は、事物を表す語彙や認識を担う語彙が、よく使われるようになることにつながると考えられるからである。

5.1.5　漢語の段階差

漢語・混種語の借用が、特定の品詞、特定の意味分野から進んで、次第に拡張していき、それらが日本語の語彙として、よく使われるようになっていくと考えたが、その全体的な流れの中で、頻繁に使われるようになっていく語と、あまり使われないままになるものとに分かれていく。このことについて、具体的な事例で見ていこう。取り上げる事例は、図5.3で、11世紀初期に増加していく傾向が特に顕著な、「言語」の細目に属する漢語・混種語である。

その語彙リストを、初出時期別に挙げると、以下の通りである。

- 10世紀前期初出
  - 解由、口舌、消息、題、文字
- 10世紀後期初出
  - 経、重点、姓、本
- 11世紀初期初出
  - 朝講、朝座、詠、巻数、漢書、願文、経仏、偈、下巻、五経、参議、三史、持経、集、頌、宣旨、宣命、草仮名、草子、手本、点長、譜、賦、封、文章、偏、返答、法文、本紀、万葉、遺言

[4] このことの証明のためには、9世紀以前に日本に持ち込まれ、日本人が読んだ純漢文の語彙を調査することが必要になる。しかし、純漢文のコーパスがない現状では、その調査を本格的に行うことは困難である。

[5] 日本語に書く語彙として使われた事例は、日本で書かれた和化漢文に使われた例であってもよいから、このことの証明のためには、和文だけでなく和化漢文の語彙の調査も必要である。しかし、和化漢文のコーパスがない現状では、その調査を本格的に行うことは困難である。

表 5.5: 「言語」に属する漢語・混種語の高頻度語彙の時期別頻度

語	総頻度	10 世紀前期	10 世紀後期	11 世紀初期
消息	72	3	21	48
題	15	4	5	6
文字	28	8	2	18
経	42		6	36
本	12		6	6
草子	15			15

「言語」に属する漢語・混種語は、異なり語数で 38 語ある。そのうち、23 語は頻度 1、9 語は頻度 2〜5 で、低頻度語彙と言ってよいもので、日本語の語彙としては、あまり使われない位置にとどまっている。和文の文章に使われ、日本語となっていたことが確かめられる語彙であっても、その大部分は、そのような位置にあるのである。

一方、「消息」「題」「文字」「経」「本」「草子」の 6 語は、頻度が 10 を超えており、低頻度語彙の段階を脱し、中頻度あるいは高頻度の語彙の段階に至っていると言ってよいものである [6]。その 6 語の、時期別の頻度を示すと表 5.5 の通りである。

表 5.5 を見ると、初出の時期以降は、ずっと一定数以上使われ続けており、日本語の語彙として安定した位置にある様子が分かる。

5.1.6 本節のまとめ

本節では、漢語や混種語が和文で使われるのは、特定の品詞や意味分野からそれが始まり、次第に広がっていくこと、日本語の語彙となった漢語や混種語の多くは低頻度語彙にとどまるが、一部が中頻度や高頻度の安定した位置に及んでいることを、平安和文を資料とした調査によって示した。

次節では、和文の文章よりも、漢語・混種語が多くなり、その使用範囲も広くなり、基幹的な語彙の部分にも入り込んでいく、和漢混淆文の『今昔』を資料として、この問題について考察を深めていく。

5.2 『今昔物語集』における漢語：語彙の層における漢語の位置

本節は、漢文訓読文の説話と和文の説話とが共存している『今昔』において、どの範囲に使用されているかによって、漢語を分類し、語彙の層における漢語の位置を確かめる。

[6] 語彙頻度を指標にして、語彙のレベルを「高頻度語彙」「中頻度語彙」「低頻度語彙」の 3 段階に分ける考え方は 3.1.5 で示したが、本節の調査対象としている資料の全語彙の頻度調査を行えば、漢語・混種語も含めて、語彙のレベルから各語の位置を測ることが可能になる。

5.2.1　漢語の層の把握と『今昔』

12世紀前期の和漢混淆文である『今昔』では、第3章で見たように、漢語・混種語の比率が11世紀初期までの平安和文の場合よりも増加し、それらの用いられる品詞や意味分野は、いっそう広がっていくと考えられる。それでは、漢語・混種語は、『今昔』の語彙の層の中でどのような位置にあるのだろうか。また、既存の固有語であった和語との間にどのような関係をつくっているのだろうか。

和漢混淆文である『今昔』における漢文訓読文と和文のありようについては、第1章、第2章で述べたが、その要点は次のようになる。

- 天竺震旦部 (巻1〜10)　漢文訓読文の説話がほとんど
- 本朝仏法部 (巻11〜20)　漢文訓読文の説話が多いが、和文の説話も交じり、特に後半の巻にそれが多い
- 本朝世俗部 (巻22〜31)　和文の説話がほとんど

本節では、このような、部・巻・説話によって文体の異なる『今昔』の性質を生かして、語が出現する部、巻、説話の範囲を指標とすることで、語彙の層の中のどこに位置付くかによって漢語を分類する。

5.2.2　2字漢語サ変動詞を取り上げる理由

5.1節のようにすべての漢語や混種語を取り上げたいところであるが、資料全体の形態素解析コーパスが整備されていない『今昔』においては、現段階でそれを行うのは無理である。そこで、適度な量の均質な語彙を事例に取り上げて、記述の対象としていくことにする。ここで事例に取り上げるのは、文法的に均質な語彙をまとまった量扱える、2字漢語サ変動詞である。

2字漢語サ変動詞とは、「修行す」のような、漢字2字からなる名詞のあとに動詞「す」(「する」) が付いたものである。これ全体を1語と見て混種語と扱うこともできるが、「修行」と「す」に分ければ「修行」の部分は漢語ということになる。形態素解析技術を適用するのが困難な『今昔』に対しても、2字漢語サ変動詞であれば、正規表現を用いた文字列検索によって網羅的に用例抽出が行える、という技術的な利点がある。

2字漢語サ変動詞は、漢字2文字の連続の後に、動詞「する」の各活用形「せ」「し」「す」「ぜ」「じ」「ず」のいずれかが続いている文字列を検索することで網羅的に抽出することができる。ただし、この抽出だけでは、「可咲(をか)シ」(形容詞「をかし」) など、2字漢語サ変動詞でないもので、この文字列と合致するものも交じってしまう。また、「不供養」(「供養せず」などと読む)、「被供養 (「供養せらる」と読む)」、「可供養」(「供養すべし」と読む)、「令供養」(「供養せしむ」と読む) など、部分的に漢文風の表記になっ

表 5.6: 2 字漢語サ変動詞の頻度 1：

層 (段階)	番号	語	天竺震旦部 巻 1〜10	本朝仏法部 巻 11〜15	本朝仏法部 巻 16〜20	本朝世俗部 巻 22〜31	計
A (1)	1	修治す	20				20
	2	滅度す	10				10
	3	命終す	18				18
	4	遊戯す	13				13
A (2)	5	遊行す	8	2			10
	6	歓喜す	56	2			58
	7	呵責す	9	1			10
	8	供給す	6	5			11
	9	建立す	6	14			20
	10	受持す	29	3			32
	11	荘厳す	13	6			19
	12	囲繞す	6	6			12
	13	転読す	8	6			14
	14	飲食す	11	4	1		16
	15	讃歎す	7	2	1		10
	16	入滅す	0	10	3		13
	17	奉仕す	6	5	1		12
	18	教化す	28	1	2		31
	19	端座す	2	16	5		23
	20	読誦す	45	197	12		254
	21	書写す	59	37	6		102
	22	療治す	6	10	2		18
	23	廻向す	0	8	2		10
	24	咒願す	11	0	1		12

ていて、別のパターンの文字列になる場合もある。これらは、個別にデータから削除したりデータに加えたりする必要がある。

本節での調査対象は、『今昔』全巻について、国文学研究資料館の「日本古典文学本文用例データベース」を、その底本である「日本古典文学大系」（岩波書店）によって校訂しつつ、利用した。電子テキストに対して、上記の文字列を検索し抽出したのち一例一例を目視で確認して、2 字漢語サ変動詞の例だけを残してデータとした。

なお、今昔の漢語サ変動詞を扱った先行研究に、桜井 (1966)、高橋 (1994)、藤井 (2003) などがあるが、本節で目指している語彙の層や和語との関係の観点から、漢語サ変動詞を扱うものはない。

5.2.3 『今昔』の使用範囲から見た 2 字漢語サ変動詞の層

抽出整備を行った 2 字漢語サ変動詞のデータのうち、全体で 10 件以上使用例のある 55 語について、巻別、説話別の頻度を算出した。漢文訓読文の巻や説話に偏在するものから、和文の巻や説話に偏在するものへと順に配列した、表 5.6、表 5.7 を作成した。

表 5.7: 2 字漢語サ変動詞の頻度 2

層 (段階)	番号	語	天竺震旦部 巻 1〜10	本朝仏法部 巻 11〜15	本朝仏法部 巻 16〜20	本朝世俗部 巻 22〜31	計
	25	往生す	2	87	7		96
	26	乞食す	11		3		14
	27	懺悔す	20	14	8		42
	28	祈請す	17	30	5		52
B (1)	29	恭敬す	27	13	17		57
	30	悩乱す	11	3	3		17
	31	持斉す		2	8		10
	32	孝養す	14		8		22
	33	結縁す	1	10	6		17
	34	殺害す	9	1	3	3	16
	35	祈念す	3	6	2	1	12
	36	沐浴す	7	17	5	1	30
	37	養育す	12	1		1	14
	38	安置す	17	32	20	2	71
	39	供養す	205	112	46	6	369
	40	修行す	15	56	22	3	96
B (2)	41	制止す	4	3		3	10
	42	長大す	11	3	3	1	18
	43	聴聞す		13	3	1	17
	44	礼拝す	58	84	36	3	181
	45	流浪す	5	4	2	1	12
	46	帰依す	16	20	23	2	61
	47	加持す		4	14	3	21
	48	出家す	121	45	32	5	203
	49	利益す	26	7	10	1	44
	50	霹靂す	2	3	2	5	12
C (1)	51	懐妊す	39	8	4	13	64
	52	対面す	3	3	6	7	19
	53	御覧ず	4	3	5	37	49
C (2)	54	仮借す	1	1	3	15	20
	55	沙汰す			2	14	16

漢文訓読文の巻（説話）と和文の巻（説話）のどちらにどの程度分布するかによって 55 語は、大きく次の 3 つの層に分かれる。

- A層 漢文訓読文の説話に使用範囲が限られる語
- B層 漢文訓読文の説話に多いが、和文の説話にも少数使われている語
- C層 和文の説話にも多い語

第 2 章で述べたように、和漢混淆文である『今昔』の説話は、漢文訓読文か和文かに分かれるが、その間は連続的であり、どこかで明確な線引きができるというものではない。その連続性が強く現れているのは巻 16〜20 で、巻 15 までは漢文訓読文の性質が強く、巻 22 からは和文の性質が強い。そこで、巻 16〜20 の部分は説話ごとに、漢文訓読

文か和文かを判別した。巻16〜20までに分布し、巻22以降に使われない、14番から33番の語のうち、漢文訓読文の説話に使用範囲が限られている語が14〜24番、和文の説話にも使われいる語が25〜33番である。

表5.6、表5.7を見ると、A層、B層、C層の各層もそれぞれ2段階に分かれている。すなわち、A層は1〜4番と5〜24番、B層は、25〜33番と34〜49番、そしてC層は、50〜53番と、54〜55番というように、それぞれ2つに線引きされる。以下、各層ごとに見ていこう。

5.2.4　A層　漢文訓読文の説話に使用範囲が限られる語彙

A層（1）　天竺震旦部にしか現れない語

まず、表5.6の1番から4番までの、1「修治す」、2「滅度す」、3「命終す」、4「遊戯す」を見よう。これらは、天竺震旦部（巻10まで）にしか現れない語であり、A層（1）と扱う。これらの語に対しては、だいたい同じ意味を表す類義語（類義語句を含む）が、『今昔』中に使われている。

- 1. 修治す ／ 修理す、修理を加ふ
- 2. 滅度す ／ 涅槃す、涅槃に入る
- 3. 命終す ／ 命終はる
- 4. 遊戯す ／ 遊ぶ

これらの類義語は、「涅槃す」以外はすべて、本朝部（巻11以後）にも用いられており、上記の1〜4の2字漢語サ変動詞よりも、和文の方に寄った出現範囲となっている。

なお、本節で扱う2字漢語サ変動詞やその対立語の用例は、付録B.3「『今昔物語集』2字漢語サ変動詞とその対立語の用例」に掲載しているので、適宜参照してほしい。

A層（2）　本朝仏法部のうち漢文訓読文の説話のみに用いられる語

次に、本朝仏法部のうち漢文訓読文の説話のみに用いられる一群があり、これらを、A層（2）と扱う。先に述べたように、本朝仏法部のうち巻16〜20には、和文の説話が見られる。したがって、これらの巻での使用例については、語が出現する範囲の観察を、部・巻の単位にとどめるのではなく、説話の単位まで細かく区別することで、その語がどの層に位置付くかを把握していく。

巻15までに限られる語

まず、出現箇所が、天竺震旦部に偏り、本朝仏法部でも巻15までに限られる語として、5「遊行す」、6「歓喜す」、7「呵責す」、8「供給す」、9「建立す」、10「受持す」、11「荘厳す」、12「囲繞す」、13「転読す」の9語を指摘できる。これらの語に対しても、ほぼ同様の文脈で用いられる対立語が、次のように存在している。

- 5. 遊行す ／ 遊ぶ、遊び行(あり)く
- 6. 歓喜す ／ 喜ぶ
- 7. 呵責す ／ 責む
- 8. 供給す ／ 備ふ、供(く)す
- 9. 建立す ／ 建つ
- 10. 受持す ／ 持(たも)つ、受け持(たも)つ・持(ぢ)す
- 11. 荘厳す ／ 飾る
- 12. 囲繞す ／ 衛(かこ)む
- 13. 転読す ／ 読誦す、読む

これらの対立語のうち、「受け持つ」「持す」「読誦す」は、出現範囲が本朝仏法部までに限られるが、他はすべて、それが本朝世俗部にまで及んでいる。

対応する類義語のうち、本朝世俗部にまで出現範囲が及ぶ一般性の高い語は、5から13までの2字漢語サ変動詞よりもより広い範囲で用いられ、和文の説話に多く使われている。

巻16以後にも見られる語

次に、漢文訓読文の説話に限って用いられているものの、巻16以後にも出現する語として、表5.8に示す11語がある。表には出現する説話番号を掲げる。

表5.8のうち、14「飲食す」から22「療治す」までには、同じような文脈で用いられる対立語が、次のように存在している。

- 14. 飲食す ／ 食(じき)す、食(く)ふ
- 15. 讃歎す ／ 讃む
- 16. 入滅す ／ 失す、絶え入る
- 17. 奉仕す ／ 仕(つか)ふ、仕(つかまつ)る
- 18. 教化す ／ 教(をし)ふ
- 19. 端座す ／ 坐(ざ)す、居(ゐ)る
- 20. 読誦す ／ 踊す、読む
- 21. 書写す ／ 書く、写す

表 5.8: 本朝仏法部の漢文訓読文の説話に限って用いられる語

番号	語	出現する巻-説話
14	飲食す	巻 16-36
15	讃歎す	巻 17-10
16	入滅す	巻 17-14、巻 17-17
17	奉仕す	巻 17-21
18	教化す	巻 17-31、巻 20-24
19	端座す	巻 17-16、巻 17-17、巻 17-23、巻 17-29、巻 17-30
20	読誦す	巻 16-3、巻 16-16、巻 16-36、巻 17-39、巻 17-14、巻 17-40、巻 17-41
21	書写す	巻 17-21、巻 17-27、巻 17-31、巻 17-34、巻 20-20
22	療治す	巻 20-15、巻 20-28
23	廻向す	巻 20-19
24	咒願す	巻 20-17

- 22. 療治す ／ 療(りやう)す、治(ぢ)す、癒(いや)す

これらの対立語はいずれも、本朝世俗部にまで、広く用いられている。なお、23「廻向す」と 24「呪願す」とは、対立語が見つからない。

以上、A（1）、A（2）に分類された、漢文訓読文の説話のみに使われる 2 字漢語サ変動詞には、23「廻向す」、24「呪願す」を除き、本朝世俗部にまで広く用いられる対立語が存在していることが分かった。この対立語は、ほぼ同義の語であり、漢文訓読文に特徴的な語と、和文にもよく使われる語である。これらのことから第 3 章で見た和漢混淆文における漢文訓読文と和文との対立語と同じ性質のものと見てよい。

5.2.5 B層　漢文訓読文の説話に多いが、和文の説話にも少数使われている語彙

B層（1）　本朝仏法部のうち和文の説話にも用いられる語

次に、漢文訓読文の説話に多くの例が集中するものの、少数ではあるが和文の説話に用いられることもあるB層を観察しよう。そのうち、まず、本朝仏法部の和文の説話に見られ、本朝世俗部には見られないものを、B層（1）として扱う。表 5.7 のうち、25 番から 33 番がそれである。これらの語が出現する和文の説話番号は、表 5.9 の通りである。

これらの語のうち 25「往生す」から 30「悩乱す」までの 6 語については、ほぼ同じ意味の対立語が存在し、それらの対立語のほとんどは、本朝世俗部でも多く用いられ、和文にも多く用いられている。

- 25. 往生す ／ 生まる
- 26. 乞食す ／ 乞ふ
- 27. 懺悔す ／ 悔ゆ
- 28. 祈請す ／ 祈る

表 5.9: 本朝仏法部の和文の説話にも用いられる語

番号	語	出現する巻-説話
25	往生す	巻 19-14、巻 19-37、巻 19-17
26	乞食す	巻 19-12、巻 19-18
27	懺悔す	巻 19-19
28	祈請す	巻 16-19、巻 16-22、巻 19-10、巻 19-24、巻 20-7
29	恭敬す	巻 20-13
30	悩乱す	巻 16-19、巻 17-33
31	持斉す	巻 16-15、巻 16-24
32	孝養す	巻 19-25、巻 19-26
33	結縁す	巻 19-11、巻 19-36

- 29. 恭敬す ／ 敬ふ
- 30. 悩乱す ／ 悩む

これら6語の2字漢語サ変動詞と対応する和語とは入れ換えて使えるほど同義性は高いが、語によっては、2字漢語サ変動詞が用いられた文脈に、和語が使われた文脈には見られない特徴がある。

例えば、26「乞食す」は、仏や僧侶による、相手に貴まれる行為として表現されている。一方、「乞フ」を用いて、物や食を乞う行為を表す場合、貴まれる行為であることはなく、時には嫌悪される行為として描かれることもある。「乞食す」と「乞ひ食らふ」が近接箇所で用いられているが、語り手の視点で仏の行為を描く場合は、行為を貴んで「乞食す」を用い、同じ行為を、外道たちの視点から描く場合は、蔑んで「乞ひ食らふ」を用いており、2語の使い分けが指摘できる。

(43) 今昔、佛、婆羅門城ニ入テ乞食シ給ハムトス。其ノ時ニ彼ノ城ノ外道共、皆、心ヲ一ニシテ云ク、「此比拘曇比丘ト云フ者ノ、人ノ家毎ニ行テ物ヲ乞ヒ食フ事有リ、悪ク无愛也。(後略)」ト云ヒ廻シテ (巻 1-11)

29「恭敬す」は、観音を対象にする場合や、「礼拝」と同時並行の行為の場合や、「供養」と同時並行の行為の場合などが目立つが、「敬ふ」は、こうした文脈で使われることはない。

30「悩乱す」は、「辛苦」と組み合わせられる例が極めて多く、様々な語と組み合わせて用いられる「悩む」(「悩み煩ふ」「痛み悩む」「思ひ悩む」「病み悩む」など) と、一線を画している。

このように、和文の説話にも出現しているＢ層（１）に分類される2字漢語サ変動詞は、ほぼ同義の和語との間に、詳しく分析してみると、意味の違いや使い分けを指摘できる例が目に付く。

なお、31「持斉す」、32「孝養す」、33「結縁す」は、同様の文脈で用いられる類義の和語が見つからない。

B層（2） 本朝世俗部にも用いられる語

表 5.7 のうち、大半の例が本朝仏法部までに集中するものの、少ないながらも本朝世俗部にも出現する場合もある語に、34 から 49 までの 16 語がある。これらを、B層（2）と扱う。それらは、次のように類義の対立語が存在するものが多い。

- 34. 殺害す ／ 殺す、害(がい)す
- 35. 祈念す ／ 祈る
- 36. 沐浴す ／ 浴む
- 37. 養育す ／ 養ふ
- 38. 安置す ／ 置く
- 39. 供養す ／ 備ふ、供(く)す
- 40. 修行す ／ 修(しゅ)む、修(しゅ)す
- 41. 制止す ／ 止(とど)む・制す
- 42. 長大す ／ 勢長す
- 43. 聴聞す ／ 聞く
- 44. 礼拝す ／ 礼(をが)む、礼(らい)す・拝(はい)す

これらの語について、用例を分析して双方の語の意味を比較してみると、意味による使い分けが認められ、その使い分けが、B層（1）の場合に比べてより明瞭になっていることが分かる。

例えば、34「殺害す」は、「殺す」の持つ広い意味のうち、企んで命を狙うことに焦点を合わせる場合に使われている。また、危害を加えることに焦点を合わせる場合に用いられている「害(がい)す」とも使い分けがある。

35「祈念す」は、「祈る」の持つ意味のうち、引用の助詞「と」を伴って、特に大切な内容を持った祈りを意味する場合や、一心に祈り続ける場合に使われる。この語については、次節で詳しく検討する。

36「沐浴す」は、「浴む」が液状のものが身に注がれることを意味しているのに対して、身を清めることを意味している。

37「養育す」は、「養ふ」が衣食などの世話をはじめ、生活の面倒を直接見ることを言うのに対し、経済力をもつ地位にある者が、低い地位の者を扶養することを言っている。

38「安置す」は、「置く」が行為の場所・物に限定がないのに対して、寺・堂・塔などの場所に仏像や舎利など仏を象るものを置くという、限定がある。

39「供養す」は、「備ふ」「供す」が物を供える行為自体に着眼した語であるのに対して、供え物をする者の動機や相手に着眼した語である。

40「修行す」は、「修む」が善根や行を対象とし、「修す」が仏事や法事を対象にするのと違って、仏道や仏法を対象とする場合に使われている。

41「制止す」は、「止む」が中止させることを行為の側に着眼して言うのに対して、制止者側に着眼して言っている。「制す」も制止者側に着眼した言い方であるが、「制止す」は、特に、統治者など強い力を持った者が制止者になる例が目立つ。

42「長大す」は、「勢長す」[7]が一人前とされる段階に達することを意味しているのに対して、成長して大きくなっていくことを意味している。

43「聴聞す」は、法会などの特別な場で、集まって講話を聞くことを表しているが、こうした特定の場に置かれた場合には、「聞（聴）く」は用いられにくい。

44「礼拝す」は、「礼(をが)む」「礼(らい)す」「拝(はい)す」が崇拝する神仏や人・物に対して、頭を下げることをいう語であるのに対して、特に崇拝すべき対象に深く心をこめて頭を下げるという特徴が際立っている。

表5.7によれば、本朝世俗部にも用いられることのある2字漢語サ変動詞には、ほかに、45「流浪す」、46「帰依す」、47「加持す」、48「出家す」、49「利益す」があるが、これらには、同じような意味を表す類義語が見つからない。

見てきたようにB層とした、和文の説話にも用いられる2字漢語サ変動詞にも、ほぼ同義の、対立語が存在するものが多い。A層の語と異なるのは、対応する2字漢語サ変動詞と和語との間に、明確な意味の差異が指摘できるものや、意味による使い分けがあるものが目立つことである。

同じくB層の語でも、出現範囲が本朝仏法部に止まる（1）段階の語より、本朝世俗部にも広がる（2）段階の語の方に、その傾向が顕著であることから、語が位置付く層が漢の側から和の側に寄っていくほど、和語との間に明確な対立関係を形成する傾向がある。

5.2.6　C層　和文の説話にも多い語彙

最後に、C層を見よう。表5.7によれば、本朝世俗部に多い2字漢語サ変動詞は、天竺震旦部、本朝仏法部を通して、どの部でもよく用いられているC層（1）と、本朝世俗部に至って出現件数が増えるC層（2）の、2つに分けられる。

まずC層（1）に属する語には、50「霹靂す」、51「懐妊す」、52「対面す」、53「御覧ず」がある。このうち、50「霹靂す」は、そのほとんどが「雷電露震す」の形であり、雷鳴が響くことを表す類義の語は見つからない。それ以外の3語には、次のように、ほぼ同義の類義語が対立語として存在している。

- 51. 懐妊す　／　孕む
- 52. 対面す　／　会ふ
- 53. 御覧ず　／　見給ふ

[7] 古典大系では「勢、長ズ」と2語に切って解釈するが、「勢長ノ時マデ」（巻14-42）のような名詞用法もあることから、「勢長す」という2字漢語サ変動詞と見るのが適切と判断した。

51「懐妊す」は、「孕む」との間に意味の差は見られないが、和語「孕む」は、天竺震旦部に使用範囲が限られ、「懐妊す」の方が広く行きわたっている。

また、52「対面す」は、「会ふ」が近接して用いられている（44）の例では、同じ2人の人物の面会を指しているが、この面会の主体側である優婆堀多に視点のある場合には「対面す」、相手側である尼に視点のある場合は「会ふ」を用いる、という使い分けがある。

(44) 優婆岨多、此ノ告ヲ得テ喜ヲ成シテ、彼ノ尼ノ御許ニ詣給フ。行キ至テ可對面キ由ヲ申シ入レサス。(中略) 優婆堀多、對面スルヲ喜テ急入ル程、裳ノ裾、此ノ油坏ニ懸タリ。其ノ時ニ油ラ塵許泛レタリ。尼、優婆崛多ニ會テ云ク、「何事ニ依テ来リ給ヘルゾ」ト。(巻4-7)

さらに、53「御覧ず」は、「見給ふ」との間に、敬度の差異があることを、桜井 (1966) が示している。

このように、C層（1）の諸語は、対立関係にある和語よりも漢語の方が広く使われている場合と、和語との間に意味分担を持つ場合とがある。

C層（2）、すなわち、本朝世俗部の用例が、他の部に比較して特に多いものには、54「仮借（けさう）す」、55「沙汰す」の2語があるが、ともに同じような意味を持つ対立語は存在しない。『今昔』の「仮借す」を調査した陳 (2001) は、漢文にははい「日本独自の用法」を持っているとし、「沙汰す」を調査した佐藤 (1983) は、「日本特有の漢語」としており、この2語は、漢語でありながら固有語である和語と同等の性質を持っている。

5.2.7　本節のまとめ

『今昔』における2字漢語サ変動詞を取り上げ、漢文訓読文と和文とで層をなす文体のどの範囲に分布しているかを見ることで、語彙の層が浮かび上がることを確かめた。それは、まずは、A層、B層、C層の3つの層をなしており、各類の内部を、さらに2つずつの層に分けることもできた。その層状の体系には、語の意味も関与していて、両極のA類（1）やC類（2）では、対立語との間での使い分けがなかったり、対立語が存在しなかったりしているが、A類（2）、B類（1）、B類（2）、C類（1）は、対立語との間に意味の差が認められたり、両者が意味によって使い分けられたりするものが多く、特にB類（2）やC類（1）でそれが顕著である。

本節で行った各語の意味の記述は、用例を全体的に見わたして実施したものにとどまり、個々の語の用例について一貫した手法で細部まで分析した意味記述は不十分である。したがって、本節で指摘した対立関係にある語同士の意味の対立点も、十分に明確にできていない。また、ここで指摘できていない語にも、対立語が存在する可能性もある。語の意味を、個別の語の実態に即して、用例を分析する手順を明示して行うことが課題である。これについては、扱う事例をしぼって、5.3節と5.4節で扱っていくことにしたい。

表 5.10: 〈祈る〉語彙の頻度分布

番号	語	天竺震旦部 巻1〜10	本朝仏法部 巻11〜15	本朝仏法部 巻16〜20	本朝世俗部 巻22〜31	計
1.	祈る	19	42	17	8	86
2.	祈り請ふ	4	10	6		20
3.	その他の複合語	7	6	3		16
4.	祈請す	17	29	5		51
5.	祈念す	3	6	2	1	12

5.3　和語と漢語の関係：『今昔物語集』の〈祈る〉語彙

本節では、B層（1）の語彙からある事例を取り上げて、語が属する層と、対立する和語との意味による使い分けについて、詳しい分析を行っていく。5.2節では概観にとどまった、語の意味の分析についても、用例のどこに着眼するかを明確にした、一貫した手順による方法で記述を行っていく。

その事例には、5.2節でも取り上げた2字漢語サ変動詞「祈請(きしやう)す」「祈念(きねん)す」を選び、対立する和語「祈る」との比較を行い、漢語「祈請」の訓読語形としての和語複合動詞「祈り請ふ」についても、考察する。

5.3.1　〈祈る〉語彙が属する層

『今昔』における「祈る」「祈請す」「祈念す」などの語彙（以下、これらを総称して「〈祈る〉語彙」と呼ぶ）については、山口 (1996) に先行研究がある。山口は、万葉集で「〜を祈る」と「を」格で表示される性質の語（「神」など）が、『今昔』では「〜に祈る」と「に」格で表示されるように変容していることを記述しているが、そこに、漢語の意味についての言及はなく、和語と漢語の意味的な関係についても問題としていない。また、漢語も含めて語の巻別頻度表も提示しているが、そこに見えている層の問題についても言及していない。本節は、〈祈る〉語彙を構成する各語が属する層を明確にするために、5.2節で2字漢語サ変動詞の頻度分布をまとめた枠組に従ってあらためて調査し、その結果を、表5.10として示す。山口の示す数値と異なるところがあるが、本文や読みの認定、品詞の取り扱いなどの相違によるものだと考えられる。

表5.10にまとめた「祈り請ふ」の中には「祈り乞ふ」と書かれる1件を含んでいる。「その他の複合語」としたものの内訳は、「祈り願ふ」4件、「願ひ祈る」1件、「祈り出す」5件、「念じ祈る」「祈り顕す」「祈り療す」「祈り試みる」「祈り止む」「祈り祭る」各1件である。個々の複合語ごとに微妙に異なる意味を用例から帰納して記述するには、いずれも用例数が少な過ぎるため、これらは以下の考察からは除外する。

なお、名詞形「祈り」が40件程度あるが、動詞と同じ方法で意味分析を行うことがで

きないため、これも対象外とする[8]。また、漢語には「祈祷す」4 件（巻 6、12、19）、「祈願す」1 件（巻 11）もあるが、やはり用例が少なく、意味分析が困難であるため、対象外とする。

以上のような処理の結果、本稿で扱う語は「祈る」「祈り請ふ」「祈請す」「祈念す」の 4 語となる。表 5.10 によれば、〈祈る〉語彙に属する語は、いずれも巻 20 以前の天竺震旦部、本朝仏法部に多い。

和語「祈る」も、巻 22 以後（本朝世俗部）ではそれ以前よりも少なく、これは、巻 10 以前の天竺震旦部よりも、巻 11〜20 の本朝仏法部の方に多いことも考慮すると、文体による偏りではなく、〈祈る〉行為自体が、宗教に関わる場面と深い関わりを持っていることの現れ、すなわち、説話の内容によって巻別分布に偏りが出ているのだと見るべきである。このことは、例えば、『源氏物語』に用いられる「祈る」全 18 例について、その行為の主体を調べてみると、13 例までが、僧侶や尼であり、宗教的な場面に限定されていることからもうかがえる。

〈祈る〉語彙の中での各語が属する層を相対的に見るとき、複合語や漢語は、「祈る」に比べて巻 20 以前に偏る傾向が顕著である。同じ内容を表しながら出現箇所に偏りのあるこれらの語は、文体的な要因で偏りを生じているものと考えられる。すなわち、「祈り請ふ」「祈請す」「祈念す」は、「祈る」に比べると、漢よりの層に属すと見られる。この種の分布を示す語について、5.2 節では、説話ごとの出現状況を調べ、漢文訓読文の説話に出現が限られるか、和文の説話にも出現しているかの尺度から、A 層と B 層との線引きを行った。その結果、2 字漢語サ変動詞である「祈請す」「祈念す」は、ともに和文の説話にも出現していることが分かり、漢文の層にありながら、やや和文の層の側に寄っている B 層に属する語だと認められた。そこで扱わなかった「祈り請ふ」について同様の調査をしてみると、次のように和文の説話での使用例が見つかる。

(45) 良藤ガ長等シク造テ、此レニ向テ礼拝シテ、「屍ヲダニ見ム」ト祈リ請。（巻 16-17）

巻 16-17 は、依拠資料は未詳だが、漢字表記のできない、和文に特有の語を、意識的に欠字にしてまで用いているところが複数箇所ある和文の説話である。

このように、「祈り請ふ」「祈請す」「祈念す」は、いずれも、漢文の側の層にありながらも、和文の側にいくぶん寄っている層にあって、ほぼ同じ位置にある見られる[9]。語彙の層から見た、〈祈る〉語彙は、「祈る」が文体的には無色な中間的な層にあり、その上の

[8] 名詞「祈り」について、巻別の頻度から推定される、この語が属する層は、動詞「祈る」の場合とだいたい同じである。

[9] 5.2 節では、本朝世俗部にも出現するかしないかで、B 層の下位区分として（1）（2）の 2 段階を認定した。これは、漢語の全体的な分類を行うための便宜的な操作であったが、その結果、本朝世俗部に出現する「祈念す」と、出現しない「祈請す」とでは、異なる段階に分類されることになった。しかし、本朝世俗部に進出する「祈念す」は 1 件のみであり、「祈請す」と「祈念す」とを 2 つだけ取り出して、属する層が異なると見る必要はないであろう。〈祈る〉語彙の内部で属する層を見るときには、「祈請す」と「祈念す」は同じ位置にあると見てよい。

漢の側の層に、「祈り請ふ」「祈請す」「祈念す」があるととらえることができるだろう。

5.3.2 〈祈る〉語彙の意味分析の方法

本節で問題にしているような、同義的な語彙の意味分析を行うには、微細な差異まで見分けられるように分析の透明度を高くする工夫が望まれる。その工夫として、その語が文の中で意味的に関係し合っている語（以下「共起語」と呼ぶ[10]）を分解して整理し、それらを統合する方法を採ることとする。動詞についてこれを行う場合、格関係で統括される共起語に着目することが、特に有効だと考えられる。とりわけ、格助詞によって格機能が明示される共起語は、意味分析にとってもっとも有効な指標になる。

〈祈る〉語彙の共起語のうち、格助詞によって明示されるのは、主体（「が」格）、対象（「を」格）、内容（「と」格）、相手（「に」格）の４種である。それぞれ、次の３つの用例に、傍点、点線、破線、二重線を付した部分がそれにあたる。

(46) 我等ガ子ヲ願テ年来観音ニ祈リ申スニ依テ、（巻 11-38）

(47) 偏ニ後世菩提ヲ祈ル。（巻 12-32）

(48) 「老母ヲ助ケ給へ」ト祈ルニ、（巻 17-9）

このうち、主体は、助詞「は」によって表示されることもあり、助詞を表示しない場合や、ボイスが転換している文で「を」や「に」などの助詞で示される場合も多い。また、主体が表示されない文でも、〈祈る〉語彙の主体が何者であるかは明瞭である。それら表示形式の別やその有無を問わず、主体となるのは、すべて人間である。「祈る」「祈請す」「祈念す」で、主体になる人間の性質が異なるというようなことはないようである。このように主体の分析は、〈祈る〉語彙における意味の差異の分析において、あまり有益な情報を提供しない。

これに対して、対象、内容、相手は、それぞれ、助詞「を」「と」「に」によって明示されることが通常で、そう明示された共起語を分析し比較することで、３語の意味の差異が見えてくることが多く、積極的な考察材料とすべきものと考えられる。表 5.11 は、「を」格、「と」格、「に」格のそれぞれで、〈祈る〉対象、内容、相手が表示されている件数と、その件数が、各語の全件数の中で占める比率（表示率）をまとめたものである。例えば、「祈る」の例で、「を」格に対象を表示している例は 29 件あり、その 29 件は、「祈る」の全用例 86 件の 34 %を占めるということを示している。

[10] 本研究では、単に同一文中で使われている語に着眼するのではなく、語の文の中での働きに応じて、意味的に関係の深いものを「共起語」と扱う。

表 5.11: 〈祈る〉語彙の格の表示件数と表示率：件数は、対象・内容・相手が表示されている用例の数を示し、表示率は、各語の全件数数の中で、その表示された用例数が占める比率を示す。

			「を」格：対象		「と」格：内容		「に」格：相手	
番号	語	全件数	件数	表示率	件数	表示率	件数	表示率
1.	祈る	86	29	34 %	13	15 %	15	17 %
2.	祈り請ふ	20	5	25 %	6	30 %	1	5 %
3.	祈請す	51	16	31 %	6	12 %	18	35 %
4.	祈念す	12	0	0 %	7	44 %	0	0 %

これら３つの格機能をもつ共起語は、格助詞が脱落した形や、修飾関係や従属関係になる語句に埋め込まれた形で、文中に現れることもあるが、そのような用例については、必要に応じて分析対象に含めることとする。

5.3.3 〈祈る〉対象

まず、「を」によって対象が表示されている場合を分析しよう。表 5.11 で「「を」格：対象」の列を見ると、「祈念す」の表示率がゼロであることが特徴的で、この語は対象に関与しない。他の３語の対象表示率は、ほぼ同程度で、これらの３語の意味は重なる部分が大きいと思われる。

次に、「を」によって表示される対象の性質を観察すると、次の 4 種類に分けられる。

具体物

(49) 法會ヲ行ヒテ、天下ヲ令榮メ帝王ヲ令祈メムガ為ニ、最勝王経ヲ講ジテ（巻 12-5）

抽象物

(50) 一人ノ形貌美麗ナル人ヲ求メテ殺シテ、其ノ肉・血ヲ取テ天神ニ祠テ、福ヲ祈ル事有ケリ。（巻 6-6）

事

(51) 子ヲ儲ケム事ヲ祈申ケルニ、（巻 15-16）

指示詞

(52) 此レヲ令祈メムス。（巻７-16）

これらの語別の状況をまとめると、表 5.12 の通りである。

表 5.12 から分かることは、「祈る」は様々な性質の対象語を取るのに対して、「祈り請ふ」「祈請す」は事を表す対象語しか取らない、ということである。

表 5.12: 「を」格の対象の性質

番号	語	具体物	抽象物	事	指示詞
1.	祈る	3	12	13	1
2.	祈り請ふ	0	0	5	0
3.	祈請す	0	0	16	0
4.	祈念す	0	0	0	0

具体物を対象にする場合は、「祈る」のみに3件見られるが、すべて人物を指す語であり、先掲の（49）の例のように、（a）その人物の幸福を祈る場合か、（53）のように、（b）その人物の病の回復を祈る場合かのいずれかである。

(53) 即チ来テ、此ノ病者ヲ祈ルニ、病愈ヌ。（巻16-14）

抽象物を対象にする場合も、「祈る」にしか見られない。先掲の（50）のような幸福を意味する語はこの1例のみで、（54）のように病を意味する語の方が多い。これらはそれぞれ、具体物の（a）（b）に対応する。

(54) 住吉明神ニ御弊ヲ令奉テ、挙周ガ病ヲ祈ケルニ（巻24-51）

ほかに、（55）のように、菩提や後世を表す語句を「を」格にとる例が目立つが、これは具体物の例にはなかったものである。

(55) 只、念仏ヲ修シテ、後世ヲ祈テ（巻15-6）

これらは、後世の幸福を祈るものであり、（a）タイプの一つと考えられるであろう。事を対象にする場合も、具体物や抽象物で見た、（a）幸福、（b）病のいずれかに分類できるものが多い。（56）は（a）、（57）は（b）である。

(56) 観音ニ子ヲ儲ケム事ヲ祈申ケルニ、（巻15-16）

(57) 数ノ僧ヲ請ジテ、法花経ヲ令転読テ、病ノ癒ム事ヲ令祈ムト云ヘドモ（巻15-46）

一見、これら2種とは異なるタイプかと思われる例もある。

(58) 国ノ内ノ人、挙り詣テ心ニ願フ事ヲ祈リ申ス社也。（巻2-25）

(59) 諸ノ止事无キ僧共ヲ以テ、此鬼ヲ降伏セム事ヲ懇ニ祈セ給ケルニ（巻20-7）

幸福や病ではないものが対象になっている例である。しかし、（58）は満足を願うこととととらえれば、（a）幸福と同類。（59）の例も災禍を払うことを意味するものと考えれば、（b）と同類。（b）は病を含む不幸を意味するものと言い換えてもよい。

事を対象にする例は、「祈り請ふ」「祈請す」にもあるが、対象語のタイプは「祈る」よりも限定的である。すなわち、次の 2 例のように、（a）幸福を対象とする例に限られ、（b）不幸を対象とする例は全く見られないのである。

(60) 諸ノ人首ヲ挙テ詣デ、願求ムル所ヲ祈請フニ、必ズ其験シ有リトナム。（巻 11-38）

(61) 或ハ七日、或ハ二七日穀ヲ断チ漿ヲ断テ心ニ願フ事ヲ祈請スルニ、（巻 4-28）

（a）幸福を得るか、（b）不幸から逃れるかについて、「祈る」はその両側面を意味領域として持つのに対して、「祈り請ふ」「祈請す」は、（a）幸福を得る側面のみに限られるわけである。

以上は、助詞「を」によって示される対象の共起語の分析であったが、次のように、それ以外の形式で対象に相当する共起語が、文中に示されている場合もある。

(62) 邪気ノ病ニ悩ム人有ケレバ、此ノ盲人ヲ以テ令祈ルニ（巻 14-19）

(63) 然ラバ、祈請フ所ノ金、自然ラ思ノ如クニ出来ナム。（巻 11-13）

点線部分が対象に相当する共起語であり、「祈る」は、(62) のように、（b）不幸を意味する対象語を取る場合もあるが、「祈り請ふ」「祈請す」は、(63) のように、（a）幸福に限定されるという違いがあり、助詞「を」によって示される場合と同様である。

5.3.4　〈祈る〉内容

次に、助詞「と」によって祈りの内容が示される用例を分析しよう。

先に掲げた表 5.11 によれば、「祈念す」が、内容を表示する比率が特に高いことが特徴的で、「祈り請ふ」がこれに次いで高い。一方、「祈る」「祈請す」は、その表示率がかなり低い。

「と」によって示される内容は、次の 2 例を典型例として、2 つのタイプに大別することができる。

(64) 父母、此レヲ愛テ悲テ思ヒ傅ケレバ、常ニ此ノ殖槻寺ニ将参テ、「此ノ女子ニ愛敬・冨ヲ令得メ給ヘ」ト祈リ申ケル程ニ（巻 16-8）

(65) 浄源、地蔵ノ本誓ヲ深ク憑テ、密ニ其ノ法ヲ行テ、「老母ヲ助ケ給ヘ」ト祈ルニ（巻 17-9）

（64）は、欲しいものを手にすること、（65）は、災難から救われることを、それぞれ内容としているが、この２つのタイプは、ちょうど対象の２つのタイプ、（ａ）幸福を手にすることと、（ｂ）不幸から逃れることに対応すると考えてよい。

「祈る」は、上の例のように、（ａ）（ｂ）どちらのタイプも見られるが、「祈り請ふ」「祈請す」は、（ａ）のタイプに限られる。次の（66）などは、災難から救われることを指している点で、一見（ｂ）に解されるようにも思われる。

(66) 后、辛苦悩乱スト云ヘドモ、更ニ可為キ方无クシテ、自ラ心ノ内ニ思ハク、「（中略）菩薩ノ慈悲ハ、深キ事大海ヨリモ深ク、広キ事世界ヨリモ広シ。然レバ、憑ヲ係ケ奉ラム人、何ドカ其ノ助ヲ不蒙ラム」ト祈請シテ、目ヲ塞テ思ヒ入テ有ル間ニ、忽ニ足ノ下ニ金ノ榻出来ヌ。（巻 16-19）

しかし、直接的な表現としては、助けを蒙ることを言うもので、難を逃れることよりも、福を受けることに着眼した表現であると考えるべきで、やはり（ａ）のタイプである。

「祈る」は（ａ）（ｂ）両面にわたり、「祈り請ふ」「祈請す」は（ａ）一面のみ、という違いがあるのは、対象の場合と全く同じである。

対象には関与しなかった「祈念す」が、内容に関しては他のどの語よりも表示率が高い。その「祈念す」は、次の２例などのように、（ａ）（ｂ）両面にわたる。

(67) 「我レ此ノ乍身留テ弥勒ノ出世ニ値ヒ奉ラム」ト三箇年ノ間ダ祈念ス。（巻 4-27）

(68) 利房、歎キ悲テ云ク、「（中略）我レ重キ誡ヲ蒙レリ。悲哉、我ガ大師、釈迦牟尼如来、涅槃ニ入給テ後久ク成ヌト云ヘドモ、神通ノ力ヲ以テ新タニ見給フラム、願クハ我ガ此ノ苦ヲ助ケ給ヘ」ト祈念シテ臥シタルニ（巻 6-1）

「祈り請ふ」「祈請す」が（ａ）に限られるのに対して、「祈念す」が（ａ）（ｂ）両面にわたるのは、この語が対象を取ることが全くなく、対象を不問にしていることと関わる現象だと思われる。「祈念す」の場合、助詞「と」で引用される句が、〈祈る〉語彙の他の語に比べて長いことも特徴的で、複雑な内容を持つ祈りの場合に、「祈念す」が用いられやすい、ということも言える。（68）の例は、その典型例である。

なお、助詞「と」によらずに、内容を示す共起語が現れる場合は、後続句として現れる。

(69) 不調ノ男、泣々ク心ノ内ニ祈念スル様、「今日ハ此レ、月ノ廿四日、地蔵菩薩ノ御日也。而ルニ、我レ、今日被害ナムトス。此レ、地蔵菩薩ノ御歎キニ非ラムヤ。願クハ、地蔵、新タニ慈悲ヲ垂テ、我ヲ助ケ給ヘ。然ラバ、我、地蔵ノ形像ヲ造り顕ハシ奉ラム」ト歩ブ毎ニ念ジ奉テ（巻 17-4）

上に引いたような、［〈祈る〉語彙＋「様」＋引用句］の形式は、「祈念す」のみに3件見られ、「祈念す」が複雑な内容をもつ祈りに用いられやすいことが、ここからもわかる。

5.3.5 〈祈る〉相手

助詞「に」によって、祈る相手を表示している例を分析しよう。

先に示した表5.11によると、相手を「に」格で表示するのは、「祈請す」の比率がひときわ高いのに対して、「祈念す」が皆無、「祈り請ふ」も極めて低いという落差が顕著である。助詞「に」によって示される相手がどのような者であるかを見ると、「祈る」と「祈請す」はすべて神や仏であり、次のようによく似た文脈に用いられている場合も見られる。

(70) 覺念、此ヲ歎テ悲ムデ、三寶ニ祈リ申シテ、此三行ノ文誦セム事ヲ願フに（巻14-13）

(71) 此レニ依テ、此ノ事ヲ三寶ニ祈請シテ思エム事ヲ願フニ（巻14-14）

しかし、助詞「に」によって示される相手を表す語句を一覧にして比較してみると、「祈る」と「祈請す」との間に相違のあることにも気づく。数字は出現件数を示し、数字のないものは1件のみのものである。

- **祈る:** 観音５、三宝２、四天王２、摩尼抜天、毘沙門天、龍神、樹神、妙見、虚空蔵菩薩
- **祈請す:** 三宝６、仏神６、天神、物部ノ氏ノ大神、観世音菩薩、毘盧舎那ノ像、卒堵婆、寺の鎮守、憑ミ奉る所ノ本尊

上の一覧によれば、「祈る」は、「観音」をはじめとする特定の仏や神を指す語が目立ち、例外は「三宝」の2件のみである。「祈請す」は、特定の仏や神を指す語もあるが、どちらかといえば、「三宝」や「仏神」など仏や神全般を指す語が多い。

このことから、「祈る」は、特定の神や仏を相手に想定した、一回一回の具体的な祈りを指す傾向が強いのに対して、「祈請す」は、神や仏全般に関して恒常的に懐いている信条に基づくような祈りを指す、といったような相違があったのではないかと思われる。

表5.11で、相手を表示する比率が、「祈請す」において特に高率であるのも、祈りを叶えてくれる相手として、神仏の存在が強く意識されやすいためであろう。

なお、1件だけ存在する、相手を表示する「祈り請ふ」の共起語は、「天地」であり、「祈る」「祈請す」にはなかったものであるが、これは、説話の依拠資料にあった「祷請」

表 5.13: 〈祈る〉語彙の意味特徴のまとめ

番号	語	対象		内容		相手	
1.	祈る	幸福を得ること	不幸から逃れること	幸福を得ること	不幸から逃れること	特定の神仏	—
2.	祈り請ふ	幸福を得ること	—	幸福を得ること	—	—	
3.	祈請す	幸福を得ること	—	幸福を得ること	—	特定の神仏	神仏全般
4.	祈念す	—	—	幸福を得ること	不幸から逃れること	—	—

の語を訓読したことによる例外的な表現である[11]。

(72) 禽堅、天地ニ祈リ請テ（巻 9-9）

(73) 祷請天地（船橋本孝子伝下 17）

5.3.6　意味から見た〈祈る〉語彙の体系

〈祈る〉語彙の共起語のうち、対象、内容、相手の 3 つの格機能を担って表示されている語句を整理する方法で、〈祈る〉語彙の意味分析を行った。その概略をまとめると、表 5.13 のようになる。

表 5.13 によれば、まず、「祈る」がもっとも広範な意味領域にわたっており、〈祈る〉語彙のもっとも一般的な語としての位置を占めている。これに対して、他の語は、意味領域が限定的であることが分かる。

「祈り請ふ」は、幸福を得ることを対象または内容とする場合に限られ、「祈る」の広範な意味から、一部を切り出して、この語の意味領域としていることが分かる。「請ふ」を内部に含む語であることを思えば、限定される意味と語形との対応は見えやすい。

「祈請す」は、対象と内容に関しては、「祈り請ふ」と全く重なり、この 2 語が、漢語とその訓読語形という語形上の対関係にあることと対応している。その一方で、「祈請す」は、相手に関して「祈り請ふ」にはない意味領域を持っている。しかも、神仏全般を相手にするなど、「祈る」よりも広範囲にまで意味を展開させている。

「祈念す」は、表 5.13 では、「祈る」の意味領域の一部を切り出した形におさまっているが、先に見たように、複雑な内容をもつ祈りを指す場合に特に用いられやすいなど、内容に関する意味を強めるような場合、「祈る」にはない意味領域で用いられることもある。

[11] 『今昔』の「祈り請フ」のうち、依拠資料の表現をそのまま受け継ぐのはこの例のみである。依拠資料が判明している説話での使用例のほとんどは、対応する表現が依拠資料の側にない場合か、「祈念」「祈祷」「祈願」等を「祈り請ふ」と翻訳したものかである。『今昔』の「祈る」「祈請す」「祈念す」についても、依拠資料の直訳は多くなく、いずれも『今昔』の書き手の語彙となっている。

5.3.7　本節のまとめ

5.2 節で見たように、『今昔』の 2 字漢語サ変動詞は、ほぼ同義の和語と対立している場合も多いが、和の層にある程度近付いた位置にある 2 字漢語サ変動詞については、和語との間に意味による使い分けを持った対立関係を形成して、共存している場合が多かった。「祈る」と「祈請す」「祈念す」の場合も、その対立関係を形成している。

和語「祈る」は、広範な意味領域をもち、文体的に無色の語であるが、漢語（混種語）「祈請す」「祈念す」は、「祈る」が担っていた意味領域の一部を特化させ、場合によってはそれを展開させた意味を担って、〈祈る〉語彙の中に一定の位置を占めているのである。「祈請す」の訓読語形である「祈り請ふ」も、漢語の場合と同様の位置にあって、やはり意味領域の一部を担っている。語彙の層において、「祈る／祈請す・祈念す・祈り請ふ」という、一対多の対立があるが、そこに、意味による一対多の対立も見える。

5.4　和語と漢語の意味対立：『今昔物語集』の〈奇異〉〈微妙〉

5.4.1　本節の目的

本節では、「祈請す」「祈念す」よりもいっそう和の層に近付いた位置にある漢語と、それに対立する和語との関係を考察する。ここで取り上げる漢語名詞「奇異（きい）」「微妙（みめう）」は、形状詞用法で使われることが多く、形容詞相当の機能を持つ。用例の多くが本朝仏法部までに偏り、漢の層に位置付く漢語である。5.2 節で 2 字漢語サ変動詞を 3 層 6 段階に分けたが、その層分けに従えば、B 層「漢文訓読文の説話に多いが、和文の説話にも少数使われている語」ということになる。しかし、本朝世俗部にも、いずれも 10 件以上使われており、この数は、5.2 節で B 層（２）とした語のどれよりも多い。B 層（２）の中でも、C 層「和文の説話にも多い語」に、かなり近付いた語だと言うことができる。

『今昔』で「奇異（きい）」と対立関係にある語は形容詞「あさまし」である。この語は、「奇異（あさまし）」と表記されることが一般的であるので、「奇異（きい）」と「奇異（あさまし）」の意味は相当に近いと予想される。『今昔』で「微妙（みめう）」と対立関係にある語は形容詞「めでたし」である。この語も、「微妙（めでたし）」表記されることが多いので、「微妙（みめう）」と「微妙（めでたし）」の意味も相当に近いと予想される。意味の相当に近い語が対立関係にある場合を考察することで、語の対立について、より詳しく見ていきたい。

なお、本節で扱う 2 つの対は、いずれも同じ表記で書かれるため、混乱を避けるために、以後、語を示すときには、「あさまし」「きい」、「めでたし」「みめう」のように、仮名書きで示すことにする。

『今昔』の「あさまし」と「きい」については、森 (1986) 、小峯 (1985)、藤井 (2003) などで探究され、「めでたし」と「みめう」についても、佐藤 (1984)、浅野 (1988)、藤

表 5.14: 「あさまし」「きい」の頻度分布

語	天竺震旦部 巻1〜10	本朝仏法部 巻11〜15	本朝仏法部 巻16〜20	本朝世俗部 巻22〜31	計
あさまし	0	11	51	164	226
きい	59	70	39	13	181

井 (2003) などで、詳しく研究されている。この2対が研究者の注目を集めてきたのは、「あさまし」に「奇異」を宛てたり、「めでたし」に「微妙」を宛てたりする表記は、平安時代においても、その後の時代でも、一般的でなく珍しい用字であること、『今昔』での出現件数がかなり多いこと、説話の評語部分など作品の重要箇所で多く使われていることなど、いくつかの事情が重なったためだと考えられる。先行研究の着眼点は多様であるが、各対の和語と漢語の層の対立や、意味の関係を論じているものはない。

5.4.2 「あさまし」と「きい」が使われる文体の違い

宮島 (1971) によると、平安時代の和文では、「あさまし」は多く使われているのに対して、「きい」は1件も見られない。一方、東京大学史料編纂所「平安時代フルテキストデータベース」[12] によると、平安時代の和化漢文に「奇異」という文字列を多く見つけることができるのに対して、平安時代の古辞書の和訓や訓点資料において、「あさまし」を見出すことは容易でない。『色葉字類抄』(前田本) キ部畳字門に「奇異」と掲出されていることから、「奇異」は「きい」という漢語として使われることがあったと見られ、和化漢文の「奇異」も「きい」を表記したものだと判断される。このような平安時代の文献における用例の出現状況から、「あさまし」は和の層に属し、「きい」は漢の層に属し、使用される文体が対照的である。

『今昔』における「奇異」には、「あさまし」と読むべきものと「きい」と読むべきものとが混在している。読みの根拠と読み分けの実践は、山田他 (1959-1963)、馬淵他 (1999–2002) などによってほぼ解決済みである。また、巻別の用例件数についても、藤井 (2003) ほかで報告されているが、あらためて調査を行った結果を示すと表5.14の通りである[13]。集計する際の巻のまとめ方は、5.2節、5.3節で採った枠組と同じである。

表5.14によると、前半は「きい」が多く、後半は「あさまし」が多く、分布は交替的で、文体による使い分けが鮮明である。

[12] http://wwwap.hi.u-tokyo.ac.jp/ships/db.html
[13] 「寄異」「奇意」「棄異」と表記されたものも含めて集計した。

5.4.3 「あさまし」と「きい」の意味分析

意味分析の方法

『今昔』における「あさまし」と「きい」の意味については、文学研究者によって、「〈奇異也〉が賛嘆を、〈奇異シ〉が驚嘆を比較的多く分担することがあったと見るべきであろう」(森 1986)、「一面で「奇異」は賛嘆、「奇異し」は驚嘆の意を負いつつも互換性・融通性をもつとみてよい」(小峯 1985) などとする研究があり、同義性が高い中でも微細な差異があることが指摘されているが、その同義性と差異について、言語学的な分析は行われていない。

「あさまし」や「きい」のような評価や感情の形容詞・形状詞（名詞の形状詞用法を含む）の意味分析をする際にも、前節の〈祈る〉語彙の語の意味分析の際に採った、語が文中で意味的に関与する共起語句から読みとれる情報を整理し、それを総合して語の意味を記述することが有効であると予測される。

前節で扱った〈祈る〉語彙の分析では、格助詞によって示される、動詞の対象、内容、相手に着眼して、共起語句を分析したが、形容詞文（形状詞文を含む）では、別の着眼点が必要である。日本語の文の基本構成を説いた、川端 (1976)、尾上 (1982)、尾上 (1987) によれば、動詞文では述語と呼応する要素は、述語との間に論理的な格関係をなすが、形容詞文では主語と述語が分節関係をなす。したがって、形容詞文の述語の意味分析のためには、主語に立つ語句を整理していくことが必要になる。

(74) 帝王ノ御為ニ此ク無礼ヲ至セルハ、奇異（あさまし）キ事也。（巻 28-4、尾張守の発話）

（74）において、述語「あさまし」の主語は、下線を引いた「帝王ノ御為ニ此ク無礼ヲ至セルハ」であり、この、「帝王のためにこのような無礼を働いたこと」が、「あさまし」と評価された対象であり、そう評価した、発話者尾張守が「あさまし」という感情を抱いていると解することができる。主語の位置に立つ語句に対して、述語「あさまし」はその評価であるとともに、話者の感情でもある (川端 1976)。その評価や感情の対象を、主語に立つ語句を整理することを通して、分析していく。

対象を示す形式

対象を示す主語の語句の形式には、次に示す（75）（76）の下線部のような名詞句と、（77）（78）の下線部のような動詞句とがあり、それぞれ、主語が述語の前にくる述定法（75）（77）と、主語が述語の後にくる装定法（76）（78）の場合がある。

(75) 山ノ躰奇異（きい）ニシテ、神霊ノ栖・仙人ノ窟也。(巻 17-16)

(76) 其ノ供養ノ庭ニ、奇異（きい）ノ瑞相有ケリ。(巻 14-10)

表 5.15: 「あさまし」「きい」の対象となる名詞の分類

分類	あさまし	きい
人物	致経、法師、徳人、悪人、者2、心5、身、命3、鼻、目、力、有様2、姿、音(こゑ)2、香、尿、死に、錯(あやま)ち	形貌、相(そう)2、者、為る者、心、命2、政
動物	馬、物、心2	
場所	所3	所
自然物	海の面	山の体、雲2、水、香、瑞相
形式名詞	事6、態(わざ)4	事11、物

(77) 然カ追補セム所ニテ、糸ヲ取テ被見顕ル、極テ奇異(あさまし)キ事也。(巻 29-15)

(78) 奇異(あさまし)ク、餌取ノ家ニモ来ニケルカナ。(巻 15-27)

なお、形式名詞による句が対象になる場合は、形式名詞の実体性が勝る（79）のような例は名詞句に扱い、形式性が勝る（80）のような例は動詞句として扱うことにする。

(79) 但シ、極メテ奇異(きい)ナル事ナム有ル。(巻 10-34)

(80) 本ヨリ見知タルガ如ク昵ビ語フ事、奇異(きい)也。(巻 11-7)

名詞句を対象とする場合

まず、名詞句を対象とする場合 (「あさまし」46 件、「きい」28 件) の対象となる名詞類を整理すると、表 5.15 のようになる。「人物」から「形式名詞」までの、ほぼ同じような意味分野の名詞が対象となっていて、「あさまし」と「きい」の意味はとても近い。

しかし、表 5.15 をよく見ると、違いがあることにも気付く。次のような点である。

1. 人物や動物は「あさまし」に多く「きい」に少ない。
2. 「あさまし」には、人物や動物それ自体を指す語（徳人、悪人、致経、法師、馬など) が目立つのに対し、「きい」では、これがない。
3. 人物や自然物が外面に醸し出す物を指す場合、「あさまし」では、物や様子の実質を表す語語（有様、姿、鼻、尿、音、面など）が多いが、「きい」では、形や見た目を表す語 (形見、体、相など) が目につく。

これらのことから、「あさまし」は人物や動物を中心とする実質的な存在を対象としやすく、「きい」は人物や動物に限らず、形や見た目を対象としやすい、という相違を導き出すことができるだろう。

表 5.15 において下線を付した語句は、「あさまし」と「きい」に共通するが、その文脈を詳しく検討してみると、対象のどこに着眼しているかに差異を見出すことができる。一例として「命」を対象とする場合についての分析を示す。

(81) 幼カリシ時、家ノ延ニ遊ビ行キシヲ、不知ヌ者ノ出来テ捕ヘテ、頸ヲ掻キ斬タリシ也。後ニ家ノ人見付テ、搦ケレドモ、行方ヲ不知デ止ニケリ。其後、誰ト不知ズ、其レヲ炙キ綴タル也。奇異(あさまし)キ命ヲ生テコソ。(巻 31-3)

(82) (虎に遭遇して) 肝・心モ失セテ、船漕グ空モ無クテナム鎮西ニハ返リ来タリケル。各妻子ニ此ノ事ヲ語テ、奇異(あさまし)キ命ヲ生テ返タル事ヲナム喜ビケル。(巻 29-31)

(83) 大キナル木、頭ノ上ニ落懸ヌレバ、頭モ破レ、頸モ可折キニ、烏帽子ニハ當タリケレバ破レテ打テ被□ニケリ。我ガ身ニハ聯ニ疵モ元ク、痛キ所モ无クテコソ有ケレ。烏帽子ニ當ル許ナラムニ、頭ニ不當ヌ様有ナムヤ。此レ他ニ非ズ、年来ノ戒ヲ持テル力、今日ノ観音ノ御助也。此ル奇異(きい)ノ命ヲナム生タリケル。(巻 19-39)

上 3 例は、いずれもある危機的状況から逃れた後に、「命ヲ生」きたことを〈奇異〉と評価するものである。「あさまし」の例は、頸を掻き斬られたり（81)、虎に遭遇したりしながらも（82)、「命ヲ生」きた体験そのものが問題とされている。一方、「きい」の例である（83）は、大木が頭上に落下しても傷一つ負わずに済んだ体験について、破線部のように、持戒と観音の助力のおかげであったとしている例である。体験そのものではなく、体験をもととしてその意味あるいは原因が、問題とされている。

(84) 実ニ極テ馬カナト見ツル程ニ、此ク死ヌレバ、命有ル者ハ奇異(きい)也。(巻 16-28)

（84）では、素晴らしい馬があっけなく死んでしまった体験から、「命有ル者」の真実に目が向けられており、目の前のことがらをもとに、その原因に思いをいたして「きい」と評価している。

「あさまし」は体験そのものへの評価や感情、「きい」は体験の意味や原因への評価や感情、という違いがある。

動詞句を対象とする場合

次に、動詞句を対象とする場合 (「あさまし」15 件、「きい」5 件) を見る。「あさまし」には、次のような類型がある。

(85) 先年ニ不動尊ノ示シ給ヒシ女ヲバ殺テシニ、
此ク思ヒ不懸ヌ者ニ落ニタルコソ奇異(あさまし)ケレ。（巻 31-3）

傍線部の思いがけない者に落ちた (女に触れて堕落した) ことを対象として「あさまし」が発現する背景に、波線部に、女に落ちてその女と夫妻となってしまうから注意するようにと不動尊が啓示した女は殺したはずなのに、という思いが示されている。

(86) 亦若干ノ財・従者共ヲモ引具シテ去ケムニ、其ノ後不聞ズシテ止ニケム、奇異(あさまし)キ事也カシ。(巻 29-3)

(87) 然カ追補セム所ニテ、糸ヲ取テ被見顕ル、極テ奇異(あさまし)キ事也。(巻 29-15)

（86）では、たくさんの財宝や従者を引き連れて去ったのに (波線部)、その後噂も聞かれないままになったこと (傍線部)、（87）では、検非違使が逮捕する現場であるのに (波線部)、検非違使自らが糸を盗んで見あらわされたこと (傍線部) について「あさまし」と評されている。いずれも、直接の対象となる目の前のことがら (傍線部) の背後に、矛盾あるいは対立するようなことがら (波線部) が示されている。これが第1の類型である。

第2の類型として、目の前のことがらとそこにないことがらとを並べて対象にする型がある。

(88) 僧都、此ヲ見テ、馬ヲモ郎等共ヲモ兼テ習シ契タラム様ニ出来ル様ノ奇異(あさまし)ク思エケレバ、(巻 23-14)

(89) 手マサグリニ節ノ程ヲ指ヲ以テ板敷ニ押蹉ケレバ、朽木ナドノ和ナラムヲ押砕ム様ニ砕々ト成ルヲ奇異(あさまし)ト見ル程ニ（巻 23-24)

（88）では、馬や郎等が出て来るさまが (傍線部)、まるで訓練し言い付けてあったかのようであった (波線部) として、「あさまし」という評価や感情が生まれている。（89）では、箭篠の節を指で押し揉むと粉々に砕けるのが (傍線部)、まるで軟らかな朽木を押し砕くかのようであった (波線部) ことが、「あさまし」と見られている。いずれも、目の前で起こっていることがら (傍線部) を、目の前にない別のことがら (波線部) と、直喩形式で並べているものである。

一方、「きい」の場合、「あさまし」とは異なっている。まず、次のような類型がある。

(90) 異国ヨリ奇シノ禿ノ由无キ事共ヲ書キ継ケダル文共及ビ仙人ノ骸ナドヲ持参セルヲ、カク被崇ルヽ、極テ奇異(きい)ノ事也。(巻 6-2)

(91) 遙ニ天竺ヨリ来レル人ヲ、日本ノ人ノ待受テ本ヨリ見知タルガ如ク昵ビ語フ事、奇異(きい)也。(巻 11-7)

（90）では、崇めること (傍線部) が「きい」の直接の対象となっているが、崇める相手は、いわれのないことを書き連ねた文書や仙人の遺骸を持参した、異国のあやしげな

禿であった (波線部)。直接の対象となる傍線部と、それに対比される波線部とは、格助詞「を」で結ばれる行為とその対象格の関係にある。同じように、（91）でも、日本人が待ち受けて旧知の仲であるかのように親しむこと (傍線部) に対比されるのは、やはり格助詞「を」で結ばれる、親しむ行為の対象である、遙か天竺から来た人 (波線部) である。「きい」には、こうした対比的なことがらを格関係でつなぐ類型がある。

その対比的なことがらを継起関係でつなぐ、もう一つの類型がある。

(92) 買誼、死テ後、面リ子ニ見エテ文ヲ教ヘテ業ヲ令遂ムル事、奇異（きい）ニ難有キ事トナム語リ伝ヘタルトヤ。(巻 10-24)

（92）は、子に面と向かって文を教えて学業を遂げさせること (傍線部) が直接の対象となり、それが死後 (波線部) 行われたとされる。死ぬことと教えることという対比的なことがらが、「テ後（のち）」という語句で継起関係としてつながれている。

5.4.4　「あさまし」と「きい」の意味の対立

対象となる名詞句の分析から、「あさまし」は、実質的な存在や体験そのものを問題にしているのに対して、「きい」は、対象に触発されてその原因や意味を問題にするものであるという相違が導き出された。また、動詞句の分析から、「あさまし」は、ことがらそれ自体を対象にしているのに対して、「きい」は、ことがら同士を格や継起の関係で結びつけ、その関係を対象にしている、という差異が見出された。

「あさまし」と「きい」の異なりは、一つの説話のなかで使い分けられている例にも、はっきりと見えている。

(93) 而ル間、其国ニ可然者ノ、男ニ送レテ寡ニテ有女在ケリ。此介ガ妻モ無テ有ヲ聞テ、「此児ノ後見セム」ト懃ニ令云ケレドモ、女ノ心ハ奇異（きい）ノ怖シキニ合セテ、身モ急ガシクテ常ハ家ニモ无レバ、「妻ノ用モ无シ」トテ不聞ケレバ、(中略)継母ノ心奇異（あさまし）ト思テ、人ヲ遣テ家ヲ堅サセツ。(巻 26-5)

（93）は、子どもの世話をしようと後妻に入ることを申し出てきた女に関して、「女ノ心ハ奇異ノ怖シ」と思って、その申し出を断る。その後、女の厚かましさに折れて後妻として迎えたところ、その女が子どもを殺そうと企んだ (中略部分)。このことを受けて用いられたのが後の例の「継母ノ心奇異（あさまし）」である。「きい」は、女の心というものに対する評価をもとに、女を後妻に迎えれば起こるであろう異常なことがらを思うものであり、「あさまし」は、異常なことがらを起こした女の心それ自体に対する評価となっている。

表 5.16: 「めでたし」「みめう」の頻度分布

語	天竺震旦部 巻 1〜10	本朝仏法部 巻 11〜15	本朝仏法部 巻 16〜20	本朝世俗部 巻 22〜31	計
めでたし	24	16	41	109	190
みめう	33	48	16	13	110

5.4.5 「めでたし」と「みめう」が使われる文体の違い

宮島 (1971) によれば、平安時代の和文では「めでたし」は多く見られるが、「みめう」は 1 件も見られない。一方、「平安時代フルテキストデータベース」によると、平安時代の和化漢文に「微妙」という文字列を見つけることができ、『色葉字類抄』(黒川本) に「微妙 雑部ミメウ」とあることから、和化漢文の「微妙」は「みめう」だと考えられ、この語は漢の層に属すると考えられる。「めでたし」は訓点資料に見出すことは容易でないものの、『類聚名義抄』(観智院本) に、「玩 メテタシ」「娃棯 メデタシ」とあるなど、少数ながら古辞書の和訓に掲出されていることは、古辞書にほとんど掲出されなかった「あさまし」と異なっている。「めでたし」は、和の層に属するが、「あさまし」に比べると、少し漢の層の側に寄っていると考えられる。

『今昔』における頻度分布は、佐藤 (1984)、藤井 (2003) で示されているが、改めて調査した結果は、表 5.16 の通りである [14]。前半は「みめう」が多く後半は「めでたし」が多く、属する文体が対照的である。しかし、表 5.14 の「あさまし」の場合に比べると、「めでたし」が前半にもかなり出現しており、ここからも「めでたし」の和文的な性格は、「あさまし」ほどには鮮明でない。「あさまし」「きい」の対に比べると、「めでたし」「みめう」が用いられる文体の差の鮮明度は、少し低くなっている。

5.4.6 「めでたし」と「みめう」の意味分析

意味分析の方法

「めでたし」と「みめう」の意味について、佐藤 (1984) は、対象にとる語の詳しい調査を行って、次のように述べている。

> （「微妙シ」は）「微妙ナリ（ノ）」と類似の語義を有しているとみられ（中略)、「微妙ナリ（ノ）」は概して感覚に関する語を対象としているのに対し、「微妙シ」は「微妙ナリ（ノ）」よりは用法の範囲が広く、抽象的な語にもかなり用いられている。

[14] 「目出」と表記された「めでたし」も含む。「めでたし」が「目出」と表記された場合と「微妙」と表記された場合には、意味の違いは認められず、意味差による書き分けではなく、意味とは別の要因での用字選択の問題に帰すことことができる。この問題は、佐藤 (1984)、藤井 (2003) が詳しく扱っている。

表 5.17: 「めでたし」「みめう」の対象となる名詞の分類

分類	めでたし	みめう
人物	女 8、女共、男女、后、大臣、歌詠み 2、相人、相撲、王昭君、若君、此の人、形 2、有様 13、形・有様 5、気はひ・有様、姿、襴姿、様体・頭付、顔付・眼見、顔、鼻・口、光 2、手、手の書様、手付、才 2、心ばへ、思え 2	音(こゑ)7、身 3、香、者
植物	花、桜の花、蓮花、花葉、紅葉、瓜、色 2	花
物品	唐車、馬、移、財、玉、太刀、帯、糸、風流、物共 2、硯の筥、硯、細畳、瓔珞、食物、酒 2、平茸、仏像、香、色 2	宝 4、財、錦 2、帳・床、食物3、食物共、飲食 2、食、大饗、香油、荘厳
建物	宮殿、僧坊、此の房、屋共、舞台・楽屋・僧の帳など、止事無き所	宮殿、宮殿共、宝塔、武楽院、荘厳、有様
場所	国、世、止事無き地、狩地、勝地、地形、山川・峪峰、水の流れ、湯の有様、所、物、物の色など、北家	荘厳 5、荘厳せる土地、世界、此の寺の地
技芸	祈り、詩、文、和歌 6、歌 3、音楽、音楽の音3、鞠	講経・論議、説経、儀式共、琵琶 2、文花、麗句、此の句、御製、音楽6、音楽の音17、楽の音、伎楽、有様
衣服	衣2、衣共、裾、装束 2、物の色	衣4、衣服 6、衣服共、衣・袴、衣及び袈裟、着物、白畳、色
抽象物		神の御験、直(あたひ)

後に見ていくように、実際に用例を調べると、「感覚に関する語」か、「抽象的な語」かという違いでは説明できない例が多くあり、対象となる語句の分析をやり直す必要がある。

「めでたし」「みめう」が述語となる文の構造は、「あさまし」「きい」の場合と同じである。「あさまし」「きい」の場合と同様の基準で、対象が名詞句か動詞句かによって分けると、名詞句は、「めでたし」131 件、「みめう」98 件、動詞句は、「めでたし」25 件、「みめう」9 件となる。

名詞句を対象とする場合

まず、名詞句を対象とする場合の対象となる名詞を、分類して示すと表 5.17 のようになり、以下のように要約できる。

1. 人物、植物は、「めでたし」に多く「みめう」に少ない。
2. 衣服、抽象物は「みめう」に多く「めでたし」に少ない。
3. 物品、建物は、「めでたし」にも「みめう」にも多く見られ、語句の内訳には異なるものもある。

4. 場所、技芸は、「めでたし」にも「みめう」にも多く見られ、語句の内訳には異なるものもある。

まず、1について、少数ながら、人物について「みめう」が用いられることがあるが、その内訳の語句は、「めでたし」が用いられる語句とは重ならないものばかりで、

(94) 微妙(みめう)ノ音(こえ)ヲ以テ広清ニ告テ宣ハク　(巻13-30)

(95) 俄ニ微妙(みめう)ノ栴檀・沈水香等ノ如クナル香出来ヌ　(巻6-6)

のように、人物それ自体ではなく、音(こえ)や香りのように、人物から外に向けて発せられるものが対象になっている。同様に、植物について「みめう」を用いた1例も、

(96) 諸ノ天人ハ、微妙(みめう)ノ花ヲ以テ棺ノ上ニ散シ奉リ (巻3-33)

のように、棺の外面を覆う花が対象になっている。

次に、2について、人物の外面を覆う衣服には「みめう」が用いられることが一般的であるなかで、「めでたし」が用いられた場合は、

(97) 簾ノ色、几帳ノ帷、打チ出シタル女房ノ衣共、微妙(めでた)ク縫重ネタリ (巻28-4)

のように、衣服だけでなく、その場にある様々な装飾の総体を対象にしている。

そして、3について、物品、建物の分野では「めでたし」も「みめう」も同じ程度に用いられていて、対象になる語句の内訳を比較しても、目立った差異を指摘しにくい。しかし、「めでたし」と「みめう」に共通する語句の用例を比較してみると、差異が見出せる。一例として、物品の分野に分類される「財」の用例を取り上げる。

(98) 此ル微妙(めでた)キ財ナレバ、浪トモ見ユ。火トモ見エケル也ケリ。(巻26-12)

(99) 其ノ時ニ、仙道王、微妙(みめう)ノ財ヲ金ノ箱ニ盛リ満テ轡ヲ相具シテ使ヲ以テ影勝王ノ許ニ遣ル。(巻1-23)

(98)の「微妙(めでた)キ財」は、「浪」や「火」と見えるとされ、(99)の「微妙(みめう)ノ財」は「金ノ箱」に「盛リ満」たしているものとして見られている。「めでたし」は、浪や火に見立てて財の存在そのものをとらえているのに対して、「みめう」は、箱という外部と、その内部の財を対比してとらえている。

最後に4は、場所、技芸については、対象となる語句の傾向に差異が認められる。場所の場合を例にとれば、「めでたし」は具体的な場所を示す語（国、狩地、勝地、地形、山川・硲峰、北家等）が多いのに対して、「みめう」は「荘厳」（飾りの意味）の語が目立つ。「めでたし」は場所そのものをとらえているのに対し、「みめう」はその場所が飾られているものをとらえていると言えよう。

以上のように、1〜4 いずれにおいても、「めでたし」は、対象そのものを評価しようとしているのに対して、「みめう」は、対象から発せられるものや、対象の外側にあったり、対象を装飾するものを評価しているという違いがある。

動詞句を対象とする場合

動詞句を対象とする場合、まず、「めでたし」には、次のような類型が認められる。

(100) 衣ノ頸ビヲ引キ立テ、左右ノ袖ヲ掻キ合セテ、二重ニ屈テ、
卒堵婆ノ方ヲスガ目ニ見遣ツヽ、御随身ノ翔フ様ニ翔テ渡タテ、
卒堵婆ノ前ニ至テ、卒堵婆ニ向テ手ヲ合セテ、額ヲ土ニ付テ、度々礼拝シテ、
屈リ翔フ事微妙（めでた）シ。（巻 19-3）

(101) 見ル目ヨリ始テ馬ニ乗ル事ナム、微妙（めでた）カリケルナム。（巻 20-44）

(102) 僧ノ香爐共ニハ種々ノ香ヲ焼テ薫ジタル事微妙（めでた）シ。(巻 12-9)

（100）は、一連の行為の細部を挙げ尽くしてそれら全体に対して「めでたし」と評価するものである。（101）の「見ル目ヨリ始テ馬ニ乗ル事」のように二極を挙げることで全体を評価する場合も、（102）で「種々ノ」として香全体を示して評価する場合も、同類に数えられる。

もう一つの類型として、別のことがらと対比する型を挙げられる。

(103) 仁浄ハ本ヨリ然ル物云ヒニテ有ケルヲ、八重ガ然サ云ヒ返シタリケム心悪ク微妙（めでた）ケレ。(巻 28-14)

(104) 円融院ノ天皇ノ御代ニ后ニ立セ給テ、微妙（めでた）ク時メキテ御マシケル間ニ、自然ラ年月ヲ積テ、老ニ臨ミ給ヒヌレバ、出家セムト思シテ、(巻 19-18)

（103）は、「物云ヒ」（口達者な人）である仁浄に対して八重が「云ヒ返シ」たこと、（104）は、「時メキテ御マシ」たうちに「年月ヲ積」んで「老ニ臨」んだことについて、それぞれ、傍線部の対象を、対格や継起の関係にある波線部と対比するものである。

一方、「みめう」が動詞句を対象とする場合は、多くが「荘厳する」「飾る」「造る」という動詞で、外見を装飾することを対象としている。それに当てはまらない例は、次である。

(105) 而ルニ、露、家ノ兵ニモ不劣トシテ、心太ク、手聞キ、強力ニシテ、
思量ノ有ル事モ微妙（みめう）ナレバ、公モ此ノ人ヲ兵ノ道ノ被仕ルルニ、聊心モト無キ事无キ。(巻 25-7)

(106) 長櫃ニ火多ク□□テ、畳厚ク敷タルニ、菓子・食物ナド儲タル様微妙(みめう)也。(巻26-7)

対象である傍線部は、人物や場所の描写として、波線部の別のことがらと、細部を構成する一つとして並ぶものである。「みめう」は、部分を一つ一つとらえている点で、「めでたし」が全体を一体的にとらえた対象化であったことと対立している。

5.4.7　「めでたし」と「みめう」の意味の対立

名詞句の分析を通して、「めでたし」は、対象をそのままとらえて評価するのに対して、「みめう」は、対象の外側や装飾に着眼して評価するものであるという違いが見られる。また、動詞句の分析によって、「めでたし」は、対象全体を、場合によって別のことがらと対比して評価するのに対し、「みめう」は、対象の外側や装飾、また部分に着眼して評価するという相違も見出された。

「めでたし」と「みめう」の相違は、近接した箇所で使い分けられている例においても、とらえることができる。次の例では、香、車とともに部分を構成する「衣服」、あるいは、車の装飾としての「飾レル」を対象とする場合は「みめう」が用いられ、一行の行進全体の様子を対象とする場合は「めでたし」が用いられている。

(107) 微妙(みめう)ノ衣服ヲ令着メ、栴檀香ヲ塗リ沈水香ヲ浴シテ、微妙(みめう)ニ飾レル五百ノ車ニ乗セテ遣シツ。女人等、山ニ入テ車ヨリ下リテ五百人打チ群レテ歩ビ寄タル様、云ハム方无ク目出(めで)タシ。(巻5-4)

5.4.8　本節のまとめ

本節では漢の層に属する漢語でありながら、和の層に近づいた位置にあって、和語との間に明確な対立をなす2つの対を取り上げ、その意味を比較した。その結果、属する層が異なる対において、意味的対立も持つことが、確かめられた。

その対立は、前節で見た「祈る」と「祈請す」「祈念す」「祈り請ふ」のそれに比べて、一対一で明確に対立している。和語は対象そのものの評価である。一方、漢語は対象を別のことがらとの関係から評価するか、対象を構成することがらに分解して評価している。

5.5　まとめ

以上、第5章では、第3章で対立語の第1の類型とした、漢語（混種語を含む）と和語の対立について、具体的な事例を取り上げて、詳しく研究した。

まず、平安和文における漢語・混種語について、時代別の比率、品詞別・意味分野別の新出語の分類によって調査し、その位置が全体的に漢の層から和の層へと移ってきていること、その移行の遅い早いに、品詞や意味分野によって差があることを確かめた。

次に、個々の漢語が、『今昔』の部・巻・説話のどの範囲に出現するかを見ることで、『今昔』の漢語が、語彙の層における3層6段階に分かれて位置付いている様子が可視化できることと、漢の層にとどまる漢語よりも、和の層に近付いている漢語の方が、和語との意味の対立が鮮明になる様子をとらえた。

さらに、『今昔』において、漢の層にとどまる漢語と、和の層に近づく漢語とについて、それぞれ対立する和語との意味関係を分析した。その結果、前者の場合は、和語の広い意味を、漢語が細かい意味に言い分けているという一対多の対立が見え、後者の場合は、和語と漢語との間に一対一の明確な対立が存在していることが分かった。

このように、漢語は、漢の層にとどまるばかりでなく、和の層に近づいたり、そこに入り込んだりする語もあり、その段階に応じて、和語との対立の鮮明度も違ってくる。

しかし、第3章で明確になった対立語の中で、漢語と和語との対は必ずしも多くなかった。数として多い和語同士で対立するものについて、次章では取り上げていこう。

第6章　感情形容詞と感情動詞の対立

第3章で、感情形容詞と感情動詞とで使われる文体が異なる対になることが多い、という事実を見出した。本章では、この感情形容詞と感情動詞の対立を取り上げる。感情形容詞と感情動詞を比較し、そこに意味的な対立があることを見ていく。

まず、6.1節では、和文の『源氏物語』（以下、『源氏』と略称することがある）と、和漢混淆文の『今昔』を調査資料に定め、感情形容詞と感情動詞の対立の全体的な傾向を、感情主の人称の観点を中心に見ていく[1]。

次いで、6.2節では、「悲し」「悲しむ」の事例にしぼり、『今昔』を中心に、和文や漢文と比較して、感情主の人称以外も分析して、感情形容詞と感情動詞の対立を、総合的に見ていく。

本章は、品詞の違いという、意味の明確な違いが予想される対を詳細に見ることで、使われる文体に違いがあるところに、どのような意味の違いがあるのかを詳細に考察していく。これは、語彙を全体的に処理して対立や層を見た第3章・第4章や、漢語が全体的にどのような層状をなし、和語との間でどのような対立をなすかを見た第5章とは異なる、焦点を絞ったアプローチである。このような方向の異なる記述を行うことで、語彙の姿がよりはっきりと見えてくると予想される。

6.1　感情形容詞と感情動詞の対立と人称

6.1.1　『源氏』における３分類

まず、『源氏』全巻のテキスト全体に対して、「中古和文 UniDic」を用いて形態素解析処理にかけ、人手によるエラー修正を施し、形態素情報を備えたデータを取得した。この作業の過程は、Tanaka and Yamamoto (2012) で部分的に報告したが、ここに詳細に述べる。

上記の形態素情報付きの『源氏』のデータをもとに、形容詞と動詞の全語彙のリストを作成した。そのリストは、形容詞530語、動詞2415語となった。それらを1語1語目視で検討し、感情を表していると考えられる語を取り出したところ、感情形容詞が43語、

[1] 本節の調査資料には、『源氏』は、『日本語歴史コーパス 平安時代編』の対象となっている全巻を対象とし、『今昔』は、同コーパスに収録するための準備作業を行っている本朝部（巻11〜31）の全巻を対象とする。本文には、いずれも、「新編日本古典文学全集」（小学館）を用いる。

表 6.1: 『源氏』における感情形容詞・感情動詞の対の頻度・比率

分類	番号	形容詞	形容詞頻度	動詞	動詞頻度	形容詞比率	動詞比率
	1	驚かし	2	驚く	80	2.4 %	97.6 %
C	2	笑まし	2	笑む	46	4.2 %	95.8 %
	3	嘆かし	26	嘆く	137	16.0 %	84.0 %
	4	願わし	3	願う	12	20.0 %	80.0 %
	5	疑わし	8	疑う	16	33.3 %	66.7 %
	6	憂わし	16	憂う	25	39.0 %	61.0 %
	7	侘びし	47	侘ぶ	57	45.2 %	54.8 %
	*8	惜し	42	惜む	45	48.3 %	51.7 %
	9	恨めし	108	恨む	111	49.3 %	50.7 %
	10	頼もし	117	頼む	105	52.7 %	47.3 %
A	*11	厭わし	18	厭う	15	54.5 %	45.5 %
	12	悩まし	106	悩む	74	58.9 %	41.1 %
	*13	好まし	35	好む	23	60.3 %	39.7 %
	*14	煩らわし	151	煩う	82	64.8 %	35.2 %
	15	睦まし	68	睦む	27	71.6 %	28.4 %
	16	疎まし	51	疎む	20	71.8 %	28.2 %
	17	慎まし	141	慎む	49	74.2 %	25.8 %
	*18	憎し	135	憎む	26	84.0 %	16.0 %
	19	恋し	234	恋う	28	89.3 %	10.7 %
B	*20	悔し	61	悔ゆ	7	89.7 %	10.3 %
	21	羨まし	32	羨む	3	91.4 %	8.6 %
	22	恥ずかし	279	恥づ	24	92.1 %	7.9 %
	*23	悲し	335	悲しむ	9	97.4 %	2.6 %
	24	貴し	67	貴む	1	98.5 %	1.5 %
	*25	怪し	508	怪しむ	1	99.8 %	0.2 %

感情動詞が 40 語になった。なお、接尾辞「がる」が付いている感情の動詞（「悲しがる」など）は、この 40 語のリストには含んでいない。なぜなら、「がる」は多くの形容詞語基に相当程度随意に付くことができ、本節が目指している感情形容詞と感情動詞の対立とは質の異なるものだからである。

『源氏』の感情形容詞のリストと感情動詞のリストを突き合わせると、同じ感情を表現していて、同じ語基から派生したと考えられる感情形容詞と感情動詞が 25 対抽出できた。表 6.1 は、その 25 対を、動詞の頻度と形容詞の頻度とを合わせた数の中で、形容詞の数が占める比率が低いものから順に配列して、一覧にしたものである。

表 6.1 の 25 対は、語構成上は、「憎し」「憎む」、「貴し」「貴む」のような、共通の語根から形容詞と動詞が派生したもの、「悲し」「悲しむ」、「怪し」「怪しむ」のような、形容詞から動詞が派生したもの、「笑む」「笑まし」、「侘ぶ」「侘びし」のような、動詞から形容詞が派生したもの、という 3 つのタイプがある。表 6.1 を詳しく見ても、その語構成上の違いが、形容詞と動詞の頻度の違いに関与しているようには見えない

表 6.1 で、「形容詞比率」の列に着目すると、大きく 3 つの類に分けることができる。

表 6.2: 『今昔』本朝部における感情形容詞・感情動詞の出現頻度・比率

類	形容詞／動詞	本朝仏法部 巻 11〜20				本朝世俗部 巻 22〜31			
		形容詞	動詞	形容詞比率	動詞比率	形容詞	動詞	形容詞比率	動詞比率
A	惜し／惜しむ	3	27	10.0 %	90.0 %	20	18	52.6 %	47.4 %
	厭わし／厭う	0	25	0.0 %	100.0 %	1	3	25.0 %	75.0 %
	好まし／好む	2	25	7.4 %	92.6 %	0	20	0.0 %	100.0 %
	煩わし／煩う	3	70	4.1 %	95.9 %	4	20	16.7 %	83.3 %
B	憎し／憎む	5	34	12.8 %	87.2 %	24	18	57.1 %	42.9 %
	悔し／悔ゆ	6	34	12.8 %	87.2 %	24	18	57.1 %	42.9 %
	悲し／悲しむ	99	294	25.2 %	74.8 %	45	51	49.5 %	50.5 %
	怪し／怪しむ	71	129	35.5 %	64.5 %	108	39	73.5 %	26.5 %

A類は、形容詞比率が、30 %程度から 75 %程度のものである。次のB類は、その比率が、84 %以上のものである。もう一つのC類は、それが 20 %以下のものである。

6.1.2　『今昔』における部別の頻度

次に、上記の 3 類の感情形容詞・感情動詞の『今昔』における頻度を見る。C類については、『今昔』に動詞は多いが、形容詞は 4 語とも 1 件も使われていない。A類とB類とは、『今昔』でも形容詞・動詞ともに使われているが、その出現頻度はどのようになっているのだろうか。

『今昔』における語彙頻度を調べようとする場合、第 2 章で述べた、自動形態素解析が開発途上であって、網羅的な語彙調査が実施できないという問題にぶつかる。そのため、調査する範囲や語を限定して、誤解析を人手で修正するか、文字列検索によるかして、データを整備する作業を行う必要がある。ここでは、語を限定して文字列検索を行って、調査対象に定めた語の全例を過不足なく収集するやり方を採った。具体的には、A類、B類それぞれから 4 語ずつを任意に選び調査対象に定めた。表 6.1 の番号に＊を付した語である。表 6.2 は、『今昔』の本朝部を、漢文訓読文の説話が多くを占める本朝仏法部（巻 11〜20）と、和文の説話がほとんどを占める本朝世俗部（巻 22〜31）とに分けて、A類、B類の各 4 対の形容詞・動詞の頻度と比率を示したものである。

表 6.2 によると、A類においてもB類においても、本朝仏法部では形容詞の比率が低く、本朝世俗部では形容詞の比率が高くなっている [2]。この結果から、本朝世俗部で多くを占める和文では感情形容詞をよく用い、本朝仏法部で多くを占める漢文訓読文では感情動詞を多く用いる傾向があるということができよう。この傾向は、第 3 章で見た、漢文訓読文である巻 12 には感情動詞が特徴語になることが多く、和文である巻 27 には感情形容詞が特徴語になることが多いという傾向と合致するものである。そして、表 6.1 の

[2] A 類の「好まし」が例外となるが、その理由は不明である。

『源氏』に比べれば、『今昔』の形容詞比率は低い。このことも、感情形容詞は和文でよく用いられることを示すものである。

表 6.2 からはまた、本朝仏法部においても本朝世俗部においても、A類よりもB類の方が形容詞比率が高いという傾向を読み取ることもできる[3]。これは、A類とB類を比べれば、『源氏』においても『今昔』においても、A類の方が動詞が選択されやすい傾向があり、B類の方が形容詞が選択されやすい傾向があることを示している。

このように、同じ感情を表現する場合に、形容詞が選ばれるか動詞が選ばれるかは、文体（和文か漢文訓読文か）と意味（感情の種類）とを要因として異なっている。

6.1.3　感情主の人称

同じ感情を表すのに形容詞と動詞があることは、現代語においても同様である。

(108)　私は友の死が悲しい。

(109)　私は友の死を悲しむ。

この 2 つの文では、形容詞と動詞とが、同じ感情を表現している。このような感情形容詞と感情動詞の対はたくさんあり、その一部をあげれば、次の通りである。

危うい／危ぶむ	苦しい／苦しむ	妬ましい／妬む
惜しい／惜しむ	疑わしい／疑う	悲しい／悲しむ
悔しい／悔いる	憎い／憎む	恨めしい／恨む

現代語の感情形容詞と感情動詞が述語となる文に関しては、Kuroda (1973), 寺村 (1982) などが、どのような場合に形容詞が選択され、どのような場合に動詞が選択されるかについて研究している。特に、寺村の次の説明は包括的なものである。

> 誰かがある対象に対してある感情を抱く表現としては、（1）前小節の感情の動詞を述語とする文と、（2）本小節の感情の形容詞を述語とする文とがある。話し手が、そのときの自分の感情をそのまま相手に表明したいとき、またそのときの相手の感情を訊きたいときには、（1）よりも（2）のほうが適しており、第三者の気持を客観的に描くときには（1）のほうが適している。(寺村 1982: 150)

[3] ここでも「好まし」が例外となる。

この問題について平安時代語を調査した研究に、安本 (2009) があり、『竹取物語』『宇津保物語』『落窪物語』『源氏物語』の 4 つの作り物語を資料として分析し、次のように結論づけている。

> 中古は、現代語と異なり、形容詞が表現主体の側に属す人物の自己の感情のみを表すのに対し、動詞はその他の人物の感情を表すことが基本であり、感情主が表現主体の側に属すか否かという点で感情形容詞と感情動詞の役割が相違していたと結論づけたい。(安本 2009: 60)

これによれば、感情形容詞は自らの感情を述べるときに、感情動詞は第 3 者の感情を述べるときに用いられるというところは、寺村による現代語の説明と共通している[4]。しかし、2 人称については、現代語では形容詞を用いることができるのに対して、平安時代では動詞を用いるという違いがあり、平安時代語には現代語とは異なるところもある。

また、上述した文体と意味によって、形容詞と動詞のどちらが選ばれやすいかが変わることについては、安本 (2009) には言及がない。本節では、この観点を加えて、平安時代語の感情形容詞と感情動詞について、主に感情主が誰であるかについて研究していく。

6.1.4 『源氏』における感情主の人称

用例の分析

A類に属する語の一つである「惜し」と「惜しむ」の対を例に、『源氏』の具体的な使用例を見てみよう。まず、会話文、心内語、和歌においては、形容詞は、（110）のように、感情主は必ず 1 人称になっているのに対して、動詞は、（111）（112）（113）のように、1 人称・2 人称・3 人称のいずれの場合もある。

(110) 女楽にえ言(こと)まぜでなむ逃げにけると伝はらむ名こそ惜しけれ。（若菜下、光源氏の発話、1 人称）

(111) かくはかなかりける身を惜しむ心のまじりけるにや。（御法、紫の上の発話、1 人称）

(112) うちつけの別れを惜しむかごとにて思はむ方に慕ひやはせぬ　（澪標、宣旨の娘の和歌、2 人称）

[4] 現代語の感情形容詞が自らの感情を述べる場合に限って用いられることは、西尾 (1972) など早くから指摘があり、推量の助動詞とともに用いられる場合など、その人称制限が解かれる場合があることなども、詳細に研究されている。また、感情動詞にも人称上の特徴があることの研究も行われている (山岡 2000)。これに対して、古典語についての感情形容詞、感情動詞の研究は安本による一連の研究があるのみである。なお、安本は、感情形容詞、感情動詞の感情主の制限は、現代語よりも平安時代語の方が強いことも指摘している。

表 6.3: A類における感情主の人称：『源氏』の会話文・心内語・和歌

語	1人称 形容詞	1人称 動詞	2人称 形容詞	2人称 動詞	3人称 形容詞	3人称 動詞
惜し／惜しむ	9(8)	8		4		7
厭わし／厭う	4(1)	4		8	(2)1	5
好まし／好む	1(1)	1			(1)1	12
煩わし／煩う	25(7)15	14	(1)	2		15

(113) そのをりかの御身を惜しみきこえたまひし人の多くも亡せたまひにけるかな　（御法、致仕の大臣の発話、3人称）

次に地の文では、形容詞と動詞がともに、物語の登場人物が感情主になる例に用いられている。登場人物は語り手にとって3人称の位置にあると考えることができる。

(114) 他人に見たてまつりなさむが惜しきなるべし。（葵、地の文、3人称）

(115) 殿上人どもも、私の別れ惜しむ多かり。（賢木、地の文、3人称）

「惜し」「惜しむ」については、語り手自身である1人称や、聞き手（読み手）である2人称には全く用いられていない。

それでは、「惜し」「惜しむ」以外の対についてはどうだろうか。以下、事例として取り上げる形容詞と動詞8対について、『源氏』における全用例について感情主の人称が何であるかを調査した結果を述べていこう。なお、C類については、『源氏』で形容詞の例が非常に少なく、『今昔』ではそれが皆無であるため、形容詞と動詞の用法比較がしにくいため、その分析は省略する。

『源氏』におけるA類

はじめに、A類の4対の事例について、『源氏』における感情主を見ていこう。

表6.3は、会話文・心内語・和歌における、各例の感情主の人称を調べて集計した結果を示している。集計にあたって、動詞の後に形容詞が下接する「惜しみ難し」のようなものや、形容詞や動詞の後に名詞が下接する「惜しみ顔」のような複合名詞は、特殊な述語形式だと判断して、除外した。

表の括弧内に示した数字は、「惜しかり」のようなカリ活用、「惜しく思う」「惜しく思ゆ」のような形容詞の後に動詞が下接するものを合わせた件数である。また、下線を付した数字は、「惜しき人」のような連体形の後に名詞が下接するものの件数である。

表6.3に明らかなように、1人称には形容詞も動詞もともに使われるが、2人称と3人称には形容詞はあまり使われず動詞が多く使われる。形容詞「厭わし」「好まし」「煩わ

表 6.4: A類における感情主の人称：『源氏』の地の文

語	1 人称 形容詞	1 人称 動詞	2 人称 形容詞	2 人称 動詞	3 人称 形容詞	3 人称 動詞
惜し／惜しむ					9(8)	33
厭わし／厭う					4(6)	3
好まし／好む	15(1)				3(5)	14
煩わし／煩う	1 1				42(23)10	63

表 6.5: B類における感情主の人称：『源氏』の会話文・心内語・和歌

語	1 人称 形容詞	1 人称 動詞	2 人称 形容詞	2 人称 動詞	3 人称 形容詞	3 人称 動詞
憎し／憎む	14(8)6		(3)	5	1	7
悔し／悔ゆ	20(6)	1		1	2	2
悲し／悲しむ	73(32)	3	1		(8)4	4
怪し／怪しむ	157(22) 71				(14)	1

し」に、2 人称・3 人称に使われた例が少しあるが、それらの例外的な用例は、括弧付きか下線付きかになっている。すなわち、次の例のように、動詞が下接しているか、連体形の後に名詞が下接しているかの、いずれかの場合に限られる。

(116) などて身を いとはしく 思ひはじめたまひけん　（手習、僧侶の発話、2 人称）

(117) さして 厭はしき ことなき人の、さはやかに背き離るるもありがたう、（鈴虫、光源氏の発話、3 人称）

今度は、地の文についてまとめた、表 6.4 を見よう。表 6.4 から分かるように、2 人称は地の文には皆無である。語り手が自らの感情を表す 1 人称は、「好まし」と「煩わし」という特定の感情の場合だけに限られる。その場合は、次の（118）のように、形容詞が使われる。また、3 人称には、（119）（120）のように、形容詞も動詞も使われる。

(118) 御遊びなどを 好ましう 世の響くばかりせさせたまひつつ、（葵、地の文、1 人称）

(119) をかしげなる侍童の姿 好ましう、（夕顔、地の文、3 人称）

(120) いといたう色 好め る若人にてありけるを、（末摘花、地の文、3 人称）

『源氏』におけるB類

動詞よりも形容詞の方がよく使われる、B類に属する 4 対の用例を見ていこう。表 6.5 は、会話文・心内語・和歌の例を集計したものであるが、1 人称では、形容詞の方が動詞よりも圧倒的に多く使われている。A 類では 1 人称に動詞が用いられることも多かったが、B 類ではこれが非常に少なくなっている。また、2 人称、3 人称では、形容詞と動詞

表 6.6: B類における感情主の人称：『源氏』の地の文

	1 人称		2 人称		3 人称	
語	形容詞	動詞	形容詞	動詞	形容詞	動詞
憎し／憎む	4(10)7				11(33)3	14
悔し／悔ゆ					16(12)	3
悲し／悲しむ					86(86)	2
怪し／怪しむ	32(2)28				78(67) 21	

とがどちらも同じ程度使われている。しかし、表の数字のすべてに括弧や下線が付いているように、形容詞は、動詞を下接する用法か、連体形の後に名詞に続く用法かのいずれかに限られる。この特定の用法の場合を除けば、2 人称と 3 人称では、通常は動詞が用いられるということになる。以上のことをまとめれば、B 類では形容詞は 1 人称に、動詞は 2 人称・3 人称にと使い分けられている。

(121) 心をあまりをさめたまへるぞ 憎き。（宿木、女房の発話、1 人称）

(122) 心地なく 憎し と思さるとも、（夕霧、夕霧の発話、2 人称）

(123) 今は、誰も誰もえ 憎み たまはじ。（桐壷、帝の発話、3 人称）

表 6.6 は、B類の地の文における例をまとめたものである。語り手自身の感情を表す 1 人称は、「憎し」と「怪し」という特定の感情の場合だけに限られる。その場合は、下の（124）の例のように形容詞が使われる。また、3 人称には、（125）（126）のように、形容詞・動詞の両方が使われるが、形容詞の方がよく使われる。

(124) めづらしからぬこと書き置くこそ 憎けれ。（宿木、地の文、1 人称）

(125) 面なのさまやと、見たまふも 憎けれ ど、わりなしと思へりしもさすがにて、（紅葉賀、地の文、3 人称）

(126) 「別人の言はむやうに心得ず仰せらる」と中将 憎む。（帚木、地の文、3 人称）

ところで、B類では動詞の使用例が少ないが、その使用箇所にはある特徴がある。表 6.7 は、表 6.5 に取り上げた 4 対における動詞について、その使用箇所を、会話・心内語・和歌と地の文とに分け、会話・心内語・和歌の例については、その語の使用者を示したものである。

僧侶と、帝・光源氏など高貴な男性が大部分を占め、使用者に偏りがあることが分かる。表 6.7 の上側の語、すなわち、動詞比率が相対的に高い語では、大君や乳母など普通の女性が使うこともあり、地の文での使用例も比較的多いが、表 6.7 の下側の語、すなわち、動詞比率が極めて低い語ほど、使用者の偏りは顕著になる。B類の動詞は、和文に使われる語彙としては、かなり異質な層に属していて、特別な人物の用語として稀に和文に顔を出したのだと言えよう。

表 6.7: B類における動詞の使用者：『源氏』の会話文・心内語・和歌

語	会話・心内語・和歌	地の文
憎む	帝 1、光源氏 6、柏木 2、夕霧 1、大君 1、乳母 1	14
悔ゆ	僧都 1、光源氏 1、柏木 1、女五宮 1	3
悲しむ	阿闍梨 1、僧都 2、薫 1、左大臣 1、紀伊守 1、妹尼 1	2
怪しむ	僧都 1	0

表 6.8: A類における感情主の人称：『今昔』の会話文・心内語・和歌

	1 人称		2 人称		3 人称	
語	形容詞	動詞	形容詞	動詞	形容詞	動詞
惜し／惜しむ	4(5)	4	1(4)	2		5
厭わしい／厭う		5		1		2
好ましい／好む	(1)	6		2		5
煩わしい／煩う	1	1				8

表 6.9: A類における感情主の人称：『今昔』の地の文

	1 人称		2 人称		3 人称	
語	形容詞	動詞	形容詞	動詞	形容詞	動詞
惜し／惜しむ					3(1)	19
厭わしい／厭う					(1)	20
好ましい／好む					(1)	45
煩わしい／煩う					4(2)	82

6.1.5 『今昔』における感情主の人称

『今昔』におけるA類

次に『今昔』での感情形容詞・感情動詞の対を考察し、『源氏』の場合と比較しよう。まず、A類の 4 対の会話文・心内語・和歌での状況は、表 6.8 に示す通りである。

表 6.8 から、『今昔』における形容詞と動詞の人称による使い分けは、表 6.3 で見た『源氏』におけるそれとおおむね同様の傾向を見せていると言うことができる。ただし、一つだけ例外がある。その例外とは、形容詞「惜し」が、動詞が下接したり連体形の後に名詞が下接したりしなくても、2 人称に使われている点である。次がその例で、「和御房」は 2 人称代名詞である [5]。

(127) 和御房ハ命惜クハ無キカ。（巻 23-19、男の発話、2 人称）

表 6.8 はまた、各対において形容詞が使われることが『源氏』の場合に比べて少ないことも示している。

表 6.9 は、A類の語の『今昔』での地の文での状況をまとめたものである。これによれば、地の文では 1 人称、2 人称は全く使われていない。3 人称においては、形容詞も動詞

[5] 感情形容詞が単独の形で 2 人称に使われる例は、『源氏』にはない。これが『今昔』に見られるということは、現代語に近づいたということかもしれない。

表 6.10: B類における感情主の人称：『今昔』の会話文・心内語・和歌

語	1 人称 形容詞	1 人称 動詞	2 人称 形容詞	2 人称 動詞	3 人称 形容詞	3 人称 動詞
憎し／憎む	5(2)	2		1	(4)	8
悔し／悔ゆ	4(1)	1				
悲し／悲しむ	35	5				15
怪し／怪しむ	31(11)27	2	2(2)	1	(24)	2

表 6.11: B類における感情主の人称：『今昔』の地の文

語	1 人称 形容詞	1 人称 動詞	2 人称 形容詞	2 人称 動詞	3 人称 形容詞	3 人称 動詞
憎し／憎む	2(1)				5(10)	40
悔し／悔ゆ					2(5)4	34
悲し／悲しむ	12(1)				55(29)	325
怪し／怪しむ	46				25(44)3	163

も使われている。これらの実態は、『源氏』の場合とほぼ同じである。ただし、全般に形容詞の頻度が低くなり、動詞の頻度が高くなっているという違いがある。

『今昔』におけるB類

次にB類の 4 対の『今昔』での状況を見よう。表 6.10 は、『今昔』の会話文・心内語・和歌における状況をまとめたものである。『源氏』のそれをまとめた表 6.5 と比較してみると、1 人称で動詞よりも形容詞が多いこと、3 人称では動詞が多く、形容詞は特別な用法に限られることが、共通している。そして、全般に、『源氏』の場合に比べて動詞の頻度が高くなっている。

表 6.1.5 は、『今昔』の地の文の状況をまとめたものである。『源氏』のそれを示した表 6.6 と比較すると、1 人称には形容詞だけが用いられ、3 人称には形容詞・動詞がともに用いられながら、形容詞に用法上の制限があることが共通している。一方、3 人称に動詞が使われることが非常に多くなっており、形容詞は動詞が下接する用法だけに限定されている点が、『源氏』の場合と異なっている。つまり、『今昔』のB類では、『源氏』のそれ以上に、形容詞は 1 人称、動詞は 2 人称・3 人称という使い分けが、はっきりしていることが分かる。

6.1.6　『源氏』と『今昔』の比較

6.1.4 と 6.1.5 の考察から、『源氏』『今昔』いずれにおいても、会話文・心内語・和歌では、感情形容詞は、動詞を下接したり連体形になったりする用法以外では、1 人称に限定され、感情動詞はどの人称にも用いられることが分かった。そして、2 人称、3 人称に

表 6.12: 『源氏』と『今昔』の主な感情表現

作品	A類	B類	C類
源氏	形容詞・動詞両用	形容詞主用	動詞主用
今昔	動詞主用	形容詞・動詞両用	動詞専用

は、形容詞よりも動詞の方がよく用いられる傾向があることも分かった。また、地の文では、感情形容詞は、語り手である 1 人称にも、登場人物である 3 人称にも用いられるが、感情動詞は、登場人物である 3 人称に限って用いられることも分かった。

以上の特徴は、『源氏』にも『今昔』にも共通していたが、2 つの作品で異なるところも見えた。それは、形容詞と動詞のどちらをより多く用いるかの違いである。

『源氏』では、形容詞がよく用いられ、特にB類では動詞はあまり用いられない。一方、『今昔』では、動詞がよく用いられ、特にA類では形容詞はあまり用いられない。また、C類では、『源氏』は形容詞を用いることもあるが、『今昔』では動詞しか用いられない。その状況を整理したのが、表 6.12 である。

6.1.7　本節のまとめ

『源氏』や『今昔』の書かれた平安時代の日本語においては、感情形容詞と感情動詞とは、全体として、感情主の人称の現れ方に違いが見られた。すなわち、形容詞は 1 人称に限られ、動詞は人称による制限がない。このことは、A 類・B 類の別に関わらず、感情形容詞と感情動詞の全体に共通している。

A 類と B 類を比較すると、B 類の方が、形容詞と動詞の差が大きく、そこには単なる差にとどまらず、使い分けや対立が見出された。すなわち、B 類においては、動詞は 1 人称に用いられることが非常に少なくなり、2 人称と 3 人称に偏るようになっている。つまり、B 類では、形容詞が 1 人称、動詞が 2・3 人称という対立が見られるのである。

一方、感情形容詞と感情動詞の比率は、『源氏』と『今昔』とで異なっており、前者は形容詞の方をよく用いる傾向が強く、後者は動詞の方をよく用いる傾向が強い。これは、感情形容詞と感情動詞とで、使われる文体が異なる対になる傾向があるということだが、その傾向は、B 類に明確にとらえられた。意味の対立が明確な B 類の方に、文体の差も明確に現れている。

なお、その人称による使い分けは、感情形容詞の場合、その用法によって変わる面もあった。形容詞の連用形の後に動詞が続く用法や、連体形の後に名詞が続く用法では、形容詞にある人称制限が解除されるのである。このことは、感情形容詞と感情動詞の対立は、人称だけを見るのでは不十分であることを示唆していよう。次節では、人称以外の分析も行って、感情形容詞と感情動詞の対立について、引き続き検討する。

表 6.13: 『今昔』における「悲し」「悲しむ」の頻度

語	天竺震旦部 巻 1〜10	本朝仏法部 巻 11〜15	本朝仏法部 巻 16〜20	本朝世俗部 巻 22〜31	計
悲し	23	27	72	45	167
悲しむ	202	161	133	49	547

表 6.14: 『慈恩伝』『源氏』における「悲し」「悲しむ」の頻度

語	慈恩伝	源氏
悲し	4	295
悲しむ	18	9

6.2 「悲し」「悲しむ」の対立

6.2.1 「悲し」「悲しむ」が使われる文体

本節では、感情形容詞と感情動詞の関係について、『今昔』で使われる文体の差が大きいＢ類の対のうち、「悲し」と「悲しむ」例に取り上げて、感情主の人称以外にも視野を広げて、詳細に見ていくことにする。資料は、『今昔』を中心とし、『源氏』や『慈恩伝』など、他の文体の資料とも比較する。

はじめに、「悲し」「悲しむ」の頻度を見ることで、それぞれが属する層を確認しよう。これについては、前節でも、『源氏』と『今昔』本朝部を資料として考察したが、本節では、『今昔』については天竺震旦部を加えた全巻を対象にし、訓点資料の『慈恩伝』を加えて、より詳しく見ていこう[6]。

まず、『今昔』について、5.2〜5.4 節で用いた巻の分類枠を用いて頻度を集計すると、表 6.13 のようになる。

表 6.13 によると、全体的に「悲しむ」が優勢だが、前半ほどその傾向が強く、天竺震旦部では「悲しむ」は「悲し」の 9 倍以上使われている。ところが、後半にいくほどその傾向は弱くなって、本朝世俗部では、「悲し」「悲しむ」がほぼ同程度になる。この頻度の状況から、「悲し」と「悲しむ」に使われる文体の差を認めることができるが、5.4 節で取り上げた、〈奇異〉〈微妙〉の事例に比べると、「あさまし」「きい」ほどには対立が鮮明ではなく、「めでたし」「みめう」と大体同じ程度の鮮明度である。ただし、「めでたし」「みめう」が、天竺震旦部で対立が不鮮明であったのと反対に、「悲し」「悲しむ」は、本朝世俗部で対立が不鮮明になるという違いがある。

次に、『慈恩伝』の頻度を調査し、6.1 節で調査した『源氏』と比較すると、表 6.14 の通りである。

[6] 本節の調査には、『今昔』は日本古典文学大系（岩波書店）を用い、『源氏』は日本古典文学全集（小学館）を用いた。また、『慈恩伝』は、築島裕『興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝古点の国語学的研究 訳文篇』（東京大学出版会）を用いた。

表 6.15: 『今昔』の「悲し」「悲しむ」の人称

	悲し			悲しむ		
	1 人称	2・3 人称	計	1 人称	2・3 人称	計
会話文	話し手	話し手以外		話し手	話し手以外	
	62	1	63	13	41	54
地の文	語り手	登場人物		語り手	登場人物	
	13	91	104	0	493	493

『慈恩伝』では「悲しむ」の方が多く、『源氏』では「悲し」の方が圧倒的に多い。「悲し」「悲しむ」が使われる文体の違いは、和文資料と訓点資料においてもとらえられる。そして、「悲しむ」が『源氏』に少ないということにおいて、その文体的な特徴が顕著に現れている。

6.2.2　『今昔』の「悲し」「悲しむ」の人称

ここからは、「悲し」「悲しむ」の使われ方を、まず『今昔』で、その後、『源氏』で、さらに『慈恩伝』等の漢文の順で考察していく。

まず、『今昔』における感情主の人称について見ていこう。表 6.15 は、会話文（心内語・和歌を含む）と地の文とに分けて、「悲し」と「悲しむ」の感情主の人称をまとめたものである。この後「会話文」と記すものには、心内語と和歌を含むものとする。

会話文

まず、会話文の状況を見よう。「悲し」の例のほとんどは、（128）のように感情主は話し手自身（1 人称）である。以下の挙例では、感情主が文中に示されている場合、その語句に点線を付す。

(128) 我レ、年来観音ヲ憑ミ奉テ、仏前ニシテ餓死ナム事コソ悲シケレ。（巻 16-4）

話し手以外が感情主となっていると解されるものが 1 件あるが、それは次である。

(129) 年来多ノ雉共ヲ殺ツルハ、我今夜思エツル様ニコソ悲シク思エツラメ。(巻 19-8)

この例では、「思エツラメ」という感情主の認識行為を表す動詞が下接している。

会話文の「悲しむ」を見ると、話し手も話し手以外も感情主になっており、動詞には人称制限が働かないことが確かめられる。そして、多くは（130）の「弟子共」のように話し手以外が感情主となっており、「悲しむ」の感情主は話し手以外に偏る傾向がある。

(130) 房ニ弟子共泣キ悲ムデナム有ツル。(巻 12-39)

「悲しむ」が話し手を感情主とする例は、（131）のようなものである。

(131) 我レ、女人ナルガ故ニ出家ヲ不得ズシテ歎キ悲ムも。(巻 1-19)

傍点部のように断定の助動詞「なり」で終止したり (5 件)、点線部のように話し手である自己を示す人称詞が文中に表示されたり (5 件) する場合が多い。

地の文

次に地の文の「悲し」を見ると、登場人物（3 人称）が感情主となることが普通である。

(132) 郎等、此レヲ見ルニ、目暗レ心迷テ悲キ事無限シ。（巻 27-14)

語り手が感情主であると見られる場合（1 人称）は、次のような例である。

(133) 此ヲ思フニ、観音ノ御誓不可思議也。現ニ人ト成テ衣ヲ被ギ給ヒケム事ノ哀レニ悲キも。（巻 16-8)

(134) 大衆亦一時ニ音ヲ放テ泣ク音、昔ノ沙羅林ノ人ノ泣キケムモ此コソハ有ケメト、貴ク悲ク押シ量ラル。（巻 24-39)

傍点を付したように、断定の助動詞「なり」で終止する場合か (11 件)、語り手の認識行為を示す動詞が下接する場合か (2 件) のいずれかである。

次に、地の文の「悲しむ」の例を調べると、すべて登場人物を感情主としている。

(135) 金剛力士ハ、五体ヲ地ニ投テ悲ム。(巻 3-31)

『今昔』の人称のまとめ

『今昔』の「悲し」「悲しむ」の人称についてここで確認できたことは、次の 3 点である。

1. 会話文では、「悲し」は話し手自身を感情主とする場合に、「悲しむ」は話し手以外を感情主とする場合に、制限される。
2. 地の文では、「悲し」も「悲しむ」も登場人物を感情主とする場合に制限される。
3. 前 2 項の人称制限が解消される場合には、断定の助動詞「なり」で終止する[7]、認識行為を表す動詞に続く、感情主の人称詞が示される、などの特別な形式をとる。

[7] 現代語の感情形容詞の人称制限が「のだ」が付くと解除されることは、Kuroda (1973), 寺村 (1982), 渡辺 (1991) などで論じられているが、平安時代語では、断定の助動詞「なり」がその役割を果たしている。

表 6.16: 『今昔』の「悲し」「悲しむ」の述部の用法

語	形式	終止法	接続法	連体法	連用法
悲し	a 単独形式	38	26	5	1
	b 熟合形式	53	36	8	0
	計	91	62	13	1
悲しむ	a 単独形式	55	265	23	0
	b 熟合形式	142	57	5	0
	計	197	322	28	0

6.2.3　『今昔』の「悲し」「悲しむ」の述部の形式

単独形式と熟合形式

次に、『今昔』の「悲し」「悲しむ」が述語となる部分について、その述部の形式を考察しよう。「悲し」も「悲しむ」も多様な形式に展開しているが、大きく見ると、(a) 単独形式と、(b) 熟合形式の 2 つに分けることができる。ここでいう、単独形式とは、形容詞・動詞が単独で述語になるか、それに助詞・助動詞が付属する形式のことである。また、熟合形式とは、形容詞・動詞に、並列用言・補助用言・形式体言等が下接する形式[8]のことである。

(a) 単独形式　「悲し」70 件・「悲しむ」343 件

(136) 但シ亦見奉ラム事ノ不有マジキコソ悲ケレ。(巻 29-28)

(137) 此ヲ見聞ク人、皆、涙流シテ貴ビ悲ケリ。(巻 17-23)

(b) 熟合形式　「悲し」97 件・「悲しむ」204 件

(138) 住持、此ノ御音ヲ聞テ、悲シク貴クテ、臥シ丸ビ泣ク事無限シ。(巻 19-4)

(139) 実ニ何許カハ侘シク悲シク思エケム。(巻 19-9)

(140) 男此レヲ聞テ、悲キ事無限クシテ、返ヌ。(巻 19-5)

(b) 熟合形式にはやや雑多なものが含まれてしまうことになるが、(a) 単独形式の例は、「悲し」「悲しむ」が述部の中核となっているものに限ることができる。以下の考察では、(a) 単独形式を中心的なデータとして重く扱い、(b) 熟合形式は参考データとして必要に応じて参照することとする。

表 6.16 は、述部を用法別に整理したものであるが、「悲し」は終止法と接続法に多く、「悲しむ」は接続法に多い。その終止法と接続法の場合について、述部の形式を分析する。

[8] 本節では、「形容詞」「動詞」を包括する概念として「用言」という用語を用い、これと対比させる概念として「名詞」「代名詞」を包括する「体言」という用語を用いる。

終止法

「悲し」「悲しむ」の終止法は、その形式からつぎの 6 つに分けられる。以下の挙例で、冒頭に＊が付けられているのは、漢文依拠資料の対応表現に基づくものと、その依拠資料の当該部分である。依拠資料の表現をそのまま用いたものでなくても、そこに依拠資料の漢文の表現の影響が認められるものである。

（1）単独、または終助詞 (「かな（や)」以外) が付属するもの

(141) 我レニ代ラムト有ルハ世ニ難有キ事ナレドモ、其ヲ見棄テヽ独リ逃ムコソ悲ケレ。(巻 29-28)

(142) *願主、此レヲ見テ、恐ヂ怖レテ、「此レ、前々ノ如ク塔ヲ可壊キ前相也」ト思テ、歎キ悲ム。(巻 12-1)

(143) *願主而作是念、雷破塔相也、悲歎憂愁。(法華験記・下 81)

（2）終助詞「かな（や)」が付属するもの

(144) *毎日ニ九百段ノ鉄ノ杖ヲ負テ破打迫ル。痛哉。悲哉。(巻 10-16)

(145) *毎日九百段、鉄鞭打迫之、痛哉 苦哉。(日本霊異記・上 30)

（3）断定の助動詞「なり」が付属するもの

(146) 此ノ日ハ、正シク御願ニ依テ雨降リ御マスト思フガ哀レニ悲キ也。(巻 12-10)

(147) *娼、年老テ年来ノ夫ニ今別レテ、泣キ悲ム也。(巻 25-26)

(148) *今嬉老後相別、是以哭也。(日本往生極楽記 22)

（4）時制の助動詞が付属するもの

(149) 我レ偏ニ、観音ノ助ケニ依テ、命ヲ生ヌル事ヲ泣々ク喜テ、五体ヲ地ニ投テ、涙ヲ流シテ悲ビケリ。(巻 26-24)

（5）推量の助動詞が付属するもの

(150) 而ルニ、彼ノ鮒、定メテ狭キ所ニ久ク有テ、広キ所ニ有ラムト悲ラム。(巻 15-48)

（6）複合辞が下接するもの

(151) 山内ノ人、亦、此レヲ聞テ、皆、貴ビ不悲ズト云事無カリケリ。(巻 15-8)

表 6.17: 『今昔』の「悲し」「悲しむ」の終止法の形式

形式	悲し a 単独	悲し b 熟合	悲しむ a 単独	悲しむ b 熟合
(1) 単独（+終助詞）	**10**	3	*21	*5
(2)　+かな（や）	*13	6	0	0
(3)　+断定辞「なり」	**15**	9	*2	*3
(4)　+時制辞	0	1	**21**	28
(5)　+推量辞	0	4	**4**	1
(6)　+複合辞	0	30	**7**	105
計	38	53	55	142

この 6 種の用例の件数を整理したものが、表 6.17 である。

表の (4) 時制辞の内訳は、「けり」48 件と「り」2 件である。(5) 推量辞の内訳は、「む」「らむ」「けむ」「むとす」「べし」がそれぞれ 1〜3 件ずつである。(6) 複合辞には、「ことかぎりなし」122 件、「ずといふことなし」8 件のほか、「ことたとひなし」「ことなかれ」「ことたとひなし」ほかの多様なものがある。

表の中の数値に*を付したところは、漢文訓読文の部分に用例が集中するもので、上の挙例の中で*を付けて引用したもののように、漢文依拠資料が判明している説話では依拠資料に対応表現をもつことが多い。表の「a 単独」の列から、*が付された部分を除けば、数字をゴチックにした部分だけが残り、「悲し」と「悲しむ」との間に相補分布が浮かび上がる。つまり、「悲し」は、(1) 単独または終助詞を付属させるか、(3) 断定辞「なり」を付属させるかして終止するのに対して、「悲しむ」は (4) 時制辞、(5) 推量辞、(6) 複合辞をともなって終止する、という対立が見られる。

おそらく、日本語本来としては「悲し」と「悲しむ」との間に終止法の述部形式の対立が存していたものが、漢文の影響によって漢文訓読文の部分では述部の形式に拡張が起こっている。

接続法

次に、「悲し」「悲しむ」の接続法は、以下の 3 種に分けられる。

（1）連体形に形式体言、補助用言、助詞等が下接するもの

(152) 僧、此レヲ聞クニ貴ク悲ニ、「無始ノ罪障皆亡ビヌラム」ト思フ。（巻 13-2）

(153) 家ノ従女等此レヲ見テ泣キ悲ム程ニ、五尋許ノ毒蛇忽ニ寝屋ヨリ出ヌ。（巻 14-3）

（2）仮定・確定などの条件法

(154) 然レバ、此レヨリ末世ノ衆生何ヲ以テ食セムト思フガ悲シケレバ、哭ク也。(巻 4-2)

(155) 只此児ヲノミ翫ビ悲ビケレバ、介怪トハ思ケレドモ、(巻 26-5)

表 6.18: 『今昔』の「悲し」「悲しむ」の接続法の形式

形式	悲し		悲しむ	
	a 単独	b 熟合	a 単独	b 熟合
(1) 連体形（+形式名詞等）	2	10	8	20
(2) 条件法	7	10	34	3
(3) 連用形（+助詞）	17	16	223	34
計	26	36	265	57

（3）連用形単独、もしくは連用形に助詞が付属するもの

(156) 此レヲ見ルニ、「何ゾ此シモ落チ給ヘルラム」ト思フニ、悲クテ、頭ノ毛太リテ、怖ロシクテ無端ク思ユ。(巻 12-34)

(157) 家主ニ此ク機縁深クシテ行キ合ヘル事ヲ悲ムデ、惜ム事無クシテ許シテケリ。(巻 26-1)

表 6.18 が、これらの 3 種の用法の件数を整理したものである。

（3）の連用形の後に付属する助詞の内訳は「て」286 件、「ながら」2 件である。接続法の形式は、終止法の場合のようには「悲し」と「悲しむ」との間に相補性は認められず、対立は認められない。その中で、「悲しむ」が（3）連用形 (+助詞) の形式に集中していることが目立っている。

6.2.4 『今昔』の「悲し」「悲しむ」の誘因を示す語句の形式

感情形容詞や感情動詞を述語とする文の主部では、感情を引き起こす誘因となる事態や事物を示す語句が特に重要な要素となるが、この誘因を示す語句の形式に着目する。述部が終止法・接続法の例について、感情の誘因を示す語句の形式を観察すると次ぎの 8 種にまとめられる。用例に点線を付した部分が感情の誘因に該当する表現である。

（1）体言 (+助詞)

(158) 我ガ宿世糸悲ク恥カシ。(巻 30-5)

(159) 然レバ、人ヲ哀ビ生類ヲ悲ブ事無限シ。(巻 15-36)

（2）形式体言 (+助詞)

(160) 現ニ人ト成テ、衣ヲ被ギ給ヒケル事ノ、哀レニ悲キ也。(巻 16-8)

(161) 穴ヲ出ム事思ヒ絶タルニ依テ、忽ニ死ナム事ヲ悲ム。(巻 17-13)

（3）準体法 (+助詞)

(162) 死ハ然ル事ニテ、別レ申シナムズルガ悲キ也。(巻 26-7)

(163) 我ガ年老テ力ノ弱レルヲ悲ムデ泣ク也ケリ。(巻 9-11)

（4）条件法

(164) 経ノ文ニ違フ事無ケレバ、貴ク悲キ也。(巻 17-33)

(165) 遂ニ聖人失ヌレバ、此ノ童部泣キ悲テ聖人ヲ葬シツ。(巻 13-23)

（5）連用形 (+助詞)

(166) 然レバ、姫君モ、可有クモ無クテ、心細ク悲シク思ユル事無限シ。(巻 19-5)

(167) 尼、此ヲ聞テ悲ムデ問テ云ク、「此レ、祥蓮カ否ヤ」ト。(巻 17-31)

（6）引用法

(168) 「多ノ年ヲ経テコソバ有ルラメ」ト見ルニ、心疎ク怖シク成テ思フニ、「何ナル苦ヲ受ラム」ト悲ケレバ、彼ノ蛇ノ為ニ多ノ経ヲ読誦シ、千手陀羅尼ヲ誦シテ、其ノ所ヲ去ニケリ。(巻 14-43)

(169) 其ノ後、兵平介、弥ヨ恐ヂ怖レテ、「我レ、無実ノ事ニ依テ、法花ノ持経者ヲ殺サムト為ルニ依テ、普賢菩薩ノ示シ給フ事也」、ト悲ムデ、持経者ニ向テ涙ヲ流シテ懺悔シテ、此ノ夢ノ事ヲ語リ令聞ム。(巻 17-40)

（7）指示詞・接続詞 (+助詞)

(170) 父、此レヲ悲ムデ外ニ捨ツル事無シ。(巻 4-41)

(171) 其ノ時ニ、国挙、弥ヨ悔ヒ悲テ、重ネテ小僧ニ申テ云ク、(巻 27-21)

（8）誘因の表示なし

(172) 穴悲シ。(巻 5-1)

(173) 郎等共、涙ヲ流シテ悲ム事無限シ。(巻 19-14)

感情表現の文法や意味についてのこれまでの研究では、感情表現が述語となる文で感情の誘因を表す語句が、主語の位置に立つ（1）（2）（3）の場合について、時枝 (1941) が「対象語」「対象語格」と呼んで以来、主要な研究対象とされてきた。この対象語（格）の位置に表現されているものと同じ内容や性質のものが、（4）（5）（6）や（7）の一部では、従属節に表現されている。本節では、感情を引き起こす誘因となるものごとを広くとらえるために、（4）以下の形式も、考察対象に含めることにした[9]。

表 6.19 と表 6.20 は、この 8 種の用法の出現件数をまとめたものである[10]。

表 6.19: 『今昔』の「悲し」「悲しむ」の感情の誘因の形式（述部が終止法の場合）

形式	悲し a 単独	悲し b 熟合	悲しむ a 単独	悲しむ b 熟合
(1) 体言 (+助詞)	1	1	5	5
(2) 形式体言 (+助詞)	6	0	6	6
(3) 準体法 (+助詞)	14	26	2	6
(4) 条件法	1	6	4	8
(5) 連用形 (+助詞)	0	8	26	71
(6) 引用法	0	1	3	4
(7) 指示詞・接続詞	0	1	3	15
(8) 誘因の表示なし	16	10	6	27
計	38	53	55	142

表 6.20: 『今昔』の「悲し」「悲しむ」の感情の誘因の形式（述部が接続法の場合）

形式	悲し a 単独	悲し b 熟合	悲しむ a 単独	悲しむ b 熟合
(1) 体言 (+助詞)	2	5	24	4
(2) 形式体言 (+助詞)	0	1	20	4
(3) 準体法 (+助詞)	20	7	6	2
(4) 条件法	2	4	12	2
(5) 連用形 (+助詞)	0	6	100	29
(6) 引用法	1	7	13	2
(7) 指示詞・接続詞	0	0	50	9
(8) 誘因の表示なし	1	6	40	5
計	26	36	265	57

この 2 つの表から、「悲し」の特徴として明らかなことは、述部が終止法の場合も接続法の場合も、（３）準体法 (+助詞) に集中し、他の形式は多くないことである [11]。「悲し」は誘因の形式に準体法を要求する傾向があると言えよう。一方、「悲しむ」は、（５）連用形 (+助詞) への集中がやや目立つものの、（１）から（８）のすべての形式にわたっており、誘因の形式に特定のものを要求する傾向はないと見てよいであろう。

6.2.5　『今昔』の「悲し」「悲しむ」のまとめ

ここまでに見てきた、『今昔』の「悲し」「悲しむ」を述語とする文の構造の特徴をまとめると、表 6.21 のようになる。人称、述部の形式、感情の誘因の形式いずれにおいて

[9] 「誘因」という用語は、寺村 (1982: 139-145) による。対象語や対象語格にとどまらない、感情の誘因の語句については、寺村のほか西尾 (1972), Kuroda (1973) などの研究でも言及しているが、その表現形式の網羅的な整理は行われていない。

[10] 複数の語句が感情の誘因に相当する場合は、述語に最も近い位置にある 1 つのみを数える。例えば、上の（６）引用法の用例に示した第 1 例は、「思フニ」や「見ルニ」でまとめられる句も感情の誘因になり得るが、述語の「悲ケレバ」に最も近い位置の「ト」によって引用される句のみを誘因の表現に扱う。

[11] 終止法では、（８）誘因の表示なしにも多いが、表示されない現象を、表示される（１）〜（７）の現象と同列には扱いにくいので、ここでは除外して考える。

表 6.21: 『今昔』の「悲し」「悲しむ」の文構造のまとめ

述語	人称	述部の形式		感情の誘因の形式
		終止法	接続法	
悲し	自己	単独、終助詞・推量「なり」下接	制約なし	準体法（+助詞）
悲しむ	他者	助動詞・複合辞下接	連用形（+助詞）	制約なし

表 6.22: 『源氏』の「悲し」の人称

	1 人称	2・3 人称	計
会話文	話し手	話し手以外	
	105	17	122
地の文	語り手	登場人物	
	0	171	171

も、「悲し」を述語とする文と「悲しむ」を述語とする文との間には対立が認められる。

6.2.6　和文の「悲し」

和文資料の『源氏』には「悲し」は 300 件近くあるが、「悲しむ」は 10 件にも満たない。「悲しむ」が現れるのは、6.1.4 で記したように、僧侶や高貴な男性の発話の部分に偏っている。

表 6.22 は、『源氏』の「悲し」の感情主の人称をまとめたものであるが、会話文では話し手に偏り、地の文では登場人物に限られるという制限がある。これは、表 6.15 に示した『今昔』の「悲し」と同様の制限である。『今昔』とは異なっていることは、地の文で語り手が感情主となる明らかな例が見つからないことである。

ただし、表 6.22 ではすべて登場人物に算入したものの、『源氏』の地の文の「悲し」は登場人物だけの感情だと言い切ることができない例もある。

(174) 曙にしも、曹司に下るる女房なるべし、「いみじうも積りにける雪かな」と言ふ声を (源氏は) 聞きつけたまへる、ただそのをりの心地するに、御かたはらのさびしきも、いふ方なく かなし。(幻)

これは、登場人物である光源氏を感情主とする「悲し」であるが、その光源氏の内面に感情移入することによって、語り手も感情主になっていると読むことができる例である。このような例は、『源氏』の地の文に多いが (上野 1995)、『今昔』には稀である。前述のように、『今昔』では語り手が感情主になる場合は、推量の助動詞「なり」や認識動詞等の特別な形式によってそれを明示する。

これは、感情主の人称の区別を形式に表さない和文と、それを表す『今昔』とに相違があるが、この相違は会話文での述部の用法にも見られる。『今昔』は話し手を感情主と

表 6.23: 『源氏』の「悲し」の述部の用法

形式	終止法	接続法	連体法	連用法
a 単独形式	44	43	26	2
b 熟合形式	70	52	56	0
計	114	95	82	2

表 6.24: 『源氏』の「悲し」の終止法の形式

形式	a 単独	b 熟合
(1) 単独（+終助詞）	**43**	40
(2)　+かな（や）	0	4
(3)　+断定辞「なり」	0	0
(4)　+時制辞	1	17
(5)　+推量辞	0	4
(6)　+複合辞	0	5
計	44	70

表 6.25: 『源氏』の「悲し」の接続法の形式

形式	a 単独	b 熟合
(1) 連体形（+形式名詞等）	9	22
(2) 条件法	13	12
(3) 連用形（+助詞）	21	18
計	43	52

する場合は「悲し」、話し手以外を感情主とする場合は「悲しむ」という使い分けをもつのに対して、和文はそうした区別をもたないのである。

表 6.23 は、『源氏』の「悲し」の述部の用法を整理したものであるが、終止法と接続法が拮抗することが分かる。

表 6.24、6.25 は、『源氏』の「悲し」の述部の形式を整理した結果である。表 6.24（終止法）で、（１）単独 (+終助詞) に集中すること、また、表 6.25（接続法）で特定の形式に偏らないことなど、『今昔』の「悲し」と共通の現象が見てとれる。

『今昔』の場合と異なるところは、まず表 6.24（終止法）で（３）断定辞「なり」で終止する形式が 1 件も見られない点があげられる。前述のとおり、この形式は『今昔』の地の文で語り手が感情主になる場合に用いられる特別なものであったが、『源氏』では語り手が感情主となっていることを明示する形式を持たないのである。また、b 熟合で、（４）「+時制辞」(「かなしかりけり」など) が多くなっているのも、『今昔』と大きく異なる点であるが、この形式は『今昔』では「悲しむ」に多いものであった。『源氏』では「悲し」が担っている形式の一部を、『今昔』では「悲しむ」が担っている面があることを示している。

『源氏』の「悲し」の感情の誘因の形式は、表 6.26、6.27 の通りである。『今昔』の場

表 6.26: 『源氏』の「悲し」の感情の誘因の形式（述部が終止法の場合）

形式	a 単独	b 熟合
(1) 名詞 (+助詞)	11	7
(2) 形式名詞 (+助詞)	4	8
(3) 準体法 (+助詞)	**17**	25
(4) 条件法	3	7
(5) 連用形 (+助詞)	4	4
(6) 引用法	0	6
(7) 指示詞・接続詞	0	0
(8) 誘因の表示なし	5	12
計	44	70

表 6.27: 『源氏』の「悲し」の感情の誘因の形式（述部が接続法の場合）

形式	a 単独	b 熟合
(1) 名詞 (+助詞)	5	7
(2) 形式名詞 (+助詞)	4	5
(3) 準体法 (+助詞)	**17**	13
(4) 条件法	2	5
(5) 連用形 (+助詞)	3	5
(6) 引用法	7	8
(7) 指示詞・接続詞	0	0
(8) 誘因の表示なし	5	9
計	43	52

合と対照すると、（３）準体法 (+助詞) にもっとも多いことや、（７）指示詞・接続詞に例がないことなどが、共通点として指摘でき、感情の誘因の形式から見ても、『今昔』の「悲し」は和文の「悲し」と通い合う部分があることが確認される。

一方で、表 6.26、6.27 の数字に下線を付したとおり、（１）体言が多いこと、（５）連用形 (+助詞) や（６）引用法にも例が見られることなど、『今昔』では「悲しむ」に限られがちであったものまでが、『源氏』では「悲し」の誘因におさまっている。

これは、『源氏』が「悲し」一種で受け持っている対象語の形式を、『今昔』は「悲し」と「悲しむ」とが分担して受け持っていると解される現象である。つまり、『今昔』の「悲し」「悲しむ」は、『源氏』の「悲し」の領域を分け合って継承している面があるのである。

人称と述部の用法や形式から、『今昔』の「悲し」は和文の「悲し」を大筋で受け継ぎながら、感情主の自他の区別を明示するように変容している。さらに、述部の形式や感情の誘因の形式には、『今昔』の「悲し」「悲しむ」の区別が和文の「悲し」の領域を分け合うように対応している様子が見えている。

表 6.28: 『日本霊異記』『法華験記』の「悲し」の人称

	1 人称	2・3 人称	計
会話文	話し手	話し手以外	
	2	2	4
地の文	書き手	登場人物	
	0	50	50

表 6.29: 『慈恩伝』『白氏文集』の「悲しむ」の終止法の形式

形式	a 単独	b 熟合
(1) 単独（+終助詞）	**6**	0
(2)　+かな（や）	0	0
(3)　+断定辞「なり」	0	0
(4)　+時制辞	**6**	0
(5)　+推量辞	**2**	0
(6)　+複合辞	**1**	0
計	15	0

表 6.30: 『慈恩伝』『白氏文集』の「悲しむ」の接続法の形式

形式	a 単独	b 熟合
(1) 連体形（+形式名詞等）	0	0
(2) 条件法	0	1
(3) 連用形（+助詞）	**8**	3
計	8	4

6.2.7　漢文の「悲しむ」

平安時代の和化漢文資料として、『日本霊異記』(9 世紀前半成立) と『法華験記』(11 世紀前半成立) を調査対象とする[12]。この 2 書から拾い出せる「悲」字のうち、「悲しむ」と読み得る例について、感情主の人称をまとめたものが表 6.28 である。会話文の用例は少ないが、地の文では登場人物を感情主とする場合に限られ、『今昔』の「悲しむ」と共通する。

述部や感情の誘因の形式を、読みが確定できない漢文資料から探ることは困難なので、加点によってそれらをうかがい知ることができる資料として訓点資料を調査する。中古に加点されたもののうち、「悲しむ」の確かな例が多く拾われる資料に『慈恩伝』と『神田本白氏文集古点』(12 世紀前半加点) とがあるが[13]。この 2 書における「悲しむ」の述部の形式と誘因を表す形式を整理すると、表 6.29〜6.32 のようになる。

[12] この 2 書は『今昔』に先行する漢文体説話集の代表的なものであり、『今昔』の主要な依拠資料でもある。本文は、出雲路修『日本霊異記』(新日本古典文学大系、岩波書店)、井上光貞・大曽根章介『往生伝・法華験記』(日本思想大系、岩波書店) による。

[13] 『白氏文集』は太田次男・小林芳規『神田本白氏文集の研究』(勉誠社) による。訓点資料の用例数は、『今昔』や『源氏』にくらべて少ないことが問題であるが、資料の範囲を広げても飛躍的に増えるものではない。今後、他の感情形容詞・感情動詞の対の調査によって補っていきたい。

表 6.31: 『慈恩伝』『白氏文集』の「悲し」の感情の誘因の形式（述部が終止法の場合）

形式	a 単独	b 熟合
(1) 名詞 (+助詞)	**7**	0
(2) 形式名詞 (+助詞)	4	0
(3) 準体法 (+助詞)	0	0
(4) 条件法	0	0
(5) 連用形 (+助詞)	0	0
(6) 引用法	0	0
(7) 指示詞・接続詞	1	0
(8) 誘因の表示なし	3	0
計	15	0

表 6.32: 『慈恩伝』『白氏文集』の「悲し」の感情の誘因の形式（述部が接続法の場合）

形式	a 単独	b 熟合
(1) 名詞 (+助詞)	1	0
(2) 形式名詞 (+助詞)	1	1
(3) 準体法 (+助詞)	1	0
(4) 条件法	0	0
(5) 連用形 (+助詞)	3	0
(6) 引用法	0	0
(7) 指示詞・接続詞	0	0
(8) 誘因の表示なし	2	3
計	8	4

表 6.29、6.30 によると、終止法では（1）（4）（5）（6）に分布、接続法では（3）に集中し、『今昔』の「悲しむ」とよく重なっていることが分かる。一方、表 6.31、6.32 を見ると、（1）体言 (+助詞) に集中するところが、『今昔』の「悲しむ」と異なる点となっている。この形式が多いのは、格関係を明示しながら読み下していく漢文訓読の特徴が現れたものと考えられるが、『今昔』でこれが多くないのは、『今昔』が漢文訓読の表現をそのまま受け入れているわけではないことを示すものであろう。他は、数値のばらつきが大きく特別な傾向は見出しにくいが、『今昔』の「悲しむ」も広い範囲の形式で感情の誘因を表していたことと矛盾する現象とは言えない。

『今昔』の「悲しむ」は、漢文の「悲しむ」と通じる部分が確かにあって、大勢としてはそれを受容していると見てよい。ただし、漢文の「悲しむ」をそのまま踏襲しない面もあり、『今昔』の「悲しむ」は漢文の「悲しむ」を受容しただけのものではない。

6.2.8　本節のまとめ

本節で分かったことをまとめると次の 4 点になる。

1. 「悲し」と「悲しむ」は、使われる文体が違う。

2. 「悲し」と「悲しむ」を述語とする文の構造を、『今昔』において分析すると、人称、述部の形式、感情の誘因を表す形式について、両者は文構造上の対立を持つ。

3. 『今昔』の「悲し」「悲しむ」は、和文の「悲し」の領域を分け合うように継承している。

4. 『今昔』の「悲しむ」は、大勢として漢文の「悲しむ」を受容している。

このことは、6.1 節で示した、B 類の感情形容詞・感情動詞の対に分類される他の語にも、基本的にあてはまるのではないかと予想されるが、その確認のための調査は今後の課題である。また、6.1 節で対立が、B 類ほどには鮮明でない A 類に属する語についても、述部や誘因をあらわす語句の形式に対立があるかどうかを調査することが必要である。

6.3　まとめ

感情形容詞と感情動詞の間には、使われる文体に差があり、その差が特に鮮明な一群の対がある。同じ感情形容詞と感情動詞の対でありながら、その対立が鮮明なものとそうでないものとに分かれる理由は、不明である。

感情形容詞と感情動詞の間には、感情主の人称によって使い分けがあり、また、使われる文体の差が鮮明な対においては、述部の形式や、主部や従属句の位置に示される感情の誘因を示す形式にも使い分けがある。

第 5 章では使われる文体の差が鮮明な漢語と和語の間に意味の対立があることを見たが、本章で述べたように、使われる文体の差が鮮明な和語と和語との間にも、意味の対立が見られる。漢の側の層にある感情動詞の用法には、漢文の用法が持ち込まれた部分もあったもののそれは一部にとどまることから（6.2.3）、感情形容詞と感情動詞の対立は、漢語や漢文がもたらしたものではなく、日本語のなかに本来備わっているものと考えられる。感情動詞と感情形容詞の対立が、意味と文体の両側面で見られることの理由については別に研究が必要であるが、この対立関係の本質をどう考えるかについては第 8 章で触れる。第 5 章と第 6 章を通して、使われる文体の差が鮮明な語の対に意味の対立がある場合が多いことが見えてきた。それでは、第 3 章で見出した、使われる文体の差が鮮明な対の第 3 の類型、すなわち、和語の同じ品詞同士の対立について

このような対立や層の構成は、感情形容詞・感情動詞に限られたものだろうか。第 3 章で見出した、使われる文体に明瞭な差異がある対の第 3 の類型、すなわち、和語の同じ品詞同士の対立については、どうだろう。

第7章　和語の同品詞同士の対立：「おづ」「おそる」の対立

本章では、第3章の研究で明確にした、文体の違いに基づく特徴語のうち、対立語を持つ対の3つの類型のうち、第3の類型である、同語種（和語）・同品詞同士で対立するものを分析する。その事例として、「おづ」と「おそる」とを比較し、そこに、使われる文体に差異があるとともに意味的対立があったことを示す。

ここで取り上げる「おそる」「おづ」の対は、第3章で抽出した対のリストには含まれていないが、『慈恩伝』の語彙と『源氏』の語彙とを比較した築島 (1969: 583) が、漢文訓読語と和文語とが対立する対の1つに挙げている。

なお、第6章で扱った感情形容詞と感情動詞で、使われる文体の差が鮮明な対に、「おそろし」と「おそる」があるが、第6章では、「おそる」の単独用法が『源氏』で皆無であったため、この対は取り上げていない。第3章で、『今昔』における語の対立を抽出した中に、この対は含まれていた。「おづ」「おそる」の対立と「おそろし」「おそる」の対立との関係についても触れる。

7.1　〈恐怖〉の感情を表わす動詞

平安時代の〈恐怖〉を表わす和語動詞には、「おそる」「おづ」「おびゆ」「わななく」「をののく」などがある。このうち、「おびゆ」は〈恐怖に反応する〉、「わななく」は〈恐怖に身を震わせる〉、「をののく」は〈恐怖に心を震わせる〉などと、他の語との違いを明確化できる意味特徴を、文脈の分析を通して、比較的容易に見出すことができる。ところが、〈恐怖〉の動詞語彙の中心にある「おづ」と「おそる」については、その意味の差異を明確にするのは難しく、先行研究はいくつかあるもののその違いは十分明らかになっていない。

関 (1993, 2009) は「おそる」を心理動作語、「おづ」を具体動作語とし、馬淵 (1987) も、「おそる」を人の心的作用、「おづ」を人の動作としている。しかし、実際の用例を見ていくと、「おそる」が心理動作、心的作用であることには疑問がないが、「おづ」が具体動作、人の動作であると見ることには疑問がある。

(175) 然レバ、院弥ヨ恐(お)ヂサセ給テ、「『此レハ人ノ花ヲ見テ興ジテ然様ニ長(なが)メタリケル

ヲ、此ク蜜(きびし)ク尋ネサスレバ、怖(おそ)レテ逃ゲ去ヌルニコソ有メレ』トコソ思ヒツルニ、此ノ□ニテ有ケレバ、極(いみじ)ク怖(おそろ)シキ事也」トナム被仰ケル。然レバ、其ノ後ハ弥ヨ恐(お)ヂサセ給ヒテ、近クモ不御ザリケル。（今昔・巻27-28）

例えば、（175）の例にある2件の「おづ」は、会話部分にある「おそる」「おそろし」と大体同じような意味で使われており、「おそる」「おそろし」が心の動きや様子を表しているのに、「おづ」だけが具体動作であると見るのは、不自然ではないだろうか。

古典語の語の意味の記述に関して、個々の用例の解釈に疑問が生じた場合、その適否は議論しにくい。解釈が研究者の主観に基づくことが多いからである。意味を扱う場合は、用例に基づいた記述の手順を、客観的な手順を示しながら研究を進める必要がある。そこで、心理動作や心的作用か、具体動作や人の動作かというような解釈的な説明をして済ませるのではなく、それぞれの語が使われている文において、その語が意味的に関与している要素として、複合動詞の結合要素と、対象格を表す助詞の種類と助詞が取る語句の性質を分析することで、手順を明示した意味記述を行っていくことにする。

7.2　資料別の頻度の特徴

「おづ」「おそる」の平安・鎌倉時代の資料別の使用頻度を一覧にしたのが表7.1および表7.2である[1]。表7.1においては、漢字表記の例は、送り仮名等によって読みの確かな例のみを算入した[2]。表7.2は、付訓によって、そう読んだことが確実な例だけを算入した。また、表7.1及び表7.2において括弧内の数字は、「おぢおそる」の数で、括弧が付いていない数字に含まれる数である。

この2つの表から、まず、大まかに次の3点が指摘できる。

1. 平安時代の和文資料（表7.1の上側）では、「おづ」が主用され、「おそる」は稀にしか用いられない。

2. 平安時代の訓点資料（表7.2）では、「おづ」と「おそる」が共用されるが、2語の勢力関係は作品によってばらつきがある。

3. 平安末期から鎌倉時代の和漢混淆文の資料（表7.1の下側）では、2語が共用されるが、概して、「おづ」よりも「おそる」の方が優勢である。

このように、時代や資料の文体によって2語の文献への現われ方はずいぶん異なっている。それでは、各時代・各文体ではどうか、やや細かく観察してみたい。

[1] 本節での調査は、索引類の検索、もしくは、資料を直接読んで検索することで行った。
[2] 例えば「恐て」は、「おぢて」とも「おそれて」とも読め、その読み分けは困難な場合が多い。

表 7.1: 平安和文・和漢混淆文資料の「おづ」「おそる」の資料別頻度：漢字表記の例は、送り仮名等で読みが確実な例のみを算入。括弧は「おぢおそる」の件数（内数）。「おづ」の「その他合成語」の内訳は「ものおぢ」「おづおづ」「おぢなし」。「おそる」の「単純名詞」の内訳は「おそれ」「おそり」、「その他合成語」の内訳は「おそるらく」「おそるおそる」。

	おづ			おそる			
作品	単純動詞	複合動詞	その他合成語	単純動詞	複合動詞	単純名詞	その他合成語
竹取物語	1						
古今集				1			
土佐日記	1					1	
落窪物語	5	2					
蜻蛉日記	1		2				
宇津保物語	9	2		1			
大和物語	2	1(1)			2(1)		
枕草子	2	3		1			
源氏物語	13	8	11	1			
紫式部日記	1						
栄花物語	8					1	
夜の寝覚		4					
浜松中納言		1					
堤中納言	3	2	2				
後拾遺集						1	
狭衣物語	5	4	2				
大鏡	5	1		5	2		
俊頼随脳		2(1)	3	3	1(1)	5(1)	
今昔物語集	6	75(52)	23	108	104(52)	30	4
法華百座				1		5	
打聞集	1						
古本説話集		1					
今鏡				1	3	1	
松浦宮物語		1		11	7	1	
方丈記				2	1	4	
愚管抄	3	1		13	1	2	
閑居友	2	1(1)			1(1)	2	
宇治拾遺	6	5(3)		5	8(3)	3	
発心集	1	1(1)		22	11(1)	4	2
十訓抄		1		2	1		1
古今著聞集	3	3(1)		12	10(1)	8	3
唐物語				1	1		1
保元物語		3(2)		8	4(2)	3	2
平治物語		1		7	1	2	
平家物語	1	5(4)		31	15(4)	13	2
徒然草				12	3	1	

表 7.1 から、平安時代の和文では、「おづ」が一般的な語であるのは明らかだが、少数ながら「おそる」が現われる箇所は、どのようなところだろうか。『古今集』は仮名序、『宇津保物語』は忠遠の学者らしい言い回しのところ、『源氏物語』は内舎人の翁というおそろしい人物の詞にそれぞれ現われる。『大和物語』で 2 件現われる 172 段はいわゆる副次的章段で、後の加筆である可能性があり、『枕草子』の例 (蟻通しの明神の章段) は文意が取りにくく、前田本・能因本で異文があり、本文に疑いがある。このように「おそ

表 7.2: 平安時代の訓点資料の「おづ」「おそる」の資料別頻度：付訓によって読みが確実な例のみを算入。作品名の後の括弧は加点時期（平安時代のいつ頃か）。数字の括弧は「おぢおそる」の件数（内数）。「おそる」の「単純名詞」の内訳は「おそれ」「おそり」、「その他合成語」の内訳は「おそるらく」「おそるおそる」。

		おづ		おそる			
種類	作品	単純動詞	複合動詞	単純動詞	複合動詞	単純名詞	その他合成語
賛・疏	法華経玄賛（中期）		1	3	1		1
	法華義疏（後期）			8			
	高山寺蔵大毘蘆遮那成仏経疏（前期）			7		2	
経	西大寺本金光明最勝王経（前期）			1			
	東大寺図書館蔵地蔵十輪経（前期）	2	1(1)	5	3(1)		
	正倉院聖語蔵地蔵十輪経（前期）	1	1(1)	1	1(1)		
	龍光院蔵妙法蓮華経（後期）		1(1)		1(1)		
	西大寺本不空絹索神呪心経（後期）			4			
伝・紀・記	上野本漢書揚雄伝（中期）		3				
	南海寄帰内法伝（後期）	3		1			1
	東北大本史記孝文本紀（末期）	3		2			
	興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝（末期）	10	5	4		1	1
	図書寮本日本書紀（末期）	5	3	2			1
	石山寺蔵大唐西域記（末期）	2	4	4			2

る」は、和文では極めて特殊な部分に限って現われており[3]、2のように、訓点資料ではよく用いられていることから、「おそる」は、漢の層に属すると見ることができる。ところが、『大鏡』『俊頼髄脳』など、平安末期の和文には、「おそる」も普通に現われるようになる。

表7.2の、訓点資料の出現状況で目を引くことは、2語の勢力関係が文献によって異なり、「おそる」を多用するか、「おづ」も多用するかの違いが、文献の性質の違いと、対応していることである。「おそる」を特に多用するのは、経義を解説した抽象的な叙述が多い賛・疏の類、「おづ」をも多用するのは、物語性が高く具体的な事件などの叙述も多い伝・紀・記の類、両者の中間に位置するのが、経義を説きながら物語性も帯びる経の類、という対応が見出せるのである。

表7.1に戻って、平安末期以後の和漢混淆文の作品では、2語が共用されながら全般に「おそる」の方が優勢であるが、次の事実が示唆的である。

1. 『今昔』の部別の頻度を調査すると、巻20までの天竺震旦部・本朝仏法部では、「おそる」128件、「おづ」13件で、圧倒的に「おそる」が優勢だが、巻22以後の本朝世俗部では、「おそる」22件、「おづ」16件で、2語の勢力に大差がない。

2. 2語が同じ程度に用いられる『宇治』では、「おそる」は、『今昔』や『古事談』等の系列に連なる書承的な説話に、「おづ」は他書に類話のない口承的な説話に多い。

[3] 単純名詞「おそり」も、漢文訓読文の混在が指摘される『土佐日記』、『栄花物語』の『往生要集』を出典とする部分、『後拾遺集』の神祇歌という特殊なところに現われている。

3. 「おづ」が優勢もしくは比較的多く現われる文献として、『打聞集』『古本説話集』『愚管抄』『閑居友』『古今著聞集』などがあげられるが、これらは、いずれも和文的性質が濃いと言われるものである。

このように、平安末期から鎌倉時代には、「おづ」は和文的性格の強い資料に現われやすい。一方の「おそる」は、文体の違いにあまり関わらず広く現われるが、どちらかといえば、漢文訓読的性質の強い資料により多く使われる。

以上見てきたように、資料に現われる事実を全体的に見れば、平安時代には、「おづ」が一般的で、「おそる」は、漢文訓読文にしか現われない語であったが、平安末期以後には逆に、「おそる」が一般的になり、「おづ」は和文的な資料に限られてきて、やや特殊化している。

しかし、平安・鎌倉時代を通じて、「おそる」は漢文訓読的な資料に多く、「おづ」は和文的な資料に多いということは一貫している。したがって、「おそる」は漢の層の側に属し、「おづ」は和の層の側に属すと考えられる。

そして、平安末期以後一般化する「おそる」は、漢の層から和の層の方向へと移行していくと見ることができる。

以下では、「おそる」が一般化した後の『大鏡』『俊頼髄脳』は鎌倉時代に含め、平安和文、訓点資料 (平安時代の漢文訓読文)、『今昔』、鎌倉時代の 4 つに分けて、2 語の比較を詳しく行っていく。

7.3 意味の分析 (1)：複合動詞の検討

一般に、2 つの動詞が結合して複合動詞をつくるときには、2 つの動詞の間に結合を可能にする何らかの意味特徴の共通性が認められる。「おづ」「おそる」それぞれがどのような意味の動詞と結合しているかを調べることで、2 語の意味特徴を探り出すことができる。まず、「おづ」「おそる」それぞれに結合する動詞を、表 7.3 として掲げる。

結合する動詞の意味を、感情か具体的な動作か、感情の場合、快・中立・不快のいずれか、という観点から分類し、印をつけた。○は不快の感情、●は快の感情、◎は中立的な感情、＊は具体的な動作、無印は補助動詞的な語である。これをもとに大体の傾向を見るために整理しなおすと、表 7.4 のようになる。表中の△は用例が 1 件しか確認できないものである。

表 7.4 から、文体や時代の別を超えた不変の側面と、文体や時代による変化の側面とを見て取ることができる。まず、不変面として、「おそる」は、「不快」を中心に「中立」「快」にも広く分布するが、鎌倉を除き「動作」には分布しない。よって、心の中だけにとどまる広く複雑な感情を表わしたと思われる。「おづ」は、主に「不快」と「動作」に分布している。動作といっても、「さわぐ」「しじまる」「泣く」「ふるふ」「わななく」の

表 7.3: 「おづ」「おそる」が結合する動詞：○は不快の感情、●は快の感情、◎は中立的な感情、＊は具体的な動作、無印は補助動詞

資料	語	前項に付く動詞	後項に付く動詞
平安和文	おづ	○おどろく、○つつしむ、○はばかる、◎おぼす、◎おもふ、＊したふ、＊まもる	○おそる、○こうず、○つつむ、○はばかる、○まどふ、○わぶ、◎おぼしめす、＊さわぐ、＊わななく、まさる
	おそる	○なげく、○おづ	
訓点資料	おづ	○うれふ、○おどろく、○つつしむ、○をののく、＊くだる、＊しじまる、＊ふるふ	○あわつ、○おそる、○をののく、＊さわぐ
	おそる	○うたがふ、○おづ、○おどろく、○かしこまる、○はづ、●よろこぶ	
今昔	おづ	○おそる	○おそる、○かしこまる、○かなしむ、○まどふ、＊かがまる、＊さわぐ、＊泣く、あふ
	おそる	○あやしぶ、○うれふ、○おづ、○おどろく、○つつしむ、○はづ、●かんず	○あやしぶ、○おづ、○なげく、○はづ、○まどふ、◎おもふ、●たふとぶ、●よろこぶ
鎌倉	おづ	＊ふるふ	○あさむ、○おそる、◎おぼしめす、＊さわぐ、＊わななく、あふ
	おそる	○おづ、○おどろく、○かしこまる、○はづ、＊ふるふ	○いとふ、○うれふ、○おどろく、○かしこまる、○かなしむ、○つつしむ、○はばかる、○まどふ、○をののく、◎おぼしめす、◎おぼす、◎おもふ、◎おもほす、◎おぼゆ、●たふとぶ、＊さわぐ、＊のがる、あふ、入る

表 7.4: 「おづ」「おそる」が結合する動詞の意味のまとめ

語	意味	平安和文	訓点資料	今昔	鎌倉
おづ	快				
	中立	○			△
	不快	○	○	○	○
	動作	○	○	○	○
おそる	快		△	○	△
	中立			○	○
	不快	○	○	○	○
	動作				○

ように、不快感からくる身体的反応としての動作をいうものが多い。したがって、「おづ」は、動作に直結するような単純で急激な感情を表わしたと思われる。

ついで、変化面であるが、文体に関わることで注目されるのは、平安和文で「おづ」が「中立」にも分布していることである。平安和文では原則として「おそる」を用いないが、

表 7.5: 「おづ」「おそる」の対象語が取る格助詞

	おづ		おそる	
資料	に	を	に	を
平安和文	19	9	1	
訓点資料	2	11	4	14
今昔	3*		9	27
鎌倉	2		28	47

他の種類の資料では「おそる」が担う用法にまで「おづ」が進出しているのである。時代的変化として目を引くのは、「おそる」が次第に用法を拡大している点で、特に鎌倉になると、「動作」にまで領域を広げていく。

7.4　意味の分析 (2)：対象格の検討

7.4.1　対象語を示す格助詞

「おづ」と「おそる」は、対象語を示す格助詞に、「に」と「を」を取る。現代語で、「蛇におそれる」とも「蛇をおそれる」とも言えるように、「に」「を」が入れ替え可能なのは、古代語でも同じである。ここでは、「に」「を」が入れ替わる現象から動詞の意味を考察した工藤 (1978) により、助詞の機能を手掛かりに、「おづ」と「おそる」の意味を考えていこう。工藤は、「に」「を」が入れ替わる多くの種類の動詞の考察を経て、

> かくして、すくなくとも古代の日本語においては、一つの動詞であっても、その表わす作用が意志的な営みであると把えるか、自然な働きであると把えるかで、ヲとニとを使い分けていたことが判るのである (工藤 1978: 19)。

と述べ、その日本語史の上への位置付けとして、

> これを要するに、動作・作用の客語を、自然な営みの契機・対象であるか、意図的な営みの対象であるかという、二元的な把握をしていたのが上代以前の日本語であったといえる。その把握の原理が漸次ゆるやかにあるいは曖昧になって来たのである。(工藤 1978: 23)

と説明している。この流れの中に、個々の動詞における現象が、どう位置付けられるかを、考えていく必要があるだろう。

表 7.5 は、「おづ」と「おそる」の取る「に」「を」の数を、資料の種類別にまとめたものである。表中に＊を付した『今昔』の 3 件は、送り仮名がなく確かな例とはしがたいが、文脈上ほぼ確実に「おづ」と読めるものの数である。

この表から、全体的に見れば、「おづ」は「に」の方を取りやすく、「おそる」は「を」の方を取りやすい、ということが言える。工藤 (1978) に従い、「に」は自然な営みの対象を、「を」は意志的・意図的な営みの対象を示すと考えれば、「に」を多く取る「おづ」は自然な営みによる動作を表わし、「を」を取りやすい「おそる」は意志的な営みによる動作を表しているのではないか、という推測が可能であろう。

以下では、各々の時代・文体において、「に」と「を」の機能を確認した上で、「おづ」と「おそる」の意味を、「に」「を」いずれを取りやすいか、どんな対象語を取るか、という2つの視点から検討し、上の推測を確かめていきたい。

7.4.2　平安和文の「おづ」の対象格

平安和文では、「おそる」は原則として用いない。その分「おづ」の用法が多彩である。「おづ」が取る「に」「を」が受ける語句は、次の通りである[4]。

- **に:** 具体物10（人物6、自然物2、神仏2)、抽象物2（託宣、おそろしき気色)、事2（連体形2)、指示詞5
- **を:** 具体物4（人物3、自然物)、事5（連体形5）

「に」には具体物を表わす語が多く、「を」には事を表わす語句が多い。

(176) つばくらめも、人のあまたのぼりゐたるにおぢて、巣にものぼりこず。（竹取物語）

(177) 盃のめぐりくるを、大将はおぢ給へど、例のことなしびに、千年万代にて過ぎぬ。(栄花物語・八)

上のように、同じ連体形を受ける場合でも、「を」を取る（177）では、これから起こることを想定して対象としているのに対し、「に」を取る（176）で対象としているのは、現に起こっている状況であり、人という具体物であるとも考えられる。「を」はより抽象的な事柄、「に」はより具体性の高い事物を対象とするのである。

具体物を受ける「に」と「を」にも相違を認めることができる。

(178) もし、受領の子どもの、すきずきしきが、頭の君におぢきこえて、やがて、ゐてくだりたるにや。(源氏物語・夕顔)

(179) かの人 (柏木) は、わりなく思ひあまる時々は、夢のやうにみたてまつりけれど、宮 (女三宮) は、つきせずわりなきことにおぼしたり。院 (源氏)をいみじくおぢきこえ給へる御心に、有様も、人のほども、ひとしくだにやはある。(源氏物語・若菜下)

[4] 数字は件数を示し、数字のないものは1件だけであることを示す。

（179）は、柏木との密会を「つきせずわりなきこと」と思い悩む女三宮が、夫である源氏に対して抱く感情で、柏木の「有様も、人のほども」源氏には「ひとしくだにやはある」と思いがつづき、重く複雑な心中を読み取ることができる。「を」によって示される源氏は、女三宮にとって意識の底深くで強く対象化されているように読み取れる。

一方、（178）は、夕顔の家主の心内語の中の例であるが、（179）のような深い感情を読み取ることはできず、自然に心が乱されてしまう対象を「に」によって示している。他の例を観察しても、「を」を取る例には、「に」を取る例にはない、感情の重さや複雑さなどの面で、特別の効果が読み取れる場合が多い。

和文の「を」には、具体的事物を対象として意識的に特立する機能があると見られる。「に」が抽象物を対象にしているかに見られる、「託宣」「おそろしき気色」は、自然に恐怖を感じさせるような属性を備えた具体的存在を想定できるものである。

以上要するに、「に」は自然な対象化、「を」は意識的な対象化という機能をもち、「おづ」は、「に」を取って自然な動作を表わすのが基本だが、「を」を取ることによって意識的な動作を表わすこともできるのである。

7.4.3　訓点資料の「おづ」「おそる」の対象格

訓点資料において、2 語が取る助詞と各々が受ける語句は次の通りである。

- **おづ**
  - **に** 抽象物 1（邪説）、事 1（連体形）
  - **を** 抽象物 4（威、苦、苦果、朱藍）、事 7（連体形+コト 7）
- **おそる**
  - **に** 具体物 2（主、悪霊霜雹風雨）、抽象物 1（怨讐）、事 1（連体形+コト））
  - **を** 具体物 1（諸魔）、抽象物 6（威厳、邪説、苦果 3、蘊）、事 7（連体形+コト 6、連体形）

「おづ」「おそる」ともに、「を」には抽象物や事を表わすものが多く、「おそる」が「に」を取る場合には具体物を表わす語も見られる。平安和文と比較しての訓点資料での特徴は、2 語ともに、「を」が目立って多いことである。

さて、訓点資料で、「おづ」と「おそる」とはどういう用法にあるのだろうか。まず、「を」を取る場合について、上の語句のリストを比較してみると、その受ける語句を見る限り、ほとんど同じと言ってもよいほどである。そこで、同一文献の中で同種の語句を受ける例を比較してみることにする。

次の 3 例は、『南海寄帰内法伝』平安後期点におけるものである。

(180) 大-分塗跣すること、衆生を損せむことを恐チてなり。

(181) 衣-食是(れ)先なれとも、塵-労を長(マ)サムコトを恐チて、厳（し）く戒-検を施す。

(182) 嗚呼、信者の為に説く可(し)、疑はむ者の與には言ひ難し。傅法(の)[之]家、尚(ほ)固執(を)懐けるを〈朱淡　ケル〉恐ルヽに由(り)てのみ[耳]。

「を」が受けるのは、（180）では自らが衆生を損ずること、（181）では自らが塵労を増すこと、（182）では伝法の家が固執を懐いていることで、「おそる」の（182）は他者の行為を、「おづ」の（180）（181）は自己の行為を対象にしている。自己の領域のことを思うのか、他者の領域のことを思うのか、という違いは、「を」を取る「おづ」「おそる」の多くの例に見出すことができる。自己の事柄は無意識のうちにも自覚されるものだが、他者の事柄を自覚するには意志的な精神によるものである。

「に」を取る場合は例が少なく比較が難しいが、『石山寺蔵大唐西域記』長寛元(1163)年に次のような例がある。

(183) 此(の)國の先王[於]邪-説に幫(アザム)カ(れ)「左訓オヂ」、仏法毀（そこな）ハムト欲す。外-道を崇-敬セムト欲す。

(184) 既(に)邪説を幫(オソ)リ、又神の為ニモ誘（アザム）カルヽ「左訓タブラカサル」ナリ。

これらの例では、同じ原文の「幫(於)邪説」を一方では「におづ」、他方では「をおそる」と訓じている。前者は、「おづ」が、受身形「あざむかる」と並び訓ぜられ、受動的・破滅的行為につづく文脈にある。

以上のように、訓点資料での「おづ」「おそる」の用法は複雑に見えるが、先に推測したような、「おづ」は自然な営みによる動作を表し、「おそる」は意志的な営みによる動作を表すという、2語の意味の相違を確認することができる。

和文と漢文訓読文とでは、2語の用法は大きく異なっているように見えるが、それぞれの用法上の特徴の基底にある意味は、共通していると考えてよい。

7.4.4　『今昔』の「おづ」「おそる」の対象格

『今昔』において、送り仮名によって確実に「おそる」と読める例について、助詞とその受ける語句は次の通りである。

- **に:** 具体物6（我（神）・我等（殿上人）・主・公・天・此ノ音）、抽象物1（王ノ仰セ）、指示詞2
- **を:** 具体物2(彼ノ女・毛ノ色)、抽象物9(勅命・世・後世4・悪道・罪2)、事12(後世ノ事・連体形+事10・此事)、指示詞4

「を」には、事を表わすものがもっとも多い。

(185) 前々モ此様ニシテ此ニ来ヌル人ヲバ、返テ此ノ有様ヲ語ラム事ヲ怖レテ、必ズ殺ス也。(今昔　巻 31-23)

その内容は、(185) のように、他者の領域の事柄であるものが特に多い。ついで、抽象物を表わす語が多く、例外的に「を」が具体物を受けているものもあるが、それは次のような例である

(186) 鹿、大王ノ御輿ノ前ニ脆テ申サク、「我レ、毛ノ色ヲ恐ルヽニ依テ、年来深キ山ニ隠レタリ。敢テ知レル人无シ。(今昔　巻 5-18)

「鹿」にとって、自身の九色の「毛ノ色」は、身の危険の原因になるもので、感情主の意識の中で恐怖の対象として想定されるものである。

一方、「に」の受ける語は、具体性の高いものばかりである (抽象物に分類した「王ノ仰セ」も王という具体的存在を対象としているとも考えられる)。

このように、『今昔』の「を」と「に」の機能は、平安時代と変化ないものと見てよい。

そして、「おそる」は、「に」よりも「を」を取りやすく、これも、平安時代の訓点資料と変わらない。

「おづ」はどうであろうか。読みの確かな 6 例の中には「を」「に」を取るものがないが、次の例などは、注釈書のほとんどが「おづ」と読んでいる。

(187) 其レガ前世ニ鼠ニテヤ有ケム、極ク猫ニナム恐ケル。(巻 28-31)

(188) 春家ガ蛇ニ恐ル事、世ノ人ノ蛇ニ恐ル様ニハ違タリカシ。(巻 28-32)

猫や蛇に対する反射的・生理的な恐怖をいうもので、ほぼ確実に「おづ」が期待される文脈である。具体物を対象としているが、「おそる」が「に」を取る場合、遠く絶大な力をもつ存在 (「王」「公」「天」など) が目立つのに対し、「おづ」の場合には目の前に実在するものを対象としている。「を」を取る例の中に、「おづ」と読んで疑いなさそうな例は見出せず、「おづ」は、「を」よりも「に」を取りやすかったと言ってよいだろう。これは、平安和文と同じである。

7.4.5　鎌倉時代の「おづ」「おそる」の対象格

鎌倉時代の和漢混淆文も、表 7.5 で見た通り、『今昔』におけるのと似た様相を示している。しかし、よく見ると、「おそる」が「に」を取る比率は 37 %で、平安時代の訓点資料 (22 %)、『今昔』(25 %) より高くなっている。「おそる」の対象語は次の通りである。

- **に:** 具体物15（梶原、義仲、我等、人2、あた、軍5、矢、太刀、御詞、風）、抽象物10（威、威勢、朝威、霊威、乱、昔のならひ、罪、世、気色2）、指示詞1
- **を:** 具体物9（人、親王、朝家、一人(天子)、悪鬼悪神怨霊、毛の色、鏡、身、間(部屋))、抽象物24（正税官物、まつりごと、戒め、罪7、罰、とが、世3、死3、終り、命、後生、悪道、軍の矢先、冥見の瞬）、事9（連体形、連体形+事5、連体形+所、このこと2)、指示詞2

全体的に見れば、やはり、「に」は具体物が多く、「を」は事や抽象物が多い。例外に見えるものも、「を」が具体物を受ける場合は、朝家や霊鬼のような対象として特に強調されるべきものか、「毛の色」「鏡」のような意識の中で対象化されるものかのいずれかで解釈できる。また、「に」が抽象物を受ける場合、「威」などの具体物の属性とも考えられるものであるか、次の例のように、「を」とは異なるとらえ方で対象化しているものかのどちらかである。

(189) 女房侍多かりけれども、或世をおそれ、或人目をつゝむほどに、とぶらふ者一人もなし。(平家物語・2)

(190) 鎌倉殿より尋らるゝ事は候はね共、世におそれておい出されて候。(平家物語・12)

（189）は、自ら出家をして生きるさまをいい、自らの意志によって世を捨てるのであるが、（190）は、頼朝から追われる身ゆえに追い出されることを言っており、他からの働き掛けによって不本意ながら世をはぼかるのである。「を」と「に」の区別は保たれていると見られる。

さて、「を」「に」の機能が基本的に平安時代から変化がないとすれば、「おそる」が「に」をも多く取るようになるのは、「おそる」の側に変化があったためではないか。つまり、「おそる」の意味に、「に」の機能に通う、無意識的で自然な動作としての性格が、強まってきているのではないか。それは結局、「おづ」の意味に近くなるということでもある。この時代の「おづ」で、対象格の助詞を取るものは、調査した文献の中では、「に」を取る場合が2件あるのみであった。

(191) 汝また木を折りて冠にし、皮をもちて衣とし、世をおそり、おほやけにおぢたてまつるも、二たび魯にうつされ、あとを衛にけづらる。(宇治拾遺物語　15-12)

(192) 侍ども梶原におそれて高くはわらはねども、目ひき鼻ひききらめきあへり。判官と梶原と、すでに同士戦あるべしとざざめきあへり。……二百除艘の舟の中に、ただ五艘いでてぞはしりける。のこりの舟は風におそる」か、梶原におづるかして、みなとゞまりぬ。(平家物語・11)

いずれの例も、「おそる」と対句になって用いられている。（191）では、抽象的事物である「世」には「おそる」、具体的人物を想定することもできる「おほやけ」には「おづ」を用い、（192）でも、どちらかと言えば抽象的な「風」に「おそる」、具体的な「梶原」に「おづる」を用いており、使い分けを認めることができる。しかし、朝家や武人を対象とするときは、先の一覧で分かる通り、「おそる」を用いることが普通であった。（191）（192）はともに、対句であるがゆえに、平板な表現を避ける意図が働いて、「おづ」が選ばれたのであろう。（192）では、同じ「梶原」を対象にして、少し前の部分では「おそる」が用いられていることもそれを裏書きしている。「おづ」と「おそる」の意味の近さと、「おそる」の優勢、「おづ」の劣勢とを物語る事実である。

7.2 で見た通り、この時代「おづ」の劣勢は確かであるが、和文的性質の強い資料には少なからず現われている。格助詞は取らないものが多い。

(193) 主上は、ことに御くちびるの色もかはらせ給けり。おぢ させ給けるとぞ。(古今著聞集・12)

(194) これも鬼のしわざにやとぞ。世の人 おぢ ける。(古今著聞集・17)

上のように、「おづ」が表わすのは、恐ろしい属性を備えた対象によってもたらされる無意識的な恐怖で、身体的な反応を伴うことも多い。意味は、平安時代と変わらない。

7.4.6　対象格の分析のまとめ

いずれの種類の資料についても、当初の推測、すなわち、「おづ」は自然な営みによる動作を表し、「おそる」は意志的な営みによる動作を表すという、意味の違いは、確かめられたと言える。あわせて、「おづ」は、自己の領域や、間近にある、より具体性の高い事物を、対象としやすいのに対して、「おそる」は、他者の領域や、遠く大きい、より抽象性の高い事物を、対象としやすいことも分かった。これも、「おづ」が対象によって無意識のうちに心を動かされ、「おそる」が対象に向かって意識的に心を働かせる、という恐怖の心理動作のあり方の違いとして理解できる。また、細かくみれば、和文においては、「おづ」で表わす動作が、「を」を取る場合にやや意識的営みの領域にも広がっていること、鎌倉時代になると、「おそる」で表わす動作が、無意識的な営みの領域にいくぶん近づいていることも、はっきり見えた。

ところで、対象格に「に」を取る感情動詞と「を」を取る感情動詞の違いについては、現代語に関して、寺村 (1982: 142–43) が次のように整理している。

> 「〜ニオドロク」類の動詞は、感情そのものを表わすというよりも、感情が表情や身体の動きとなって外面に現れる点に重点があり、その動きが一時的

に生起し、次の瞬間には、あるいは暫くして、もとの（通常の）状態に戻るような性質をもったものである点に意味的な特徴がある。このような気の動きにとって一時的に問題となる補語は、感じ手のほかには「〜ニ」という形をとる「誘因」であった。これに対して、より純粋の心の感情の状態を描くものとして、ヨロコブ、ウレシイ、悲シム、悲シイ、愛スル、憎ムなどのことばがある。これらは大きく動詞のグループと形容詞、名容詞のグループとに分けられる。ここではまず動詞のグループを取り上げる。（「人ヲ愛スル／憎ム」など用例を挙げる。省略）　上のように、これらの動詞は、それぞれの感情の対象を補語として要求し、それは「〜ヲ」という形を取る。

本節で取り上げた「に」「を」をともに取る、「おづ」「おそる」は、寺村のあげる2類の動詞の境界あたりに連続して位置付いているものだろう。そして、「に」をよく取る「おづ」は、「〜ニオドロク類」の側にあり、「を」をよく取る「おそる」は、「人ヲ愛する／憎ム」の類の側にあると言えるだろう[5]。平安・鎌倉時代の「おづ」と「おそる」の意味の対立は、現代日本語にもある感情動詞の2類の間での対立と通じるものだと言えよう。

7.5　使われる文体の違いと意味の対立

7.5.1　「おづ」「おそる」のまとめ

複合動詞の考察から得た意味特徴（「おづ」は単純で急激な感情、「おそる」は広く複雑な感情）と、対象格の考察によって見出した意味特徴（「おづ」は無意識に心を動かされる、「おそる」は意識的に心を働かせる）とは、表裏一体のものである。なぜなら、広く複雑な心の営みは意志に基づいて行われ、単純で急激な心の動きは、外からの働き掛けによって無意識的に起こるとするのが、自然な考えだからである。「おづ」については平安和文で、「おそる」については鎌倉時代、各々の意味特徴が、他方の語の意味領域と考えられるところにまで広がりを見せるのも、複合動詞から得られた意味特徴と、対象格から得られた意味特徴とで、共通しているのである。

平安末期以後の「おそる」の一般化は、意味の広がりとともに進んでいったことが明確になり、「おそる」が漢の層から和の層へと近づいていくに当たっては、意味の変化を伴っていたのである。

7.5.2　「おそろし」との意味の関係

ところで、第3章で見たように、感情動詞「おそる」には、感情形容詞「おそろし」も対立している。この「おそろし」と「おそる」との対立と、「おづ」との関係について、

[5] 現代語「おそれる」は、「に」「を」どちらも取るが、このような例には寺村は言及していない。

『今昔』での使用実態を考察すると、次のような特徴があることが確認できる。用例を挙げた詳しい報告は、田中 (1995a,b) に譲り、ここには要点を記す。

1. 感情主の人称は、会話文・心内語では、「おそろし」は 1 人称で使われることが原則で、「おそる」「おづ」は人称の制限はないが 2 人称、3 人称が多い。また地の文では、いずれの語も登場人物（3 人称）に使われることが普通である。

2. 述部の形式は、終止法では、「おそろし」は形容詞単独で終止するか、終助詞や断定の助動詞「なり」を下接させて終止し、「おそる」「おづ」は、「けり」などの時制の助動詞が付いて終止する。接続法では、「おそろし」が様々な形式を取るのに対して、「おそる」「おづ」は、連用形に「て」「ながら」が付く形式などに限られる。また、接続法の後に続く語句は、「おそろし」は反射的な身体動作や消極的な心理が多いが、「おそる」は意識的で積極的な動作が多く、「おづ」はそのどちらも同じ程度ある。

3. 感情の誘因になる事物は、「おそろし」と「おづ」は具体物が多いが、「おそる」は抽象物や事が多い。

1. の感情主の人称では、「おそろし」と「おそる」「おづ」との間で対立が認められ、3. の感情の誘因になる事物では、「おそろし」「おづ」と「おそる」との間に対立が認められる。そして、2. の述部の形式では、「おそろし」と「おそる」とが明確な対立をなし、「おづ」はその中間にある。1. から 3. を総合すれば、「おそろし」と「おそる」の対立の中間に「おづ」がある。

「おそろし」と「おづ」、「おそろし」と「おそる」のような、同じ種類の感情を形容詞と動詞で表現し分ける場合の、意味的な対立については、第 6 章でいくつかの対で考察したのと同じで、2 類のうち B 類の語の様相を示す。本節で見たように、「おづ」と「おそる」のような、同じ種類の感情を同じ動詞の類義語で表現し分ける場合の意味的な対立も、形容詞と動詞とで表現し分ける場合と同じ体系の中にあると考えられよう。

「おそろし」「おづ」「おそる」は、意味的に層をなしていて、その中から 2 つを取り出して比較すれば、そこに意味的な対立が見られる。

7.5.3 「おそろし」との文体の関係

「おそろし」「おづ」「おそる」の、『今昔』と『源氏』の使用頻度を改めて示すと、表 7.6 の通りである [6]。

[6] この表における『今昔』の頻度は 7.2 節に記した数値、『源氏』の頻度は、『日本語歴史コーパス 平安時代編』を WEB 検索ツール「中納言」で検索した際の、ヒット件数である。

表 7.6: 『今昔』『源氏』の「おそろし」「おづ」「おそる」の頻度と比率（%）

資料	おそろし	おづ	おそる	計
『今昔』巻 1〜20	86(36.3 %)	13(5.5 %)	138(58.2 %)	237(100 %)
『今昔』巻 22〜31	119(75.8 %)	16(10.2 %)	22(14.0 %)	157(100 %)
『源氏』	119(83.2 %)	23(16.1 %)	1(0.7 %)	143(100 %)

表 7.6 の比率に着目すると、「おそろし」と「おづ」は、漢文訓読文の説話が多い『今昔』巻 1〜20 で値が小さく、和文の説話からなる『今昔』巻 22〜31 でそれが大きくなり、平安和文の『源氏』でいっそう大きくなっている。一方、「おそる」は、その順で値が小さくなっていく。したがって、「おそろし」「おづ」は、和の層に属すのに対して、「おそる」は、漢の層に属すと見ることができる。

なお、表 7.6 には、1 点注意が必要である。それは、『今昔』の「おづ」「おそる」は、送り仮名から確実に「おづ」「おそる」と読めるものだけを算入している点である。この表に示した数以外に、「おづ」「おそる」のいずれかであるものが、118 件（巻 1〜20：65 件、巻 22〜31：53 件）ある。3 拍語の「おそる」よりも 2 拍語の「おづ」の方が、送り仮名は書かれにくいという事情を考慮すると、その内訳は、読みの確実な例における「おづ」と「おそる」の比率よりも、「おづ」の比率が高く、「おそる」の比率が低くなると推測される。『今昔』の「おづ」の比率は、実際には、表 7.6 の数値よりも高くなると考えられる。

以上のことを総合して考えると、語彙の層については、「おそろし」「おづ」「おそる」の順で、和の層から漢の層への方向での段階差があったと見ることができる。そこから 2 語を取り出してみると、そこに使われる文体の差が鮮明に見えるのである。

7.6　まとめ

本章では、和語の同品詞同士で対立語になる例として、「おづ」「おそる」を取り上げて、複合動詞の構成要素と対象格の分析を通して、その意味を比較した。

その結果、「おづ」「おそる」には、使われる文体の違いと意味的な対立があることが分かった。文体によって、資料に現れる両語の勢力関係に変化があるが、その変化に応じて、「おづ」と「おそる」の意味の境界も変化することも分かった。このことは、文体の違いと意味の対立とが密接な関係を持っていて、文体か意味の一方が変動すれば他方も変動することを示すものだろう。

また、「おづ」「おそる」には、形容詞「おそろし」も深い関係を持っており、「おそろし」「おづ」「おそる」は、この順で和の層から漢の層へと段階をなして位置付いていて、意味の層も同じく 3 段階をなしていた。そこから 2 語を取り出して比較して見れば、それぞれが位置付く層の違いに応じて、文体の違いを示し、意味の対立を関係を持ってい

ることも確かめられた。

第 3 章で抽出した和語の同品詞同士で対立関係をなす対は他にも多く、感情にかかわる語に限らず、多様な意味に及んでいる。それらも、使われる文体の差とともに意味の対立を持つのではないかと予想される。他の対について比較することが必要である。

第8章　総合討議

ここでは、第3章から第7章までの考察を踏まえ、語彙の層状体系とは何か、語の対立とは何か、対立から層へ、文体から層へ、研究資料としての『今昔』とは何であったか、古典語の研究にコーパスを利用するとはどういうことなのかのそれぞれについて、総合的に本研究の議論と提言を行う。

8.1　語彙の層状体系

8.1.1　本研究で見えた3層

本研究では、次の2つの調査で、語彙の層状体系を見た。

第3章では、『今昔』巻12（漢文訓読文）と巻27（和文）という、文体（文章の種類）が違う語彙を相互に比較した。それによって、それぞれの特徴語を抽出し、文体の違いに基づく特徴語を判別し、それとほぼ同義である、他方の文体でよく使われる対立語を50対（3.4節の表3.12、 表3.13参照）特定した。その上で、漢文訓読語と和文語が対立するもの、漢文訓読語と基幹語（漢文訓読文にも和文にもよく用いられるもの）が対立するもの、和文語と基幹語が対立するものという、どの語彙とどの語彙の間で対立関係にある語が見つかるかによって、3つのタイプに分かれることを見た。この3つのタイプの対を並べることで、3層の語彙体系が見えた（3.4節 図3.5参照）。

第4章では、文体が相対的に異なる『今昔』と『宇治』の同文説話において、対応している語を相互に比較した。それによって、同じ内容を表すのに、一方の資料で採用され他方の資料で避けられる語を抽出し、他方の資料で決まった語が対応している対立語を特定していった。その作業によって、『今昔』で採用される語の側で対立のある対と、『宇治』で採用される語の側で対立のある対の2つのタイプがあることが分かった。その2つを並べることで、やはり3層の語彙体系が見えた（第4章 図4.3参照）。

第3章、第4章ともに、文体によって異なる語彙を比較したものだが、前者が文章の種類の違いに基づく調査であり、後者が用いられる文章の相対的な段階差に基づく調査である点で、相違もある。これらはそれぞれ、先行研究における、築島 (1963, 1969)、宮島 (1994) と立場を同じくする。

8.1.2　漢文訓読語と和文語の層

築島（1963）は、漢文訓読文の『慈恩伝』の全語彙を、和文の『源氏』の語彙と比較し、ほぼ同義の「二形対立」の語の対を 100 近くリスト化している。これは、本研究の第 3 章で得た 50 対と似た方法で抽出したものであり、漢文訓読語と和文語の層に属する語彙が得られている。築島の 100 対と本研究の 50 対を比較すると、重なっているのは「速やか―疾し」の 1 対だけである。築島が、漢文訓読文の文章の中でも特に漢の度合いが強い訓点資料を調査して、その反対の極にある『源氏』との対立を見たのに対して、本研究は、一つの和漢混淆文内部の漢文訓読文と和文とで対立を見た。築島の「二形対立」は、両極の間にある中間的な語彙の層を見ていないため、連続している層との関連から語の対立をとらえることはできていない。また、語の頻度差などの計量的分析が行われていないため、対立関係をなす語同士の距離も不明である。これに対して本研究は、両極ではない連続する層を見て、層のどこに語が位置付くかを推測した対立を見出した。また、語の頻度比較を行ったことで、対立語同士の距離も把握できた。3.4 節の図 4.3 に「対立語の層」の 3 つのタイプを指摘したが、これに築島の対立を重ねて示すと、図 8.1 になる。

基幹語など、漢か和かについて中立的な無色の語彙を第 3 層として中央に置き、漢の側に 2 段階（第 2 層、第 1 層）、和の側に 2 段階（第 4 層、第 5 層）とする。築島が示した二形対立は、両極の第 1 層と第 5 層に当たる。それは、『慈恩伝』の語彙を調査して、そこから『源氏』の語彙を見ているので、矢印は一方向だけを向いている。

築島 (1963, 1969) は、『慈恩伝』の語彙と『源氏』の語彙が違うことを言っているが、その相互の関係は研究していない。それらは語彙の層の両極であって、それらの間に連続する中間層があり、より大きな層状体系があることを指摘したのが本研究である。このように見てくると、平安時代における語彙の文体的な違いは、単純な、漢文訓読語と和文語の 2 つの対立にとどまるものではなく、和漢の軸で構成される多重の層である。

8.1.3　文章語・日常語・俗語の層

宮島 (1994) は、文章に書かれる語彙と日常会話の語彙との違いから、語彙に文体的な層を見る立場から、現代語の記述を行った。

> （品詞や言語単位などの分類と比べて）文体的特徴の分類はずっと微妙であって、白がしだいに灰色になり、黒になっていくようなものである。(宮島 1994: 213)

> ここで文体的価値というのは、単語が文章の中でしめす具体的効果（それはいちいちの文脈によってかわる）のことではなく、それが言語の単位として

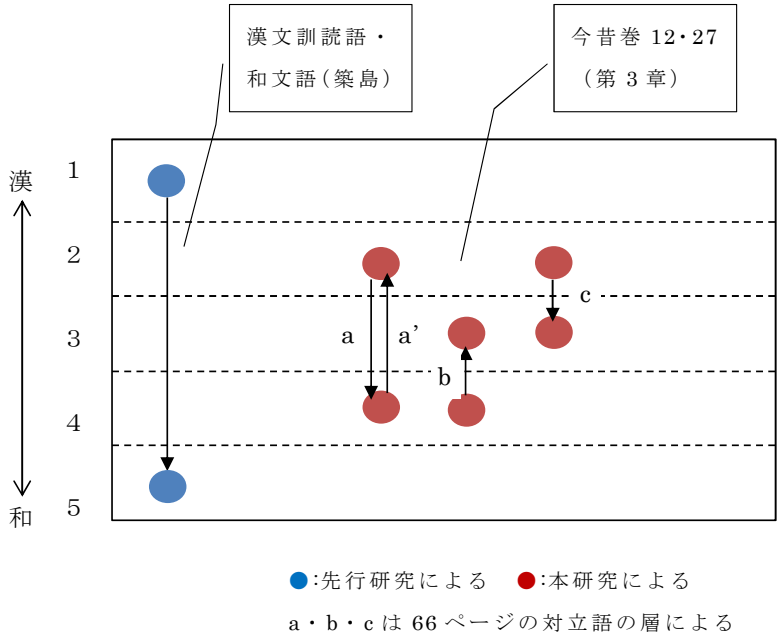

図 8.1: 語の対立と層（1）:平安時代の語彙は、第 3 層を中央に、漢の側に 2 層、和の側の 2 層の 5 層をなしている。赤丸の 3 対は、本研究第 3 章で見出した語の対立。a は漢文訓読文（『今昔』巻 12）の特徴語から和文（『今昔』巻 27）との対立語を見出したもので、a' はその逆。b は和文の特徴語から基幹語との対立語を見出したもの。c は漢文訓読文の特徴語から基幹語との対立語を見出したもの。青丸の対は、築島の「二形対立」を、上記の層状体系にあてはめたもの。

> もっている品位とでもいうべきいうべきものであり、その単語がどのような場面・文章のなかで使われるのがふさわしいかをきめる特徴である。(宮島 1994: 37)

> 単語に文体的な層があるのは、どの言語にもみられる普遍的な現象だろう。(宮島 1994: 282)

これは、本研究の第 4 章で、語彙の相対的な段階差を記述したのと同じ立場である。宮島が直接、語を扱っているのに対して、本研究は文章を資料にしているところは異なっているが、本研究の第 4 章の調査が同一内容の文同士の語と語を直接関係づけている点は、第 3 章の調査に比べて、語そのものを扱っている側面が強い。

そして、宮島は、ドイツ語など外国語の文体的価値についての研究 (Klappenbach 1960) を引いて、「文章語」「日常語」「俗語」の 3 つの層が、例えば、「わたくし—わたし—あたし」のように、類義語において対立しているとする。それぞれの定義は次の通りである。

> 「文章語」とは、もっぱらかきことばや、あらたまったはなしことばだけに

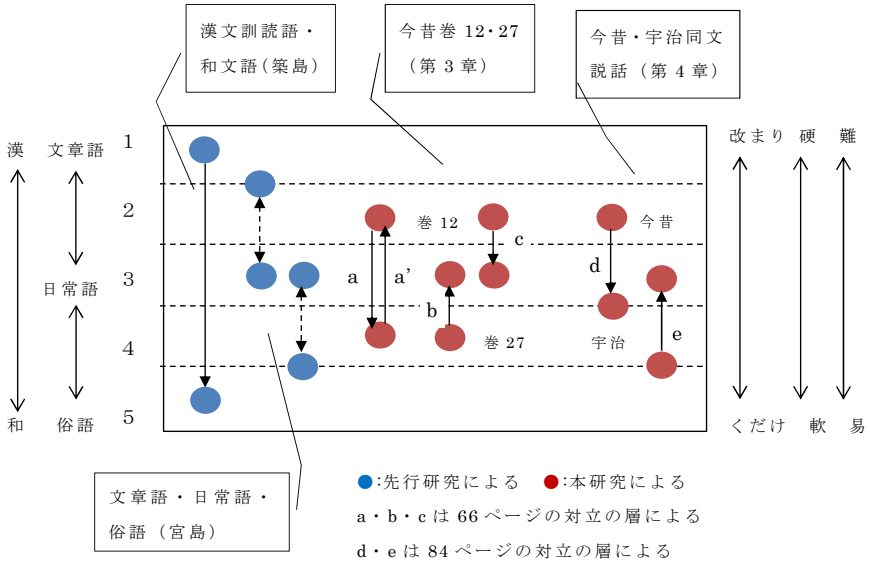

図 8.2: 語の対立と層（2）：図 8.1 に、本研究第 4 章で見出した『今昔』と『宇治』の同文説話で異語が対応する対立と、宮島の対立を描き加えた。描き加えた赤丸の 2 対のうち、d は『今昔』の特徴語から『宇治』の語との対立語を見出したもの、e は『宇治』の特徴語から『今昔』との対立語を見出したもの。『今昔』と『宇治』の対立は和漢の軸による層とは限らず、改まり・くだけ、硬軟、難易などいくつかの軸が想定される。描き加えた青丸の対は、宮島による現代語の「文章語・日常語・俗語」の対立を、本研究の層状体系にあてはめたもの。宮島は内省で対立を導き出しているので点線で結んだ。

> つかわれるものである。「日常語」とは、積極的な文体の特徴をもたず、どのような種類のはなしことば、かきことばにも自由につかわれる中立的な層である。「俗語」とは、かきことばにはあらわれず、もっぱら、くだけた、下品なはなしことばでつかわれるものである。(宮島 1994: 282)

図 8.1 に、宮島の指摘する文章語・日常語・俗語の対立と、本研究の第 4 章で把握した『今昔』と『宇治』の同文説話の比較から得られた対立を、描き加えると、図 8.2 になる。宮島による語の対応付けは、調査に基づいたものではなく内省によって対立を想定したものなので、点線で表現し、矢印は双方向に向いている。

8.1.4　語彙の層の見方

上述のように、築島と宮島は、同じく文体による語彙の違いを研究したものでありながら、その立場を異にしている。しかし、築島の次の記述からは、宮島の考え方に近い側面もうかがわれる。

> 訓読特有語彙は、当時として一種の文語語彙であったと認められる。恰も現代語に於て「こんなに」に対して「かように」「おしえる」に対して「教示す

る」のような関係にある。(築島 1969: 577)

この種の言語（引用者注：平仮名文の世界の言語＝和文の言語）は、多くは平安時代に於ける貴族の日常会話の用語に近いものであった。(築島 1969: 13)

つまり、築島は、漢文訓読語と和文語の違いは、文語語彙（書かれる語彙）と日常会話の用語の違いだと見ており、これは、宮島のいう文章語と日常語の違いに対応する。文体から語彙を見る見方は異なっている築島と宮島であるが、個々の語が実際に持っている性質については、共通する見方をしているのである。

このことは文体への見方が異なっていても、それぞれの見方で整理した語彙の実際を見ていくと、結果的に同じような体系をなしていることを予想させる。図 8.2 に描かれた、文体から見た語彙の層は、多様な要因が複合していても、何らかの秩序を持ったひとつの体系なのではないかと考えられる。

築島や宮島の研究や本研究によって把握した語の対立関係の背後に見える層は、漢か和かの軸によるだけでなく、書き言葉か話し言葉か、改まっているかくだけているか、硬いか軟らかいか、難しいか易しいか、など様々な軸が想定される。どの観点がより本質的なものであるかは、分からない。しかし、文体の観点から見れば、語彙はこのような層状の体系をなしていると想定されるのである。

8.1.5 各層に属する語

第 1 層から第 5 層へと漢の層から和の層へという方向で移行していくわけだが、和漢混淆文の『今昔』には、主に第 2 層から第 4 層の語彙が反映していると見られ、天竺震旦部だけに限られる語など、第 1 層のものもあっただろう。同じく和漢混淆文でありながら『今昔』よりも和文的な『宇治』では、第 2 層の語彙がいくらか減って、その分第 5 層の語彙がいくらか加わっているだろう。『源氏』など平安和文には第 3 層から第 5 層、『慈恩伝』など訓点資料には第 1 層から第 3 層の語彙が、それぞれ反映していると予想される。本研究で実際に調査を行った『今昔』巻 12 と巻 27、『今昔』『宇治』の同文説話 6 対、そしていくつかの個別事例のほかにも、語がよく使われる文体の違いを分析することで、各層に属する語を特定し、語彙体系の実際を見ていくことができるだろう。一例として、本研究で特定できた語をもとに、各層にどのような語が属しているかを、語種の観点から見てみよう。

第 1 層や第 2 層には漢語が多く、第 4 層や第 5 層には和語が多いと予想される。第 3 章で、層に位置付けることのできた対立関係にある 20 対を見ると、第 2 層には、和語 11 語に対して漢語・混種語 4 語、第 4 層には、和語ばかり 18 語が位置付いている。漢語・混種語がすべて第 2 層に属するのは予想通りと言えるが、第 2 層もその多くが和語であ

ることは、予想に反していよう（第 3 層は和語ばかり 7 語が位置付く）。第 4 章で抽出した、『今昔』でよく使われ『宇治』で避けられている、第 2 層の中でも第 1 層寄りの語彙は、漢語は 7 語中 1 語にとどまり、それ以外の層に属することが見えた他の語もすべて和語であった。これらの語彙抽出の作業の対象は、高頻度や中頻度の語彙であり、この時代によく使われる語彙は、第 2 層から第 4 層では、どの層においても、和語が大部分だったということである。和語は広い層に分かれて分布していることが見てとれ、各層における和語にどのような違いがあるかを、調査していくことが必要だろう。

8.2　語の対立とは何か

8.2.1　語の対立に関する先行研究

築島 (1963: 350) は、漢文訓読語と和文語の対立を、「表現者の表現態度の相違」によって対立する「二形対立」だと指摘したが、その「表現態度の相違」がどのようなものであるかは、説明していない。宮島 (1994) は、「文章語」「日常語」「俗語」の対立について、そこに意味の差があることを指摘している。

> 日常語と文章語との意味的な対応について一般的にいえることは、文章語の方が意味的に限定されていることが多い。(宮島 1994: 238)

> 文章語が日常語にくらべてかたよりがちな分野・方向というのは、（1）大規模なことがら（2）公的なことがら（3）抽象的なことがら（4）よいことがらなどである。(宮島 1994: 242)

> その（引用者注：俗語の）意味との対応関係も（文章語に比べて）ずっとかんたんだ。（中略）動詞についていえば、俗語は日常語にくらべて、あらあらしい動作にかたよっている、ということにつきる。(宮島 1994: 266)

8.2.2　意味の対立

本論文の第 5 章から第 7 章では、使われる文体に明瞭な差がある語同士が、意味的な対立関係も持つことを見てきた。

第 5 章の 5.3 節で見た、「祈る」と「祈請す」「祈念す」「祈り請ふ」との対立は、図 8.2 の第 3 層と第 2 層の対立と見られるが、そこには、第 3 層の「祈る」の持つ広い意味を、第 2 層の 3 語が、細かく言い分ける対立が見出された。これは、宮島の言う「文章語の方が意味的に限定されている」というところに、相当しよう。

第7章で扱った「おづ」と「おそる」の対立も、第3層と第2層の対立だと見られる。第2層の「おそる」は第3層の「おづ」に比べて、広く複雑な感情、意識的に心を働かせる、という意味上の特徴を持ち、快の感情を持つ動詞と結合したり、抽象的な事柄や大きな力を持つ存在を対象に取りやすい、という用法上の特徴を示していた。これらは、第2層に位置付く語の方に、宮島の言う「大規模なことがら」「抽象的なことがら」「よいことがら」という偏りがあることを示すものだろう。

このように見てくると、本研究で見出した、使われる文体に差がある語における意味の対立も、現代語にも通じる、日本語の語彙の一般的なあり方と共通していることが分かる。一方、宮島の指摘には当てはまらない意味の対立を示すものもある。第5章の5.4節で見た、評価形容詞「あさまし」と「奇異」、同じく「めでたし」と「微妙」の対立は、第4層と第2層の対立だと考えられるが、第4層の「あさまし」「めでたし」は、対象そのものを評価するのに対して、第2層の「奇異」「微妙」は、対象を他の物事と関係づけて分析的に評価するという違いがあった。このような意味の違いは、宮島は触れていない。

また、第6章で扱った感情形容詞と感情動詞の対立のうち、『源氏』で、形容詞比率が高く動詞比率が低く、『今昔』の本朝世俗部（和文の説話が多い部分）で形容詞と動詞の比率に差の小さい、「悲し」と「悲しむ」などB類とした対は、第4層と第2層の対立だと見られる。このB類において、第4層の「悲し」などが、自己の視点の表現、第2層の「悲しむ」などが、他者の視点での表現という対立があったが、この自己視点と他者視点の対立についても、やはり宮島は言っていない。

このように、使われる文体に差のある語の意味的対立について、現代語の研究では明らかになっていない事実も、本研究によって指摘した。このような意味の対立が、語彙の層の違いとどこまで対応するのか、その現象の広がりや原理について、多くの事例を取り上げて研究を展開していくことが期待されよう。その際には、文体的な観点によるものに限らず、語の意味の対立についての先行研究との関連を研究していく必要がある。

また、現代語の宮島の研究は、主に内省に基づくものであり、これを現代語のコーパスデータから帰納して行えば、現代語における、語の対立が、より精細に見えてくる可能性もある。コーパスデータを使った、語の対立についての、平安時代語と現代語との対照研究や史的研究の領域も広がっていよう。

8.2.3　文体によって使われる語が異なる理由

本研究の結果、使われる文体が異なる語には、意味の対立が伴うことが分かった。古典語の研究においては、現代人の分析では、本当の当時の意味が扱えないため、用いられる文体の異なる対を比較して、語の対立を見たが、その対立の本質は文体よりも意味にあると考える。平安時代の文体による語彙の違いに関して、文体の違いよりも意味の

違いを重視する先行研究に、関 (1993, 2009) がある。関は、「おづ」「おそる」の対も取り上げ、その意味の差異が、平安和文に「おづ」が多く「おそる」がほとんどないという結果をもたらしたとする。

> 「おそる」が〈恐縮スル〉意の心理動作であるのに対し、「おづ」は後述する通り、それが態度に表れて、〈オズオズトスル〉動作の表現である。（中略）「おそる」は心理動作語であって、具体動作を通して登場人物の心理を描き上げることを基本とする平安和文には、馴染まない語であったのである。(関 2009: 182-184)

「おそる」が和文に使われない理由を、漢文訓読語だからとする従来の考えを退け、語の持つ意味にそれを求めた点が新しい。しかし、「おづ」は、「態度に表れ」た「動作の表現」とは言えず、やはり心理動作を表す語であることは、本研究の第 7 章に述べた通りである。「おそる」が和文に使われないのは、心理動作語であるからではなく、「おづ」との違いを意味的に区別することによって、図 8.2 の第 2 層の中でも第 1 層に近いところにそれが位置するからだと考えられる。

文体によって使われる語が異なる現象の背後に、意味の対立があるとする関の主張に賛同するが、和文はその意味を避けるためにその語を意図的に使わなかったとする関の説明には従えない。語の対立関係が、語彙の層と密接な関係を持ち、「おそる」が漢の側に寄った層にあったことが、和文にこの語が見えない理由だろう。関が意味そのものに、資料への出現状況の偏りの要因を求めているのに対して、本研究は、語と語の意味による対立が、層における語の位置を決め、そのことが、資料への現れ方の偏りをもたらしていると考えるのである。

8.3　対立から層へ

第 5 章で、第 1 層の語は、類義語との対をつくりにくく、第 2 層から第 4 層にある語の間で、語の対立は形成されやすいことを見た。第 1 層にあるうちは、語彙体系に組み込まれにくく、対になる語との関係もつくられにくいのだと思われる。第 2 層に入り込んでくれば、第 3 層の語との間で対を構成し、語彙体系の形成に参加してくるようになる。このような、語彙の層と語の対立の関係は、第 5 章で見た、漢語の日本語語彙における位置からうかがうことができた。第 7 章で扱った「おそる」も、平安後期までは第 1 層に近いところにあったため、和文にはほとんど用いられなかったのが、平安末期にいたって第 2 層に入り込み、「おづ」や「おそろし」との間で明確な対立が形成されるとともに、安定して用いられるようになったと考えられる。遠く隔たった層に属する語は、同一の文章では使われにくかったため、それらを使い分けるような、意味の対立が形成される

機会はなかっただろう。近い層に位置付いたところで意味の対立が生じるのは、語と語の相互の関係が意識され、一緒に使われる中で意味の関係も決まっていくからだろう。

一方、同じ層に属する語同士には、異なる層に位置付く語同士に比べて、意味の対立が見えにくいということもある。例えば、第 6 章で扱った、感情形容詞と感情動詞の対には、使われる文体の差が比較的小さい A 類（「惜し」「惜しむ」など）と、比較的大きい B 類（「悲し」「悲しむ」など）とがあったが、図 8.2 の層状体系にあてはめると、A 類は第 4 層と第 3 層の対、B 類は第 4 層と第 2 層の対だと考えられる。各類で感情形容詞と感情動詞の意味を比較すると、その対立は、A 類よりも B 類で顕著に見えた。属する層が近過ぎると、意味の対立が見えにくいこともあるのである。

語彙の層は、意味の対立を持つ語の対の存在によって確かなものに見え、語が属する層が遠く隔たっているわけでもなく、また隣り合っているわけでもない、適度な距離の関係にあるときに、語と語の間に意味の対立関係を生じやすいと見ることができそうである。これらのことは、本研究で見た語彙の層が、語彙体系における意味の問題と関わるものであることを示唆している。当時の語の意味を直接見ること、すなわち絶対的な意味の記述はできない。しかし、対になる語同士を比較し、相対的な関係を見つけることによって、層と層の境目を見ることはできた。絶対的な意味記述ができない古典語について、語の対を相対的な意味の構造記述の手段として意味の対立を記述し、その対立の間に見られた境目の位置が連続的な層をなしている様子を見たのである。

8.4　文体から層へ

従来は、平安時代の文体が二極をなしていたことから、その時代の語彙も二極をなしている様子が記述されてきた。本研究は、語彙は二極をなすのではなく連続的なものであると考え、その連続性を説明するモデルとして層を提示した。層のモデルで語彙を考えることは、従来の文体の違いによる語彙を考えることと比べて、次のような利点があると考える。

文体から語彙を見るのには少なくとも 2 つの立場があり、本研究ではその 2 つの立場から調査を実施し、その結果を図 8.2 の 1 つの層状体系として描いた。このことによって、多面的な性質を持つ「文体」を、一つの面上でとらえることができるようになる。層にすることで、漢文訓読文や和文などの種類、硬軟ほかの価値づけといった、文体にかかわる具体的な性質を捨象して、語の相対的な段階差に抽象化することを可能にしてくれる。

例えば、日本語の語彙に漢語がどのように入ってきたかの研究は、山田 (1935b) 以来、語形や意味が、どのように日本語化したかという観点で記述が進められてきたが (佐藤 1971, 松下 1988, 浅野 1988)、層の視点を取り入れることで、語彙の層のどこまで入り込

表 8.1: 『今昔』の 2 字漢語サ変動詞の層: 第 5 章 5.2 節参照

層	層分けの基準	段階	段階分けの基準	語数	例
A	漢文訓読文の説話	(1)	天竺震旦部に限られる	4	修治す
	にだけ使われる	(2)	本朝仏法部にもある	20	読誦す
B	漢文訓読文の説話に多く	(1)	本朝仏法部までしかない	9	往生す
	和文の説話にもある	(2)	本朝世俗部にもある	16	供養す
C	和文の説話に多い	(1)	漢文訓読文の説話にもある	4	懐妊す
		(2)	和文の説話に偏る	2	仮借す

んでいるのかという見方での漢語の記述を進める可能性が開かれた。

5.2 節で取り上げた頻度の高い 2 字漢語サ変動詞の、『今昔』における漢文訓読文の説話と和文の説話への分布状況の考察から推測した漢語の層は、表 8.1 である。これら 3 層 6 段階は、漢文訓読文か和文かの軸での、使われる文章の種類による語彙の違いを見ているので、図 8.2 と同じような層状の構成であると考えてよいだろう。ただし、図 8.2 と表 8.1 の各層がどう対応するかは明確にできない。

頻度の低い漢語や他の品詞の漢語を調査すれば、おそらく和の層には及ばない漢語が非常に多く指摘できるだろう。漢語の多くは、表 8.1 の A 層、図 8.2 の第 1 層や第 2 層に位置付いていると予想される。岡島 (2009: 109) が、漢語の研究史を踏まえながら研究の必要性に言及している、「語源的には漢語であってもふるまいとしては和語と同様である（あるいはその逆）、というようなもの」を明確化する研究もできるようになる。

「悲しむ」と「悲し」、「おそる」と「おづ」のような、漢文訓読語と和文語の対立と言われてきたものについて、対をなす個々の語がどの層に属するかを確かめることで、相互の関係を記述することができるようになる。文体による語彙の違いを、語彙体系の中で説明するのにも、層のモデルは有効である。

8.5　研究資料の『今昔物語集』とは何か

以上のように、本研究は平安時代の語彙に層があることを想定し、その層が反映した対立関係にある語の対を数多く抽出した。これは、資料に『今昔』を用いたことによって実現できたことである。

築島は、漢文訓読文と和文という両極にある文体間の語彙の比較を行ったために、その相違面を見ることが中心となり、その連続面に目が向けられなかった。『今昔』の語彙研究も、前半の巻と後半の巻に漢文訓読語と和文語が分かれて存在することを指摘する「かなり安易なものに陥りがちな危険性をはらんでいた」(佐藤 1984: 22) 研究動向が長く続いていた。佐藤によれば、研究史の流れを変えたのは、『今昔』全巻に渡って一貫しているのがどの文体の語彙・語法であるかという問題設定をした山口 (1966) の研究である。山口は、和化漢文の語彙・語法が『今昔』に一貫していることを主張したが、その後は、

全巻を通じて用いられる語彙・語法が、和化漢文のそれか、漢文訓読文のそれか、和文のそれかといった、『今昔』の文体の出自を求める、同じような問題設定の研究動向が続いてきた (田中 2006)。舩城 (2011) は、それらすべての文体の語彙・語法が、『今昔』を一貫するものとして流れ込んでいて、『今昔』は、新しい文体を形成しているという新しい主張をしたが、『今昔』で共存している出自の異なる語彙や語法が、どのような体系をなしているかは、問題にされていない。

本研究は、文体による語彙の層というものを想定した上で、その層の上で、語が相互に対立し合っている語彙体系を具体的に記述し、対立が生じている事情や背景を説明してきた。これは、従来の『今昔』研究になかった方向性を示すものである。

『今昔』以前、すなわち、和漢混淆文の成立以前は、一つの資料の中で見える語彙の層の範囲は限定的で、どうしても、漢の層の側だけの語彙、和の層の側だけの語彙を、それぞれ別々に記述することになりがちである。ところが、和漢混淆文の『今昔』では、一資料の中で広範囲の層の語彙が分析できるので、語彙の層を背景とした語彙体系の研究を行うのに、恰好の資料である。従来の『今昔』研究は、その資料の価値を十分に生かせていなかった。日本語史上の最初の本格的和漢混淆文資料である『今昔』を分析して見えた語彙の層や対立の姿は、平安時代語のそれを反映している可能性が高いだろう。

また、説話集の持つ、依拠資料に基づいて自らの作品を書いているという特徴も、語彙の層や対立を研究するのに有利である。第 4 章で行った、『今昔』と『宇治』のパラレルコーパスは、層と対立を浮かび上がらせるのに極めて有効であった。『宇治大納言』以外の依拠資料の語彙との関係、特に漢文資料の語彙との比較を行っていくことが、有望な研究となるだろう。例えば、第 6 章で、「悲し」「悲しむ」の用法は、漢文の依拠資料の影響を選り分けて残ったところに、日本語としての明確な対立が浮かび上がることを見たが、異言語である中国語との接触によって生じた語彙の現象を、語彙の層と関係付けて記述していくことも重要だろう。

8.6 古典語研究におけるコーパスとは何か

古典語の研究に、コーパスを本格的に利用したことも、本研究の特徴の一つである。特に、形態素解析コーパスを作成し、語彙頻度を集計し、文体の異なる資料同士の頻度を比較して得たデータから、語彙の層を見て、語の対立を導き出したところが、最大の特色であり、従来の研究になかった新しい方法である。

平安時代の文体による語彙の対立は、築島の研究があったが、漢文訓読語の語彙調査には、十分な計量的処理は施されておらず、それと対立関係にある語の特定についても、その手順はほとんど説明されていなかった。本研究で、コーパスから得られるデータを、手順を明示して処理していったことで、築島の発見が、より広い範囲で多くの語につい

て確認できることを示した。コーパスデータを用いることで、対立関係をなす語にある層や、相互の距離なども、推測することができた。

本研究で実際に行った作業は、『今昔』巻 12 と巻 27 の比較、『今昔』と『宇治』の同文説話 6 対の比較に限られるが、今後資料を変えて同様の作業を重ねることで、文体による語彙の層や対立の全体像や、その細部の実際を明らかにしていく研究が可能になっていくだろう。

また、語の意味の対立を記述するために行った意味の研究についても、従来の古典語研究とは異なる新しい方法を採った。例えば、動詞の場合は、格助詞や格関係を構成する語句を、コーパスデータから網羅的に取得して、一貫した枠組で分類したデータを、相互に比較することで、意味の対立がどこに見られるかを記述していった。また、形容詞の場合は主語や対象語を、感情表現の場合は感情の誘因となる語句を、それぞれ同じように網羅的に分類することで、意味記述につなげていった。

従来の古典語の語の意味研究は、作品における個々の例の解釈に基づいて行われることが一般的で、研究者の主観を免れないところがあった。例えば、古典に現れる語の意味は知らず知らずのうちに、現代語の意味を前提に考えてしまう。現代人に古典語の意味は直感的に分かるわけでない。むしろ、意味は不明という前提から研究を始めるべきである。コーパスによる研究法は、本来古典研究でとるべき、「研究者の主観」を排除する方法論と言えよう。本研究では、研究対象の語が文の中で関係を持っている他の語句（共起語句）を、手順を明示して抽出・分類していくことで、客観的で斉一な枠組での意味記述や、意味比較を可能にしていった。

8.7　研究結果による今後の展望

最後に、本研究を行った結果を踏まえて、これからの平安時代日本語の語彙研究を展望すると、次の 4 点にまとめられる。

1. 平安時代の語彙には、文体から見た層状の語彙体系が想定できる。この時代の語彙研究は、これまで文章の種類別に行われてきたが、今後はそれらを統合する層状の語彙体系を想定して、記述を行っていく必要がある。

2. 文体の軸で層をなす語彙体系は、語の対立を通して見えるが、その対立は、これまで研究されてきたような、漢語と和語の対立、漢文訓読語と和文語の対立のような単純な対立だけではない。対立関係にある語の対を、幅広く拾い上げて記述していくことが求められる。

3. 本研究が扱った語彙体系は、文体の軸に基づくものだが、語彙体系には文法など別の軸も深く関与していると予想される。別の軸による語彙体系は、層状をなしてい

るかどうかは分からない。

4. 過去の時代の語彙を研究する場合、内省や解釈による記述ではなく、コーパスデータに基づく、観点を定めた比較の方法を採ることが有効である。扱う資料や扱う語に応じた比較の観点を工夫していくことが望まれる。

第9章　結語

平安時代の語彙を対象に本研究を行った結果、第1の仮説である「語彙は、文献資料への現れ方に応じて分類すれば、層をなしているのが見える」については、次のことが明確になった。

まず、『今昔』巻12（漢文訓読文）と『今昔』巻27（和文）の2つにどのように現れるかを見ることによって、漢文訓読文の特徴語と和文の特徴語の2つの層を見出すことができた（第3章）。

次に、同一内容を異なる文体で書いた『今昔』（より漢文訓読的）と『宇治』（より和文的）の同文説話で、相互に語がどのように対応しているかを見ることによって、2つの語彙の層と、それぞれの層の中での段階差を見出すことができた（第4章）。

さらに、『今昔』全巻の漢文訓読文の説話と和文の説話にどのように現れるかを見ることによって、2字漢語サ変動詞に3層6段階の層があることが確認できた（第5章）。

そして、『今昔』『源氏』『慈恩伝』など文体の異なる資料に、感情形容詞や感情動詞がどのように現れるかを見ることによって、それらの語彙が、2つまたは3つの層に分かれていることが見えた（第6章、第7章）。

これらのことを総合し、先行研究と関連付けることで、平安時代の語彙に5つの層を想定した。この5つの層を背景とすることで、語の対立を中心とする語彙体系が説明しやすくなることを見た（第8章）。

以上のことから、第1の仮説は証明され、語彙の層の存在が見えた。

第2の仮説である、「語彙の層は、漢と和の2つの要素の対立において明瞭に見える」については、次のことが確かめられた。

第1の仮説についての結論のうち、『今昔』巻12と巻27の語彙の比較から得た、漢文訓読文の特徴語と和文の特徴語の多くには、それぞれ、ほぼ同義の、和文によく使われる語、漢文訓読文でよく使われる語が対立していることが確認された（第3章）。

同じく、『今昔』と『宇治』の同文説話の比較から抽出した、別々の層にある語には、それぞれ異なる層にあるほぼ同義の語が対立している場合が多いことが確認された（第4章）。

『今昔』で3層6段階に分類された2字漢語サ変動詞は、両極の層にあるもの以外は、異なる層にある和語との間に、意味的な対立を持つ場合が多いことが確認された。また、対立の鮮明度が、どの層にあるかによって変わることも分かった（第5章）。

和語同士（例えば、感情形容詞と感情動詞）の対において、異なる層にある語の間で対立が多く見られ、そこには意味の対立が明確に存在していることを確認した（第 6 章、第 7 章）。このことから、層の違いを背景とする対立は、漢語と和語という対立だけにとどまるものではなく、和語同士でも確認できた。

対立はいつでもどこでも見つかるものではなく、背景に層が見える語であっても、対立語が見つからないものも多かった。

以上のことから、語彙の層は対立において明瞭に見えることが説明された。しかし、層が見えるところに必ず対立が存在するわけではなかった。そして、その対立は漢と和の要素間にあることもあるが、和語と和語の間にあることも多かった。

付 録A　語彙表

A.1　和漢混淆文の基幹語

A.2　『今昔物語集』巻12の特徴語

A.3　『今昔物語集』巻27の特徴語

表 A.1: 『今昔』の巻 12・巻 27 の基幹語（両巻でともに高頻度語彙）1–50：「読み」は現代仮名遣い・口語法で示し、「語」は歴史的仮名遣い・文語法で示した。

No.	品詞	読み	語	巻 12 頻度	巻 27 頻度	計	巻 12 レベル	巻 27 レベル
1	名詞	アイダ	間	123	34	157	高	高
2	名詞	アワレ	哀れ	10	14	24	高	高
3	名詞	イエ	家	37	88	125	高	高
4	名詞	イマ	今	82	74	156	高	高
5	名詞	イン	院	16	31	47	高	高
6	名詞	ウエ	上	25	26	51	高	高
7	名詞	ウシ	牛	34	14	48	高	高
8	名詞	ウチ	内	43	37	80	高	高
9	名詞	ウマ	馬	20	55	75	高	高
10	名詞	オト	音	8	9	17	高	高
11	名詞	オニ	鬼	11	47	58	高	高
12	名詞	オンナ	女	17	111	128	高	高
13	名詞	カタ	方	21	58	79	高	高
14	名詞	カタチ	形	13	14	27	高	高
15	名詞	カタワラ	傍ら	11	12	23	高	高
16	名詞	カミ	守	11	23	34	高	高
17	名詞	カワ	川	18	20	38	高	高
18	名詞	キ	木	34	26	60	高	高
19	名詞	キョウ	京	9	32	41	高	高
20	名詞	クニ	国	74	38	112	高	高
21	名詞	クルマ	車	10	14	24	高	高
22	名詞	ケウ	希有	11	12	23	高	高
23	名詞	コ	子	9	30	39	高	高
24	名詞	コエ	声	57	31	88	高	高
25	名詞	コオリ	郡	30	9	39	高	高
26	名詞	ココロ	心	81	37	118	高	高
27	名詞	コト	事	325	224	549	高	高
28	名詞	サキ	先	14	18	32	高	高
29	名詞	シ	師	13	16	29	高	高
30	名詞	ソウ	僧	98	9	107	高	高
31	名詞	チゴ	稚児	21	13	34	高	高
32	名詞	テ	手	18	23	41	高	高
33	名詞	ドウ	堂	25	21	46	高	高
34	名詞	トキ	時	113	73	186	高	高
35	名詞	トコロ	所	102	92	194	高	高
36	名詞	トシゴロ	年頃	30	13	43	高	高
37	名詞	トモ	共	9	10	19	高	高
38	名詞	ナ	名	10	9	19	高	高
39	名詞	ナカ	中	51	21	72	高	高
40	名詞	ニシ	西	14	26	40	高	高
41	名詞	ノチ	後	105	60	165	高	高
42	名詞	ハコ	箱	27	15	42	高	高
43	名詞	ハシ	橋	8	27	35	高	高
44	名詞	ハハ	母	21	18	39	高	高
45	名詞	ヒ	日	29	34	63	高	高
46	名詞	ヒ	火	12	32	44	高	高
47	名詞	ヒガシ	東	10	27	37	高	高
48	名詞	ヒト	人	232	267	499	高	高
49	名詞	ヒトリ	一人	33	46	79	高	高
50	名詞	フタリ	二人	13	32	45	高	高

表 A.2: 『今昔』の巻 12・巻 27 の基幹語（両巻でともに高頻度語彙）51–100

No.	品詞	読み	語	巻 12 頻度	巻 27 頻度	計	巻 12 レベル	巻 27 レベル
51	名詞	ホド	程	45	125	170	高	高
52	名詞	ホトリ	辺	15	16	31	高	高
53	名詞	マエ	前	33	11	44	高	高
54	名詞	マコト	真	28	29	57	高	高
55	名詞	ミ	身	37	20	57	高	高
56	名詞	ミズ	水	27	13	40	高	高
57	名詞	ミチ	道	33	13	46	高	高
58	名詞	ミナ	皆	67	39	106	高	高
59	名詞	ムカシ	昔	54	53	107	高	高
60	名詞	メ	目	8	12	20	高	高
61	名詞	モト	元	53	48	101	高	高
62	名詞	モノ	者	32	93	125	高	高
63	名詞	モノ	物	36	89	125	高	高
64	名詞	ヤマ	山	69	23	92	高	高
65	名詞	ヨ	夜	12	46	58	高	高
66	名詞	ヨ	世	41	15	56	高	高
67	名詞	ヨウ	様	18	62	80	高	高
68	名詞	ヨシ	由	16	11	27	高	高
69	名詞	ワラワ	童	29	28	57	高	高
70	数詞	イツ	五	8	11	19	高	高
71	数詞	ヒト	一	34	11	45	高	高
72	数詞	ミ	三	9	16	25	高	高
73	代名詞	イカ	如何	34	65	99	高	高
74	代名詞	イズコ	何処	9	15	24	高	高
75	代名詞	カ	彼	45	31	76	高	高
76	代名詞	コ	此	329	193	522	高	高
77	代名詞	コレ	此れ	335	113	448	高	高
78	代名詞	ソウ	其	325	276	601	高	高
79	代名詞	ソレ	其れ	41	53	94	高	高
80	代名詞	ナニ	何	18	17	35	高	高
81	代名詞	ワレ	我	123	42	165	高	高
82	動詞	アウ	会ふ	21	19	40	高	高
83	動詞	アウ	合ふ	13	9	22	高	高
84	動詞	アケル	明く	13	23	36	高	高
85	動詞	アゲル	上ぐ	24	18	42	高	高
86	動詞	アツマル	集まる	9	10	19	高	高
87	動詞	アヤシム	怪しむ	28	12	40	高	高
88	動詞	アル	有り	355	409	764	高	高
89	動詞	イウ	言ふ	416	376	792	高	高
90	動詞	イク	行く	66	161	227	高	高
91	動詞	イソグ	急ぐ	8	16	24	高	高
92	動詞	イダス	出す	22	11	33	高	高
93	動詞	イズコ	出づ	62	87	149	高	高
94	動詞	イル	居る	35	81	116	高	高
95	動詞	イル	入る	40	67	107	高	高
96	動詞	イル	率る	14	17	31	高	高
97	動詞	イレル	入る	30	31	61	高	高
98	動詞	ウケル	受く	30	12	42	高	高
99	動詞	ウス	失す	17	34	51	高	高
100	動詞	ウツ	打つ	34	53	87	高	高

表 A.3: 『今昔』の巻 12・巻 27 の基幹語（両巻でともに高頻度語彙）101–150

No.	品詞	読み	語	巻 12 頻度	巻 27 頻度	計	巻 12 レベル	巻 27 レベル
101	動詞	エル	得	33	18	51	高	高
102	動詞	オク	置く	24	30	54	高	高
103	動詞	オズ	怖づ	9	19	28	高	高
104	動詞	オソレル	恐る	8	13	21	高	高
105	動詞	オドロク	驚く	11	17	28	高	高
106	動詞	オボエル	覚ゆ	18	41	59	高	高
107	動詞	オモウ	思ふ	156	207	363	高	高
108	動詞	オリル	下る	13	13	26	高	高
109	動詞	オワシマス	御ます	22	12	34	高	高
110	動詞	カエス	返す	13	25	38	高	高
111	動詞	カエル	返る	56	65	121	高	高
112	動詞	カク	掻く	12	32	44	高	高
113	動詞	カケル	掛く	19	24	43	高	高
114	動詞	カタル	語る	60	70	130	高	高
115	動詞	キク	聞く	116	67	183	高	高
116	動詞	キタル	来たる	87	54	141	高	高
117	動詞	キル	着る	9	12	21	高	高
118	動詞	クウ	食ふ	23	13	36	高	高
119	動詞	グスル	具す	9	23	32	高	高
120	動詞	クダル	下る	13	17	30	高	高
121	動詞	クル	来	24	63	87	高	高
122	動詞	コタエル	答ふ	25	21	46	高	高
123	動詞	コロス	殺す	8	15	23	高	高
124	動詞	サル	然り	28	44	72	高	高
125	動詞	サル	去る	27	22	49	高	高
126	動詞	シカル	然り	184	105	289	高	高
127	動詞	シヌ	死ぬ	25	39	64	高	高
128	動詞	シル	知る	72	60	132	高	高
129	動詞	スギル	過ぐ	12	30	42	高	高
130	動詞	ステル	捨つ	15	9	24	高	高
131	動詞	スム	住む	10	43	53	高	高
132	動詞	スル	為	446	263	709	高	高
133	動詞	ソウロウ	候ふ	9	50	59	高	高
134	動詞	タズネル	尋ぬ	8	15	23	高	高
135	動詞	タツ	立つ	18	68	86	高	高
136	動詞	タテマツル	奉る	132	14	146	高	高
137	動詞	タテル	立つ	23	17	40	高	高
138	動詞	タマフ	給 ふ-尊敬	231	96	327	高	高
139	動詞	ツク	付く	19	44	63	高	高
140	動詞	ツケル	付く	8	20	28	高	高
141	動詞	ツタエル	伝ふ	49	56	105	高	高
142	動詞	トウ	問ふ	29	30	59	高	高
143	動詞	トドマル	留まる	8	9	17	高	高
144	動詞	トル	取る	55	96	151	高	高
145	動詞	ナク	泣く	65	25	90	高	高
146	動詞	ナス	成す	14	12	26	高	高
147	動詞	ナル	成る	53	74	127	高	高
148	動詞	ニゲル	逃ぐ	15	27	42	高	高
149	動詞	ノボル	上る	21	26	47	高	高
150	動詞	ノル	乗る	16	29	45	高	高

表 A.4: 『今昔』の巻 12・巻 27 の基幹語（両巻でともに高頻度語彙）151–192

No.	品詞	読み	語	巻 12 頻度	巻 27 頻度	計	巻 12 レベル	巻 27 レベル
151	動詞	ヒク	引く	37	38	75	高	高
152	動詞	フス	臥す	15	19	34	高	高
153	動詞	マイル	参る	53	16	69	高	高
154	動詞	ミエル	見ゆ	17	33	50	高	高
155	動詞	ミル	見る	165	170	335	高	高
156	動詞	ムカウ	向かふ	22	9	31	高	高
157	動詞	モウス	申す	46	38	84	高	高
158	動詞	モツ	持つ	24	34	58	高	高
159	動詞	モトメル	求む	23	9	32	高	高
160	動詞	ヤム	止む	11	16	27	高	高
161	動詞	ヤル	遣る	17	14	31	高	高
162	動詞	ヨル	寄る	20	28	48	高	高
163	動詞	ワタル	渡る	12	37	49	高	高
164	形容詞	オオイ	多し	31	18	49	高	高
165	形容詞	オオキ	大き	31	15	46	高	高
166	形容詞	オソロシイ	恐ろし	10	52	62	高	高
167	形容詞	カギリナイ	限り無し	54	18	72	高	高
168	形容詞	カタイ	難し	9	10	19	高	高
169	形容詞	ナイ	無し	120	128	248	高	高
170	形容詞	ニワカ	俄か	8	17	25	高	高
171	形容詞	ヒサシイ	久し	10	9	19	高	高
172	形容詞	フカイ	深し	18	10	28	高	高
173	副詞	イヨイヨ	愈	18	10	28	高	高
174	副詞	カク	斯く	47	61	108	高	高
175	副詞	カナラズ	必ず	29	23	52	高	高
176	副詞	キワメテ	極めて	31	20	51	高	高
177	副詞	サダメテ	定めて	9	10	19	高	高
178	副詞	サラニ	更に	21	15	36	高	高
179	副詞	シバラク	暫く	12	10	22	高	高
180	副詞	スコシ	少し	14	11	25	高	高
181	副詞	スデニ	既に	28	13	41	高	高
182	副詞	タダ	唯	33	59	92	高	高
183	副詞	ツイニ	遂に	17	10	27	高	高
184	副詞	ナオ	猶	22	14	36	高	高
185	副詞	マタ	又	97	43	140	高	高
186	副詞	モシ	若し	17	17	34	高	高
187	副詞	ヨウヤク	漸く	12	12	24	高	高
188	接辞	オホン	御	39	14	53	高	高
189	接辞	カ	日	14	10	24	高	高
190	接辞	ゲ	気	9	31	40	高	高
191	接辞	ツ	つ	30	9	39	高	高
192	接辞	ドモ	共	52	95	147	高	高

表 A.5: 『今昔』の巻 12 の特徴語（巻 12 比率 0.8 以上の高頻度語彙・中頻度語彙）1–50：「読み」は現代仮名遣い・口語法で示し、「語」は歴史的仮名遣い・文語法で示した。

No.	品詞	読み	語	巻 12 比率	巻 27 比率	レベル	巻 12 頻度	巻 27 頻度	内容
1	名詞	アオリ	障泥	0.8	0.2	中	5	1	＊
2	名詞	アジャリ	阿闍梨	1	0	高	44	0	＊
3	名詞	アマ	尼	1	0	高	24	0	＊
4	名詞	アンチ	安置	1	0	高	12	0	＊
5	名詞	イイ	飯	1	0	中	5	0	＊
6	名詞	イガキ	籬	1	0	中	5	0	＊
7	名詞	イカダ	筏	1	0	中	6	0	＊
8	名詞	イチブ	一部	1	0	中	6	0	＊
9	名詞	ウオ	魚	1	0	高	18	0	＊
10	名詞	ウジ	氏	1	0	中	9	0	＊
11	名詞	ウタガイ	疑い	1	0	中	10	0	
12	名詞	エ	会	1	0	高	61	0	＊
13	名詞	オウ	王	1	0	中	9	0	＊
14	名詞	オモイ	思い	0.8	0.2	中	5	1	
15	名詞	オンガク	音楽	1	0	中	9	0	＊
16	名詞	オンナゴ	女子	1	0	中	7	0	
17	名詞	カガミ	鏡	1	0	中	5	0	＊
18	名詞	ガクショウ	学生	1	0	中	8	0	＊
19	名詞	カゼ	風	0.83	0.17	中	6	1	＊
20	名詞	ガツ	月	1	0	中	5	0	＊
21	名詞	カベ	壁	1	0	中	7	0	＊
22	名詞	カン	巻	1	0	中	5	0	＊
23	名詞	ガン	願	1	0	中	8	0	＊
24	名詞	ガンシュ	願主	1	0	高	20	0	＊
25	名詞	キイ	奇異	0.88	0.12	高	19	2	
26	名詞	ギシキ	儀式	1	0	中	9	0	＊
27	名詞	キジン	鬼神	1	0	中	5	0	＊
28	名詞	キョウ	経	0.99	0.01	高	174	2	＊
29	名詞	クギョウ	恭敬	1	0	中	9	0	＊
30	名詞	クギョウ	公卿	1	0	中	5	0	＊
31	名詞	クドク	功徳	1	0	中	11	0	＊
32	名詞	クヨウ	供養	1	0	高	40	0	＊
33	名詞	クロウド	蔵人	1	0	中	7	0	＊
34	名詞	ゴ	碁	0.8	0.2	中	5	1	＊
35	名詞	コウ	講	1	0	中	6	0	＊
36	名詞	コウザ	高座	1	0	中	5	0	＊
37	名詞	コウシ	講師	1	0	高	16	0	＊
38	名詞	コウドウ	講堂	1	0	中	5	0	＊
39	名詞	コウベ	首	1	0	中	8	0	
40	名詞	ゴクラク	極楽	1	0	高	12	0	＊
41	名詞	ゴセ	後世	1	0	中	8	0	＊
42	名詞	コッシャ	乞者	1	0	中	5	0	＊
43	名詞	コロモ	衣	0.86	0.14	中	8	1	＊
44	名詞	コンドウ	金堂	1	0	中	10	0	＊
45	名詞	ザ	座	0.81	0.19	高	11	2	＊
46	名詞	サイゴ	最後	1	0	中	5	0	＊
47	名詞	サイショウ	最勝	1	0	中	8	0	＊
48	名詞	ザイモク	材木	1	0	中	8	0	＊
49	名詞	サウ	左右	0.83	0.17	中	6	1	＊
50	名詞	ザス	座主	1	0	中	11	0	＊

表 A.6: 『今昔』の巻 12 の特徴語（巻 12 比率 0.8 以上の高頻度語彙・中頻度語彙）51–100

No.	品詞	読み	語	巻 12 比率	巻 27 比率	レベル	巻 12 頻度	巻 27 頻度	内容
51	名詞	サトリ	悟り	0.89	0.11	中	10	1	
52	名詞	サバ	鯖	1	0	中	5	0	＊
53	名詞	サンガツ	三月	1	0	中	7	0	＊
54	名詞	ジキ	食	1	0	中	7	0	＊
55	名詞	ジキモツ	食物	0.8	0.2	中	5	1	＊
56	名詞	ジキョウ	持経	1	0	高	33	0	＊
57	名詞	シャミ	沙弥	1	0	中	7	0	＊
58	名詞	シャリ	舎利	1	0	高	15	0	＊
59	名詞	シュギョウ	修行	1	0	中	10	0	＊
60	名詞	ジュジ	受持	1	0	中	5	0	＊
61	名詞	シュッケ	出家	1	0	中	9	0	＊
62	名詞	ジョウ	丈	0.83	0.17	中	6	1	＊
63	名詞	ショウニン	聖人	1	0	高	120	0	＊
64	名詞	ショウルイ	生類	1	0	中	6	0	＊
65	名詞	ジョウロク	丈六	1	0	中	6	0	＊
66	名詞	ショクカン	織冠	1	0	高	12	0	＊
67	名詞	ショクドウ	食堂	1	0	中	5	0	＊
68	名詞	ショシャ	書写	1	0	中	5	0	＊
69	名詞	ショショウ	書生	1	0	高	15	0	＊
70	名詞	シルシ	印	0.86	0.14	高	15	2	＊
71	名詞	シン	信	1	0	中	7	0	＊
72	名詞	セキ	関	0.88	0.12	中	9	1	＊
73	名詞	ゼニ	銭	1	0	高	12	0	＊
74	名詞	ゼンコン	善根	1	0	中	5	0	＊
75	名詞	センジ	宣旨	1	0	中	5	0	＊
76	名詞	ソウ	僧	0.9	0.1	高	98	9	＊
77	名詞	ゾウ	像	1	0	高	20	0	＊
78	名詞	ソウグ	僧供	1	0	中	6	0	＊
79	名詞	ソウジョウ	僧正	1	0	中	11	0	＊
80	名詞	ソウズ	僧都	0.89	0.11	高	31	3	＊
81	名詞	ゾク	俗	1	0	中	5	0	＊
82	名詞	ソラ	空	1	0	高	21	0	＊
83	名詞	ダイシ	大師	1	0	中	7	0	＊
84	名詞	ダイジョウ	太政	1	0	中	6	0	＊
85	名詞	ダイジン	大臣	0.8	0.2	高	15	3	
86	名詞	ダイボサツ	大菩薩	1	0	中	10	0	＊
87	名詞	ダイモン	大門	1	0	中	11	0	＊
88	名詞	タカラ	宝	1	0	中	6	0	＊
89	名詞	タナゴコロ	掌	1	0	中	7	0	
90	名詞	タメ	為	0.84	0.16	高	54	8	
91	名詞	ダンオツ	檀越	1	0	中	6	0	＊
92	名詞	タンジョウ	端正	1	0	中	5	0	
93	名詞	チカイ	誓い	1	0	中	7	0	＊
94	名詞	チギリ	契り	1	0	中	6	0	＊
95	名詞	チシキ	知識	1	0	中	6	0	＊
96	名詞	チョウシュウ	聴衆	1	0	中	5	0	＊
97	名詞	チョウモン	聴聞	1	0	中	6	0	＊
98	名詞	ツカサ	司	0.89	0.11	中	10	1	＊
99	名詞	ツミ	罪	0.8	0.2	高	10	2	＊
100	名詞	デシ	弟子	1	0	高	18	0	＊

表 A.7: 『今昔』の巻 12 の特徴語（巻 12 比率 0.8 以上の高頻度語彙・中頻度語彙）101–150

No.	品詞	読み	語	巻 12 比率	巻 27 比率	レベル	巻 12 頻度	巻 27 頻度	内容
101	名詞	テラ	寺	0.99	0.01	高	115	1	＊
102	名詞	テン	天	0.83	0.17	中	6	1	＊
103	名詞	テンガイ	天蓋	1	0	中	5	0	＊
104	名詞	テンドウ	天童	1	0	中	5	0	＊
105	名詞	テンノウ	天皇	0.83	0.17	高	44	7	＊
106	名詞	トウ	塔	1	0	高	22	0	＊
107	名詞	トウザイ	東西	0.8	0.2	中	5	1	
108	名詞	ドウジ	童子	1	0	高	13	0	＊
109	名詞	ドウシン	道心	1	0	中	10	0	＊
110	名詞	ドウゾク	道俗	1	0	中	8	0	＊
111	名詞	ドクジュ	読誦	1	0	高	23	0	＊
112	名詞	トシ	年	0.83	0.17	高	48	8	＊
113	名詞	ナミダ	涙	0.9	0.1	高	11	1	
114	名詞	ナラビ	並び	1	0	高	16	0	
115	名詞	ナワ	縄	0.83	0.17	中	6	1	＊
116	名詞	ナンニョ	男女	1	0	中	6	0	＊
117	名詞	ニチ	日	0.92	0.08	高	27	2	＊
118	名詞	ニチヤ	日夜	1	0	中	8	0	＊
119	名詞	ニュウドウ	入道	1	0	中	7	0	＊
120	名詞	ニュウメツ	入滅	1	0	中	6	0	＊
121	名詞	ニョニン	女人	1	0	高	16	0	
122	名詞	ネガイ	願い	1	0	中	11	0	＊
123	名詞	ネハン	涅槃	1	0	中	6	0	＊
124	名詞	ネン	年	0.85	0.15	高	21	3	＊
125	名詞	ハジメ	始め	0.81	0.19	高	11	2	
126	名詞	ハリ	針	1	0	中	6	0	＊
127	名詞	ビョウニン	病人	1	0	中	7	0	＊
128	名詞	ヒラバリ	平張	1	0	中	5	0	＊
129	名詞	ブ	夫	1	0	中	6	0	＊
130	名詞	ブ	部	1	0	中	6	0	＊
131	名詞	フダ	札	0.8	0.2	中	5	1	＊
132	名詞	ブツ	仏	1	0	中	8	0	＊
133	名詞	ブッシ	仏師	1	0	中	5	0	＊
134	名詞	ブッポウ	仏法	1	0	中	8	0	＊
135	名詞	フネ	船	0.88	0.12	中	9	1	＊
136	名詞	フミ	文	0.88	0.12	中	9	1	＊
137	名詞	ブモ	父母	0.86	0.14	高	30	4	
138	名詞	ホウ	法	0.89	0.11	中	10	1	＊
139	名詞	ボウ	房	0.87	0.13	高	25	3	＊
140	名詞	ホウエ	法会	1	0	高	16	0	＊
141	名詞	ホウシ	法師	1	0	中	5	0	＊
142	名詞	ホウジョウ	放生	1	0	高	15	0	＊
143	名詞	ホウフク	法服	1	0	中	7	0	＊
144	名詞	ボサツ	菩薩	1	0	高	23	0	＊
145	名詞	ボダイ	菩提	1	0	中	5	0	＊
146	名詞	ホッケ	法華	1	0	高	98	0	＊
147	名詞	ホトケ	仏	0.94	0.06	高	99	5	＊
148	名詞	ミネ	峰	1	0	中	10	0	＊
149	名詞	ミヨ	御代	0.86	0.14	高	15	2	＊
150	名詞	ミョウジン	明神	1	0	中	6	0	＊

表 A.8: 『今昔』の巻 12 の特徴語（巻 12 比率 0.8 以上の高頻度語彙・中頻度語彙）151–200

No.	品詞	読み	語	巻 12 比率	巻 27 比率	レベル	巻 12 頻度	巻 27 頻度	内容
151	名詞	ムラ	村	1	0	中	6	0	＊
152	名詞	メウシ	雌牛	1	0	中	6	0	＊
153	名詞	メグリ	巡り	1	0	中	5	0	＊
154	名詞	モッパラ	専ら	1	0	中	11	0	
155	名詞	モロモロ	諸々	0.95	0.05	高	25	1	
156	名詞	ヤクシ	薬師	1	0	高	17	0	＊
157	名詞	ヤマデラ	山寺	1	0	中	10	0	＊
158	名詞	ユイマ	維摩	1	0	中	10	0	＊
159	名詞	ユメ	夢	0.83	0.17	高	43	7	＊
160	名詞	ライハイ	礼拝	1	0	高	28	0	＊
161	名詞	リョウ	料	1	0	中	6	0	
162	名詞	レイゲン	霊験	1	0	高	22	0	＊
163	名詞	レンゲ	蓮華	1	0	中	7	0	＊
164	名詞	ロウソウ	老僧	1	0	中	6	0	＊
165	代名詞	ナンジ	汝	0.85	0.15	高	44	6	
166	動詞	アタエル	与ふ	0.89	0.11	高	20	2	
167	動詞	アツメル	集む	0.88	0.12	中	9	1	
168	動詞	アワセル	合はす	0.85	0.15	中	7	1	
169	動詞	アワレム	哀れむ	1	0	中	10	0	
170	動詞	イエル	癒ゆ	1	0	中	5	0	＊
171	動詞	イタス	致す	1	0	高	19	0	
172	動詞	イタル	至る	0.88	0.12	高	27	3	
173	動詞	イノル	祈る	1	0	高	14	0	＊
174	動詞	ウケタマワル	承る	0.83	0.17	中	6	1	
175	動詞	ウツス	移す	0.93	0.07	高	16	1	＊
176	動詞	ウツル	移る	1	0	中	8	0	＊
177	動詞	ウマレル	生まる	1	0	高	20	0	
178	動詞	ウヤマウ	敬ふ	1	0	中	7	0	＊
179	動詞	エラブ	選ぶ	1	0	中	7	0	＊
180	動詞	オガム	拝む	1	0	高	23	0	＊
181	動詞	オコス	起こす	0.93	0.07	高	34	2	
182	動詞	オコタル	怠る	1	0	中	5	0	
183	動詞	オコナウ	行ふ	0.93	0.07	高	64	4	＊
184	動詞	オサメル	修む	1	0	中	5	0	＊
185	動詞	オヨブ	及ぶ	1	0	中	8	0	
186	動詞	オワル	終はる	0.95	0.05	高	26	1	
187	動詞	カザル	飾る	1	0	中	5	0	＊
188	動詞	カタムケル	傾く	1	0	中	5	0	
189	動詞	カナウ	叶う	0.86	0.14	中	8	1	＊
190	動詞	カナシム	悲しむ	0.93	0.07	高	35	2	
191	動詞	クチル	朽つ	0.8	0.2	中	5	1	＊
192	動詞	クモル	曇る	1	0	中	7	0	＊
193	動詞	ケスル	化す	1	0	中	5	0	
194	動詞	コウ	請ふ	0.88	0.12	中	9	1	＊
195	動詞	コウズル	講ず	1	0	高	12	0	＊
196	動詞	コモル	籠もる	0.91	0.09	高	13	1	＊
197	動詞	サケブ	叫ぶ	1	0	中	11	0	
198	動詞	サメル	覚む	0.94	0.06	高	18	1	＊
199	動詞	シタガウ	従ふ	0.9	0.1	高	22	2	
200	動詞	シメス	示す	1	0	中	7	0	＊

表 A.9: 『今昔』の巻 12 の特徴語（巻 12 比率 0.8 以上の高頻度語彙・中頻度語彙）201–250

No.	品詞	読み	語	巻 12 比率	巻 27 比率	レベル	巻 12 頻度	巻 27 頻度	内容
201	動詞	シュウスル	修す	1	0	中	7	0	＊
202	動詞	ジュウスル	住す	0.92	0.08	高	14	1	
203	動詞	ジュスル	誦す	1	0	高	53	0	＊
204	動詞	ショウズル	請ず	1	0	高	17	0	＊
205	動詞	ショウズル	生ず	1	0	中	8	0	
206	動詞	シンズル	信ず	1	0	中	7	0	＊
207	動詞	セメル	責む	0.8	0.2	中	5	1	＊
208	動詞	ソウスル	奏す	0.8	0.2	中	5	1	
209	動詞	ソエル	添ふ	0.8	0.2	中	5	1	
210	動詞	タツ	絶つ	1	0	中	5	0	
211	動詞	タテマツル	奉る	0.88	0.12	高	132	14	
212	動詞	タノム	頼む	1	0	中	5	0	＊
213	動詞	タモツ	保つ	0.88	0.12	中	9	1	＊
214	動詞	ツクル	作る	0.88	0.12	高	64	7	＊
215	動詞	ツトメル	勤む	1	0	中	5	0	＊
216	動詞	ツム	積む	1	0	中	6	0	
217	動詞	トウトブ	貴ぶ	1	0	高	46	0	＊
218	動詞	トク	説く	1	0	中	10	0	＊
219	動詞	トゲル	遂ぐ	1	0	中	11	0	＊
220	動詞	トトノエル	整ふ	0.89	0.11	中	10	1	＊
221	動詞	トナエル	唱ふ	0.83	0.17	中	6	1	＊
222	動詞	ナガス	流す	1	0	中	10	0	
223	動詞	ナゲク	嘆く	0.82	0.18	高	23	4	
224	動詞	ナヤム	悩む	1	0	中	6	0	
225	動詞	ナラウ	習ふ	1	0	中	8	0	＊
226	動詞	ニギル	握る	1	0	中	10	0	＊
227	動詞	ニナウ	担ふ	1	0	中	5	0	
228	動詞	ネガウ	願ふ	1	0	高	16	0	＊
229	動詞	ノゾム	臨む	1	0	中	7	0	
230	動詞	ノタマウ	宣ふ	0.86	0.14	高	15	2	＊
231	動詞	ハコブ	運ぶ	1	0	中	6	0	＊
232	動詞	ヒラク	開く	0.81	0.19	高	22	4	
233	動詞	ヘル	経	0.84	0.16	高	26	4	
234	動詞	ホドコス	施す	1	0	中	5	0	＊
235	動詞	マシマス	在す	0.96	0.04	高	29	1	
236	動詞	ミツ	満つ	0.85	0.15	中	7	1	
237	動詞	ムカエル	迎ふ	1	0	中	5	0	＊
238	動詞	モウデル	詣づ	0.86	0.14	高	23	3	＊
239	動詞	モチイル	用ゐる	1	0	中	6	0	
240	動詞	ヤケル	焼く	1	0	中	11	0	＊
241	動詞	ヤシナウ	養ふ	0.83	0.17	中	6	1	
242	動詞	ヤブル	破る	1	0	高	13	0	
243	動詞	ヨム	読む	1	0	高	33	0	＊
244	動詞	ヨル	因る	0.9	0.1	高	70	6	
245	動詞	ヨロコブ	喜ぶ	0.86	0.14	高	31	4	
246	形容詞・形状詞	アキラカ	明らか	1	0	中	5	0	
247	形容詞・形状詞	クロイ	黒し	0.83	0.17	中	6	1	＊
248	形容詞・形状詞	シズカ	静か	1	0	中	5	0	
249	形容詞・形状詞	スミヤカ	速やか	0.87	0.13	高	17	2	
250	形容詞・形状詞	ツブサ	具	1	0	中	7	0	

表 A.10: 『今昔』の巻 12 の特徴語（巻 12 比率 0.8 以上の高頻度語彙・中頻度語彙）251–290

No.	品詞	読み	語	巻 12 比率	巻 27 比率	レベル	巻 12 頻度	巻 27 頻度	内容
251	形容詞・形状詞	トウトイ	貴し	1	0	高	33	0	＊
252	形容詞・形状詞	ナガイ	長し	0.81	0.19	高	21	4	＊
253	形容詞・形状詞	ネンゴロ	懇ろ	0.93	0.07	高	17	1	
254	形容詞・形状詞	ヤンゴトナイ	やんごとない	0.83	0.17	高	18	3	＊
255	副詞	カネテ	予て	0.8	0.2	中	5	1	
256	副詞	ツユ	つゆ	1	0	中	8	0	
257	副詞	ハジメテ	初めて	1	0	中	5	0	
258	副詞	ヒトエニ	偏に	0.92	0.08	高	15	1	
259	副詞	ヨク	良く	1	0	中	10	0	
260	数詞	ク	九	1	0	中	7	0	＊
261	数詞	シ	四	0.85	0.15	高	14	2	＊
262	数詞	シチ	七	0.92	0.08	高	15	1	＊
263	数詞	ジュウ	十	0.81	0.19	高	27	5	＊
264	数詞	ナナ	七	0.85	0.15	中	7	1	＊
265	数詞	ニジュウ	二十	0.85	0.15	中	7	1	＊
266	数詞	ハチ	八	0.8	0.2	中	5	1	＊
267	数詞	ヒャク	百	1	0	中	10	0	＊
268	数詞	ヨ	余	1	0	高	17	0	＊
269	数詞	ロク	六	1	0	高	12	0	＊
270	接辞	コ	小	0.8	0.2	中	5	1	＊
271	接辞	ゴ	御	1	0	中	7	0	
272	接辞	サイ	歳	0.91	0.09	高	12	1	＊
273	接辞	ジ	寺	0.89	0.11	高	20	2	＊
274	接辞	シャ	者	1	0	高	33	0	＊
275	接辞	ダイ	大	0.92	0.08	高	28	2	＊
276	接辞	ナン	南	1	0	中	5	0	＊
277	接辞	ホン	品	1	0	中	7	0	＊
278	接辞	ラ	等	0.93	0.07	高	51	3	
279	固有名詞	アタゴ	愛宕	1	0	中	9	0	＊
280	固有名詞	アミダ	阿弥陀	1	0	中	5	0	＊
281	固有名詞	ウマカイ	馬養	1	0	中	6	0	＊
282	固有名詞	エイジツ	睿実	1	0	中	7	0	＊
283	固有名詞	キ	紀	0.8	0.2	中	5	1	＊
284	固有名詞	キイ	紀伊	1	0	中	5	0	＊
285	固有名詞	ギョウケイ	行教	1	0	中	6	0	＊
286	固有名詞	ゲンシン	源信	1	0	高	14	0	＊
287	固有名詞	コウエン	好延	1	0	中	5	0	＊
288	固有名詞	シャカ	釈迦	1	0	高	16	0	＊
289	固有名詞	ジュコウ	寿広	1	0	中	5	0	＊
290	固有名詞	ショウム	聖武	1	0	中	9	0	＊

表 A.11: 『今昔』の巻 12 の特徴語（巻 12 比率 0.8 以上の高頻度語彙・中頻度語彙）291–300

No.	品詞	読み	語	巻 12 比率	巻 27 比率	レベル	巻 12 頻度	巻 27 頻度	内容
291	固有名詞	ショシャ	書写	1	0	中	8	0	＊
292	固有名詞	シンメイ	神明	1	0	中	7	0	＊
293	固有名詞	ゾウガ	増賀	1	0	中	6	0	＊
294	固有名詞	タイアン	大安	1	0	中	5	0	＊
295	固有名詞	チガミ	茅上	1	0	中	5	0	＊
296	固有名詞	ドウミョウ	道命	1	0	中	5	0	＊
297	固有名詞	ヒエイ	比叡	0.86	0.14	中	8	1	＊
298	固有名詞	ミイ	三井	1	0	中	5	0	＊
299	固有名詞	ミタケ	御嶽ケ	1	0	中	7	0	＊
300	固有名詞	ミロク	弥勒	1	0	中	6	0	＊
301	固有名詞	ヤマシナ	山科	0.87	0.13	高	17	2	＊
302	固有名詞	ヨカワ	横川	1	0	中	9	0	＊
303	固有名詞	リュウモン	竜門	1	0	中	5	0	＊

表 A.12: 『今昔』の巻 27 の特徴語（巻 27 比率 0.8 以上の高頻度語彙・中頻度語彙）1–50：「読み」は現代仮名遣い・口語法で示し、「語」は歴史的仮名遣い・文語法で示した。

No.	品詞	読み	語	巻 12 比率	巻 27 比率	レベル	巻 12 頻度	巻 27 頻度	内容
1	名詞	アス	明日	0.17	0.83	中	1	4	＊
2	名詞	アタリ	辺り	0.17	0.83	中	1	4	
3	名詞	アニ	兄	0.00	1.00	高	0	27	＊
4	名詞	アマタ	数多	0.00	1.00	高	0	18	
5	名詞	イオリ	庵	0.15	0.85	中	2	9	＊
6	名詞	イタ	板	0.00	1.00	中	0	8	＊
7	名詞	ウシロ	後	0.17	0.83	中	1	4	
8	名詞	ウタ	歌	0.00	1.00	中	0	8	＊
9	名詞	エサブクロ	餌袋	0.00	1.00	中	0	7	＊
10	名詞	オウギ	扇	0.00	1.00	中	0	6	＊
11	名詞	オウト	夫	0.00	1.00	中	0	9	＊
12	名詞	オウナ	媼	0.00	1.00	中	0	7	＊
13	名詞	オオキミ	大君	0.00	1.00	中	0	9	＊
14	名詞	オオジ	大路	0.17	0.83	中	1	4	＊
15	名詞	オオトナブラ	大殿油	0.00	1.00	中	0	5	＊
16	名詞	オオミヤ	大宮	0.09	0.91	中	1	8	＊
17	名詞	オキナ	翁	0.15	0.85	高	3	14	＊
18	名詞	オク	奥	0.00	1.00	中	0	5	
19	名詞	オトウト	弟	0.00	1.00	高	0	28	＊
20	名詞	オトコ	男	0.07	0.93	高	4	42	＊
21	名詞	オトド	大臣	0.00	1.00	高	0	18	
22	名詞	オニ	鬼	0.16	0.84	高	11	47	＊
23	名詞	オノコ	男	0.07	0.93	高	7	78	＊
24	名詞	オモバカリ	思量	0.00	1.00	中	0	6	
25	名詞	オヤ	親	0.17	0.83	中	1	4	＊
26	名詞	オンナ	女	0.11	0.89	高	17	111	
27	名詞	オンヨウ	陰陽	0.05	0.95	高	1	16	＊
28	名詞	カオ	顔	0.05	0.95	高	1	15	
29	名詞	カギリ	限り	0.19	0.81	中	2	7	
30	名詞	カタナ	刀	0.00	1.00	中	0	10	＊
31	名詞	カド	門	0.07	0.93	高	2	20	＊
32	名詞	キツネ	狐	0.02	0.98	高	1	47	＊
33	名詞	キヌ	衣	0.00	1.00	中	0	8	＊
34	名詞	キョウ	京	0.18	0.82	高	9	32	＊
35	名詞	キョウダイ	兄弟	0.00	1.00	中	0	7	＊
36	名詞	クサイナギ	野猪	0.00	1.00	中	0	7	＊
37	名詞	クラ	鞍	0.00	1.00	中	0	7	＊
38	名詞	ケ	毛	0.07	0.93	高	1	11	
39	名詞	ケ	気	0.06	0.94	高	1	12	
40	名詞	ケシキ	気色	0.15	0.85	高	5	23	
41	名詞	コ	子	0.19	0.81	高	9	30	＊
42	名詞	コドモ	子供	0.00	1.00	中	0	6	＊
43	名詞	コヨイ	今宵	0.00	1.00	中	0	5	＊
44	名詞	コンヤ	今夜	0.00	1.00	中	0	6	＊
45	名詞	サイショウ	宰相	0.04	0.96	高	1	19	＊
46	名詞	サカン	史	0.00	1.00	中	0	8	＊
47	名詞	サマ	様	0.03	0.97	高	1	25	
48	名詞	サムライ	侍	0.00	1.00	高	0	16	＊
49	名詞	シカジカ	然々	0.00	1.00	中	0	10	
50	名詞	シニ	死に	0.00	1.00	中	0	5	＊

表 A.13: 『今昔』の巻 27 の特徴語（巻 27 比率 0.8 以上の高頻度語彙・中頻度語彙）51–100

No.	品詞	読み	語	巻 12 比率	巻 27 比率	レベル	巻 12 頻度	巻 27 頻度	内容
51	名詞	シニン	死人	0.11	0.89	高	2	13	＊
52	名詞	シモベ	僕	0.17	0.83	中	1	4	＊
53	名詞	ジュウシャ	従者	0.14	0.86	高	5	24	＊
54	名詞	シリ	尻	0.00	1.00	高	0	15	＊
55	名詞	シロガネ	銀	0.00	1.00	中	0	5	＊
56	名詞	シンデン	寝殿	0.00	1.00	中	0	5	＊
57	名詞	スギ	杉	0.10	0.90	中	1	7	＊
58	名詞	スミ	角	0.14	0.86	中	1	5	
59	名詞	ゾウシキ	雑色	0.00	1.00	中	0	6	＊
60	名詞	ソウソウ	葬送	0.00	1.00	中	0	6	＊
61	名詞	ソラゴト	空言	0.00	1.00	中	0	6	
62	名詞	タイフ	大夫	0.10	0.90	高	3	22	＊
63	名詞	ダイフ	大夫	0.00	1.00	中	0	6	＊
64	名詞	タキグチ	滝口	0.00	1.00	高	0	26	＊
65	名詞	タタミ	畳	0.00	1.00	中	0	7	＊
66	名詞	タチ	太刀	0.00	1.00	高	0	18	＊
67	名詞	タマ	霊	0.00	1.00	中	0	5	＊
68	名詞	タマ	玉	0.06	0.94	高	1	12	＊
69	名詞	タライ	盥	0.00	1.00	中	0	5	＊
70	名詞	チ	血	0.00	1.00	中	0	8	＊
71	名詞	チュウジョウ	中将	0.16	0.84	高	3	13	＊
72	名詞	チョウ	庁	0.00	1.00	中	0	6	＊
73	名詞	ツワモノ	兵	0.12	0.88	中	1	6	＊
74	名詞	ト	戸	0.18	0.82	高	3	11	＊
75	名詞	トウイン	洞院	0.00	1.00	中	0	5	＊
76	名詞	トノ	殿	0.00	1.00	中	0	11	＊
77	名詞	トノイ	宿直	0.00	1.00	中	0	5	＊
78	名詞	ナガツキ	長月	0.00	1.00	中	0	5	
79	名詞	ナニモノ	何物	0.17	0.83	中	1	4	
80	名詞	ナンデン	南殿	0.00	1.00	中	0	7	＊
81	名詞	ニョウボウ	女房	0.15	0.85	高	3	14	＊
82	名詞	ヌリゴメ	塗籠	0.00	1.00	中	0	6	＊
83	名詞	ハサマ	狭間	0.00	1.00	中	0	5	
84	名詞	ハシ	橋	0.19	0.81	高	8	27	＊
85	名詞	ハダカ	裸	0.17	0.83	中	1	4	＊
86	名詞	ハナチイデ	放ち出で	0.00	1.00	中	0	5	＊
87	名詞	ヒガメ	僻目	0.17	0.83	中	1	4	
88	名詞	ヒツギ	棺	0.00	1.00	中	0	6	＊
89	名詞	フタ	蓋	0.00	1.00	中	0	6	＊
90	名詞	フトコロ	懐	0.00	1.00	中	0	6	＊
91	名詞	ベン	弁	0.04	0.96	高	1	17	＊
92	名詞	ホンジョ	本所	0.00	1.00	中	0	6	＊
93	名詞	マツ	松	0.00	1.00	中	0	5	＊
94	名詞	ママ	侭	0.00	1.00	高	0	16	
95	名詞	ミナミオモテ	南面	0.10	0.90	中	1	7	＊
96	名詞	ミヤヅカエ	宮仕へ	0.00	1.00	中	0	5	＊
97	名詞	ムスメ	娘	0.10	0.90	中	1	7	＊
98	名詞	メ	女	0.03	0.97	高	3	69	＊
99	名詞	メテ	女手	0.00	1.00	中	0	6	＊
100	名詞	メノト	乳母	0.20	0.80	高	4	13	＊

表 A.14: 『今昔』の巻 27 の特徴語（巻 27 比率 0.8 以上の高頻度語彙・中頻度語彙）101–150

No.	品詞	読み	語	巻 12 比率	巻 27 比率	レベル	巻 12 頻度	巻 27 頻度	内容
101	名詞	モトドリ	髻	0.00	1.00	中	0	6	＊
102	名詞	モノイミ	物忌み	0.00	1.00	中	0	8	＊
103	名詞	モノガタリ	物語	0.00	1.00	中	0	8	＊
104	名詞	モノノケ	物の怪	0.00	1.00	中	0	5	＊
105	名詞	モン	門	0.13	0.87	高	2	11	＊
106	名詞	ヤ	矢	0.00	1.00	高	0	15	＊
107	名詞	ヤゼン	夜前	0.00	1.00	中	0	7	＊
108	名詞	ヤツ	奴	0.17	0.83	中	1	4	
109	名詞	ヤナグイ	胡録	0.00	1.00	中	0	7	＊
110	名詞	ヤハン	夜半	0.12	0.88	高	2	12	＊
111	名詞	ユウグレ	夕暮れ	0.17	0.83	中	1	4	＊
112	名詞	ユミ	弓	0.00	1.00	中	0	8	＊
113	名詞	ヨ	夜	0.17	0.83	高	12	46	＊
114	名詞	ヨウ	様	0.19	0.81	高	18	62	
115	名詞	ヨロズ	万	0.17	0.83	中	2	8	
116	名詞	リョウ	霊	0.04	0.96	高	1	20	＊
117	名詞	ワキ	脇	0.00	1.00	中	0	5	
118	名詞	ワタリ	渡り	0.00	1.00	中	0	9	
119	代名詞	アレ	彼	0.00	1.00	中	0	6	
120	代名詞	オノレ	己	0.08	0.92	高	2	19	
121	代名詞	ココ	此処	0.16	0.84	高	7	29	
122	代名詞	ソコ	其処	0.16	0.84	高	6	25	
123	動詞	アガル	上がる	0.08	0.92	中	1	9	
124	動詞	アク	開く	0.06	0.94	高	1	13	
125	動詞	アケル	開く	0.04	0.96	高	1	19	
126	動詞	アツカウ	扱ふ	0.00	1.00	中	0	7	
127	動詞	アユム	歩む	0.13	0.87	高	2	11	＊
128	動詞	アラソウ	争ふ	0.11	0.89	高	2	13	＊
129	動詞	アリク	行く	0.06	0.94	高	1	13	＊
130	動詞	イサム	勇む	0.00	1.00	中	0	5	＊
131	動詞	イル	射る	0.00	1.00	高	0	36	＊
132	動詞	ウシナウ	失ふ	0.17	0.83	中	1	4	
133	動詞	ウタウ	歌う	0.17	0.83	中	1	4	＊
134	動詞	ウム	生む	0.17	0.83	中	1	4	
135	動詞	ウラナウ	占ふ	0.14	0.86	中	1	5	＊
136	動詞	オイル	生ふ	0.14	0.86	中	1	5	＊
137	動詞	オイル	老ゆ	0.00	1.00	中	0	10	
138	動詞	オウ	負ふ	0.00	1.00	高	0	14	＊
139	動詞	オドル	踊る	0.09	0.91	中	1	8	
140	動詞	オワス	御す	0.02	0.98	高	1	38	
141	動詞	カカル	斯かり	0.03	0.97	高	1	23	
142	動詞	カカル	懸かる	0.09	0.91	高	2	17	
143	動詞	カラメル	絡む	0.08	0.92	中	1	9	＊
144	動詞	カル	借る	0.00	1.00	中	0	7	＊
145	動詞	キエル	消ゆ	0.17	0.83	中	1	4	＊
146	動詞	クレル	暮る	0.17	0.83	中	2	8	＊
147	動詞	ケツ	消つ	0.19	0.81	高	3	10	＊
148	動詞	コエル	越ゆ	0.14	0.86	中	1	5	＊
149	動詞	ココロミル	試みる	0.19	0.81	中	2	7	
150	動詞	コボレル	零る	0.00	1.00	中	0	6	＊

表 A.15: 『今昔』の巻 27 の特徴語（巻 27 比率 0.8 以上の高頻度語彙・中頻度語彙）151–200

No.	品詞	読み	語	巻 12 比率	巻 27 比率	レベル	巻 12 頻度	巻 27 頻度	内容
151	動詞	サグル	探る	0.09	0.91	中	1	8	＊
152	動詞	サス	差す	0.17	0.83	高	7	28	
153	動詞	サワグ	騒ぐ	0.05	0.95	高	1	15	＊
154	動詞	スム	住む	0.16	0.84	高	10	43	
155	動詞	ソウロウ	候ふ	0.13	0.87	高	9	50	
156	動詞	タツ	立つ	0.17	0.83	高	18	68	
157	動詞	ツガウ	番ふ	0.00	1.00	中	0	6	＊
158	動詞	ツレル	連る	0.00	1.00	中	0	5	
159	動詞	トオル	通る	0.16	0.84	高	3	13	＊
160	動詞	トジル	閉づ	0.10	0.90	中	1	7	
161	動詞	トモス	灯す	0.00	1.00	高	0	23	＊
162	動詞	ナガメル	眺む	0.00	1.00	中	0	6	
163	動詞	ナク	鳴く	0.00	1.00	中	0	5	＊
164	動詞	ナム	並む	0.00	1.00	中	0	5	
165	動詞	ヌク	抜く	0.00	1.00	中	0	10	＊
166	動詞	ネル	寝	0.19	0.81	高	5	17	＊
167	動詞	ノセル	乗す	0.12	0.88	中	1	6	＊
168	動詞	ハカル	測る	0.12	0.88	高	3	17	
169	動詞	ハゲマス	励ます	0.00	1.00	中	0	5	＊
170	動詞	ハシル	走る	0.09	0.91	高	5	39	＊
171	動詞	ハセル	馳す	0.09	0.91	中	1	8	＊
172	動詞	ハテル	果つ	0.14	0.86	高	2	10	
173	動詞	ハナレル	離る	0.18	0.82	高	3	11	
174	動詞	ハベル	侍り	0.04	0.96	高	1	20	
175	動詞	ヒカエル	控ふ	0.00	1.00	中	0	6	
176	動詞	ヒカル	光る	0.10	0.90	中	1	7	＊
177	動詞	フケル	更く	0.00	1.00	中	0	9	＊
178	動詞	フセル	臥す	0.17	0.83	中	1	4	＊
179	動詞	フトル	太る	0.09	0.91	中	1	8	
180	動詞	マカル	罷る	0.12	0.88	高	4	23	
181	動詞	マツ	待つ	0.18	0.82	高	5	18	＊
182	動詞	ミセル	見す	0.10	0.90	中	1	7	
183	動詞	メグラス	廻らす	0.08	0.92	中	1	9	＊
184	動詞	ヤドル	宿る	0.04	0.96	高	1	18	＊
185	動詞	ヨブ	呼ぶ	0.16	0.84	高	7	30	＊
186	形容詞	アサマシイ	浅まし	0.03	0.97	高	1	31	
187	形容詞	アシイ	悪し	0.12	0.88	高	2	12	＊
188	形容詞	アヤシイ	怪し	0.04	0.96	高	1	22	
189	形容詞	イブカシイ	訝し	0.00	1.00	中	0	5	
190	形容詞	イミジイ	いみじ	0.02	0.98	高	1	38	
191	形容詞	ウレシイ	嬉し	0.13	0.87	高	2	11	
192	形容詞	オサナイ	幼し	0.17	0.83	中	1	4	
193	形容詞	オソイ	遅し	0.00	1.00	中	0	5	
194	形容詞	オソロシイ	恐ろし	0.13	0.87	高	10	52	
195	形容詞	カシコイ	賢し	0.08	0.92	中	1	9	
196	形状詞	カヨウ	斯様	0.00	1.00	中	0	8	
197	形容詞	クライ	暗し	0.05	0.95	高	1	14	＊
198	形容詞	ケダカイ	気高し	0.14	0.86	中	1	5	
199	形状詞	コウコウ	こうこう	0.00	1.00	中	0	5	＊
200	形容詞	ココロボソイ	心細し	0.00	1.00	中	0	5	

表 A.16: 『今昔』の巻 27 の特徴語（巻 27 比率 0.8 以上の高頻度語彙・中頻度語彙）200–243

No.	品詞	読み	語	巻 12 比率	巻 27 比率	レベル	巻 12 頻度	巻 27 頻度	内容
201	形状詞	サヨウ	然様	0.00	1.00	中	0	10	
202	形容詞	タケイ	猛し	0.00	1.00	中	0	5	＊
203	形容詞	ツタナイ	拙し	0.14	0.86	中	1	5	
204	形容詞	ツヨイ	強し	0.18	0.82	高	3	11	＊
205	形容詞	トイ	疾し	0.19	0.81	高	3	10	
206	形容詞	トオイ	遠し	0.19	0.81	高	3	10	＊
207	形容詞	ハヤイ	早し	0.19	0.81	高	3	10	
208	形容詞	フルイ	古し	0.00	1.00	中	0	9	
209	形容詞	ムツカシイ	難し	0.00	1.00	中	0	6	
210	形容詞	ヤクナイ	益無し	0.00	1.00	中	0	8	
211	形容詞	ヤスイ	安し	0.17	0.83	中	1	4	
212	形容詞	ヨシナイ	由無し	0.07	0.93	高	1	11	
213	形容詞	ワカイ	若し	0.13	0.87	高	3	16	
214	形容詞	ワリナイ	わりなし	0.00	1.00	中	0	6	
215	副詞	イト	いと	0.13	0.87	高	6	33	
216	副詞	エ	え	0.00	1.00	高	0	27	
217	副詞	サ	然	0.11	0.89	高	4	25	
218	副詞	サテ	然て	0.11	0.89	高	3	19	
219	副詞	サト	さと	0.00	1.00	中	0	5	
220	副詞	シバシ	暫し	0.08	0.92	中	1	9	
221	副詞	ナド	何ど	0.00	1.00	中	0	7	
222	副詞	ヤガテ	軈て	0.00	1.00	中	0	6	
223	副詞	ヤワラ	柔ら	0.10	0.90	中	1	7	
224	感動詞	アナ	あな	0.00	1.00	中	0	8	
225	感動詞	イザ	去来	0.00	1.00	中	0	11	
226	接辞	イ	位	0.19	0.81	中	2	7	＊
227	接辞	ゲ	気	0.19	0.81	高	9	31	
228	接辞	シャ	しや	0.00	1.00	中	0	5	
229	接辞	タリ	人	0.07	0.93	中	1	10	
230	接辞	チュウ	中	0.08	0.92	中	1	9	＊
231	固有名詞	オウミ	近江	0.00	1.00	中	0	5	＊
232	固有名詞	カヤ	高陽	0.00	1.00	中	0	7	＊
233	固有名詞	カワチ	河内	0.00	1.00	中	0	7	＊
234	固有名詞	カワラ	川原	0.00	1.00	中	0	5	＊
235	固有名詞	コハタ	木幡	0.00	1.00	中	0	6	＊
236	固有名詞	サ	佐	0.00	1.00	中	0	6	＊
237	固有名詞	サンジョウ	三条	0.00	1.00	中	0	7	＊
238	固有名詞	スエタケ	季武	0.00	1.00	高	0	19	＊
239	固有名詞	スザク	朱雀	0.17	0.83	中	1	4	＊
240	固有名詞	トオスケ	遠助	0.00	1.00	高	0	19	＊
241	固有名詞	ミノ	美濃	0.00	1.00	中	0	7	＊
242	固有名詞	ヤスタカ	安高	0.00	1.00	高	0	17	＊
243	固有名詞	ヨリノブ	頼信	0.00	1.00	高	0	14	＊

付 録B　資料

B.1　『今昔物語集』巻12の文体の違いに基づく特徴語とその対立語の用例

「3.2.3 文体の違いに基づく特徴語の分類」において、巻12特徴語とほぼ同じ意味の語が、巻27で使われていることを示した。そこで示した語が、ほぼ同じ文脈で使われていて、意味をほぼ同じであることが分かる例を、ここに掲出する。

11. 疑ひ（有らず、有らじ、無し）　―必ず

- 徒ニ餓死ナム事疑ヒ有ジ。（巻12-9）
- 我レ必ズ死ナムトス。（巻27-33）

16.女子（おんなご）　―女の童（め）

- 七歳ノ女子ニ手ヲ引シメテ、（巻12-19）
- 京ノ方ニ来ルニ女ノ童立テリ。（巻27-41）

25.奇異（きい）　―あさまし

- 願主此レヲ見テ、奇異也ト思テ　（巻12-22）
- 夫此レヲ見ルニ、奇異キ事無限シ。（巻27-39）

51. 悟り（有り）　―賢（かしこ）し

- 中納言従三位兼行中務卿直世ノ王ト云フ人有リ。身才有リ、心悟リ有テ、内外ノ道ニ達レリ。（巻12-5）
- 身ノ才微妙ク、心賢ク御ケレバ、世ノ人、賢人ノ右ノ大臣トゾ名付タリシ。（巻27-19）

85.大臣（だいじん）　―大臣（おとど）

- 関白内大臣（だいじん）殿ヲ始メ奉テ、左大臣（だいじん）顕光、右大臣（だいじん）公季、（巻12-22）

- 西ノ宮ノ左ノ大臣(おとど)ナム住給ケル。（巻 27-3）

90.為(ため)　―とて

- 海辺ノ人ヲ教化セム ガ為（ため）ニ、其ノ所ニ住シテ人ヲ利益ス。（巻 12-31）
- 其ノ事ヲ云聞カセム トテ 此ニ立タリツル也。（巻 27-11）

92. 端正　―うるはし

- 而ル間、形貌 端正 ナル童子阿闍梨ノ前ニ出来レリ。（巻 12-37）
- 一人ノ男子有ケリ。年若クシテ形チ 美(うるはし) カリ ケケレバ、京ニ上テ宮仕シテ笛ヲゾ吉ク吹ケル。（巻 27-25）

114. 並び（に）　―など

- 見レバ、鉢 並(ならび) ニ嚢ヲ 肘ニ懸テ、酒ニ酔テ道ノ辺ニ臥セリ。（巻 12-25）
- 閇ツレバ、不開ズ成ヌ。 然レバ傍ナル 格子遣戸ナドヲ、此引キ彼引キ為レドモ、（巻 27-17）

121.女人(にょにん)　―女(おんな)

- 奈良ノ京大安寺ノ西ノ郷ニ一人ノ 女人 有ケリ。（巻 12-15）
- 頼清ガ中間ニ仕ケル 女 有ケリ。（巻 27-32）

137.父母(ぶも)　―親(おや)

- 父母 ハ既ニ死タリ。（巻 12-37）
- 其ノ 祖(おや) 死ニケレバ、（巻 27-35）

155.諸々(もろもろ)　―あまた

- 諸(もろもろ) ノ上中下ノ人参リ集ル程ニ、（巻 12-24）
- 数(あまた) ノ兵共集リ居テ　（巻 27-43）

165. 汝(なんぢ)　―其(そこ)　己(おのれ)

- 汝 ガ持タル物ハ、此レ何物ゾ。（巻 12-27）
- 其 ハ其ノ玉取タリト云フトモ、（巻 27-40）
- 己 ヨ、今ヨリ此ル態(わざ)ナセソ。（巻 27-41）

166. 与ふ　―取らす

- 正則此ノ牛ヲ聖人ニ与へ ツ。（巻 12-24）
- （遠助は）此ノ箱ヲバ女ニ取セ ムトテ　（巻 27-21）

169. 哀れむ　―哀れ

- 海人等此レヲ聞テ、哀ム デ此レヲ養フニ、（巻 12-14）
- 夜半許ニ笛ヲ吹ク音ノ遠ク聞エケレバ、「哀レ昔人ニ似タル物カナ」ト弥ヨ哀レ ニ思ケルニ、（巻 27-24）

172. 至る　―着く

- 今亦其ノ所ニ返リ 至 ナバ、（巻 12-14）
- 西ノ京ノ家ニ夜半許ニ返リ 着(つき) タリケル。（巻 27-33）

177. 生まる　―生む

- 其ノ 生レ タル児ヲ見レバ、（巻 12-2）
- 賤ノ畳ナド敷テ取セタレバ、程モ無ク平カニ 産(うみ) ツ。（巻 27-15）

186. 終わる　―果つ

- 一年ニ一巻ヲ誦シテ、八年ニ一部ヲ誦シ 畢(をは)ル。（巻 12-36）
- 膳部シケル男、家内ノ事共皆シ 畢(は)テ ケレバ、（巻 27-11）

190. 悲しむ　―悲し

- 或ハ僧都ヲ惜テ涙ヲ流シテ 悲ビ 合ヘル事限ナシ。（巻 12-32）
- 月漸ク近ク成マヽニハ、悲キ 事云ハム方無ク思エケレドモ、（巻 27-15）

193.化(け)す　―成る

- 迦葉仏ノ、牛ノ身ト 化シ テ、人ヲ勧メ給フ事、希有ニ貴キ事也。（巻 12-24）
- 其ノ妻忽ニ狐ニ 成 テ、戸ノ開タリケルヨリ大路ニ走リ出テ、（巻 27-39）

197. 叫ぶ　声を挙ぐ

- 「釈迦牟尼仏、我レヲ助ケ給ヘ」ト念ジテ、叫ブト 云ヘドモ、更ニ助クル人無シ。（巻 12-14）

- 極テ怖シ気ナル音ヲ挙テ、「何時何時」ト、度々呼ケレバ、（巻 27-14）

199. 従ふ　―付く、侭

- 母ニ随テ日向ノ国ニ至ル。（巻 12-34）
- 陸奥ノ守ニ付テ行ニケルガ、（巻 27-13）
- 主ノ命に随テ、河ニ臨テ多ノ木ヲ取テ、筏ヲ編テ其ノ筏ニ乗テ下ス間ニ、（巻 12-14）
- 約束ノマヽニ、懸タリケル物共皆取出シタリケレドモ、（巻 27-43）

202. 住す　―住む

- 年来、海ノ辺ニ住シテ、網ヲ持テ海ニ出テ、（巻 12-1）
- 今昔、西ノ京辺ニ住ム者有ケリ。（巻 27-33）

205. 生ず　―生む

- 盲女一人ノ女子ヲ生ゼリ。（巻 12-19）
- 女ノ、子産ムトテ死タルガ、霊ニ成タル。（巻 27-43）

224. 悩む　―煩ふ

- 好延持経者ト云フ人有ケリ。日来悩テ此ノ暁ニ死ニケリ。（巻 12-39）
- 其ノ母重キ病ヲ受テ日来煩ケレバ、（巻 27-33）

232.開(ひら)く　―開(あ)く〔下二段〕

- 南ノ門ヲ開(ひらき)テ、礼拝ヲ得シメムト為ル間、（巻 12-16）
- 遣戸ノ有ルヲ開(あ)クルヲ見レバ、（巻 27-15）

233.経(ふ)　―過ぐ

- 此ノ願ヲ遂ズシテ年月ヲ経ルニ、（巻 12-18）
- 墓無ク月日モ過テ、（巻 27-24）

235.在(ましま)す　―おはす

- 仁和寺ノ済信大僧正ノ在(ましま)ス也ケリ。（巻 12-22）
- 小野ノ宮ノ右大臣ト申ケル人御(おはし)ケリ。（巻 27-16）

239. 用ゐる　―使ふ

- 講師ニハ、山階寺ノ維摩会ノ去年ノ講師勤タル人ヲ 用ル。（巻 12-4）
- 只我レ其ノ気色有ラム時ニ、只独リ 仕フ 女ノ童ヲ具シテ（巻 27-15）

241. 養ふ　―傅(かしづ)く

- 悪ミ棄ル事無クシテ悲ビ 養フ 間ニ、漸ク長大シテ、其ノ児ノ形貌端正ナル事並ナシ。（巻 12-2）
- 形美麗ニシテ心労タカリケレバ、父母此レヲ 傅キ ケリ。（巻 27-25）

245. 喜ぶ　―嬉し

- 寺ノ僧等此レヲ聞テ 喜ブ 事限ナシ。（巻 12-20）
- 内ニ呼入ルレバ、女 喜(うれし)キ 事無限シ。（巻 27-15）

246. 明らか　―明し

- 雲方四五丈許ノ程晴レテ、七星 明カ ニ見エ給フ。（巻 12-19）
- 有明ノ月ノ極テ 明キ ニ、（巻 27-31）

249. 速やか　―疾(と)し

- 此ノ童有テハ、尚悪キ事有ナム。速ニ 出ネ。（巻 12-34）
- 我ガ音セム時ニ火ヲ燃シテ、必ズ 疾ク 持来レ。（巻 27-35）

250.具(つぶ)さ　―詳し

- 父母妻子ニ此ノ事ヲ 具(つぶさ) ニ語ル。（巻 12-28）
- 此ノ滝口、前ニ被謀テ、鳥部野ニ行タリシ事共 委(くはし)ク 語ケル。（巻 27-41）

256. つゆ　―聊か

- 露ユ 焦レタル所ダニ無クテ、灰ノ中ヨリ掻出デ給ヘリ。（巻 12-30）
- 聊 ニ知タル人モ無ケレバ、立寄ル所モ無クテ、（巻 27-15）

271.御(ご)　―御(み)

- 其ノ 御(ご) 願ヲ助ケ奉ラセ給フ。（巻 12-10）
- 御(み) 名ヲバ実資トゾ申ケル。（巻 27-19）

B.2　『今昔物語集』巻 27 の文体の違いに基づく特徴語とその対立語の用例

「3.3.3 文体の違いに基づく特徴語の分類」において、巻 27 特徴語とほぼ同じ意味の語が、巻 12 で使われていることを示した。そこで示した語が、ほぼ同じ文脈で使われていて、意味がほぼ同じであることが分かる例を、ここに掲出する。

4. あまた　―多く、諸々

- 念仏ヲシテ、数(あまた)ノ人遥ヨリ来ル音有リ。（巻 27-36）
- 諸ノ僧、楽人ヲ前ニ立テテ引テ入ルニ　（巻 12-22）
- 此ノ事ヲ聞キ伝ヘテ多(おほく)ノ僧来リ集テ礼ミ貴ビケリ。（巻 12-30）
- 車共、数(あまた)遣次ケテ、（巻 27-41）
- 大小ノ諸ノ木、多(おほく)河ヨリ流レ下ル。（巻 12-14）

21.大臣(おとど)　―大臣(だいじん)

付録 B.1「『今昔物語集』巻 12 の文体の違いに基づく特徴語とその対立語の用例」の「85.大臣(だいじん)」参照

25. 親　―父母(ぶも)

付録 B.1「『今昔物語集』巻 12 の文体の違いに基づく特徴語とその対立語の用例」の「137. 父母」参照

28. 顔　―面(おもて)

- 女扇ヲ以テ顔ニ指隠シテカカヤクヲ（巻 27-38）
- 大政大臣襴ノ袖ヲ面(おもて)ニ塞テ泣キ給フ事限ナシ。（巻 12-24）

94.侭(まま)　―如し、時に

- 約束ノ ママ ニ懸タリケル物共皆取出シタリケレドモ　（巻 27-43）
- 聖人ノ言ノ 如ク 水ヲ可出シ、（巻 12-1）
- 箭ノ尻答フト聞ケル ママ ニ、其ノ椙ノ木俄ニ失ニケリ。（巻 27-37）
- 鞭ヲ打テ逃グル 時ニ、女ノ云ク　（巻 12-28）

113.様(やう)　―如し

- 迷ヒ覆ヒテ、本ノ 様(やう) ニ結テ、ヤガテ即チ彼ノ女ノ教ヘシ橋ノ許ニ持行テ立テリケレバ（巻 27-21）

- 今亦其ノ所ニ返リ至ナバ、本ノ 如ク ニ駈レテ猶殺生ノ業止ラジ。（巻 12-14）

118. 渡り　―辺（ほとり）

- 今ハ山崎ノ 渡（わたり） ニハ行着ヌベキニ、（巻 27-42）
- 摂津ノ国ノ難波ノ 辺ほとり ニ行ヌ。（巻 12-17）

120. 己（おのれ）　―汝

付録 B.1「『今昔物語集』巻 12 の文体の違いに基づく特徴語とその対立語の用例」の「165. 汝」参照

125.開（あ）く〔下二段〕　―開（ひら）く〔他動詞〕

付録 B.1「『今昔物語集』巻 12 の文体の違いに基づく特徴語とその対立語の用例」の「232.開（ひら）く」参照

134. 生む　―生まる

付録 B.1「『今昔物語集』巻 12 の文体の違いに基づく特徴語とその対立語の用例」の「177. 生まる」参照

140.御（おは）す　―在（ましま）す

付録 B.1「『今昔物語集』巻 12 の文体の違いに基づく特徴語とその対立語の用例」の「235. 在（ましま）す」参照

141. 斯かり　―然（しか）り

- 此ル 程ニ暁ニ成ヌレバ、共ニ寝入ヌ。（巻 27-24）
- 而ル 間ニ、忽ニ食物絶テ、幽ナル庵ニ居タルニ、（巻 12-34）

154. 住む　―住す

付録 B.1「『今昔物語集』巻 12 の文体の違いに基づく特徴語とその対立語の用例」の「202. 住す」参照

172. 果つ　―終わる

付録 B.1「『今昔物語集』巻 12 の文体の違いに基づく特徴語とその対立語の用例」の「186. 終わる」参照

186. あさまし　―奇異

付録 B.1「『今昔物語集』巻 12 の文体の違いに基づく特徴語とその対立語の用例」の「25. 奇異」参照

188. 怪し　―怪しむ

- 極ク物怖シク思エケレバ、「何ナルニカ」ト 怪ク 思フ程ニ、（巻 27-40）
- 此レヲ何ヨリ来レル人ト知ズシテ 怪ビ 思フ程ニ、（巻 12-37）

191. 嬉し　―喜ぶ

付録 B.1「『今昔物語集』巻 12 の文体の違いに基づく特徴語とその対立語の用例」の「245. 喜ぶ」参照

194. 恐ろし　―恐る

- 此レヲ見ルニ、怖シク(おそろ)思ユレバ、「何ナル事ニカ」ト怪ムデ、（巻 27-16）
- 女人此ヲ見テ大キニ恐(おそれ)テ、此レ何ニシテ置タリト云フ事ヲ知ズシテ、（巻 12-15）

195. 賢(かしこ)し　―悟り（有り）

付録 B.1「『今昔物語集』巻 12 の文体の違いに基づく特徴語とその対立語の用例」の「51. 悟り」参照

196. 斯様(かやう)　―如此(かくのごと)し

- 此様ニシツヽ常ニ此ノ男ニ副テ、（巻 27-40）
- 如此ク シテ既ニ月来ニ成ル間ニ、（巻 12-34）

205. 疾し　―速やか

付録 B.1「『今昔物語集』巻 12 の文体の違いに基づく特徴語とその対立語の用例」の「249. 速やか」参照

215. いと　―極めて

- 草 糸 高ク生タリ、（巻 27-32）
- 極テ 高ク大ナル椙ノ木有リ。（巻 12-38）

216. え　―能(あた)ふ

- 此様ニ竦ヤカニ異人ハ 否 不答ジカシ。（巻 27-2）
- 高座ニ登テ、法ヲ説クニ 能 ズシテ、先ヅ云ク、（巻 12-25）

217. 然(さ)　―然(しか)

- 実ニ鬼有ラバ、然(さ) モ知ラム。（巻 27-44）
- 舎利ヲ捲レルヲ以テ 然カ(し) 知ベシ。（巻 12-33）

220. 暫し　―暫く

- 然ハ有レドモ、大切ニ可申キ事ノ侍ル也。暫シ 立留マリ給へ。（巻 27-20）
- 然ラバ、暫ク 立給ヘレ。出デテ道ヲ教ヘム。（巻 12-28）

222.軈(やが)て　―即ち

- 然テ、其ノ男ヤガテ霊ニ成ニケリ。（巻27-1）
- 此ヲ聞テ、法会畢テ後ニ即チ死ヌ。（巻12-34）

224. あな　―ああ

- 穴侘シ。人ノ有ケル所ヲ。（巻27-15）
- 嗚呼、痛ク踏哉。（巻12-11）

229.人(たり)　―人(にん)

- 此ノ三人(たり)ノ男、山ヲ通ル間ニ（巻27-44）
- 此ノ十余人(にん)歓喜スル事限无シ。（巻12-16）

B.3　『今昔物語集』2字漢語サ変動詞とその対立語の用例

■A層（1）漢文訓読文の説話に使用範囲が限られる語彙・天竺震旦部にしか現れない語

1. 修治す　対立語：修理す・修理を加ふ

- 如此ク寺ノ破レ荒タルヲ見テ、諸ノ人ヲ勧メテ寺ヲ修治シキ。(巻2-40)
- 彼ノ寺ノ壊タル所ニ、修理セムトテ、麻柱ヲ結テ日毎ニ工共数来テ修理シケルニ、(巻23-20)
- 建立ヨリ後、年シ久ク成テ、當ニ倒レ傾テ、殊ニ修理ヲ加ル人元シ。(巻20-34)

2. 滅度す　対立語：涅槃す・涅槃に入る

- 佛滅度シ給ヒヌト聞テ、(巻3-35)
- 佛、當ニ涅槃シ給ヒナムトス。(巻31-28)
- 此レヲ思フニ、釋迦如来ハ、涅槃ニ入給テ後ハ、(巻13-36)

3. 命終す　対立語：命終はる

- 遂ニ年七十九ニシテ命終シヌ。(巻6-38)
- 既ニ年八十二ニ及テ、命終ル時、(巻17-10)

4 遊戯す　対立語：遊ぶ

- 或ハ前裁ノ中ニ花ノ翫ビ、或ハ虫ノ音ヲ聞テ詠ヲ吟ジ、如此ク遊戯ス。(巻 3-15)
- 曹蛾ガ父、管絃ノ女人等ニ被引レテ江ニ行テ船ニ乗テ水ニ浮テ遊ブ間　(巻 9-7)

■A層（2）漢文訓読文の説話に使用範囲が限られる語彙・本朝仏法部のうち漢文訓読文の説話のみに用いられる語

5. 遊行す　対立語：遊ぶ・遊び行(あり)く

- 僧徹、栖ヨリ出デテ遊行スルニ、其ノ山ノ間ニノ土ノ穴ヲ見ル。(巻 7-25)
- 大刀帯共小鷹狩ニ北野ニ出テ遊ケルニ、此ノ魚費ノ女出来タリ。(巻 31-31)
- 天皇自ラ宮ヲ出テ遊ビ行テ所々ヲ見給ケルニ、弘農ト云フ所ニ至リ給ケリ。(巻 10-7)

6. 歓喜す　対立語：喜ぶ

- 大臣、此ヲ聞テ心ニ歓喜シテ、即チ、道心ヲ發シツ。(巻 2-32)
- 王、此ノ偈ヲ聞テ心ニ喜テ諸ノ衆生ノ為ニ大キニ慈心ヲ發シ給フ。(巻 5-9)

7. 呵責す　対立語・責む

- 彼ノ聖人、嗔恚ヲ以テ弟子童子ヲ呵磧シ罵詈ス。(巻 13-6)
- 此ノ度ハ強ク縛テ引ヘタリケレバ、暫コソ人ニテ有ケレ、痛ク責メケレバ、遂ニ狐ニ成テ有ケルヲ、(巻 27-41)

8. 供給す　対立語：備ふ・供(く)す

- 孟宗、年来ノ間、朝暮ノ備ヘニ笋ヲ構ヘ求メテ供給シテ闕ク事无し。(巻 9-2)
- 笋ヲ堀リ出デムニ不堪ザル朝ニ、母ニ笋ヲ不備ズ。(巻 9-2)
- 節日毎、我ガ為ニ功徳ヲ修シ、食ヲ供セヨ。(巻 20-19)

9. 建立す　対立語：建つ

- 我レ、此ノ所ニ伽藍ヲ建立シテ、天台宗ノ法ヲ弘メム。(巻 11-10)
- 此ノ佛ヲ安置シ奉ラム為ニ、速ニ伽藍ヲ可建シ。(巻 11-15)

10. 受持す　対立語：持(たも)つ・受け持(たも)つ・持(ぢ)す

- 法花経ヲ受持セル人、皆、此ノ事ヲ聞テ、其ノ唇・舌ノ所ニ集マリ来テ、(巻 7-14)
- 聖人ノ、年来法花経ヲ持チ奉リ給ハム目ニ見エ給ハムハ、(巻 20-13)
- 幼稚ノ時ヨリ法花経ヲ受ケ持テ、晝夜ニ讀奉ルヲ以テ役トシテ (巻 12-1)

11. 荘厳す　対立語：飾る

- 百寶ノ瓔珞ヲ以テ其ノ身ヲ庄嚴シテ大象ニ令乗テ、(巻 5-15)
- 汝ヂ、懃ニ二ノ経ヲ持スル力ニ依テ、此ノ界ニ可来シ。(巻 6-44)
- 種々ノ目出タキ瓔珞ヲ以テ身ヲ飾リ給テ元憂樹下ニ進ミ至リ給フ。(巻 1-2)

12. 囲繞す　対立語：衛(かこ)む

- 菩薩・聲聞ハ佛ヲ囲遶シテ前後ニ在マス。(巻 6-15)
- 寺ノ僧共并檀越等、此ノ事ヲ聞キ驚テ、其ノ所ニ来リ集テ被壊タル佛ヲ衛ムデ、各哭キ悲ムデ云ク（巻 12-13）

13. 転読す　対立語：読誦す・読む

- 専ニ此ノ経ヲ可転読シ。(巻 6-46)
- 専ニ法花経ヲ読誦シテ他ノ念无シ。(巻 7-16)
- 佛法ヲ信ジテ、常ニ経ヲ読ム。(巻 9-38)

14. 飲食す　対立語：食(じき)す・食(く)ふ

- 只獨人无クシテ静ナル所ニ行テ心ノ如ク飲食セム。(巻 3-22)
- 明日美物ヲ備テ令食(くはし)メム。其ヲ心ノ欲ママニ食(じき)シ可給シ。(巻 19-3)

15. 讃歎す　対立語：讃む

- 佛、此レヲ聞キ給テ讃歎シテ、「善哉々々」ト宣テ、授記シ給フ。(巻 1-33)
- 虚空ノ諸天ハ香ヲ焼キ花ヲ散シテ「善哉々々」ト讃奉ル。(巻 1-4)

16. 入滅す　対立語：失す・絶え入る

- 西ニ向テ端坐シテ、掌ヲ合セテ入滅シニケリ。(巻 17-17)
- 西ニ向テ端坐シテ、掌ヲ合セテ失ニケリ。(巻 15-33)
- 僧澤、形・色鮮ニシテ端坐合掌シテ絶入タリ。(巻 4-10)

17. 奉仕す　対立語：仕ふ・仕る

- 我等二人有テ、聖人ニ随テ 奉仕セ ムト思フ。(巻 13-23)
- 十七八歳許ノ童ノ、長短ニテ身太クテ力強ゲナルガ、赤髪ナル、何コヨリトモ无ク出来テ、「聖人ニ 仕ラ ム」ト云フ。(巻 12-34)
- 行者ニ 仕へ ム事、仏ニ 仕ル ガ如シ。(巻 10-34)

18. 教化す　対立語：教ふ

- 此ノ卒堵婆ニ依テ、我レ正覺ヲ成ジテ一切ノ衆生ヲ 教化スル 也。(巻 2-4)
- 公ニ仕ヘテハ政ヲ直シ、私ニ行テハ人ヲ 教フ。(巻 10-9)

19. 端座す　対立語：坐す・居る

- 衣服ヲ直クシテ縄床ニ 端坐シ テ、目ヲ閉テ不動ズ。(巻 7-25)
- 僧徹ガ身冷テ三年猶端シク 坐セ ル事、生タリシ時ノ如クナリ。(巻 7-25)
- 死ナムズル所ニ行テ、独リ 居 テ念佛唱ヘテ居タリ。(巻 19-24)

20. 読誦す　対立語：踊す・読む

- 速ニ鐵塔ニ入テ大般若経ヲ 読誦シ、経ノ在ス地ヲ踏マバ、(巻 7-6)
- 必ズ法花経千部ヲ 誦シ ケリ。(巻 13-28)
- 心ヲ澄シテ経ヲ 読ム 間 (巻 12-34)

21. 書写す　対立語：書く・写す

- 喩伽論ト云フ法文ヲ 書写 セム。(巻 17-34)
- 仏ヲ為シ奉テ、経ヲ 書キ 奉テ、(巻 20-36)
- 法花経ヲ 写シ 奉ル。(巻 14-26)

22. 療治す　対立語：療す・治し癒す

- 醫師ヲ呼テ、藥ヲ以テ 療治ス ト云ヘドモ、(巻 20-28)
- 后ノ御病ヲ 療セ ムガ為ニ、(巻 20-7)
- 新タニ此病ヲ 治シ愈ス 者共ナム有ケル。(巻 24-17)

23. 廻向す　対立語なし

- 其ノ池ノ邊ニシテ、不断ニ法花ノ懺法シ修シ、弥陀ノ念佛ヲ唱ヘテ、彼ノ霊ニ廻向シケリ。(巻 16-35)

24. 呪願す　対立語なし

- 尊者、水ヲ受テ蝉ノ為ニ呪願シテ、次ニ戒ヲ授ケ給テ後、念佛ヲ勧メ給フ。(巻 2-7)

■Ｂ層（１）漢文訓読文の説話に多いが和文の説話にも少数使われている語彙・本朝仏法部のうち和文の説話にも用いられる語

25. 往生す　対立語：生まる

- 疑ヒ无ク極楽ニ往生セムズル者ノ也。(巻 19-37)
- 必ズ極樂ニ生レム。(巻 14-11)

26. 乞食す　対立語：乞ふ

- 今昔、佛、婆羅門城ニ入テ乞食シ給ハムトス。其ノ時ニ彼ノ城ノ外道共、皆、心ヲ一ニシテ云ク、「此比拘曇比丘ト云フ者ノ、人ノ家毎ニ行テ物ヲ乞ヒ食フ事有リ、悪ク无愛也。(後略)」ト云ヒ廻シテ (巻 1-11)

27. 懺悔す　対立語：悔ゆ

- 涙ヲ流シテ省ヲ懺悔シテ、(巻 17-40)
- 歎キ悲テ、泣々ク前ノ咎ヲ悔ル事无限シ。(巻 17-40)

28. 祈請す　対立語：祈る

- 観音ニ申ス様、「願クハ、大悲観世音、我レニ此ノ二字ノ文思エサセ給ヘ」ト祈請スルニ、(巻 14-12)
- 宇佐ノ宮ニ詣テ、「道ノ間、海ノ怖レ无クシテ平カニ渡シ給ヘ」ト、祈リ申シ給ケルニ (巻 11-10)

29. 恭敬す　対立語：敬ふ

- 佛ヲ礼拝恭敬シ奉ケリ。(巻 13-18)
- 實ノ佛ヲ敬ヒ給テ (巻 6-5)

30. 悩乱す　対立語：悩む

- 身ニ重キ病ヲ受テ、辛苦悩乱スル事ハ (巻 20-15)

- 身ニ重キ病ヲ受テ、苦ミ 悩ム 事无限シ (巻 16-36)

31. 持斉す

- 毎月ノ十八日ニハ、自ラ 持齊シ テ僧ヲ請ジテ、普門品ヲ令読誦シム。(巻 16-3)

32. 孝養す

- 母ト共ニ家ニ有テ、母ニ 孝養スル 事无限シ。(巻 9-5)

33. 結縁す

- 遠ク近道俗・男女来集テ、此ノ供養ニ 結縁スル 事員ヲ不知ズ。(巻 17-23)

■Ｂ層（２）漢文訓読文の説話に多いが和文の説話にも少数使われている語彙・本朝世俗部にも用いられる語

34. 殺害す　対立語：殺す・害(がい)す

- 汝ヂ尚強ニ明日家ニ返ラムト思ハヾ、汝ヲ 殺害セ ムト為ル者ハ家ノ丑寅ノ角ナル所ニ隠レ居タル也。(巻 24-14)
- 生有ル物ヲ 殺シ テ鬼魅ニ祭ヲ備ヘテ (巻 11-17)
- 蛇ハ忽ニ人ヲ不 害 ネドモ、(巻 28-32)

35. 祈念す　対立語：祈る

- 心ニ思ク、「祖ノ敵ヲ罰事ハ天道皆許シ給フ事也。我レ今夜孝養ノ為ニ思企ツルヲ、心ニ不違ヘ令為得給ヘ」ト 祈念シ テ、屈リ居タルヲ、露知ル人无シ。(巻 25-4)
- 宇佐ノ宮ニ詣テ、「道ノ間、怖レ无クシテ平カニ渡シ給ヘ」ト、祈リ 申シ給ケルニ (巻 11-10)

36. 沐浴す　対立語：浴む

- 聖人、沐浴シ 清浄ニシテ、香ヲ焼キ花ヲ散テ、弟子共ニ告テ、諸共ニ念仏ヲ唱ヘテ、西ニ向テ居タリ。(巻 20-12)
- 明日ノ午時ニ観音来リ給ヒテ此ノ湯ヲ 浴ミ 可給シ、(巻 19-11)

37. 養育す　対立語：養ふ

- 寛忠僧都、此ノ妹ノ尼ヲ哀レムデ、其ノ住ム寺ノ邊ニ迎ヘ居ヘテ、朝暮ニ此レヲ 養育シ ケリ。(巻 15-37)

- 菓・戉ヲ拾テ子共ヲモ養ヒ、我等ガ命ヲモ助ケム。(巻5-14)

38. 安置す　対立語：置く

- 我家ヲバ寺ト成シテ、佛ヲ安置シ奉テ、法ヲ修行シケリ。(巻20-15)
- 塔ヲ起テヽ、此ノ多ノ頭ヲ置テ供養シケリ。(巻4-30)

39. 供養す　対立語：備ふ・供(く)す

- 比丘ヲ見テ歓喜ノ心ヲ発スト云ヘドモ、我ガ身貧クシテ可供養キ物、一塵无シ。(巻2-9)
- 国王、微妙ノ食ヲ備テ沙門ニ供養シ給ヒキ。(巻4-14)
- 笋ヲ堀リ出デムニ不堪ザル朝ニ、母ニ笋ヲ不備ズ。(巻9-2)
- 節日毎、我ガ為ニ功徳ヲ修シ、食ヲ供セヨ。(巻20-19)

40. 修行す　対立語：修む・修(しゅ)す

- 汝ヂ僧ノ身ニテ御スメリ、亦佛ノ道ヲ修行シ給フ人也。(巻31-13)
- 我レ生タリシ時一善ヲ不修メ、(巻25-1)
- 母、其ノ髪ヲ持テ、泣々ク家ニ返テ、子ノ為ニ法事ヲ修シテ、(巻20-33)

41. 制止す　対立語：止(とど)む・制す

- 此レ、常ノ事ナルヲ、父母、此ノ事ヲ聞テ制止シテ云ク、「若キ時、必ズ如此クノ勤メヲ不為ズ。此レ、身ノ衰フル根元也」ト強ニ止ムト云ヘドモ、女、此ノ勤メ止ル事元シ。(巻15-49)
- 兄ノ俊平入道モ聞テ強ニ制シケレバ、鎮西ヘダニモ不行カ成ケリ。(巻24-22)

42. 長大す　対立語：勢長す

- 漸ク長大シテ、幼童也ケル時、隣ノ小児等・村小童部ト相共ニ佛法ヲ讃歎スル事ヲ唱ヘケリ。(巻11-2)
- 其男子、漸ク、勢長シテ既ニ九歳ニ成ヌ、(巻11-11)

43. 聴聞す　対立語：聞く

- 實ニ心有ラム人ハ必ズ此ノ涅槃会ヲバ、可聴聞キ事也。(巻12-6)
- 我レ妙法ヲ可説シ。國ノ内ノ人悉ク来テ聴クベシ。(巻4-4)

44. 礼拝す　対立語：礼(をが)む・礼(らい)す・拝(はい)す

- 卒堵婆ニ向テ手ヲ合セテ額ヲ土ニ付テ、度々礼拝シテ、屈リ翔フ事微妙シ。(巻19-3)
- 堂ニ入テ観音ヲ礼ミ奉ラムト為ルニ、(巻16-8)
- 守門ノ者ノ、此小子ヲ見テ、脆テ礼ス。(巻20-16)
- 男泣々ク陰陽師ヲ拝シケリ。(巻24-20)

45. 流浪す　対立語なし

- 佛道ヲ修行セムガ為ニ京ヲ出テ所々ノ霊験ノ所ニ流浪ス。(巻15-11)

46. 帰依す　対立語なし

- 天皇此ノ由ヲ聞食テ、召出シテ、神泉ニ被居テ、帰依セサセ給フ事元限シ。(巻28-24)

47. 加持す　対立語なし

- 僧ハ不動ノ火界ノ呪ヲ讃テ、病者ヲ加持スル時ニ、(巻16-32)

48. 出家す　対立語なし

- 我レ、願フ、「出家シテ佛道ヲ修行セム」ト思フ故也。(巻17-49)

49. 利益す　対立語なし

- 佛菩薩ノ変化シテ、児ヲ利益セムガ為ニ来給タリケルニヤ。(巻19-44)

■C層（1）　和文の説話にも多い語・どの部にも多い語

50. 霹靂す　対立語なし

- 俄ニ空陰リ雷電霹靂シテ大ナル雨降ル事(巻13-33)

51. 懐妊す 対立語：孕む

- 妻既ニ懐任シヌ。長者喜ブ事无シ。(中略) 長者、舎利弗ニ間テ云ク、「此ノ孕メル子、男カ女カ、何ゾ」ト。(巻11-15)

52. 対面す　対立語：会ふ

- 優婆岨多、此ノ告ヲ得テ喜ヲ成シテ、彼ノ尼ノ御許ニ詣給フ。行キ至テ可対面キ由ヲ申シ入レサス。(中略) 優婆堀多、対面スルヲ喜テ急入ル程、裳ノ裾、此ノ油圷ニ懸タリ。其ノ時ニ油ラ塵許泛レタリ。尼、優婆崛多ニ會テ云ク、「何事ニ依テ来リ給ヘルゾ」ト。(巻4-7)

53. 御覧ず　対立語：見給ふ

- 取出テ 御覧ジ ツル程ニ、取□テ打破セ給ヒタルニナム。(巻 19-9)
- 若君ノ此ノ硯ヲ取リ出テ 見給ヒ ツル程ニ、打破リ給ヒツ。(巻 19-9)

■C 層（2） 和文の説話にも多い語・本朝世俗部で増える語

54.仮借(けさう)す　対立語なし

- 文君ヲ妻トセムガ為ニ 仮借スル 人、世ニ多カリト云ヘドモ、(巻 10-26)

55. 沙汰す　対立語なし

- 罷返テ文轡ニ付テコソハ 沙汰シ 申シ候ハム。(巻 28-31)

文　献

Klappenbach, R. (1960) “Gliederung des deutshen Wortshcatzes der Gegenwart,” *Deutschunterricht*, Vol. 12, No. 5, p. 31.

Kuroda, S.-Y (1973) “Where Epistemology, Style and Grammar Meet: A Case Study from the Japanese,” in *A Festschrift for Morris Halle*: Holt Rinehart and Willson, pp. 337–391.

Tanaka, Makiro and Hilofumi Yamamoto (2011) “An analysis of Sino-Japanese words of the Heian period for the development of the historical Japanese dictionary,” in *ASIALEX2011 Proceedings LEXICOGRAPHY: Theoretical and Practical Perspectives*: The Asian Association for Lexicography, pp. 496–505.

Tanaka, Makiro and Hilofumi Yamamoto (2012) “A Corpus Study of Emotive Adjectives and Verbs of the Heian Japanese,” in *SNPD2012 Proceedings 13th ACIS International Conference on Software Engineering, Artificial Intelligence, Networking and Parallel/Distributed Computing*: IEEE Computer Society, pp. 377–380.

浅野敏彦 (1988) 『国語史のなかの漢語』，和泉書院.

市川孝 (1980) 「文体」,『国語学大辞典』，東京堂出版，93–96 頁.

上野英二 (1995) 『源氏物語序説』，平凡社.

岡島昭浩 (2009) 「第４章漢語から見た語彙史」,『シリーズ日本語史２　語彙史』，安部清哉・斎藤倫明・岡島昭浩・半沢幹一・伊藤雅光・前田富祺　岩波書店，105–126 頁.

沖森卓也・木村義之・田中牧郎・陳力衛・前田直子 (2011) 『図解日本の語彙』，三省堂.

小木曽智信・小椋秀樹・田中牧郎・近藤明日子・伝康晴 (2010) 「中古和文を対象とした形態素解析辞書の開発」,『情報処理学会研究報告. 人文科学とコンピュータ研究会報告』，第 2010 巻，第 CH85 号，1-8 頁.

小木曽智信・小椋秀樹・須永哲矢 (2012) 「中古和文 UniDic 短単位規程集」. 科研費報告書.

尾上圭介 (1982)「文の基本構成・史的展開」,『講座日本語学 2 文法史』, 明治書院, 1–19 頁.

尾上圭介 (1987) 「日本語の構文」,『国文法講座 6 時代と文法ー現代語』, 明治書院, 57–75 頁.

樺島忠夫 (1954) 「現代文における品詞の比率とその増減の要因について」,『国語学』, 15–20 頁.

樺島忠夫 (2009) 「3.3 語彙量の実態 3.3.1 ジャンル・文体」,『計量国語学事典』, 朝倉書店, 93–96 頁.

川端善明 (1976) 「用言」,『岩波講座日本語 6 文法　』, 岩波書店, 169–217 頁.

工藤力男 (1978) 「格助詞と動詞との相関についての通時的考察」,『岐阜大学教育学部研究報告人文科学』, 第 26 巻, 167–179 頁.

国立国語研究所 (2004) 『分類語彙表 増補改訂版』, 大日本図書.

国立国語研究所 (2005) 『太陽コーパスー雑誌『太陽』日本語データベースー』, 博文館新社.

小林保治・増古和子 (1996) 『宇治拾遺物語』, 新編日本古典文学全集, 小学館.

小峯和明 (1985) 『今昔物語集の形成と構造』, 笠間書院.

近藤泰弘 (2000) 『日本語記述文法の理論』, ひつじ書房.

桜井茂治 (1960) 「平安・院政時代における「複合動詞」ー関一雄氏の論文を読んでー」,『国語と国文学』, 第 37 巻, 第 7 号, 58–73 頁.

桜井光昭 (1966) 『今昔物語集の語法の研究』, 明治書院.

佐藤喜代治 (1971) 『国語語彙の歴史的研究』, 明治書院.

佐藤武義 (1983) 「さた（沙汰）」,『講座日本語の語彙 10 語彙 2』, 明治書院.

佐藤武義 (1984) 『今昔物語集の語彙と語法』, 明治書院.

佐藤武義 (2007) 「上代の文体」,『国語学研究事典』, 明治書院, 479–480 頁.

関一雄 (1993) 『平安時代和文語の研究』, 笠間書院.

関一雄 (2009) 『平安物語の動画的表現と役柄語』, 笠間書院.

高橋敬一 (1994) 「今昔物語集における漢語サ変動詞研究試論ー巻 15 の出典との関連を通してー」,『活水日文』, 第 28 号, 49–60 頁.

竹内美智子 (1988) 『平安時代和文の研究』，明治書院.

田中牧郎 (1995a) 「今昔物語集のオソロシとオソルについて（１）」,『学苑』，第 661 号，71–82 頁.

田中牧郎 (1995b) 「今昔物語集のオソロシとオソルについて（２）」,『学苑』，第 662 号，55–68 頁.

田中牧郎 (2005) 「言語資料としての雑誌『太陽』の考察と『太陽コーパス』の設計」,『雑誌『太陽』による確立期現代語の研究―『太陽コーパス』研究論文集―』，博文館新社，1–48 頁.

田中牧郎 (2006) 「書評　藤井俊博著『今昔物語集の表現形成』」,『日本語の研究』，第 2 巻，第 2 号，150–156 頁.

陳力衛 (2001) 『和製漢語の形成とその展開』，汲古書院.

築島裕 (1963) 『平安時代の漢文訓読語につきての研究』，東京大学出版会.

築島裕 (1969) 『平安時代語新論』，東京大学出版会.

築島裕 (2007) 『訓点語彙集成第１巻』，汲古書院.

寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味 1』，くろしお出版.

伝康晴・小木曽智信・小椋秀樹・山田篤・峯松信明・内元清貴・小磯花絵 (2007) 「コーパス日本語学のための言語資源―形態素解析用電子化辞書の開発とその応用」,『日本語科学』，第 22 巻.

時枝誠記 (1941) 『国語学原論』，岩波書店.

長瀬真理 (1995) 「「源氏物語」ハイパー・テキストの開発の試み」,『情報処理学会研究報告.IM, [情報メディア]』，第 95 巻，第 1 号，11–18 頁.

西尾寅弥 (1972) 『形容詞の意味・用法の記述的研究』，国立国語研究所報告 44，秀英出版.

野口博久 (1963) 「宇治拾遺物語の成立について」,『国文学言語と文芸』，第 5 巻，第 1 号，40–50 頁.

藤井俊博 (1988) 「今昔物語集の「畢」―ヲハル・ハツの表現と語法―」,『国文学論叢』，第 33 号，26–44 頁.

藤井俊博 (2003) 『今昔物語集の表現形成』，和泉書院.

冨士池優美・河瀬彰宏・野田高広・岩崎瑠莉恵 (2013) 「『今昔物語集』のテキスト整形」，『第４回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』，125–134 頁.

冨士池優美・田中牧郎 (2012) 「今昔物語集の返読文字について―形態素解析の前処理を通して―」.

舩城俊太郎 (2011) 『院政時代文章様式史論考』，勉誠出版.

松下貞三 (1988) 『漢語受容史の研究』，和泉書院.

馬淵和夫 (1987) 「「怖」と「恐」」,『今昔研究年報』，第 1 号，1–4 頁.

馬淵和夫・国東文麿・稲垣泰一 (1999–2002) 『今昔物語集１～４』，新編日本古典文学全集，小学館.

峰岸明 (1986) 『変体漢文』，国語学叢書，第 11 号，東京堂出版.

宮島達夫 (1971) 『古典対照語い表』，笠間書院.

宮島達夫 (1994) 『語彙論研究』，むぎ書房.

森正人 (1986) 『今昔物語集の生成』，和泉書院.

安永尚志 (1998) 『国文学研究とコンピュータ』，勉誠社.

安本真弓 (2009) 「中古における感情形容詞と感情動詞の対応とその対応要因」,『国語語彙史の研究』，第 28 巻，45–66 頁.

山岡政紀 (2000) 『日本語の述語と文機能』，くろしお出版.

山口仲美 (1998) 『平安朝の言葉と文体』，風間書房.

山口康子 (1996) 『今昔物語集の文章研究―書きとめられた「ものがたり」』，おうふう.

山口佳紀 (1966) 「今昔物語集の文体基調について―『由（ヨシ）』の用法を通してー」，『国語学』，第 67 巻，1–19 頁.

山口佳紀 (1993) 『古代日本文体史論考』，有精堂.

山田孝雄 (1935a) 『漢文の訓読によりて伝へられたる語法』，宝文館.

山田孝雄 (1935b) 『国語の中に於ける漢語の研究』，宝文館.

山田孝雄・山田忠雄・山田英雄・山田俊雄 (1959-1963) 『今昔物語集１～５』，日本古典文学大系，岩波書店.

山本真吾 (1988) 「今昔物語集に於ける「速ニ」の用法について」,『鎌倉時代語研究』, 第 11 号, 159–184 頁.

山元啓史 (2007) 「和歌のための品詞タグづけシステム」,『日本語の研究』, 第 3 巻, 第 3 号, 33–39 頁.

山元啓史・田中牧郎・近藤泰弘 (2012) 「通時コーパスと言語空間論」,『第 1 回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』, 241–248 頁.

吉田金彦・築島裕・石塚晴通・月本雅幸 (2001) 『訓点語辞典』, 東京堂書店.

渡辺実 (1991) 「「わがこと・ひとごと」の観点と文法論」,『国語学』, 第 165 巻, 1–14 頁.

ホドシチェクボル・山元啓史 (2013) 「現代日本語コーパス比較分析のための中間語彙層の抽出と応用」,『人文科学とコンピュータシンポジウム論文集』, 第 2013 巻, 第 4 号, 21–26 頁.